2011.3.11 14:46

石巻市南浜町（2011 年 3 月 30 日　撮影・鈴木拓）

鈴木 拓

2011年3月21日 23:45
詳細情報

【意見募集】まだどうなるか分かりませんが。。

各位

※このメールは地震後、何らかの形で僕とコンタクト取ってくださった方に一斉送信しています。

こんばんは、鈴木拓です。
皆さん必要なモノありませんか？
もし困っていることあったら言ってください。
提供出来る物があるかもしれませんので。

さて、本題。
震災後、比較的被害が少ない方々は自分たちに出来ることを模索しておられるでしょう。
外部からは仙台市全体が瓦礫の山のような印象を持たれたり、数キロ先には今なおご遺体があったりと、様々なギャップが僕らを惑わせています。

僕個人は住まいの被害も少なく、生活に困るほどではありません。
きっとそういう方も多いと思います。
時間が経過するにつれ、そのギャップは自分を駆り立てる事になります。
「自分に出来る何か」を必死で考えています。

まだ答えは見つかりませんが、具体的に動こうと思っています。
個人で出来ることは無意味ではないですが、小さいです。
素人のボランティア20人よりも自衛隊員1人のほうが役に立つのは現実です。
僕達表現者(アーティスト)に"いま"出来ることは無いのかもしれません。

それでも、東北がこれから長い年月かけて復興していく課程で僕らの出来ることはきっとあります。
そう信じて、"演劇的活動"で支援する枠を作りたいと思います。
それは組織ほどのモノでもないかもしれません。
ハッキリとした形にまでもならないかもしれません。

今は大風呂敷広げてますが、僕自身まだ大いに迷ってます。
日常のバランスが崩れ去った今、僕が持っていた演劇感も通用しないかもしれないと思うからです。
自信はまだありません、が、今何も行動せず後で後悔するよりマシです。

具体的なスキーム(枠組み・計画)は10-BOXの八巻工房長と話し合っています。
僕はある程度行政のバックアップが必要だと思っています。
いまその話し合いを始めたところです。

そこで皆さんにお願いです。
今私たち(表現者)に出来る事、そのアイデアを募集させてください。
意見でもイイです。
こういう活動は偽善的であるという批判も当然あると思います。
集まった声は、まとめて事業団-仙台市に伝えます。

きっとこの活動は困難を極めるでしょう。
形にもならないかもしれません。
それでも野田秀樹さんが「上演続行を決定した理由」で述べた「ココロに平穏を取り戻す」手助けが、表現の力で出来たらと考えています。
http://www.nodamap.com/site/news/206

近日、10-BOXで集まりを設けたいと思っています。
まずは皆で顔を合わせ、無事を喜び分かち合いましょう。
そして日常の情報を交換しつつ、これからのはなしをしましょう。
焦ることはないと思います。
復興には時間がかかります。
今必要なことだけじゃなく、これから必要なことを考えましょう。

皆さんの想いや知恵が、演劇を通して形になることを願います。

鈴木拓

※このメールは転送していただいてもかまいません。ご意見は広く募集します。ただ、これはまだ僕個人の思いつきにすぎません。無闇に拡散するのではなく、真剣に議論出来る範囲で行いたいと思っています。個々の良識で広めてください。
またこの内容に賛同出来ない方はスルーしてください。ご意見、ご批判は是非受け付けます。

[redacted]

2011年3月25日 15:00

宛先: 鈴木 拓

受信 - iCloud

ギュウです。演出家大会流れましたが、、、。

別件です。是非ともご参加を！

ご案内

仙台で活動する舞台関係者各位

「東北復興に向けての舞台人会議」開催のお知らせ

大震災から2週間が経ちました。皆様、体調など大丈夫でしょうか。さて、今回の大震災により、私たちも仕事や活動の延期・休止など様々な不安・苦難の中に立たされていますが、今後の復興に向けて、何かできることはないものか、と考える毎日です。東京、大阪をはじめ全国各地から、そして海外からも東北の舞台人や表現者たちに激励と支援の意志が届いています。今後の東北、あるいは日本の復興の中で、舞台芸術や表現活動が、「必要にされる時期」が必ずきます。そのために、「今、発信できること」(確かに今は無力ですが)、「今後やれること」など、様々な可能性についての意見交換会(座談会の雰囲気で！)を下記の日程で行いたいと思います。ライフラインが安定しない中ではありますが、是非ともご出席いただけると幸いです。

呼びかけ人
樋渡宏嗣
渡部ギュウ
戸石みつる

記
日時/3月29日17時～20時。場所/白鳥ビル2FSENDAI座☆プロジェクト第1スタジオ(青葉区春日町6-1)

※交通事情や都合がつかない方は、メールでのご意見をお待ちしています。
sendaiza@rose.plala.or.jp

左：鈴木拓から仙台市内の演劇人 20 数名に送られた活動への呼びかけメール（2011 年 3 月 21 日）
右：SENDAI 座プロジェクト渡部ギュウから、演劇人へ送られた会議のお知らせメール（2011 年 3 月 25 日）

目次

2011.03
震災直後の様子
010 沿岸被災地へ
012 東北復興に向けての仙台舞台人会議（仮）

2011.04
014 Art Revival Connection TOHOKU 発足
016 出前のはじまり
017 青年座、参上
018 Art Volunteer Network との座談会
019 こどもとあゆむネットワークとの協働
022 出前部の発足
023 関西演劇人からの支援
028 夢とらっく劇場「セロ弾きのゴーシュ」
030 ARC>T で活用されたインターネットツール
032 「10-BOX の現場から」八巻寿文（せんだい演劇工房 10-BOX）

2011.05
044 【INTERVIEW】「避難所への出前」須藤達也（福室市民センター）
048 あるくとサロン① 八巻寿文（せんだい演劇工房 10-BOX）
050 あるくとサロン② 関口怜子（ハート＆アート空間 Be I）
052 あるくとサロン③ 千葉信（社会福祉法人慶和会老人福祉施設花いちもんめ）
054 「ダンスをたのしもう」しおかぜ福祉会
055 「レクリエーションの時間の提供」花いちもんめ

2011.06
058 日本演出者協会「フェニックス・プロジェクト」
062 「3 weeks Charity」
063 NPO 法人 20 世紀アーカイブ仙台との協働
065 「絆支援員」研修への出前

2011.08
066 「祈りの星祭り〜 Pray for TOHOKU 〜」七夕まつりでの舞台
068 【論考】1・17 神戸から　3・11 東北へ 島田誠（アーツエイド神戸、ギャラリー島田）
072 兵庫県立ピッコロ劇団との協働
074 次代を担う子どもの文化芸術体験事業
080 【座談会】劇作家たち「喪失、そして再生」

2011.09
088 砂連尾理ワークショップ
090 招聘第 1 弾「PAW'2011 東北・復興 Week」横浜
092 文化庁芸術家派遣事業 事前研修 吉野さつきさん
093 【寄稿】演劇人から演劇人のために ベアーテ・ヴォンデ（ベルリン森鴎外記念館）

2011.10
094 舞台芸術専門講座「ウォーキング ARC ＞ T」はじまる
096 ARC ＞ T PRESENTS 芋煮会 @10-BOX
098 つれづれ なかじょうのぶ（劇団三カ年計画）
099 「臨床するアート」東京セッション

2011.11

102　招聘第 2 弾「えだみつ演劇フェスティバル 2011」北九州
106　えだトーク「東北と九州の人がいっしょに、3.11 を考える」

2011.12

108　来て、見て、あるくと。〜共に歩いた 288 日、そしてこれから〜
110　あるくとサロン「地方と地方が繋がるとき」
112　あるくとサロン「クリエーションを通して繋がっていく」
114　あるくとサロン「繋がった、その先へ」
120　高齢者と地元アーティストの学びあい事業
122　出前プログラム研究会から生まれたプログラム
124　文部科学省「復興教育支援事業」での取り組み
130　多夢多夢舎中山工房 × 西海石みかさ

2012.03

132　招聘第 3 弾「晴れの国、岡山との交流」岡山
134　こどもがつくるまち「Piccoli せんだい〜 miyagino 〜」前日祭
138　【考察】「ARC ＞ T という現象とオルタナティブとしての劇場へ」
　　坂口大洋（仙台高等専門学校 建築デザイン学科准教授）

2012.04

142　「あるくと 100 人会議 ーまちの再生、アートの再生—」

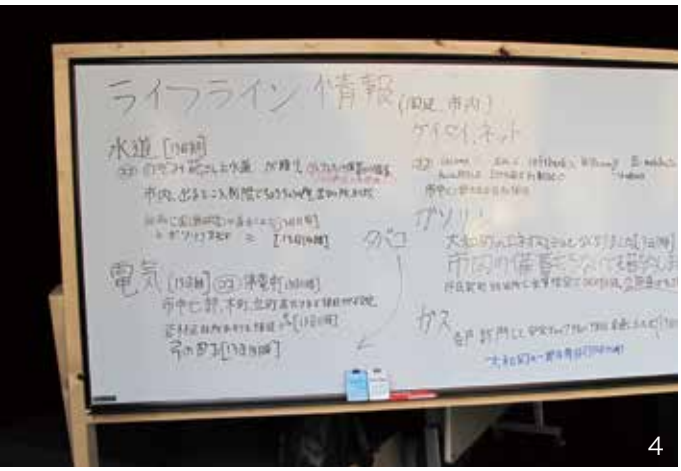
148　【寄稿】仙台の物語 小川智紀（ST スポット横浜）
150　河北新報夕刊連載「あるくとの報告」

158　資料 文化庁「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」実施一覧
160　資料 2011 年 4 月 6 日〜 2012 年 3 月 31 日までの出前活動一覧
164　資料 2011 年 3 月 11 日〜 2012 年 3 月 31 日までの間に宮城県内で行われた主な舞台公演一覧

168　ARC ＞ T が参加したシンポジウム / ご支援をいただいた方々
169　ARC ＞ T ネットワーク参加者一覧

170　2011 年度収支決算
171　発刊コメント

1　2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分地震発生（せんだい演劇工房 10-BOX オフィス内）
2　2011 年 3 月 12 日の様子
3　のぞみ苑にあった備蓄
4　せんだい演劇工房 10-BOX にてライフライン情報を書き出した



1　仙台市・ハピナ名掛丁アーケードにて。電力が復活した店が外部電源を開放し、携帯電話の充電へ提供した。（2011 年 3 月 13 日）
2　仙台市・一番町四丁目商店街にて。（2011 年 3 月 23 日）
3　藤崎デパートの前に貼られた新聞を見る人（2011 年 3 月 23 日）
4　仙台市・一番町四丁目商店街にて。手書きのビラが情報源だった。ライフラインが止まっている中、復旧したお店が次々と炊き出しを行ったり、弁当を安価に提供していた。美容院などはシャンプーを無料提供した。
5　仙台市宮城野区・スーパーへ並ぶ行列。（2011 年 3 月 13 日）

1

2

3

4

5

2011.3.28-3.31

沿岸被災地へ _ 宮城県亘理町、石巻市

山元町立中浜小学校

1

2

1　避難所となった亘理町中央児童センターへ 10-BOXの公用車で絵本を届ける。
2　横田重俊さんの読み聞かせ。
3　避難所となった亘理高校体育館。
4　石巻市にて。避難所に設置された特設公衆電話。
5　石巻市にて。自衛隊の炊き出し。
6　石巻市にて。届いた絵本を読む子ども。

3

4

2011

3月11日　東日本大震災発生　M9.0、最大震度6強
女川原発、福島第一、第二原発等計11基が自動停止
首相官邸にて緊急災害対策本部会議
福島第一原発半径3km圏内避難指示

3月12日　福島第一原発1号機水素爆発
長野県栄村で震度5弱の地震
東北自動車道、常磐自動車道の緊急車両通行可能
米軍「トモダチ作戦」開始
福島第一原発から半径20km圏内避難指示

3月13日　米軍空母ロナルドレーガン三陸沖に到着

3月14日　福島第一原発3号機爆発
東京電力が計画停電開始
仙台市地下鉄南北線、富沢―台原間運転再開

3月15日　福島第一原発2号機と4号機水素爆発、400mSvの緊急事態発表
仙台市が福祉避難所11か所開設
東西方向全15ルートの通行確保
東北新幹線が東京―那須塩原間運転再開

3月16日　JRバス東北が仙台―新宿間の高速バス運行（～22日）
仙台空港、救援機のみの暫定的使用開始

八巻寿文（やまきとしぶみ）10-BOX 工房長がガソリンを調達し、地震後はじめて被災地に赴いた。翌日が「東北復興に向けての仙台舞台人会議（仮）」の初日だったので、何か実感を得ようとしていたことを覚えている。行き先は亘理町鳥の海と石巻小学校。眼前に広がる光景はまさに言葉にならない。圧倒的な無力感を胸に、避難所になっている体育館で今後の支援の途を探る。

子どもたちは元気に遊んでいた。体育館の隅に設置されていた子供エリアで、横田重俊（よこたしげとし）さんが持参した絵本で読み聞かせを行う。次第に子どもたちが集まってくる。最初は騒いでいた子どもたちも次第に集中して見聞きしていった。元気そうに遊んでいた子供たちも、実際は他にやることがなく、大人が忙しくしているから、そうするしかないのかもしれないと思った。（鈴木拓（すずきたく））

石巻市

5

6

3月28日　福島第一原発2号機の汚染水が1000mSvを記録
横田重俊氏、八巻寿文氏、鈴木拓ほか、石巻方面沿岸部視察

3月25日　ミャンマーでM7.0の地震
樋渡宏嗣、渡部ギュウ、戸石みつるが仙台の舞台関係者へ呼びかけメールを送る。

3月24日　福島第一原発3号機の汚染水で作業員3人が被爆
仙台市立の小学校43校で卒業式
東北自動車道、仙台北部道路、南部道路の通行止め解除

3月23日　東北新幹線が盛岡―新青森間で運転再開
GBファンドが設立

3月22日　ヤマト運輸が宮城、福島、岩手で再開

3月21日　鈴木拓が仙台の舞台関係者へ呼びかけメール

3月20日　米仏がリビア爆撃

3月19日　東京電力、計画停電回避（～20日）

3月18日　国道4号全線一般車両通行可能

2011.3.29

東北復興に向けての仙台舞台人会議（仮）_SENDAI 座☆プロジェクト稽古場

会議の冒頭で黙祷をする参加者

まだ交通機関がおぼつかない時期にもかかわらず、メールの呼びかけに応えて32名の舞台関係者が集まった。「何ができるかはわからない、でも居ても立ってもいられない」という困惑、いらだち、想いがうずまき、会場は異様な熱気に満ちていた。この場で震災後はじめて顔を合わせた人も多く、それぞれの被災状況を語りあった。

この様子はUstreamで生中継され、関東、関西、九州、ヨーロッパ、アメリカなどからもTwitterで意見や励ましの言葉が多く寄せられた。会議の様子を見ていたSTスポット横浜のスタッフ田中真実（たなかまみ）さんはすすんで議事録を作成し、共有すべき貴重な証言だとして、横浜市芸術文化教育プラットフォーム事務局ブログに掲載。そのことを知った会議の参加者たちはその機転と深い配慮に感激し、「われわれはひとりではない」ことを実感した。

あのときあれから

あるくとが立ち上がるきっかけとなった2011年3月29日の会議のUstream中継を横浜の事務所で見ていました。震災後、直接的なつながりがなく、芸術文化の動向がどうなっているのか、まったくつかめずにいたところ、Twitterで情報を見つけ、食い入るように見ていました。途中で同僚が席を外さなくてはならなくなったため、内部報告用に残したテキストをお送りしたところから、あるくとのみなさんとつながることになりました。

あのころもあれからも、全体会議の様子などを見ていると、遠いところで起こっている誰かのことではなく、今自分が直面していることとして考えることが多いです。同じようなところで悩んだり、同じようなことに喜んだり。戦っている人たちがここにもいると、勝手に心強くなっています。仙台と横浜は、ちょっぴり距離がありますが、離れていてもできること、離れているからできることを、これからも考え続けていきたいと思います。

横浜市芸術文化教育プラットフォーム事務局
NPO法人STスポット横浜
田中真実（たなかまみ）

3月29日　仙台空港3000m滑走路使用再開
第1回東北復興に向けての舞台人会議（SENDAI 座稽古場）

3月30日　三陸自動車道、全面復旧
横田重俊氏、八巻寿文氏、鈴木拓ほか亘理町方面沿岸部視察

3月31日　米軍はしけ船、冷却用水を積載し、福島第一原発専用港に接岸
JR東北本線、部分開通
大島航路が気仙沼～大島間再開
第2回舞台人会議（SENDAI 座稽古場）
枝光本町商店街アイアンシアターから寄せ書きの手紙が届く

4月1日　仙南芸術文化センターえずこホールが全施設貸し出し再開
常磐自動車道が原発規制区間を除き全線一般車両通行再開

4月2日　福島第一原発2号機から高濃度放射能汚染水が海に流出
韓国から仙台の舞台人へ支援のメールが届く
大阪ウイングフィールド福本年雄氏から阪神大震災関連資料が届く

4月4日　福島第一原発が低濃度汚染水1万トン超を海へ放出
第3回舞台人会議
Art Revival Connection TOHOKU発足（SENDAI 座稽古場）
以後、舞台人会議から定例会とする

私たちが出来ることは？　石川裕人（TheatreGroup“OCT/PASS” 主宰）※第 1 回欠席により文面にて

・96 年。阪神淡路大震災後から 1 年後、「神戸演劇ワークショップ」というボランティア団体の会議に出席と尼崎のピッコロ劇団の演劇ボランティア活動を視察したことがあります。「神戸演劇 WS」は関西地区で活動している演劇人が仮設住宅、避難所への演劇ボランティアをするために結成された団体です。現在この時の資料を大阪の演劇人を介して収集してもらっています。まずはそのような実際の蓄積を参考に考えていきたいと思っています。
・現在、学校の新学期を前にして避難所は流動的です。無理矢理入って行ける状況ではないようです。これは名取市の文化振興課にリサーチしています。
・被災された方々が本当に今必要なものはなんなのか？果たして芝居は必要とされているのかを実際自分の目で耳で聞き取らなければならないと思います。避難所に入って声を聞くことです。そこから果たして演劇ボランティアが必要とされているのかを感得することから始めた方がいいと考えています。
・もし必要とされていると判断出来たときからボランティアは開始されるでしょう。
・NPO や NGO の専門家も今は素人が入るべきではないと言っています。私たちは演劇の専門家ですが、こういう場合の演劇の提供に関しては素人であるという認識が必要ではないでしょうか？
・やれることはいっぱいあるでしょう。朗読、子ども達と即興芝居を作る、短篇芝居、シアターゲームを利用した方法、チャリティ公演などなど。
・私個人としては “OCT/PASS” を活用して現場に入りたいと思っています。別に他団体や個人との共同を嫌うわけでなく、己が劇団が一番意思疎通がきくし、臨機応変小回りが利くと思うからです。神戸のように任意団体として活動することに異議はありません。ただその場合、事務局がかなりしっかりしていないと運営できないでしょう。
・活動資金も必要になってきます。現在私たちも２次被災を受けたも同然のことになっています。企画の延期、中止などで生活が脅かされています。自分の財布で動ける人が何人いるでしょうか？阪神淡路の際は大阪の演劇人はほとんど被災しませんでした。だからボランティア活動が活発だったと言えます。しかし、今回の震災は私たちも被災者であるということを考えなければなりません。
・でも、やる！！というバイタリティも求められるでしょう。
・東京、関西で行われている義援金募集の宛先を赤十字ではなく仙台演劇（仮称）ということにすれば募金は活動に充てられます。これはそのような活動団体が立ち上がればということですが。
・私たち TheatreGroup”OCT/PASS” では劇団ＯＢ、ＯＧの義援金活動の宛先を自らの劇団にして活動資金に充てようと思っています。
・しかし、これもまず現場に入って我が目で確認することから始めようと思っています。
・これから復興までの長い期間を、私たちも自らの芝居を再起動させながら進んでいかなければなりません。興行活動とボランティア活動の両輪で走る胆力が必要になると思います。
・私たち自身が演劇を必要としている＝演劇の力＝人間をおおらかに見つめる装置として機能することを願ってやみません。

4月13日　仙台空港で民間機就航再開
　ＡＶＮとの情報交換会（仙台市役所）
4月12日　福島第一原発事故の国際評価がレベル7に引き上げ
　あるくとが「つなプロ」のボランティア輸送に協力（～16日）
　ＡＶＮ（Art Volunteer Network）来仙（～13日）
　二兎社『シングルマザーズ』無料公演（大河原・えずこホール）
　愛媛から梶原剛氏が 10-BOX 来訪
4月11日　福島県浜通りでＭ7・0の直下型地震発生、最大震度6弱
　第４回定例会（SENDAI座稽古場）
　東京から青年座支援隊が 10-BOX に到着
4月8日　あるくとロゴマーク誕生（ベルギーの阿部玲子さんによる）
4月7日　宮城県沖Ｍ7・4の最大規模の余震発生、最大震度6強
4月6日　あるくと出前部が活動開始　仙台・多夢多夢舎中山工房「美術のじかん」
　あるくとメンバーがＦＭたいはくで読み語り収録
4月5日　米軍空母ロナルドレーガンがトモダチ作戦を終えて三陸沖を離れる
　栗原市若柳総合文化センターが全施設貸し出し再開
　岩手県陸前高田市立第一中学校校庭に初の応急仮設住宅設置

2011.4.4

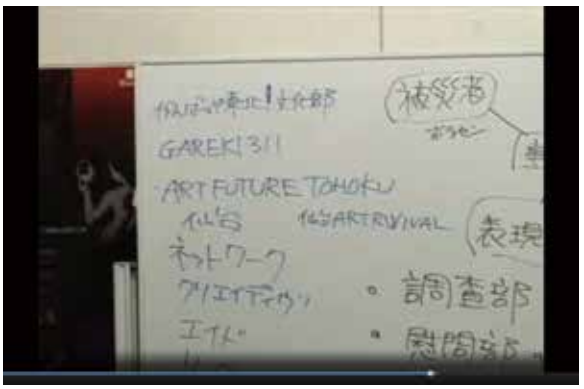
Art Revival Connection TOHOKU 発足 _SENDAI 座☆プロジェクト稽古場

第 3 回会議で、復興支援のためのネットワーク体が立ち上がった。代表は樋渡宏嗣 (SENDAI 座☆プロジェクト)、副代表は渡部ギュウ (SENDAI 座☆プロジェクト) と戸石みつる (俳優)、事務局は鈴木拓 (杜の都の演劇祭プロデューサー) と伊藤み弥 (演出者) が承認された。

Twitter 経由で会議に参加する国内外の人たちの意見をもらいながら、新たな名称について話し合った結果、「再生」「つなぐ」をキーワードとして Art Revival Connection TOHOKU に決定。頭文字の A.R.C.T. の中には ART と ACT も入っており、「アートで行動する」「アートを持って外へ出て行く」イメージが、このネットワークの理念と合うとの意見だった。

このときの様子をベルギーから見守っていた Act for JAPAN be. 代表の日玉浩史さんは、同メンバーのグラフィックデザイナー阿部玲子さんにロゴマークの作成を依頼。阿部さんは、頭文字の中に ARC（虹）を見出し、東北に虹を架けるイメージをデザインした。ARC ＞ T の「＞」は、国内外問わず「西」からの想いや支援が東北へ向かっていることを表す、こころの矢印である。

この日から、「ARC ＞ T」が歩きはじめた。



4月14日　内閣総理大臣が第1回東日本大震災復興構想会議を開催

4月18日　米軍空母ロナルドレーガンが佐世保へ入港
仙台国際センターが全施設貸し出し再開
第5回定例会（SENDAI 座稽古場）

4月19日　あるくと事務局、島田誠氏、日玉浩史氏ほかと亘理町視察（左写真）

4月20日　宮城県の公立小中学校が新学期開始

4月21日　千葉県東方沖で地震
いわきアリオス「いわきの今と演劇 Zero」開催

4月22日　福島県が計画的避難区域および緊急時避難準備区域の設定

4月23日　登米祝祭劇場が全施設貸し出し再開
JR 仙山線が全線運転再開
第6回定例会（SENDAI 座稽古場）
大阪から福本年雄氏、内田洋一氏ほか来訪（〜25日）

ARC＞T
Art Revival Connection TOHOKU

ARC = 虹。
ARC＞T は東北へ繋ぐ虹。西から東へ、虹の架け橋。

ベルギー在住の阿部玲子さんにデザインして頂いたロゴマークです。東北に虹（アーチ・弧・円）を架ける（ARC → TOHOKU）とのコンセプトでデザインされました。「いろいろなジャンルのアーティストが "REVIVAL" という名の通り、復興へ向けて協力し合い、被災されている方々と一緒に一喜一憂し、励ましあってもらいたい」という思いが込められています。

あのときあれから

「何か行動を起こさずにはいられなかった。」

震災後、全国から続々と支援の手が差しのべられている中で、同じ被災者として、被害を受けて苦しんでいる人達の力になりたくて芝居仲間に声を掛けた。

チャリティー公演を行ってその収益を寄附しようと。しかしこの提案は受け入れられなかった。時期尚早だったのかもしれない。その後、この呼び掛けで集った人達で ARC ＞ T が組織されていくのだが…。

発足当初は手探りの状態が続き、何かをやろうと積極的に提案する人は少なかった。が、現在では限られた人達ではあるが、被災地支援の為のプログラム作り等を精力的に行っている。

多くの方から頂いた真心の支援金は、復興支援の為に本当に有効に活用されてきたのか。また、今のままの活動の在り方で良いのか、積極的な協議が望まれる。事務局は、会員の意見を尊重しながら運営していくと言ってはきたが、果してその言葉通りに誠実な対応を行ってきたのだろうか？

二年目の活動にあたり、誰の為に、何を目的とした組織であるのかを今一度、会員同士確認し合う必要があると思う。

SENDAI 座☆プロジェクト
2011 年度 ARC ＞ T 代表
樋渡宏嗣

4月28日　宮城県が応急仮設住宅への入居を開始

「東日本大震災により甚大な被害を受けた市街地における建築制限」の特例に関する法律成立（29日公布・施行）

全国の主な舞台芸術関係施設等へあるくと発足のお知らせ（左写真）

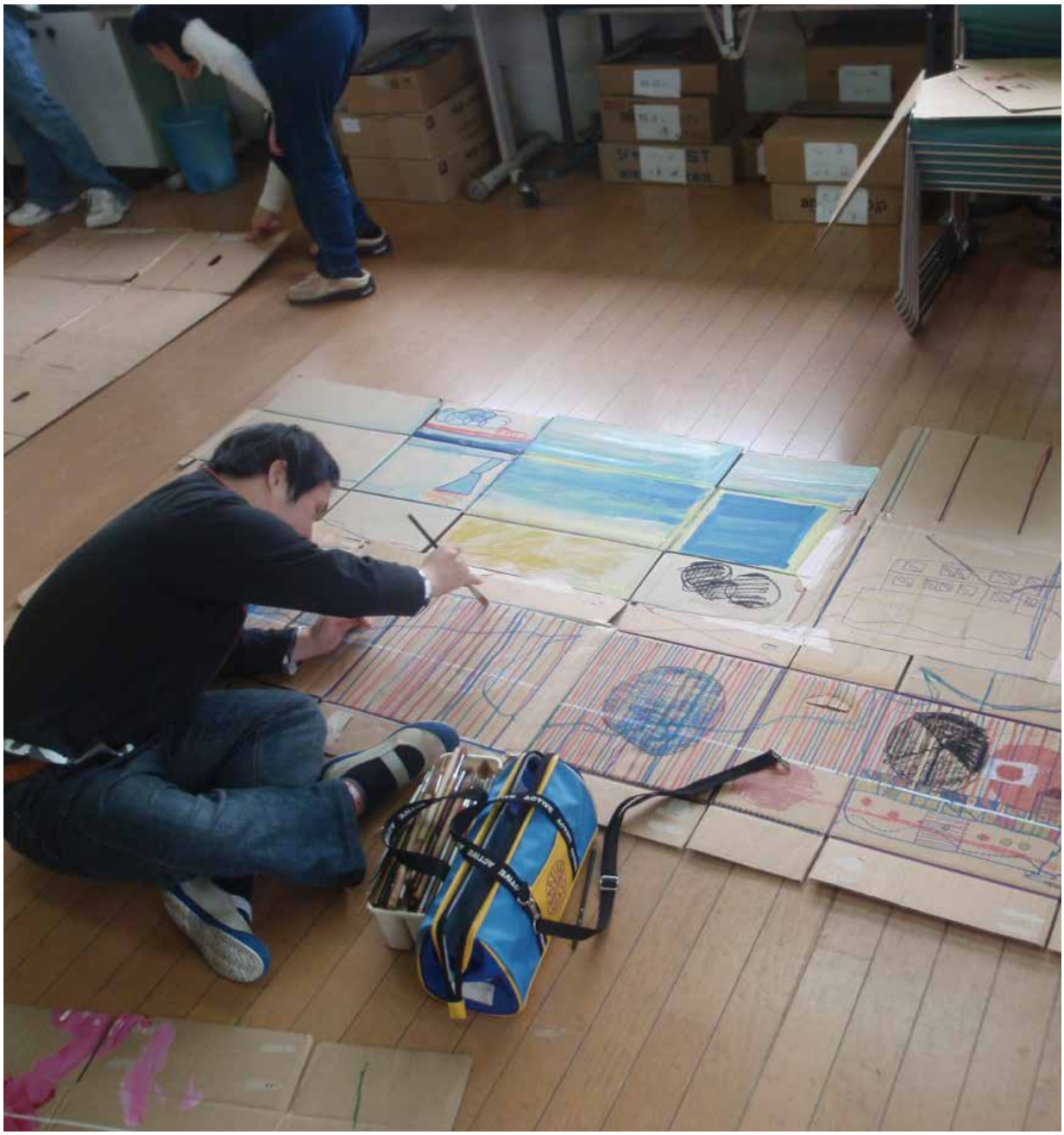
4月25日　第7回定例会（10-BOX　box-2）

日本産経新聞主催「被災地＋ミュージアムと文化財の被災状況」展（東京・表参道ギャラリー・～5月8日）

4月24日　大阪からのご一行と宮城県亘理郡を視察（左写真）

2011.4.6 ～

出前のはじまり _ 特定非営利活動法人多夢多夢舎中山工房 / 仙台市青葉区中山



すんぷちょ代表でARC＞Tメンバーの西海石(さいかいし)みかさが、かねてより交流のあった知的障害者就労支援施設「多夢多夢舎(たむたむしゃ)中山工房」の利用者さんたちの精神的な不安の軽減のために、絵を描いたり創作しながらゆったりした時間を一緒に楽しむ「美術のじかん」をARC＞Tメンバーとともに届けにいった。これが、のちに「出前」と呼ばれる活動のはじまりとなる。また、「ダンスのじかん」と称して、『イエイ』というあいさつゲームや『すきまをうめるダンス』、また音楽を取り入れて一緒に楽しむダンスでコミュニケーションを育む時間を設けた。

実施概要［2012年4月末まで・順不同］
「ダンスのじかん」毎週水曜日 14:00～15:30
「美術のじかん」毎週金曜日 16:00～17:30
参加メンバー：西海石みかさ (すんぷちょ) 千葉瑠依子 (ダンサー) CHii(アトリエ・ジェミニ) 猪戸美香 (アトリエ・ジェミニ) 土屋悠太郎 (タイ舞踊家) 半田深雪 (魚類の薔薇) 生田恵 (三角フラスコ) 伊藤文恵 (空間実験こがねむし) まめ (児童館職員) 大沢佐智子 (舞台美術家) 千葉里佳 (BalletCompany~demain~) 居舘倫絵 (すんぷちょ) 上島奈津子 (俳優) 長保めいみ (シェイクスピア・カンパニー) 白鳥英一 (OtoOpresents) 橋本沙織 (精神保健福祉士) 近藤麻衣子 (日本語教師) 山口小夜子 (看護師) わかやなぎよしみ (俳優) 漣なみ (TheatreGroup"OCT/PASS") 高橋美峰子 (TheatreGroup"OCT/PASS") 足羽アリス貴和子 (オバリン大学) 佐藤紘（美術家） 羽太結子 (ダンサー)
［順不同／2012年度も継続中］

2011.4.11

青年座、参上。_せんだい演劇工房 10-BOX

仙台と長年にわたって交流のある演出家の宮田慶子さん（劇団青年座）のご厚意により、東京の劇団青年座から青木鉄仁さん、小豆畑雅一さん、加瀬貴広さん、桜木信介さん、宇宙さん、橘あんりさん、野々村のんさんが到着。3月から4月にかけて東北各地の演劇鑑賞会を巡演予定だった『赤シャツ』公演がほぼ中止となり、青年座もまた大きな打撃を受けていた。

一行は、地震で散らかった10-BOXの片付けや津波で被災した演劇人の自宅の泥かきなど、体力を要する復旧作業の数々を舞台人ならではのたくましさとチームワークでやり遂げた。また同じころ、愛媛県松山市から梶原剛さん(株式会社MICHIKUSA代表)も来仙し、この作業に加わった。梶原さんは2005年の「10-BOX国際演劇学校」に参加して以来、10-BOXと交流のある舞台人である。彼らの励ましと笑顔は一陣の春の風のようであった。

あのときあれから

劇団青年座のメンバーを中心に構成された「仙台10-BOX支援隊(自称)」が10-BOXの片づけを手伝うということで仙台入りしたのは4月11日だった。着いてすぐにSENDAI座稽古場で第4回ARC>Tミーティングに参加させていただいた。震災後すぐにこれだけのネットワークを立ち上げ、始動していることには正直、驚かされた。仙台、東北の演劇人たち、芸術家たちのバイタリティに感服し、こちらが勇気づけられた。13日には亘理町鳥の海を案内してもらった。行き帰りの道路から見える風景を含め、想像を絶する被災状況を目の当たりにして言葉を失う。東京に居ながらメディアを通じて知りうることはごくわずか、百聞は一見に如かずだ。それは、風景からだけでなく、仙台、東北の人たちにじかに触れて話を伺うたびに実感したことでもある。人それぞれに違った思いがあるのだ。来てよかったと心底思った。あれ以来、東北を訪れることができない恨めしい日々を過ごしている。

劇団青年座演技部所属　青木鉄仁

2011.4.13

Art Volunteer Network との座談会 _ 仙台市役所第 6 会議室（仙台市青葉区）

関東および関西圏から Art Volunteer Network(以下 AVN/ 現 Art Vision Network 311) の方々が訪れ、仙台の舞台関係者と意見交換会をおこなった。仙台からの参加者はそれぞれの震災体験や近況を報告。ショックやとまどい、鬱積する心情を吐露する場面も見られた。AVN の方々は、当事者ではない立場で被災地の表現者たちおよび市民とどう関係を結べるのか、どういった支援が可能なのかと手探りしている様子だった。

出前をはじめとする ARC ＞ T の今後の活動に向けて、ワークショップのスキルや心やからだのケアについて学ぶ場の必要を感じるメンバーが多かったことから、AVN の協力を得ながら研修会などを開催していきたい旨を要請。これからも継続的な協働をしていこうとの合意を得た。

あのときあれから

4 月 12 日にえずこホール、13 日に 10-BOX にお伺いしたのを皮切りに、福島県や岩手県、青森県の幾つかの市町村に伺いました。あのころも、今も、地域ごとに、被災状況、経済状況、文化的な背景などが違い「いま必要とされていること」も「いまできること」も全く異なりました。復興と言っても一概に「これが最も必要だ」とは言い難い状況がありました。しかし、何れの地域も、良くも悪くも震災以前の状態が色濃く浮き彫りになっているという印象を受けました。沿岸の公立文化施設の多くは避難所として大きな役割を果たしましたが、10-BOX のように舞台関係者が集まって ARC ＞ T のような支援組織がつくられた例は多くはありませんでした。これも震災以前から舞台関係者が集う場所としての機能、人と人との繋がりがあればこそのことだったのだと思います。あれからを振りかえって、これからを描くときに、私たちはどのような日常を構築していくのかが問われているのだと強く感じています。

Arts Vision Network 311
事務局　坂田雄平（さかたゆうへい）

5月2日　米軍がウサマ・ビン・ラディンを殺害
平成24年度補正予算第1号成立

5月1日　東京から平田オリザ氏ほか来訪

4月30日　米軍がトモダチ作戦終了
青森県が県民向け避難所をすべて閉鎖
10-BOX「月と太陽の広場」開設

4月29日　南三陸町の応急仮設住宅が隣接する登米市に完成
東北新幹線が全線運転再開
夢とらっく劇場『セロ弾きのゴーシュ』岩手公演（5月1日まで3箇所）

2011.4.17

こどもとあゆむネットワークとの協働 _ せんだい演劇工房 10-BOX →宮城県域へ

3 月末。やっと手に入れたガソリンで被災地に赴いた。地震に遭ったこどもたちは、心に何らかの影響を受けている。そのこどもたちが一日でも早く日常に戻れるように支援するためだ。電池を使わない玩具を扱うおもちゃ屋さんの横田さんと、10-BOX の八巻さんと一緒にいわゆる御用聞きに伺った。全国から支援物資が届く。10-BOX の体育館をターミナルに、本の仕分け作業が始まる。こどもたちの笑顔は、被災地にともる灯りだと思う。その灯りを消さないように、「絵本」「おもちゃ」「文房具」「あそび」を届けることにした。

東松島市の様子 (2011 年 4 月 17 日撮影)

あのときあれから

地震に遭遇し、自分の周りがいくらか落ちつき、浮かんだのは、今まで付き合いがあった海岸部の保育所などのこと。さらに、全国各地からは被災地の子どもたちに本やおもちゃを届けたいとの申し出がきはじめ、それらの集積場所にありがたいことに 10-BOX の一室が使えそうとなった。3 月末、まずは現地を見なければと、10-BOX のスタッフなどと石巻・東松島・亘理・山元に行った。その時の自分の感情はいまだに整理が出来ていないが、目にした風景は、そこで起こったことを想像することすらできないものだった。自分の中には何かしなければとならないという高揚感だけが渦巻いていた。その帰り道、3 年間活動するチーム「こどもとあゆむネットワーク」の立ち上げが決まった。その後「ARC ＞ T」との協働で東松島図書館に行ったりもした。11 月末まで 10-BOX には本当にお世話になった。あと 2 年、子ども達が、以前の日常に早く戻れる手助けを行う覚悟でいる。

こどもとあゆむネットワーク代表
横田重俊（よこたしげとし）

第 5 回定例会・SENDAI 座☆プロジェクト稽古場（2011 年 4 月 18 日撮影）

2011.4.18

出前部の発足 _SENDAI 座☆プロジェクト稽古場

避難所や学校などからのニーズに応えて現地に赴き、ワークショップなどを行う活動を当初「慰問」と呼んでいたが、立場の上下を思わせる言葉の違和感を払拭するため、「要望に応えて、必要なものをお届けするならば」ということで、「出前」と名称をあらためた。

この第５回会議には、東京の青年座のみなさん、ベルギーの日玉浩史（ひだまこうし）さん (Act for JAPAN be. 代表)、神戸の島田誠（しまだまこと）さん (公益財団法人神戸文化支援基金理事長)、青森の立木祥一郎（たちきしょういちろう）さん (TECO) ほか、おおぜいの来訪があった。じつに多くの、さまざまな人たちが、被災地の状況を目の当たりにし、支援の方法を模索していた。

あのときあれから

被災地支援のための NGO をベルギーで立ち上げたばかりのぼくは、2011 年４月、被災状況を知るために仙台にも立ち寄った。直前に陸前高田の逼迫した状況を見ており、迅速な対策と行動の必要性を感じていたあの時のぼくにとって、仙台の文化人たちの動きはあまりに遅すぎるように感じていた。だから出過ぎた発言もした。

あれから一年が過ぎ、ウェブサイトで見る限り、今や ARC ＞ T の活動は多岐にわたり充実しつつあるようだ。それらの活動の中で、ARC ＞ T のメンバーが何を感じ発見しているのか、そしてそこから何が生まれるのか。表現はそれを受け取る人がいなければ成り立たない。ARC ＞T の活動の中で、発信者と受信者とのやりとりは文化を根付かせる畑を耕すことになるだろう。危機を好機に。震災の悲惨が、いつしか旅立ちの場面として語り継がれながら、そこから様々な物語が社会と作品の中で紡がれ、花開いていくことを期待してやまない。

Act for JAPAN.be
代表　日玉浩史（ひだまこうし）

5月8日　遠藤一郎氏『未来へ号』10-BOXを通過

第8回定例会（10-BOX　box-2）
出前部が仙台市福室市民センターで出前部自主研修会
「気持ちよく眠るためのからだほぐし」開始（仙台市福室市民センター）
シアターアーツ「公開フォーラム・震災後の演劇を語る」に石川裕人が参加（東京）

5月7日　ばんばみ&ななめ45°大阪公演にて東北の演劇人トークに森忠治が参加（～8日）

5月6日　東北大学が1か月遅れの入学式
東京から本杉省三氏来訪

5月5日　仙台電力ホールが全館再開

5月4日　広瀬川市民会議「広瀬川で遊ぼう」開催　広瀬川宮沢緑地公園（～5日）

5月3日　家屋流出区域等を除く全域で都市ガスが復旧
せんだいメディアテークが部分再開および「わすれン！」開設
夢とらっく劇場『セロ弾きのゴーシュ』宮城公演（5日まで3箇所）
東京からロバート＝キャンベル氏、奈良からたんぽぽの家ご一行来訪

2011.4.23
関西演劇人からの支援

「御用聞きに来ました」と、800km の距離を超えて福本年雄さん (ウイングフィールド代表) 、内田洋一さん（日本経済新聞記者）、間屋口克さん (制作者、NPO 法人大阪現代舞台芸術協会 DIVE 理事) 、土橋淳志さん (劇作家、演出家、A 級 MissingLink 主宰、DIVE 理事) 、尾崎雅久さん (制作者、尾崎商店代表) が来仙。「実際に必要なことは何ですか」阪神淡路大震災を経験した彼らにとって東日本大震災は他人事ではなかった。ARC ＞ T メンバーにとっては、阪神淡路大震災に対して関西の演劇人が何をし、その後どうなったかについて生の声を聞く貴重な機会となった。

東北の舞台人への支援として、東北の作品を関西で上演できる受け入れ体勢づくりや、仙台の人材不足解消につながる人的交流を望む意見が出た。関西の方々からは、今後、東北と息の長いつきあいをしていきたいとの意志表明があった。

あのときあれから

あの時思った事、今思う事

3・11 後の仙台を訪れたのは昨年 4 月末だった。ARC ＞ T の鈴木拓さんに亘理町の海側の被災現場へ連れていってもらった。足下に土台だけの家屋の跡、誰かの眼鏡、長靴の片方などがまだあった。

目を上げると海は凪ぎ、空は雲ひとつなく、桜は今を盛りと咲いていた。

これが自然というものだ、時の流れの無常さだと思うほか言葉もなかった。

「それでも桜は咲いている。俺は何をしに来たんや。」

確かに仙台、いわきの友人達を見舞い依頼された阪神大震災時の関西の演劇人活動資料を持参した。「ここで何が求められているか」をたずねもした。そして、仙台の舞台人の真摯で熱い思いに耳を傾けもした。

けれど津波が襲った現場に行き、人々の受難とは別次元の北国の春の余りの美しさを目にした。

禁断の風景を見てしまった罪悪感は今も心に重い。

ウイングフィールド・代表　福本年雄

1　有志と青年座で演劇人の家に泥かきのお手伝いへ（2011 年 4 月 17 日）
2　こどもとあゆむネットワークで絵本の仕分けお手伝い（2011 年 4 月～）
3　青年座の宮田慶子さんから届いた救援物資とお手紙
4　2011 年 4 月 30 日にせんだい演劇工房 10-BOX 部分再開にあたり、box-2 は「月と太陽の広場」と名付けられ、舞台人や市民の憩いの場として一般開放された。その場所を活用して ARC>T の定例会を開いた。

あのときあれから

震災から 1 か月目の 4 月 11 日、東北ツアーが中止になった青年座の『赤シャツ』メンバー数名の他 6 人と共に、せんだい演劇工房 10-BOX に到着した。
まずは、施設内の整備からとりかかった。10-BOX のスタッフや ARC ＞ T のメンバー、そして仙台の劇団の方達と共に、作業は進んだ。
とにかくひたすら皆で体を動かし続ける。初対面同志が、一緒になって動いているうちに、仲間になっていった。飯を一緒に食い、夜は酒も呑んだ。土砂のかき出しにも行った。物資の配達もやった。
フットワークの良さは必要。だが、今後、現実的に考えれば、現地の情報やニーズ、できる仕事を知った上で、ある程度の期間と人数で行けることを考えている。
少しずつでも、どれだけかかっても、あたりまえのことをやりたい。

加瀬貴広（かせたかひろ）

5　南三陸町（2011 年 4 月撮影）。

6　FM たいはく (仙台市太白区長町) では松島や南三陸町の子どもたちへ向けた絵本の朗読番組を収録。俳優の上島奈津子、高橋菜穂子、永澤真美、美峰子、原西忠佑、樋渡宏嗣、渡部ギュウが参加した。(2011 年 4 月～ 5 月)

7　せんだい演劇工房 10-BOX「月と太陽のひろば」に『あるくと。かわら版』と称して、文化芸術に関する新聞記事や公演情報、協働団体の紹介など情報の共有をはかった。

Save the

夢とらっく劇場「セロ弾きのゴーシュ」／セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンとの協働
（岩手県陸前高田市・2011 年 5 月 1 日　石川裕人撮影）

2011.4.29-5.5

夢とらっく劇場「セロ弾きのゴーシュ」_セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンとの協働

子どもの人権を守る国際NGOの公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンは、避難所生活で窮屈な思いをしている子どもたちに、安心してのびのびと遊べる場を提供する「こどもひろば」活動を各地で展開した。その現場には10名程度の地元舞台人が個人有志のスタッフとして参加しており、その中の一人、ARC＞Tメンバーの真田鰯(さなだいわし)のもとに主催者から「被災地の子どもが楽しめるお芝居をつくれないか」との相談があった。ARC＞Tで呼びかけたところ、劇団「夢とらっく〜結〜」が結成され、「夢とらっく劇場」企画が走り始めた。

上演作品『セロ弾きのゴーシュ』は、劇作家の石川裕人(いしかわゆうじん)が宮沢賢治の作品を構成・演出した。出演はχ梨(かいり)ライヒ（TheatreGroup“OCT/PASS”）、真田鰯（仙台シアターラボ）、白鳥英一(しらとりえいいち)（OtoO presents）、土屋悠太郎(つちやゆうたろう)（タイ舞踊家）、寺田美夏(てらだみか)。4トントラックの荷台を舞台に見立て、岩手県と宮城県の沿岸部6箇所を巡演。開演前には無印良品による「じぶんでつくる紙管こどもイスワークショップ」がおこなわれ、子どもたちは自分で作った椅子に腰掛けて上演を楽しんだ。

上演記録

4月29日（金）岩手県釜石市・釜石市市民体育館前ひろば
4月30日（土）岩手県山田町・山田南小学校校庭
5月1日（日）岩手県陸前高田市・サンビレッジ高田
5月3日（火）宮城県名取市・ファミリーマート名取植松1丁目店駐車場
5月4日（水）宮城県東松島市・ロックタウン矢本
5月5日（木）宮城県石巻市・石巻市立大街道小学校校庭

のべ観客数およそ1080名

5月18日　東京から中村陽一氏、高宮知数氏が来訪
5月16日　せんだい演劇工房10-BOX再開後初の公演・すんぷちょ『Midorigo』（10-BOX・〜18日）
5月15日　東京電力が福島第一原発1号機のメルトダウン暫定解析結果を発表
5月14日　中部電力が浜岡原発5号機の運転停止
5月13日　あるくと事務局、仙台フィル慰問コンサートに随行　女川第二小学校
5月12日　南三陸町の志津川小学校で入学式
5月11日　南三陸町の小中学校が新学期を開始（〜12日）
envisi主催追悼集会「南三陸の海に思いを届けよう」（南三陸町）
東京から福澤諭志氏、伊藤達哉氏、長塚圭史氏来訪
5月10日　仙台市民会館が会議室等の一部を再開
山形から宮沢啓氏、東京から流山児祥氏来訪
及川健一氏『ひかりのまち』撮影（10-BOX）

真田鰯（さなだ いわし）の旅日記

2011.4.29
釜石市民体育館前ひろば

AM6:00 仙台駅前集合。内陸を通ったため、この日は津波で被災した場所を見ずに会場まで行くことになる。
AM11:00 会場着。会場設営。掃いても掃いてもトラックの中に桜が舞い込んでくる。裏山の木が風に揺れて、山全体が生きているみたいに見える。賢治が描いた世界が岩手にはまだある。

PM1:00 イベント開始。日和もあってとても被災地とは思えない。今ここが被災地だとわかる理由は、たくさんの大人が、次から次へ子どもたちにプレゼントを無償で与えていることだ。

PM2:00 上演開始。役者の演じる猫がトラックから飛び降りると、子どもたちはその場で配られたお菓子を次々と与え始める。

終了後、宿へ移動。いかにも「遠野」という感じの、座敷わらしが出そうな古民家。

2011.5.3
ファミリーマート名取植松１丁目店駐車場

不思議な虹が出た。何を見ても地震の前兆に見える。

コンビニの駐車場での公演は、今までの発想に無かったことだった。リハーサルを見ていた子どもに「さっきのやって」とせがまれる。おもしろいと思うと何度でも見たいものらしい。「本番で」と軽く受け流したつもりが、すぐにターゲットにされ絡まれる。この日見に来ていた友人の子どもは、翌日、「今日もあれ見たい」とせがんだらしい。

2011.5.4
ロックタウン矢本

敷地内の店には親子がおもちゃを買いにきている。映画館も復活したらしい。子どもの娯楽が戻りつつある。

上演終了後、大人の方に「とても感動しました」とお声をかけていただく。みな心から楽しめる何か、楽しんでもいい何かを求めているんだと思う。たくさんの人が一緒に見ることで、「楽しんでもいい場」が生まれるのだと思う。

2011.4.30
山田町立山田南小学校校庭

遠野から山を越え、海沿いに出る。とたんに「ああ、これが現実だったな」と思い出す。胸が詰まって身体が硬くなる。車内の空気が急に変わって、みな無口になる。嘆息のような言葉だけになる。この光景を見て心が硬くなることに理由なんてない。圧倒的に不条理だし、圧倒的に非常事態なのだ。心も身体も、構えるし緊張する。

山田町は火災もあったらしい。焼け焦げた家々は空襲のあとのよう。崩れ、焼けて住めなくなった家のひとつひとつに「O.K」と書かれている。

2011.5.1
サンビレッジ高田

子どもたちは、すごく劇に参加してくる。心で思ったことを全部言葉にして 客席から投げかけてくる。一人はどんどん近づいてきて、もう舞台に上りそうになっている。でも、他の子どもたちはそれをとがめるでもなく、普通に見ている。たぶん他の子も心持ちが同じだから、気にならないのだろう。

2011.5.5
石巻市立大街道小学校校庭

私は、3 週間近くこの学校に「こどもひろば」で通っていた。

大街道の子どもたちは、他のどこよりも真剣に見てくれていた。野外なのにひとりひとりの息遣いがきこえるような集中した客席だった。上演終了後、こどもひろばで遊んでいた大街道の暴れん坊将軍 (小 2) に会う。はにかみながら、すごく嬉しそうにしている。地震後、自分にとって一番大事な友達のひとりだったので、私もすごく嬉しくなる。

人と関わる度に、自分にとって大事な人が増えていく。まして、非力で、困難を抱えていて、闘っている子どもは、すぐに大事なひとだ。私が今、生きている理由も、舞台上で闘う理由も、大事な人のためでしかない。

だから、外へ出ていって人と関わるより他に道はないのだろうと思う。

真田鰯
俳優、演劇ワークショップファシリテーター。仙台シアターラボ所属。震災後、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンが開設した「こどもひろば」のスタッフとして 2011 年３月～４月、石巻市の小学校を中心に活動。

5月19日　第9回定例会（10-BOX　box-2）

Art Revival Connection TOHOKU 2,500 pcs

5月20日　世田谷パブリックシアターご一行来訪
あるくと券、発行開始

5月21日　美里町文化会館が全施設貸し出し再開
出前部がしおかぜ福祉会「ダンスを楽しもう」を開始（宮城県岩沼市）

5月22日　石巻専修大が入学式
東京から千賀ゆう子氏来訪

5月23日　出前部が花いちもんめ「ほがらかタイム」を開始（東松島市赤井）

5月24日　事務局が盛岡を訪問。岩手の演劇状況を聞く。

5月25日　東日本大震災支援全国ネットワーク現地会議イン宮城（仙台国際センター）

5月28日　流山児★事務所『夢語話浮世根問』仙台公演（10-BOX・～29日）
福島から今尾博之氏来訪

ARC>T で活用されたインターネットツール

はじまり

□メーリングリスト
会議に集まったメンバーで Google によるメーリングリストを立ち上げる。

□暫定ホームページ
杜の都の演劇祭のサーバー上で、情報共有用に暫定の WEB ページを運用。

発信

□ Ustream
設立前の会議を含め、全ての定例会の様子を Ustream 中継した。

□ SNS
まだそこまで一般的ではなかった、Facebook や Twitter を用いて、積極的に発信。

運営

□チャットワーク
事務局の情報共有＆プロジェクト進行にチャットワークで活用。

□ FileMaker
主にアウトリーチ活動のために、独自の管理システムをファイルメーカーで開発・運用。

共有

□ホームページ・情報掲示板
ARC>T として正式に運用開始。活動報告をメインに情報の公開に努める。不測事態に備えてテキストベースの情報掲示板を整備。

□ Google カレンダー
事務局や事業のスケジュール管理のために使用。

□ Google ドキュメント
同時編集が必要な書類作成に使用。

□ Dropbox
事務局内での電子ファイル共有に使用。

□メールマガジン
3 日に 1 通の頻度で、メンバーに配信された。

□ Evernote
メルマガの過去ログを共有するために活用した。

http://arct.jp/mailmaga

2011 年 3 月 27 日 渡部ギュウ氏からメールで「仙台の演劇人の寄り合いを行います。ベルギー在住のダンサーから、支援を行いたいので、会議の内容をネット配信してほしいという要望があります。力を貸していただけませんか？」との依頼があり、震災の影響で仕事もほとんどストップしていたため、自分の出来ることをしようと思い Ustream を使った映像配信のお手伝いをさせていただきました。

3・11 以前から考えていたことでしたが、30 年間近く映像編集の仕事をしてきていて、もっと社会貢献的な活動が出来ないか考えていたところでした。

3 月 29 日、ARC ＞ T の前身「東北復興に向けての仙台舞台人会議」は参加者の震災当時の状況と現状をリアルな声で動画配信し、録画試聴も含めのべ 1,000 人以上の方々に見ていただきました。4 月 11 日に開催の ARC ＞ T 会議はリアルタイムでの試聴は約 100 人の方々でしたが、ARC ＞ T を強く応援したい方々であったと思います。その後、現在の視聴者数は多くはありませんが、会議を Ustream で中継する事は、多くの人々に支えられて活動する ARC ＞ T の透明性を保つためにも必要だと思います。

また、Ustream での動画配信はその時間・感覚を共有するものなのだとも思います。

演劇も音楽もライブで見る聞くことが一番です。これからは映像コンテンツでライブにお客さんを呼ぶ仕組みを作り、会場に来るきっかけの一つになれればと思います。そのためには先ずはお互い「共有する」ということが重要です。時間を共有し同じ空気を吸うことにより、何かを感じていると思います。 Ustream の映像を見ていた人の中でも実際に仙台に来たのは、その何かを確かめたくて「共有」したくて来たのだと思います。

Ustream 中継をこれまでいろいろと経験していると、自分の本業である映像編集の仕事は現場で起こった時間・空間の要素を凝縮して編集することにより、見る人の時間を作り出す効果があると気づいてきました。たとえば、6 時間の会議に出られない人が、1 時間に編集された映像で見ると、見る人には 5 時間分の時間の余裕が出来る。その 5 時間分の余裕が 100 人集まると 500 時間、200 人だと 1,000 時間…その時間を作り出せることも映像編集の役割と再確認しました。

自分は 2011 年 6 月に会社勤めを辞め、フリーランスの映像技術者として映像音声編集等で生計を立てつつ、ARC ＞ T で映像配信のお手伝いをしています。これからも仙台の舞台表現者のお役に立てるよう ARC ＞ T に関わって行きたいと思います。

Ustream アーカイブ
「東北復興に向けての舞台人会議」
http://www.ustream.tv/channel/mikiha/videos
「ARCT ミーティング」
http://www.ustream.tv/channel/arct2011/videos

長屋 裕二（ながや・ゆうじ）
映像音声編集技術者、ガオンスタジオ、見る聞く話す .net 所属。
ARC＞T の前身の舞台人会議から定例ミーティングのほとんどの回の動画中継を担当。2011 年 5 月から 8 月にかけて南三陸町でおこなわれた追悼集会「南三陸の海に思いを届けよう」（主催：ENVISI）では、避難生活でばらばらに暮らす町民たちが同じ時間を共有できるように、いくつかの避難所をつないで集会の様子を同時中継する技術協力をおこなった。

10-BOXの現場から

八巻寿文（やまきとしぶみ）
せんだい演劇工房 10-BOX 二代目工房長

せんだい演劇工房 10-BOX(*1) がある仙台市若林区は、57%が津波の被害にやられ、10-BOX は仙台市内でいちばん被災地に近い劇場となった。自治体による「建物の応急危険度判定」で、10-BOX の新棟部分には緑色の「調査済み」の紙が、旧棟には黄色い「要注意」の紙が貼られた。10-BOX のある卸商団地 (*2) では 30 パーセントを超える建物に赤い「危険」の札が貼られていた。

あの日とその翌日　2011年3月11日(金)と12日(土)

突然の地震が 3 分以上、余震を含めると終日揺れ続いた。傾いた信号機は光を失い不気味な黒い目で交差点を見下ろすなか、車はお互いが緊急車両であるかのように譲り合っていた。10-BOX の外観は変化が無く安堵したものの、内部は一歩も踏み入れられない惨状だった。同じ敷地にある重度の知的障害者通所施設「のぞみ苑」と 10-BOX の利用者は、避難訓練のとおりに隣の公園で待機し、避難訓練をやっていて良かったとしみじみ話し合った。

余震が続くなか 16 時ちょうど、唐突に不自然な雪が降り始め、舞台の裏方という職業柄か、キッカケのように体が反応し時間を計った。45 分で収まったが、雪はけっこう積もった。その直後「く」の字に飛行するすごい数の水鳥の編隊を見た。初めて見た光景だった。

ブレーカーを全て落とし、災害ダイヤルとコミュニティ FM に「無事」を伝言し、スタッフや障害者の皆さんとともにしばらく帰れない不条理を思いながら夜をむかえ、暗闇に大天空（だいてんくう）の星を仰いだ。だれかが耳元で「銀河鉄道」とささやいた。すると、続く余震の揺れが列車のように感じられ、たしかに生きているか死んでいるのか、ちょっと自分が定かでなかった。

翌早朝、10-BOX の公用車でパトロールを試みたところ、仙台港まで行けてしまった。カシャカシャ！車がおびただしい缶ビールをつぶす音を聞きながら、深まる土砂と、建物の壁や電柱に吹き溜まるような自動車の重なりを見、低い雲かと思ったものはコンビナートが炎上する煙に続いていた。横倒しのトレーラーに道を阻まれ、引き返す道すがら何台もの自衛隊の車両とすれ違った。

まずは水道水を確保し、駐車場にカマドを作り、生存が確認できた人の名をひたすらホワイトボードに書いて掲示を始めた。しかし、何を見ても聞いても想像力を超えており、思考や判断には何一つ確信が持てず、それからはただ漠然とした涙が突然あふれ出るようになっていた。

10-BOX の HP「劇都仙台」のブログで無事を知らせる「10-BOX からのお知らせ」（下記）を上げたが、状況が把握できないため書く内容が定まらず、優秀なスタッフに口述で打ち込んでもらい、何度も読み返して、やっと思い切って UP してもらったものだ。

劇カラ通信

« 劇都仙台2010連続レンポジウム「... | トップページ | おはようございます »

10-BOXからのおしらせ

運営を休止し、復旧作業を行っています。

19日までに立ち直るつもりです。

・連続シンポジウム#7,#8
(12日(土) メディアテーク)
は実施できませんでした。

・舞台スタッフ★ラボ ～しっかり土日編～
(13日(日)、20日(日)、21日(月祝) 10-BOX)
は中止にいたします。

たくさんの皆様に助けられ、『10-BOX』も『のぞみ苑』もケガ人はありません。

ごめいわくをおかけした関係者の皆様にお詫び申し上げます。

(工房長)

17:55, Saturday, Mar 12, 2011 | パーマリンク | コメント(31495) | コメントを書く | トラックバック (0)

建物はともかく無事で、訪れたもの同士が再会し、差し入れを分け合い、生存確認ができた人の名を書き込み、できる範囲で復旧作業を手伝ってもらった。人は入れ替わり立ち替わり集まって来た。

(*1)　せんだい演劇工房 10-BOX：仙台市市民文化事業団演劇振興課が管轄する仙台市の演劇専用施設。稽古場、作業場、資料室など 10 個の部屋から構成され、「試しながらじっくり演劇を創る空間」を謳（うた）う。2002 年開箱。舞台芸術振興のための「劇都仙台」事業の拠点として演劇祭やワークショップ等を行う。舞台芸術の発信と交流の場として仙台のみならず全国から利用者が訪れる。

(*2)　卸商団地：仙台市の東部若林区にある多業種企業が集積する総合流通団地。1965 年創立。仙台市地下鉄東西線計画への対応から、団地設立時の第一種特別業務地区から第七種特別業務地区へと用途規制を緩和。これにより卸売業以外の商業活動や文化活動のための施設立地が条件付きで可能となり、10-BOX のほか、音楽工房 MOX、能 BOX ができた。「人・モノ・情報・文化」が行き交う新しいまちづくりに積極的に取り組む。

焦燥と無力感　3月13日(日)から14日(月)

しかし、その「お知らせ」をアップしたことで、来ることのできない人たちから「手伝いに行けなくて申し訳ない」というメッセージが多く届いた。自分より悲惨な状況がきっとあって何かチカラになれることがあるなら、そう誰もが願っていたはずだ。

翌13日、10-BOXの内部は確かにめちゃくちゃだったが、復旧作業は電気が通るまで日中だけの作業と決め、時として15時になったら酒を出した。そうしないと取り憑かれたように作業を続けてしまうからだ。来られる人はいつでも来ておしゃべりができる。思い思いに10-BOXに来る事ができて、気兼ねなく再会でき、できるだけゆっくりと深刻になってほしかった。

14日、「支援物資が向かっているが受け入れスペースを提供できるか」と電話が鳴った。その場で床面積を伝え「受け入れたい」と答えたが、向かっていたのは10トン車10台と知った段階で断らざるを得なかった。運転手は夜通し走ったことだろう。10-BOXからであればそれが届いて助かった人もいたかもしれない。許容量の小さい10-BOXは無力なのか、いや采配できない自分が無力なのだ。

膨大な「詩」が雲散霧消している　3月中旬

音信不通の3日間、避難所になって5日間、水道の復旧に一週間、電気は10日後に通電した。10日間が生命線といわれるが、震災が起きライフラインが途絶えた10日間は意識が定まらない暗く深い底だった。言葉も思いも記憶すら蒸発し、イメージが像を結ばない。同じような多くの思いが膨大な蒸気となって立ち上がっている気配を感じた。これは「詩」が生まれている気配だ。いま「詩」とは気づいていない人たちから産み落とせない詩が、詩になる以前のままの記憶として消えてゆくのだろう。助産婦のように産みの手助けをする人とスキルが必要だ。しかもその数は膨大だ。そう思うほど手も足も出ない無力感ばかりが倍加した。

泥かきと子どもしかない　3月下旬

地震の当日、会う約束をしていて結局会えなかったサンディエゴ在住のアーティスト、ヤコ・キムラ（後に現地で「CAL」を立ち上げ：*4) と電話で「今できることは泥かきと子どものケアしかない」と話して受話器を置いた。

直後に電話が鳴り、仙台の絵本の店「横田や」の主人、横田重俊(よこたしげとし)さんが「子どもがたいへんだ」と言う。「そうだね」と言ったとたん受話器から横田さんが飛び出す絵本のように現れた。本当にそんな印象なのだが、実際は横田さんが近くから電話をかけていて間もなく事務所に現れたのだ。
10-BOX公用車が仙台市の緊急車両扱いとなり、卸商団地会員限定で給油ができ、条件が揃ったからには現地の状況を調査する責任があると感じた。

同乗者は5人。えずこホールの水戸雅彦さんと、後に「ARC＞T」の事務局長となる鈴木拓くん、せんだいメディアテーク「わすれン！」(*5) 担当となる北野央(きたのひさし)くん。そして私と横田さんは絵本を届ける「こどもとあゆむネットワーク」(*6) を立ち上げた。同乗者は全員ネットワークのメンバーになった。

3月28日、絵本やおもちゃとともにヘルメット、マスク、水などを積みこんで南に向かう。相馬の手前の宮城県山元町で道は瓦礫と海水により途絶えた。翌々日は北に向かい、石巻の日和山公園から街の明暗を見下ろした。ナビや地図は現実のものではなく、道は高速道路も含め段差が多く交通規制もあいまいだった。子どもがどこでどうしているのかは、実際に確かめなければわからない。向かうべき道も施設も横田さんの人脈と土地勘が全てだった。

大人は会って話せるが、うまく話せない子どもは不安や悲しみを発散するために遊ばなければならない。現場の避難所や公的施設から無邪気な子どもは急速に減っていた。避難所や役場は、外の情報を誰も持っておらず、物資があふれている施設と不足している施設が隣り合っている現場すらあった。

子どもに関する情報は民間の保育所が最も有力だった。元気に遊ぶ子を持つ親は、2階だけ残った自宅に戻っているケースも少なくない。しかし、そこには物資も情報も届かず、コミュニティができかけた避難所では配分のシステムも生まれ、部外者は物資を分けてもらいにくいという声もよく聞いた。保育所は泥をかいたばかりの施設で子どもを預かる準備を進めていた。

同時期、ARC＞Tの前身「東北復興に向けての舞台人会議」発足。

(*4)　CAL(Creative Action Links)：東北の子どもたちを支援するために発足した組織。日本や海外の慈善組織と連携しながら、救援物資や文房具等を送る「東北キッズソリダリティプロジェクト」、中高生を対象に国際的な人材育成を図る「羽ばたけ！東北キッズ」、高齢者の知恵を継承する「おしえて！せんぱい」、日本の現状を伝えるウェブサイトの運営など、多くの支援プロジェクトを展開している。

(*5)　わすれン！（3がつ11にちを忘れないためにセンター）：市民と専門家らが協働し、震災復興のプロセスを発信、記録していくプラットフォームとしてせんだいメディアテークが2011年5月3日に開設。さまざまなメディアを通じた情報共有、「震災の記録・市民協働アーカイブ」の記録保存、インターネットを介した番組の収録と配信等を行なっている。

(*6) こどもとあゆむネットワーク：被災地の子どもたちのために絵本やおもちゃ、文房具ほか必要な物資を届ける支援組織。

社会の価値がひっくり返った　4月頃

食と暖と通信と移動と排泄、とにかくかろうじて破綻に至らなかった。舞台スタッフと「のぞみ苑」の栄養士の現場力と、10-BOX がある卸商団地内のスーパーやガソリンスタンドの人力のおかげだ。お金や権力ではなく、縁の下の人力の価値が明らかに顕在化し、立場の垣根を感じなかった。

一刻も早く各自の家族の安否と様子の確認が必要だと思った時点で、原付バイクの二人乗りは黙認されるべきだと思った。実際にそのような事例は見ていないが、大渋滞とガソリン不足、交差点での阿吽（あうん）の呼吸の譲り合いを考えれば、ライフラインの復旧までは常識の範囲と考え躊躇しなくてもよかったのではないだろうか。

ともかく、大型スーパーではなく地元の小売店。自動車ではなく自転車や原付バイク。パソコンではなくラジオ。携帯電話ではなく公衆電話に助けられた。現金ではない価値を分け合った。在庫の総量を共に知る事が大切だと思ったし、そうすることによって、不思議なことに「少し足りないくらいの物を分け合う」と、少量でも心身ともに満足ができた。

緊急時の判断や個別の対応を、のちに責めを負わせず、結果の事態として共有したうえで責任を果たす、その機能と認識は自治体など組織の血流と考えれば特に必要だと思う。

原発を思い返せば、現場の技術者の使命感によって最悪の事態がかろうじて回避されたのだろうと想像できる。それほど大事な現場や人力の事を、国や企業の権力の高い人ほど認めない、あるいは認め難い、そういう傾向を感じる。　もしそうだとしたら自己評価に必要な「フィードバック」が困難な要因だと考えるべきだ。

何がほしいか答えられない　4月頃

不足している物は皆それぞれにある。しかし「他のみんなにとって何がほしいのか」と考えたとたん答えに詰まる。「みんなにとって」という単位が果てしなく、はたしてみんなはどうなのか、誰のどこまで分け合ってよいものか、わからなくなる。四国松山の梶原剛（かじわらごう）(*7) という男からの電話「酒？」「うまいの」「やっぱり！」。それから宮田慶子（みやたけいこ）さん（*8）「うちのやつらの腕？アタマ？」「腕」。この会話の後に彼らはそれぞれ勘で辿って実際に来てしまった。しかも、まったく手がかからず滞在し、それどころか率先して働き、食事を作り、話し相手になり、見送られずに去った。

いまも日々思う。もしも逆の立場だったら自分も同じことができるのだろうか。できなかったらどんな気持ちになるのだろうか。どうやったら恩返しができるのだろうか。

声が小さくなっていた　6月頃

施設は貸し出せないが、やる事を思えば際限なくあった。しかし、スタッフみんなと共に立ち上がるタイミングを計らなければ、その後の体力や精神力は続かないと思ったし、コンディションもまた明らかに人それぞれだった。勤務のシフトを決め出勤できる時期になっても、仕事を始める前の少しの時間をコーヒー＆ゲームで過し、みんなで笑える時間を作ってから仕事を始めることにしていた。

貸し出せない施設のひと部屋を支援で頂いた盤ゲームなどの遊び場にして、誰でもいつでも遊べるようにした。スタッフだから置いてあるゲームの遊び方がわからないといけないという詭弁で様々な国のいろいろなゲームで遊び研究した。その中で何度も繰りかえしたのは、カードゲーム「虹色の蛇」だった。

そのうちに気がついたことがあった。自分も含めなぜかみんな日々の声が小さい。

想像するに至ったことは、地震は瞬時に起こるが津波は襲われるまでの猶予がある。パニックになるまでの残酷な時間だ。地震の後の水の匂いや空気感を感じた人は多い。津波は壁のように現れたと言う人もいる。電柱がマッチ棒のようにポキポキ倒れた、と言う人もいる。第２波、そして第３波と次第に大きくなった。引き波が第４波を打ち消し目の前で消

(*7)　梶原剛：愛媛県松山市在住。株式会社 MICHIKUSA 代表取締役。演劇を基盤に各方面でコミュニケーションに関わるビジネスを展開。2005 年「10-BOX 国際演劇学校」への参加をきっかけに 10-BOX との交流が続いている。

(*8)　宮田慶子：演出家、劇団青年座所属。2010 年新国立劇場演劇芸術監督に就任。1995 年仙台市市民文化事業団主催の演劇ワークショップ以来、劇都仙台演劇プロデュース公演７作品の演出および仙台劇のまち戯曲賞選考委員を務めるなど、長年に渡り仙台の演劇事業に尽力。

えた。逆に大きさを増して飲まれた。総じてあっという間の出来事だったという。この、地震発生から 30 分〜 1 時間のあいだ、どれだけ多くの人間が大声を出し叫んだことだろう。近年には無かった声の総量を想像すると、生き残った私たちは声を吸い取られたために低いのではないだろうか。

逆に、声の大きな人は元気な人が多い。声を出すストレッチは心身に有効だと思う。

「無事」と言うコトバには中身がない

つい「無事か？」と言ってしまう。しかし、いろいろな種類の「無事」があった。本当に無事。今のところ無事。本人だけが無事。ひたすら「ウン」としか反応できない。個々人の状況の振幅があまりに大きく「無事」という言葉ひとつでは背景も心境も全く推し量れないし、状況や背景もその善し悪しも別個で比較が無意味だった。しいて言えば、聞いた自分が安心するためだけに役立っていた。

苦しみの波紋は広がる

電気が通り外部との交信が回復すると、メールや電話や来客に絶え間がない。10-BOX という場所があることは生存の旗印であり拠点の証しだと実感した。本当に多くの方々から電話やメールや支援を頂いた。その多くの方々をここで紹介し、お礼を申し上げたい気持ちであふれている。しかし、その背景や周辺に何倍もの苦しむ方々が生まれるのだと思う。

私には何もできなかった。そういう感覚が多くの人々の心の波紋が広がるようにあったはずだと考えるとき、被災したこの地ならではの無残な情景を見る事も、復旧する光景を見る事も、また何も無かったかのような環境に浸ることもできるわれらの方が、どれだけ幸せか知れないとも思う。

他者との比較に意味が無いとはいっても、何もできない苦しみは、むしろ被災者である事よりも苦しいのではないだろうか。早々に連絡を下さった方も、そうでない方も、支援の行為も、思いも、個々の状況の振幅は同心円でも差が大きすぎて、間違って人を傷つけるかもしれない。

共通語としての方言

交換した名刺の束が 20 センチを超えた 2 〜 3 か月頃はありがたい半面、体力も憔悴（しょうすい）し記憶も定かではなかったようだ。対話にかなりムラがあったと思っている。無意識に共通語に合わせて対話をしているが、コンディションに左右され、時に頭のネジが海水でさび付いた感じになった。

そのネジが急に滑らかに動いたのは東北弁で応えた瞬間からだった。生まれ変わったように思ったことが楽にしゃべれるようになり、言い過ぎて後味が悪く後悔することさえあった。イントネーションと訛りの度合いだと思うが、普段使っている言葉が共通語だから伝える匙加減（さじかげん）がわかる。言語学的に正確な仙台弁をしゃべろうとしたなら、標準語と同じく束縛があるかもしれない。そうではなく生きた言葉と思考が結びついて、自分にとって最も楽に本音が出る、しかも日本語として伝わる「方言の共通語」があるのだと気付いた。

関西から来ているボランティアが、関西弁を注意深く使っていると語っていた。東北のひとには刺々（とげとげ）しく伝わるようだからと。思うに、それは関西弁そのものが刺々しいのではなく、ハッキリと物事を言う風土の人がストレスなくしゃべる内容に、文化の差があるのだという気がする。

普段私たちは相手と同じ言語を使おうと無意識の作用が働き、言語の違う相手に一方的に方言を使おうとは積極的にはしていない。また、若者が訛れない現象もあるが、訛りを文章で書くと漢字が減り読み難い。パソコンのキーボードでは打ちにくい。などの要因があると考えている。

しかし、この「発語」に強く頼る「身体性」には「地域性」が活きており、地域語を普通に使う社会がやってきたなら、地域の文化が立ち上がり、交流が本音でできて、誇りやアイデンティティを身体感覚で取り戻せるかもしれないとさえ思える。

また、支援で現地に入った際に、現地語で訛ればすぐに打ち解けられることは容易に想像できるし、現地以外の人には東北弁がきつくて聞き取れないという事態は想像に難くない。共通語で話せても現地語の聞き取りができないが、方言者側は聞き取りも話しもできる関係。現地の人にとっては、むしろ伝わらないことがもどかしいだろうし、同じ東北人でさえよくある事だ。この両者の関係ではバイリンガルである方言者が理解に有利であり、共通語者が理解の壁にぶち当たる姿を想像し、駆けつけたいほど気の毒に思っていた。ごく最近までは少しの疑いも無く。

しかし、方言を理解できない共通語側が、方言しか話せない人を「自分たちにわかる言葉がしゃべれない不自由な人たち」そう考える人がいることを知った時、本当に驚いた。助けてもらう術を持たないかわいそうな人たち、という感覚だろうか。「方言人は不自由人」という感覚が現在の日本の社会通念なら、日本は多様な言語社会の難しい人権問題などに対して平等な議論をすることはできない。強い者の思い上がった論理は常にあるし、支援なのか押し付けか、侵攻なのか侵略か、きわめて曖昧で危険だ。特に、日本人が過去に犯した戦争に至る精神の弱点であり、現在も「もうろうとした日本人」特有の腐った甘えの構造だ。強い側の論理に悪意が無いことも、問題をクリアにできない要素としてあるのではないだろうか。

部分再開を伝えた「劇都仙台」ホームページのメッセージ　５月１日

【０】からの再出発

2011年4月24日から受付を開始した１０−ＢＯＸは5月1日から利用を再開します。

１０−ＢＯＸの建物は、上空から見下ろすと数字の【１０】に見えるはずです。
まだ【1】の部分である旧棟は貸出しの見通しが立っておらず、
新棟の【0】の部分を先行して開館します。
文字通り【0】からの再出発です。

しかも一部のスペースは物置を兼ねており、ご不便をおかけして申し訳ありませんが
「月と太陽の広場」と名づけ、打合せや休憩などいつでも誰にでも使っていただけるよう開放します。
「太陽と月の…」と言いたいところですが、夜でもやがて日は昇る、という思いから「月」が先になりました。

このささやかな広場にはテーブル、イス、空いた棚、ホワイトボード、簡易印刷機などとともに持ち寄りケータリングや美しい盤ゲームなどがあります。

この広場から「濁色(だくしょく)」と「プレイ(あそび)」をイメージします。
例えば、絵の具の赤・黄・青は混ぜて作りだすことが出来ない「純色」(または「個色」)ですが、三つの純色をぜんぶ使って好きな割合で混ぜる【プレイ】をすると無限の種類の黒や茶色、つまり【濁色】が生まれます。
濁色もまた美しい色の種類です。その色を白い紙にちょっと取ってゴシゴシ強くこすると、今度また純色を発見します。が、大きな違いは個々にある色ではなくグラデーションになっているところ、かな。

そして「ワークショップ」とは、もともと「場」を指す単語でした。
この【0】から始まる場や活動は「ワークショップそのもの」と考えます。

二代目工房長 ヤマキ

【10-BOX に立って】

あの日とその翌日

あの日は、舞台技術講座の発展形「舞台スタッフ☆ラボ」(*9)の素材を探しに近くの図書館にいた。16 時には街なかで、「10-BOX 国際演劇学校」(*10)から「夏の学校」(*11)へ移行する打ち合わせにサンディエゴから来ていたヤコ・キムラと待ち合わせていた。そして、10-BOX のある卸町にできたクリエイターのシェアオフィス TRUNK (*12) での展示の照明をセッティングする予定もあり、夜は「杜の都の演劇祭 2011」(*13) の総打ち上げだった。翌日は、「仙台劇のまち戯曲賞」と「演劇プロデュース公演」の隔年セット事業 (*14) の見直しを期に、仙台市市民文化事業団の最長寿事業である「劇都仙台」事業を振り返り、今後の展望を話し合う連続シンポジウム「劇都仙台のこれから」の最終回を、せんだいメディアテークの（特に被害が大きかった）7 階で予定しており、東京と大阪から招いたゲストが仙台に向かう予定だった。わずか 2 日間のことを書いただけで 10-BOX の主要な演劇系事業が紹介できてしまった。しかも、通信手段が途絶え、悪い夢を見ているように自動的に予定が消えていった。

ひとつだけ実施できたことがあるので記録としても残しておきたい。

10-BOX のアウトリーチ活動は、もっぱら「学習発表会」などを中心に人材や機材を現地に届けるといった、通年で手間がかかるプログラムを主に年間 30 件ほど行っている。そのなかに、宮城県と協働で行っているアウトリーチがある。県は現場の募集とマッチングを行ない、10-BOX はプログラムと人材を提供する。小学校の授業か放課後の児童館が多い。うまくいっていた協働事業だけに、実施できないことを残念に思った矢先、被害の大きかった宮城野区にある「榴岡児童館」から、仙台のベテラン俳優で自ら劇団を主宰する白鳥英一（*15）のプログラムを、予定の日程どおり 3 月 24 日に行いたいと要請が来た。10-BOX にまだ電気が通じていない時点での要請。しかもそれに応えたことは驚きだった。個人的には様々な決断をするうえで大きな励みになった。

予定が飛んでしまったどの事業も、あらためて必要だと感じられた。こんなときにこんな事はやっていられない、といった見直しが思いつかないどころか、むしろ今こそやるべきときだと思っていた。ただ、どんな復興の風が吹いてくるのか読めないという不安があり、風が去った将来も残る基盤であるために「漂えど沈まない船」であれる事業が大事だと意識している。

(*9)　舞台スタッフ☆ラボ：10-BOX 自主事業のひとつ。初心者および経験者対象の舞台技術講座。

(*10)　10-BOX 国際演劇学校：フランスのジャック・ルコック国際演劇学校のカリキュラムを基にした集中夏期講座。2004 年から 09 年まで、フランスから講師としてヴァレリー・モアイオン、ヤコ・キムラを招いて開催された。

(*11)　夏の学校：既成概念に捉われない発想力や観察力を鍛える夏の集中講座。ヤコ・キムラを講師に迎え、身体と造形の作業を通じて創造の本質をつかむ「好奇心と創造のレッスン」、クリエイターの新たな挑戦を促す「創作実験アトリエ」の 2 プログラムを行なう。

(*12)　シェアオフィス TRUNK：正式名称は TRUNK-Creative Office Sharing-(トランク クリエイティヴ・オフィス・シェアリング)。2009 年、仙台市は卸商団地地区をクリエイティブ産業立地促進助成制度の対象地区として指定。クリエイティブ産業を集積し、テクノロジーとアートのコラボレーションによる新しいビジネスモデルを生み出していくことを目的として TRUNK を開設。

(*13)　杜の都の演劇祭：10-BOX 自主事業の一つ。街なかのカフェやレストランなどでリーディングを行う。2008 年から継続中。

(*14)　「仙台劇のまち戯曲賞」と「演劇プロデュース公演」の隔年セット事業：2001 年度に仙台劇のまち戯曲賞を創設。第 3 回となる 09 年度まで隔年実施した。大賞受賞作品は演劇プロデュース公演として翌年度に舞台化された。

(*15)　白鳥英一：俳優、演出家、劇作家、OtoOpresents 代表。震災以前から市民センターや児童館等で演劇ワークショップを行っている。

震災前から思うところ「国境なき劇団」

「災害があったとき、初動の 3 日間は自衛隊が人命救助にあたる。間もなく到着した『国境なき医師団』は 10 日ほど現地で治療を行い身体の痛みを癒す。やがて、どこからともなくやって来る『国境なき劇団』は、その後しばらく続く心のケアに当たる。10-BOX はそれをイメージして運営する。『国境なき劇団』の具体的なプランやイメージは未知のものだが、10-BOX の運営で迷ったときには『国境なき劇団』に向かうかどうかを基準に判断する。」

これは、10-BOX がオープンして以来、いろいろな場で語り、自分の中でテキスト化されているくらいだ。しかし「国境なき劇団」が何を意味し、どんな組織なのか、実は自分自身で分からない。響きがかっこいいと思う。何となく被災地の野外や小劇場で演劇をしているイメージはぼんやりとある。ある時は外人だったりする。

10-BOX が行ってきた、演劇を応用して社会に役立てるための、特に教育の現場でのアプローチには、学校は地域の公共施設でもあるという考えが根底にあり、例えば「学習発表会」を活用して地域の人たちを巻き込んだお祭りのような避難訓練を行うことで演劇への敷居を低くする、という提案もしてきた。しかし､学校や先生の壁はとても高くて厚かった。震災を体験した自分は、これから「国境なき劇団」をどう捉え直せるのだろう。落ち着いて観察して行きたいし、この概念は誰かと分かち合いたい。

震災前から思うところ「野生のフィールド」

「アートもアーティストも天から降ってくるわけではない。完成されたものが自然に降ってくるのではない。芸術は 100 パーセント人口の産物であり、それに関わる人は努力の結果として専門性が高く、自己実現のために人生を賭けている。が、しかしアーティストが職業としてあり、生活保障がなされているヨーロッパなどと違い、一般市民である。」

「なかでも演劇は、その時のレベルで思ったことを他者に発言して良いジャンルである。学者などは間違ったことを無責任に言えないが、演劇は自分が思った段階で、自分のものが言える。場合によっては社会を告発することもあり、その余地を奪ってはならない。」

「活き活きとした表現が生息する『野生のフィールド』に、無責任に手を突っ込んで荒らすようなことがあってはならない。」

このような考えも何度も語り脳内でテキスト化されていたようだ。震災直後に来訪された方に対して「10-BOX は『野生のフィールド』を守るのであって、何かがあったときだけ適切な手を差し伸べる。」そう口をついた瞬間、今まさに何か大変な事が起こっているのに何も適切なことをしていないと気づいたとき、自分に自分で愕然とした。野生のフィールドが緊急事態だ。何も考えていない。何もしていない。助けていない。ハッと気づいて青ざめた瞬間を今も思い出す。何ができる事かと集まって話し合っていたみんなが被災者だと、私は気付かなければいけなかった。

いまの、10-BOX の一角を ARC ＞ T のオープンオフィスとして通年で貸し出す決断につながっている。

10-BOX はワークショップそのものだった

前述の、5 月 1 日の 10-BOX のホームページで「『ワークショップ』とは､もともと『場』を指す単語でした。この【0】から始まる場や活動は『ワークショップそのもの』と考えます。」

そう言っていながら、施設を運営する日常において、そのことを忘れることが多い。忘れてよく考えるとまた同じ考えに戻る。それを繰り返している。たぶん、日本に前例が無いからだと思う。

しかし、本当の「劇場」という概念の出発点ではないかという気がするのだ。

【不思議な光景を見た】

これまでにもあった問題

元の日常にもどること。その願いは、失われた尊いものたちが帰ってくること。朝、起きたら悪夢だったと、普段通りだったと目覚めることだ。

冷静に思い返してみたい。震災直後の私たちが皆で協力して行った行為は「消費を抑えた」ことではなかったか…「消費者」って誰なんだ？いつからいたんだ？

社会格差、ホームレス、過疎化、少子高齢化、子どもの発達障害、過労や孤独死、自殺率、環境問題、そして舞台関係では「劇場法」も、自衛隊の存在理由も憲法改正も、みんな未解決の問題だったはずだ。そしてさらに、あまりに知らなさ過ぎた原子力発電所の実態がクリアに露呈した。

元の日常って何だ？ 変化している今が常に日常ではないのか？

個別の問題や願いと社会問題は別であり、社会が「元の日常に戻る」という事は、少なくともそれまでの問題を続けるということだ。時計の針を戻すという単純な話ではない。
社会を誰かが「元の日常」に戻そうとしている意思を感じる。しかし、それは誰か個人ではなく、個人が集合した社会という姿なき巨人なのだ。姿なき巨人「日本」は、もうろうとして国土に横たわっていた。私たちは、みっともないその姿に戻ってはならない。

震災によって出くわした不思議な光景がある。それは、これまでの日常に無かった、一瞬クリアになった「夢」か「啓示」のような気がしてならない、先に書いた社会の価値がひっくり返ったと思われる事例の続きでもある。
生活と施設が機能していた実態を把握するには、施設管理者や建築面からだけではなく、ボランティアや被災者も含め、断片的ではなく総合的にリサーチするしかないだろう。
これから記す事例は場所も時期も様々である。

たぶん公共ホールは体育館よりも避難所に適している

避難所となった公共ホールが、窓の外で洗濯物が旗のように揺れる小さな町になっていた。劇場で仕事をしてきた私の目には不思議な光景に写ったのだ。
震災直後はライフラインが途絶え夜は相当に冷え込み、幕に包まって寒さをしのいだ例がある。10-BOX でも敷地に「かまど」を作ったが、いざとなったら平台を焚き付けにできると考えた。平台は組み合わせれば仕切りに、箱馬はイスやテーブルになる。長座布団や毛氈（もうせん）も布団の足しにはなる。舞台には多少の工作ができる素材と道具が豊富にあり、舞台設備があれば、できれば技術者がいれば、そして躊躇しなければ、かなりの応用ができるだろう。

住みにくいホールは慰問を受け入れる「劇場」となり、「劇場」を中心に廊下やロビーや楽屋にヒトが暮らす、ふだん接した事のない舞台を楽しんだ。何か不思議に感じてしばらく考えたが、この状況は公共ホールのミッション「生活の中心にある劇場」そのものが具現化しているのだと思い当たった。

施設の中心にあるホール空間は、客席がスロープでイスも固定してあり住みにくい。舞台上は吊物が落ちて来そうだし、だいいち「見られている」ようで落ち着かない。なにしろ柱の無い空間に住むのは単純に怖い。そのため、慰問を受け入れるステージ空間が確保された。専属の舞台技術者を確保できた施設では、訪れたビッグアーティストと直に打ち合わせ、技術者のセンスで演出効果を加え舞台を作るという、通常では求めてもあり得ない状況が生まれた。
公共ホールという建物が生活者中心の「舞台芸術のお城」になっていたことは、なにか将来に活かされるヒントに違いないと考えている。

催しの告知は、砂に水を撒くようなチラシの印刷など不要だ。館内非常用設備で放送して満席になる。昔、ラッパ型のスピーカーで町の人に放送で呼びかけ人が集まった懐かしさを思い浮べる。まったくシンプルな、文字通り直接の「よびかけ」だ。

誰もが正面玄関から出入りしていた。利用している人たちはごく自然に思えたかもしれないが、通常なら荷物は搬入口から、アーティストは楽屋口からと、用途別に出入り口があるものだ。正面玄関から受付まで、そして受付からホールまでの通路はけもの道のように往来があり、物資もアーティストもボランティアも被災者も、みんな正面玄関から通路を利用して交流していた。

同種の支援者の間には非常にデリケートなライバル意識が少なからずあると思う。しかし、特にホワイエは支援者同士が出会う交差点であり情報交換の場でもあった。
現場で出会えば互いに励ましあい、たたえあい、交流ができた。ともかく様々な人たちが絶えずおしゃべりをして、人を紹介して、にぎわっていた。ネットワークが交差して広がったポイントのひとつだ。

居住空間を区分けできる諸室は、男女を分けるだけではなく、病気の患者を隔離できた。ペット専用の区分けもできた。例えば１階と２階など、コミュニティごとに分離して物資の支給やサービスの案内も防災区域ごとにできた。

図書室は、ひとりになりたい大人や赤ちゃんの保育に役立ち、子どもから高齢者まで時間帯もなんとなく区分けができ、設置者の意図ではなく利用者の意図にファンタジーをプラスして入り込んだような、図書館がこうだったらいいな、というような施設と利用者の静かな光景を見た。

実際には、避難所として機能しても貸館施設としては閉館中であるため、施設の指定管理業務にあたらないと判断される恐れから無理やり部分再開した例もあった。

NPO や NGO といった外部の組織が事務室の一角を使い物資やボランティアの受け入れなどを行った。この光景をどう判断するかは簡単ではない。ともかく可能性を視覚化していると感じた。
施設管理者も被災している場合、外部組織との「協働」を許す事で、より大きな効果が生まれる可能性がある。しかし、外部組織の受け入れには、権限やプライドをいったん鞘に収めなければならず、現場のコンセンサスは苦渋の選択ともなるだろう。それでも、責務の比率が復旧の段階や作業の割合などによって変化するくらい柔軟であってほしい。そうでなければ、本当は讃えられるべきことが責任放棄と叱責されかねない。勇気ある決断が無能と判断されかねない。

その場で判断した管理者も、所管する自治体の部局も、どちらも疑問を抱いたまま忘れたいかのように立ち尽くし、どこからも評価を受けずに放置されている残念な事例が多い。実態は、ほとんどそうかもしれない。

クリエイションの可能性

東北の風土や営みを背景とした文化も、以前と異なりクリアになっているように感じる。

慰問に来たアーティストが口をそろえて言う言葉は「逆に癒された」だった。屈託無く鑑賞し「ありがとう」と握手する被災者の姿は、傍で見ている者の心も熱くさせた。決して大げさではなく、通常は出会わない、または相容れない舞台と客席の、見えない壁が本当に消えた不思議な光景を見た。

慰問に来たアーティストの舞台を、来てくれなければこちらから観に行くという事は一生涯なかっただろう被災者。クラシック音楽の演奏を生で聴いたことが無く、興味も無かった人たちが鑑賞している。
そのアーティストが、さっき晩飯の炊き出しや配給の弁当やみかんなどがあるプライベートな万年床にやってきて握手をしてくれる。「なんで来るんだべ」「ここにこうしているから来てくれるんだべ」どう距離を取って良いかわからないが握手をする。
アーティストは、こんな距離感は作ろうとして実現するものではないと感じ、表現が受け入れられ届いたと、自分の存在が証明され役立ったと、しみじみ実感したからこそ「逆に癒され」て感動したのだろう。
お互いの距離が近づくと、アーティストはリクエストを断らず、用意してきた曲目を変えて『となりのトトロ』を弾いている。互いのベクトルが重なった幸福な瞬間だ。
当然、アーティストやジャンルによって反応も違うが、観客である側は生活者としていつも安定して、つまりチケットや予約など無く「普通にそこにいる人」なのだった。ごくごく素直な感想がこぼれる「じょうずだね」。通常のコンサートホールで有料の鑑賞だったら、上手な人の演奏と知って来ているから「じょうずだね」とは誰も言わないだろう。しかし、本当に純粋で素朴な感想なのだ。アーティストは思っただろう「とても努力したからね」と。

文化の本質を探ろうとしても作為的にできない実験、のように思えた。このような光景を思い出そうとしてしばらく時間がかかったが、旅館の宴会場や寄席や大衆演劇の小屋や巡業公演だった。
クオリティを落とさずに、観客の目線に降りて応える幸福な劇場がいつの間にか無くなっていたのかもしれない。こうした現場は絶対に否定できないどころか、積極的に肯定して取り戻すべきだと思っている。

マイノリティとマジョリティ

避難所や仮設住宅と呼ばれるが､そこにある暮らしは「仮」ではなく、生活者に違いない。生活者に違いないが、住民票が無効になったのだ。この、仮設住宅の暮らしと、格差社会の穴だらけのセーフティーネットからこぼれ落ちたホームレスと、どこが違うのだろう。「かわいそう」の違いとは何なのだろう。なぜアーティストは避難所に行くがホームレスのところには行かないのだろう。

また､「自分よりも大変な他者」という思いが連鎖していて、断ち切ることができないために、自分は少数派だと大多数の人が感じているような気がする。仙台市内で仮設住宅に入った 1,800 世帯に対して、アパートなどに入った人々を仮設とみなす「みなし住宅」が 8,000 世帯におよぶ。

仮設住宅は場所がわかり訪れやすいが、みなし住宅には何も届かない。避難所ではないところで避難している人は物資の配分や催しの場で参加は疎まれる。似たような実態は震災当初の避難所にもあったが、特に「みなし住宅」は神戸の震災時には無かった事例なだけに、新たな想像力で支援することが静かに求められている。「静かに」と書いたのは声が聞こえて来ないからだ。

2011 年 9 月 19 日に東京で行われ 6 万人が集まった「さよなら原発集会」で最後にスピーチした福島の武藤類子（むとうるいこ）さんは「私たちはしずかに怒る東北の鬼です」と語った。まさにサイレント・マジョリティということだ。今後の大きな課題であり、試されている問題だ。

震災以前は「マイノリティに届く」ということばかり意識してきたが、これからは「サイレントに届く」ということが重要だと考えている。

効果としての「うるおい」と「無形」という概念

「費用対効果」というが、費用も成果も形があり数値化できるが、効果（エフェクト）は現象であり心は実測し難い。アーティストと被災者が出合った避難所という場の、驚きや刺激や癒しを含めて心身を満たした大きな幸福感をなんと表わしたものか、そこに発生していた満足度の高い「効果」とはなにかを、長いあいだ考えていた。それは「芸術がもたらすべき効果とは何か」という問いなのだが、抽象的で申し訳ないが「うるおい」という言葉しか思い当たらない。

芸術があるところに､何らかの効果があるべきだとしたら、今の私は「うるおい」が不可欠と答える。そして「うるおい」を与えたのは芸術だけではない。芸術という言葉が見当たらなくてもその効果があればそれでいいと思う。

そもそも芸術という言葉が、未だに東北の田舎にまでは浸透していない事実を私は否定できない。私は、文化財に使う「無形」という概念が「芸術」に最も近く適切だと考えている。西洋や未来といった、自分から離れたものに対する実態なき憧れではなく、個々の生活から感じられる歴史観や現在を見渡したときに、変化しながら今まさに生きてここに在ることの価値を表している日本語だと思う。

日本文化の金脈が、霧が晴れるような効果とともに見えてくる気がする。

芸術と文化の渚

「渚」とは、陸から海へと続く中間の浜や岸辺、潮の干満により地形が変化する際であり、そこでしか見られない現象や､そこにしかいない生物が多様に存在する「沿岸」であり、被災地である。

■芸術文化という言葉に対し全く興味関心のない人々とその生活や風土
→水平イメージ
：田舎、素朴、土着、高齢、古い、第一次産業、
そして日本的

■芸術文化の存在を信じ、また自覚してあまねく振興しようとする努力
→垂直イメージ
：都会、洗練、情報、若さ、現代、第三次産業、
そして西洋的

両者の「間」の領域が震災により顕在化した、または考えさせられた。それは、これまでもあった「田舎と都会」「地域と東京」「ノンプロフィットとプロフィット」なにより「芸術と文化」の間の【と】の字が【渚】の領域であり､「渚の再生」とはどう発見し共有し変化すべきか、不毛な復興の議論にならないために必要な共通言語が無い。そのことが最も重要な問題なのだと感じている。

八巻寿文（やまき・としぶみ）
公益財団法人仙台市市民文化事業団演劇振興課課長
せんだい演劇工房 10-BOX 二代目工房長。

1　せんだいメディアテーク再開イベント「歩き出すために〜宮澤賢治の詩を読む〜」演出は半田深雪、出演は俳優のかとれあ、高橋菜穂子、長保めいみ、半田深雪、美峰子、館林敦士、戸石みつる、樋渡宏嗣、渡部ギュウ。(2011 年 5 月 3 日)

2　東松島市図書館主催の子供の日イベント「子どもひろば」にて、俳優の館林敦士と高橋康太によるジャグリング、樋渡宏嗣らによる絵本の読み語りを出前。(2011 年 5 月 4- 5 日)

3　広瀬川市民会議主催の連休イベント「広瀬川で遊ぼう」にて。観世流能楽師の山中が晶氏らによる舞と能楽ワークショップ、俳優の小畑次郎による紙芝居。(2011 年 5 月 3-5 日)

4　仙台出身でサンディエゴ在住のアーティスト、ヤコキムラ氏らによる支援組織 Creative Action Links(CAL) から、被災地の子どもを励ます手紙が届けられた。ARC>T ではイベント会場でその返事を書いてもらう「お手紙大作戦」を展開。

5　津波被害にあった亘理町・山元小学校にあった球根を救出して植え替えた。その後、小学校へ戻した。

2012.5.20 ～ あるくと券の発行

活動資金ゼロのARC>Tだが、出前活動は緊急を要した。しかし、アーティストの自己負担にたよっていては継続が難しい。苦肉の策として、いつか資金繰りできた日に換金できる「あるくと券」を発行。単位は po(ぽ＝歩)。2500po は当時日本赤十字が定めていたボランティア経費に準じた金額である。出前にかかる交通費を補助するという役割だけでなく、出前に行ったことの証明するあかしともなった。その後、勉強会の参加費の支払いに使用するなど ARC ＞ T 内で地域通貨的役割を持つようになる。

6　東北の劇場の被害状況を調査中の本杉省三氏（日本大学理工学部建築学科教授）が来訪。(2011 年 5 月 6 日)

7　「月と太陽のひろば」横田やさんのおもちゃ。

8　元気玉！ぷろじぇくと公演『ゆ』(SENDAI KOFFEE CO. ／仙台市青葉区春日町) の様子。劇場ではない場所での活動が顕著になってゆく。(2011 年 5 月 8 日)

9　震災の影響で閉館していた 10-BOX だったが、修繕と安全確認を終えて、5 月 1 日から通常どおりの施設利用を再開。すんぷちょ「Midorigo」が震災後初の公演となった。(2011 年 5 月 16-18 日)

あのときあれから

社会福祉領域で働く私にとって職業柄強く興味を抱いたのは、あるくとが高齢者や “ しょうがい ” を持つ方々にも、需要のあるところには平等に供給を行っていたことです。この、あるくとが様々な対象へ柔らかさを持って関心を向ける姿勢が、結果として様々な領域から関心を向けられる対象となった理由のように思います。

人と人を繋ぐものは人でしかなく、それがどんな人であるかで繋がりの質、厚み、広がり、継続性は変化します。1 年経って、他者他機関と誠実な関係を築くあるくとの様子を拝見すると、当初の目的であったプラットホームの役割を非常に柔軟な存在として担ったのではないかと思います。

これから先、東北における文化復興への道のりは何千何億歩と続いていくことでしょう。その中であるくとが形を変えることもあるかもしれません。あるくとを構成する皆さんにはこの先もその人間性を活かし、各々がプラットホームとしての要素を持ちながら、納得の行く一歩を踏みしめていってほしいと思います。

精神保健福祉士　橋本沙織（はしもとさおり）
（兵庫県在住）

2011.5.10-6.30

避難所への出前 _ 福室市民センター / 仙台市宮城野区

INTERVIEW

仙台市東部に位置する宮城野区の福室にある福室市民センターは、2011 年 6 月末まで避難所となり、一時は 100 人を超える避難者が生活していた。

4 月下旬、センター職員の須藤達也（すとうたつや）さんから依頼があり、ARC＞T は 5 月初旬から「よく眠るためのからだほぐし」の出前を行うこととなった。その経緯について、須藤さんに話を聞いた。

聞き手　伊藤み弥（ARC＞T 事務局）

当初の様子

福室市民センターには津波の直接被害で避難してきた人はいなくて、もっと海寄りの高砂市民センターのようにびしょ濡れで逃げてきた人はいませんでした。隣の福室小学校が指定避難所でしたが、とても一箇所でまかないきれる規模ではなくて、一度そこに避難したけれど「隣の市民センターが空いているらしい」とやってきた人がたくさんいました。市民センターは指定避難所ではなかったので、館長がトップになり、他の社会教育施設の職員や避難者の協力を得ながら避難所をやっていました。

ほとんどの方が家の中の片づけや応急の修理で自宅に戻れる状況でしたので、町内会や民生委員、ボランティアセンター等とつなぐことで 3 月 18 日頃には目途がつき、21 日で避難所を閉めることになりました。

その後、指定避難所となっている小中学校が 4 月 7 日から再開するために、避難者の移動を伴う避難所の集約・再編が行われ、宮城野区では福室市民センターを含む 5 箇所が「集約避難所」になりました。

実はその前から「ここがまた避難所になるらしい」という噂はありました。高砂市民センターがものすごい避難者数のためウチに分散させるとか、県内の沿岸市町村や福島からの避難者を受け入れるとか、今となってはなぜそんな噂が出ていたのか不思議なのですが。そのような状況で、職員の間では、反省も踏まえて「もし、また避難所をやることがあったらこうしたい」という話が自然に出ていました。その中で最も強く感じていたのが「“ お茶のみ ” をしたい」というアイディアでした。「みんなで雑談をする時間を設けたいね」と。

だから、3 月末にまた避難所になることが決まったとき、職員の間では気合いが入っていました。おこがましい考えかもしれませんが、避難所を出て行くときに「避難先が福室で良かった」と思ってもらえるように、と。

2 回目の避難所

開設時に 100 人強の避難者を受け入れた 2 回目の避難所の事情は、3 月の避難所とは大きく異なりました。区の災害対策本部が避難所の運営主体者のため、市民センター職員は施設の管理業務を行う立場になったことです。「災害対策本部から派遣される仙台市職員の指示や依頼があった場合に施設管理者として対応すればよい」と言われても、目の前では避難者の避難生活が続いています。派遣されてきた市職員は 4 月 7 日の余震対応や避難者の把握に追われて我々に何か指示を出せる状態ではなく、市民センター職員も勝手に動くことはできませんでした。避難所内の役割分担を避難者が知る

由もなく、「なんだあいつらは何もしないで」と思われているのでは、と、正直、精神的には３月のときよりも辛かったです。実際に、避難者やボランティアで訪れた一部の方の目には、そのように映っていたようです。

避難所開設６日目に、ようやく避難所内の運営委員会が立ち上がりました。派遣されてくる市職員、複数名の避難者代表とともに、市民センター館長と職員もそのメンバーに加わりました。毎日の会議に参加する中で、避難者同士の関係づくりや単調な避難所暮らしにメリハリをつけるために、市民センターが持つ人的ネットワークを活かして貢献できるのでは、と考えるようになり、私たちがコーディネートするボランティアの受け入れを運営委員会に提案して認めてもらいました。確か、４月 20 日頃のことだったと思います。もちろん、災害対策本部経由のボランティアが全国から来てくださっていましたが、この避難所に特化した、ここの避難者に必要と思われる内容をボランティアの方と相談しながら提供していけないかと考えたのです。

しかし一方で、なんとなく「踏み込んじゃいけない」という雰囲気もありました。当然のことですが、避難所内で何か起きたときは災害対策本部の職員の方に話が行く。私たちはせいぜい運営会議の席でリーダーから話を聞くとか、郵便物を届けに行くときに中の様子を伺う程度で細かな状況は分からなかったので、手探りな感じでボランティア受け入れは始まりました。

ARC ＞ T との出会い

仙台市から巡回してきた運動指導員の方から、「ここの方々は他所と比べてあまり動いていないようだ。何か体を動かすことを考えた方がいいかもしれない」と言われ、これはまずいな、と感じていました。

４月 23 日、私用で仙台市市民活動サポートセンター（サポセン）に行ったときに、西海石みかささんに偶然、お会いしました。西海石さんとは、仙台シアターラボ主催の「コミュニケーション教育のためのワークショップ」でご一緒したことがある程度だったのですが、これも何かの縁だと思い声をかけてみました。そこで、ARC ＞ T の存在と、ご自身がその事務局のメンバーであること、そして被災地支援のマッチング相談のためにサポートセンターにいらしていたことが分かりました。それで、気になっていた「避難者がからだを動かすための取り組み」について、その場で相談しました。健康体操のプログラムではなく、ダンスの要素を交えながら楽しくからだを動かすこと、自分のからだに気を巡らせてメンテナンスするようなことができないか、そして、そんなプログラムと併せて、お茶飲みしながら世間話をするようなことができないか、という相談をしたように記憶しています。そこからの西海石さんの動きには、正直、驚きました。「まずは、現場を見せてほしい」との話になり、翌日には避難所に来ていただき最初の打ち合わせをしました。次に、協力してくださるメンバーを ARC ＞T 内で募り、５月８日には、ダンサーの千葉瑠依子（ちばるいこ）さんと、劇団代表で劇作家の生田恵（いくためぐみ）さんとともに、実施についての打ち合わせを行いました。実は、西海石さんはこの他にも打ち合わせに来ていただいているので、ARC ＞T の「出前」の開始に向けて、３度の打ち合わせ機会をつくってくださったのです。ARC ＞ T 立ち上がり時期の忙しい最中に！自分でも無茶苦茶なリクエストだと思っていたお茶会も「必ずやりますから」と話してくださったのも、とても嬉しかったです。

実は、運営委員会に頼み込んでまで、市民センターが災害対策本部のボランティア受け入れとは異なる枠をわざわざ持ったのは、自分たちの出番をつくるためばかりでなく、避難者がただ提供してもらう、与えられるだけじゃない、自分で何かをやるというプログラムを組み込むことが必要だと思っていたからです。

さらに、震災にかかわらず、市民センターは地域をどうイキイキさせていくかも仕事だと考えていて、そこにアートは重要な貢献ができるはず、と根拠もなしに信じていました。しかし、そこに携わってくださるようなアーティストとどうすれば出会えるのかが分からない。ずっと考えていて、これは良い機会かもしれないと思いました。ここでご一緒することで、自分自身新しい発見や学べることがあるのではないか。こうして会えたのも自分の中では運命なのだとさえ感じました。

出前へ向けて

西海石さんとの打ち合わせを進めている中で、５月初めから週２回、健康増進センターの指導員が訪問して健康体操を行うことが決まりました。正直、これで「からだを動かすためのプログラム」の必要性は少なくなったと感じたのですが、平日の日中ということもあり、参加者が少なかった。みんな日中は、役所に手続きに行く、病院に行く、全壊の自宅から少しでも荷物を取り出しに行く、苦竹の自衛隊まで風呂に行くなど、結構忙しい。医療チームが巡回してきても日中だから人がいなくて、もったいないですよね。

巡回で訪問する相談員も保健士も夕方５時で終わるし、ボランティアの申し出もみんな昼間。ボランティアの方は善意で動くから、家族を犠牲にすることはできないし、遠方からのボランティアには夜間は難しい。４月中はセンター職員も泊まり勤務がありましたので、避難者のみなさんは夕食後にすることがないことに気付いてました。テレビや雑誌を見たりして、もちろんそういうリラックスする時間も大切だけど、何となく所在なげにしている。そして、この時間帯にいちばん人がいるということも分かりました。何かやるならここをねらうと来るかもしれないと思いました。

そういう意味で「気持ちよく眠るためのからだほぐし」は稀有なプログラムだったと思います。私にとっても貴重な体験でした。瑠依子さんが照明機材を持ってきたことも「さすが舞台人だ」と感心しました。避難所って蛍光灯か水銀灯だから、すべてがフラットに無駄に明るい。そこで、陰影のある部屋を用意するという発想はすごい。全然雰囲気が違いましたよね。あの明かりだけでもリラックスできる効果があったと思います。

出前の効用

５月 10 日に初回の実施となりました。運営委員会の役員の人に「役者さんが来るから参加しませんか」と言うと「テレビに出てる人？」って訊かれて「うーん、どうかなあ…」なんて (笑)。こちらでも「役者やダンサーと一緒に体を動かしてみませんか」とチラシをつくりました。思いのほか参加があってよかったです。でも、伝え方が良くなかったのか、マッサージ屋さんと勘違いして「なんだ、マッサージじゃねえんだ」って出ていく人もいましたね。

最初は運営委員の中心メンバーとそれに近い方が多く参加していました。人数が増えたり減ったりしながら推移していったようです。日頃私たちとコンタクトの取れない方、朝出かけて夜帰ってくるような方、まさか参加するとは思っていなかった方も参加していました。「もっと早く来れば良かった」という方もいて、それが日中の会話のきっかけになった方もありました。一方で、こちらが頑張って周知したつもりでも、「知らなかった」と後で言われたのは残念でした。

もっとも印象に残っているのは、避難者だった小学生の兄弟です。落ち着きがなくて、正直なところ、大人たちは手を焼いていた感もありました。支援でいただいた絵本や児童書があったのですが、とても彼らには落ち着いて読めないだろうと渡していませんでした。ARC>T の初回の出前のときにも部屋の中で騒いで、参加者から「外に出てろ」と追い出されちゃった。２回目の出前からは西海石さんが託児所をやってくれました。何回目かのときに「あの子たちにはお気に入りの絵本があるんですよ、知ってました？」って言われ、

6月6日　鈴木拓が地域創造、文化庁、横浜ふね劇場ほかを訪問

6月4日　チリ南部のプジェウエ火山が半世紀ぶりに噴火
日本演出家協会「フェニックス・プロジェクト」vol.1 に鈴木拓、伊藤み弥が参加（〜5日）東京

6月3日　出前部自主研修会（演劇）

6月2日　国会が内閣不信任案否決
劇団三カ年計画が東松島市立野蒜小学校、赤井南小学校で朗読会

6月1日　野党3党が内閣不信任決議案を衆院に共同提出
大崎市岩出山文化会館が全館貸し出し再開
あるくと調査部が亘理町および山元町の避難所へ出前ニーズ調査

5月31日　アートNPOエイドからヒアリング

5月30日　大阪から大谷燠氏、横堀ふみ氏ほか来訪

5月29日　宮城県南三陸町が「福興市」を開始
宮城県知事が東日本復興特区創設を提言
横浜から小川智紀氏、兵庫から森田雅子氏、森田勝昭氏来訪

「えっ！彼ら落ち着いて本が読めるの？」って驚き、自分が彼らに偏見をもっていたことに気付かされました。対応の仕方や場を適切に整えてあげれば彼らはもっと落ち着いて過ごせたのではないか、と後悔しました。丁寧に対応すること、それができていれば、彼らを見る周りの目も変わってきただろうし、そうすればいろんなことがもっと違っていただろうなと思います。

「気持ちよく眠るためのからだほぐし」実施概要
期間：2011 年 5 月 10 日–6 月 28 日
　　毎週火曜日 19 時〜 21 時
会場：福室市民センター (仙台市宮城野区福室) 和室
参加メンバー [順不同]：西海石みかさ (すんぷちょ)　千葉瑠依子 (ダンサー)　生田恵 (三角フラスコ)　かとれあ (かとれあ project)　片倉久美子 (TheatreGroup"OCT/PASS")　小住典子 (俳優)　近藤麻衣子 (日本語教師)　サマイ (俳優)　長保めいみ (シェイクスピア・カンパニー)　橋本沙織 (精神保健福祉士)　山口小夜子 (看護師)

その後

　正直、避難所を出た後、避難者のみなさんがどうしているかは分かりません。でも、今回の出前プログラムのようなことは避難所が終わってもずっと必要になってくるだろうと思います。避難所を出ていった先、例えば太白区のあすと長町（応急仮設住宅の一つ）に入った人たちにもこういうことを体験してほしかったけど､私の立場では追いかけて行けない。「なぜ宮城野区の市民センターが太白区に支援に来るの？」って話になってしまう。市民センターは管轄エリアを越えて追いかけることは難しい。その地域の市民センターにつなごうと思っても、そこにはそこの動きがあるため、必ずしも継続できるとは限らない。今回も、そのつなぎはうまくいきませんでした。自分にはできないことだけに「ARC ＞ T には仮設住宅まで追いかけていってほしい」と個人的な思いも込めて要望したこともあります。だから、ARC ＞ T が絆支援員養成のためのワークショップをやることになったと聞いたときには「つながれるかもしれない」と思いました。

須藤達也（すとう・たつや）
こりれいず（もうひとつのこどもとおとなリレーションズ）代表
子どもたちと親でも教師（指導者）でもない " もうひとつの大人 " との関係づくりを目指して活動する。地域のおんちゃん (= おじさん) やおばちゃんの立場で、子どもたちと出会い、関わる機会づくりに奮闘中。

6月6日　原子力安全・保安院が福島第一原発1〜3号機メルトスルーの評価結果を発表
　　出前部自主研修会（ダンス）
6月7日　東京から森陽平氏が来訪
6月8日　東京電力が福島第一原発の停電復旧を発表
6月9日　第10回定例会（仙台市市民活動サポートセンター）
6月10日　復興基本法案および津波対策推進法案が衆院本会議で可決
6月11日　東京電力が福島第一原発2号機の原子炉建屋で換気装置の運転開始を発表
　　envisi 主催追悼集会「南三陸の海に思いを届けよう」（南三陸町）
　　SENDAI 座☆プロジェクト『明日に向かって歌え！』東京公演（青年座劇場・〜12日）
6月12日　NHK仙台第一放送「やるっちゃ！宮城」に半田深雪ほか出演
　　東京から小堀結香氏、立石美佐子氏、石田優光氏ほか来訪

2011.5.16

あるくとサロン①　八巻寿文 _ せんだい演劇工房 10-BOX box-1

5 月 16 日～ 18 日に開催された、すんぷちょ公演『Midorigo』の終演後に行われたトークセッション「あるくとサロン」から一部を抜粋して掲載する。

聞き手　伊藤み弥（ARC＞T 事務局）

―八巻さんは、10-BOX の一室を「月と太陽の広場」と命名して、利用者に開放しましたね。

八巻　震災後「明けない夜はない」という励ましの言葉を受けたけれど、まず月があって、それから太陽が来るんだと思いました。でもそのとき僕には「明けた朝も夢であってほしかった」という気持ちがあって、正直なところ、その言葉を素直に受け入れられなかったんだなあ…

― 10-BOX はどんな状況ですか？

八巻　10-BOX は上から見ると、建物が数字の１と０の形になっていて、その１の旧棟部分がまだ一般のお客様には貸せない状態です。新築の０の部分は躯体がしっかりしているので５月１日から通常どおり再開できることになりました。まあ「０からの出発」と申しましょうか（笑）

―市内の劇場の様子は？

八巻　大きな建物は物理的に弱いです。天井が崩落すると客席も破損するし、舞台には照明機材などの吊り物があって揺れます。公立文化施設はだいたい今年いっぱい再開は無理かなという感じですね。どこも部分開館をまず目指しています。

―八巻さんは美術家でもありますが、アーティストとして現状をどのように捉えていますか。

八巻　震災について語れ、と…涙もろくなりました。実は僕自身、19 歳の時に神経症になりまして、自己治癒するのにその恐怖を他人に語ることがとても有効だったんです。それを初めて他人に語ったのがフランスに留学したときでした。「怖いイメージが本当になったらどうしよう」と思って喋ったのに、何も起きなかった。それはまだフランス語ができなくて、ものすごく単純なストーリーになっちゃって「あ、僕の悩みはこんな単純だったんだ」と捉え直せたのね。その後、親しい人に話すようになって、今は普通に話します。すらすらと出てくるほど「テキスト化」されている。トラウマは残っているけれども、自分で物語を作り直したんですね。それは僕の個人的な体験だけど、震災はその個人を超えてまちの単位で起こったのだと思います。いまはまだ言葉にならないですね…情景描写はできますよ、だけど「どんな気持ちだったか」はわからない。いずれ言葉になって語り直すんだとは思いますけど、その前にまずは詩のようなものが出てくるんじゃないかという気がしています。情景描写ともちがう、物語的な脈絡とも関係のない、単語のような言葉が湧き上がってくる時期があるのではないかと思います。だから、今日のダンス公演はよかった。

西海石　もともとこれは１年前にホンジュラスで創った作品で、今年の９月にまちなかの会場を借りてやろうとしていたんですが、震災のためにあやふやになってしまって、どうしようかと思いました。震災後の電気がない、水がないという大変なときに、ホンジュラスのことをすごく思い出しました、「こうやって水汲んでたなあ」とか。それで、どうしてもこの作品をやりたいと思ったんです。ダンスって言葉を使わないし、だからおそらくわからなくて置いてけぼりにされることもあるけれど、その部分はお客さんが想像力で埋めてくださるだろうと思いました。そういうふうに創ったので、言葉がない分、今やれると思ったのでした。私自身も言葉ではうまく表現できないんですが、からだは在るので、想像力で補っていきながら作品世界はつくれるんじゃないかと思いました。

―八巻さんはどの点が良かったですか？

八巻　僕は裏方だから、まず「明かりが点いてよかった～」「スピーカーから音が出てよかった～」と思いました（笑）。個人的にそれだけで泣けますね。ダンスは言葉要らないじゃない？だから嬉しくて観ていました。

―震災以後の変化は何かありますか？

八巻　現実を見ると、心も現状も揺れ幅が大きすぎて、言葉がかみ合わないと言うか、違っちゃうことがあるんです。「そのこと」について、「何をやるべきか」「どうあるべきか」はわからないんです。むしろ今わかったらだめな気がする。わかったらもったいない気がする。わからないまま表現してしまうってことは、何を表現してしまうんだろう、言葉にならないうちに表される表現とは何なんだろう、ってその状況が楽しいよね。それと、これは誇張して言いますが、「こんなときにおいしいものを食べちゃいけないんじゃないか」「笑っちゃダメなんじゃないか」とか考える人もいますけど、でも、絶対笑って良いはずだし、おいしいもの食べて良いはず。泥の中に菜の花が咲いていて、笑っているように見えるんだけど、自然がそうであるならば、われわれだって自然なんだから、そうあったって良いような気がしています。

―アートにはいろいろな力があると言われますが、今だからこそアートに期待することはありますか？

八巻　「思い込まされているアート」じゃないものを見つけたい、確かめたいと思いますね。東北にしかないものをというのは難しいかもしれないけど、借り物じゃない、「ここならでは」のものを手触りで充分に確かめていきたいと思う。それは固定された表現ではないかもしれない、それはひょっとすると僕の好きなお神楽かもしれない。それはただ古いと言う意味じゃなく、「やっぱりこれは何か落ち着くぞ」「これは失っちゃいけないんじゃないか？」というものを、僕は僕で、みなさんもそれぞれで確かめていって、全体として東北人の持っている関心みたいなものが確かめ直せればいいかなと思います。

西海石　私は東京の出身なので、「東北」のこととなるといつも微妙な立場なんです…

八巻　うん、「東北」と言った瞬間に逃げてしまうし、「東北って何？」って考え込めばつかまえにくいけれども、でも「ここにある何か」、借り物じゃない何かを探れる時期じゃないかなと思います。いずれ日常が戻ったら忘れていきそうなものを、いまリアルに感触を確かめられる時期じゃないかって気がする。まあ、わからないけどね。

―自分をもの語る、「語り直しの時期」とは、先日、鷲田清一さんもせんだいメディアテークでの講演で言っていました。自分たちの言葉で紡ぎ直してゆくときなのでしょうか。

八巻　語るのはもうすこし先でしょうね。今はその手前かな…いろんなことを思うんですが、無理に「新しく！」とか「何かが変わったはずだから」と思わない方が、揺れている自分も見えてくると思います。自然に復興するのがいいと思うし、そのときに「これは余計だ」と思うことをよく引き算していきたい。それが心地よくなればいいと思いました。

八巻寿文（やまきとしふみ）
公益財団法人仙台市市民文化事業団演劇振興課課長、せんだい演劇工房 10-BOX 二代目工房長。舞台照明、絵画、インスタレーションなども手がける美術家でもある。

西海石みかさ（さいかいし）
ダンサー、演出家、ワークショップファシリテイター、「すんぷちょ」代表。障がいの有無・国籍・年齢・性別を問わずすべての人がアートを楽しむことを目指して活動。JICA ボランティアとしてモロッコ、ホンジュラスで障がい児教育に携わり、2011 年１月帰国。

2011.5.17
あるくとサロン②　関口怜子 _ せんだい演劇工房 10-BOX box-1

―5月の初めに気仙沼へ子どもたちとのワークをしに行かれたそうですね。

関口　順を追って説明しますと、1月下旬、盛岡でとある出版記念パーティーがあって、そのとき友人がすごい勢いで飛んできて、「『雨ニモ負ケズ』の大事な言葉って知ってる?!」と言うんです。私はそんなこと考えたこともなくて、きょとんとしてしまいましたが、彼はずっと子どもの頃から「東ニ病気ノ人アレバ、行ッテ看病シテヤリ」の「行ッテ」という言葉がとても大事なことを指していると思っていたそうです。彼はそのパーティーで、宮澤賢治の弟の清六さんのお孫さんと話しているうちに「賢治はこの詩の中で「行ッテ」ということがとても大事なんだと語っていた」ということを偶然聞いたらしく、彼は「誰かに言わなきゃ!」とわざわざ私のところに飛んできたんです。実はその日は私の誕生日でもあったので、とても良いプレゼントをもらったな、と思いました。なぜなら、わたしは「コミュニケーションとは、誰かのところに行くか来るかしかないんだ!」といつもたくさんの人に言っているにもかかわらず、あの有名な「雨ニモマケズ」の中に「行って」という言葉があって、そこに深い深い意味があるとは気づかずに今まで生きてきた、それを65歳の誕生日に気づかされたわけです。そのことが私の中でぐるぐるしていたんです。

3月11日は、「せんだい“まち力”ミュージアム」という企画でまちなかのお店やギャラリーなど20箇所で子どもたちの絵を飾ってもらっていました。

遠くから来た人が帰れなくなって4人、ビーアイに泊まりました。いつもはすぐ寝ちゃう私なのに寒くて寒くて眠れない。ビーアイには子どもたちの描いた絵がたくさんあって、夜中にしゃべりながら絵を見ていると、その絵が言うんですよ「ここにいていいんだよ」って。「行って」じゃなく「行かなくていいんだよ」って。「行かずに、ここにいなさい。いつもと同じようにあなたはここで子どもたちを待ちなさい」と絵が言うんです。それはすごい勇気でしたね。十日経って、ビーアイには子ども達が来はじめてうれしかったですね。それから、気仙沼に古い知り合いで天旗（てんばた＝凧）職人の高橋澄夫さんという人がいたのですが、5月初めにそのお弟子さんの加藤さんが「大空に響け」という企画をするという新聞記事をたまたま見たんです。世界中から贈られてきた凧で子どもも大人も心を空に遊ばせなさい、とありました。それまで電話も通じなくて安否の確認もできなくて心配していたんですが、それを見たとたん「これは行かなくちゃ！そっちが大空ならこっちは一歩一歩大地を踏みしめてというワークをしなくっちゃ！」と思ったんです。（一枚の紙をくしゃくしゃに丸めて）たとえ人間こういう時があったとしてもいいのよ。こうやって少しずつ…（広げてゆるやかに立たせながら）…こうなることはできると思うの。だから、いったんくしゃくしゃになったとしても、あたま空っぽにして絵を描いたりなんかしながら、なりたい自分になる力を持ってほしくて、気仙沼に行ったのでした。

―今回の震災とは、どのような体験でしたか？

関口　震災直後、私はどこにも行かずに、何も変えることもなく、今までのスタイルで、ビーアイを子どもたちやいろんな人たちの気分転換できる場、食糧補給場所として機能できるようにしました。今回のことは大人にとっては暮らしの捉え直し、生き方の捉え直しをしなければならないと思いますが、ビーアイはそんなこと昔からやっているぞ！ということも言いたい（笑）。味気ないとか旨みがないものはアートとしてはつまらない。ヴィヴィットな感性を育てるためには味覚を育てることが大事です。だからビーアイでは普段からよくうまいごはんとおかず、つくって食べるんです。食べ終わったら新聞紙を揉んでお皿をぬぐって、水で洗うとか。「ココロキン肉マン」と言うか、世界中どこに行っても生きていける人を育てたいと思っています。

―震災後、子どもの変化はなにか感じられますか？

関口　やっぱり震災のテレビを見過ぎていて…子どもには子どものキャパシティがあるから、得体の知れないことが毎日一杯積み重なると不安ですよね。だから赤ちゃん返りのような子もいますし。子どもは非常に傷みやすい生きものであることは間違いないんですよ。

西海石　先日、ビーアイに伺ったとき子どもの絵を見たんですが、玉ねぎが画面の端っこに描かれているのがありました。私はその子がよくその位置を選んだなあと、その勇気に感動しました。

関口　選択力と決断力と判断力！と私はいつも言うんですけど。子どもにはそんなチャンスとしかけをね。ある時期から日本人にはそれが足りていないと感じています。ある日突然勇気が出るなんてことは絶対なくて、勇気ってどこかで貯めて、ある日湧くんだと思うんです。実は私自身、昔は人見知りで全くしゃべれない人でした。直感的ではあるけれど言語化は苦手で、やっとトレーニングされてね。今は“言語化すること”は必要だと思っています。世界で生きていく人はやっぱり自分の意見を言えないとダメ。せめて身体表現でカバーするぐらいのことができないとね。作品のタイトルも全部自分で決めます。これもトレーニングなので必ず言語化してね。作品をつくっていて、タイトルは途中で変えていいとも言います。「人生はいつでも変わっていいのだ」ということを伝えたい。作品制作は一石三鳥ねらいなんです。この画材はどんなことができるかという可能性に挑戦しつつ、自分のテーマを追いかけながらも、いつでも変わっていいと言いながら、表現力をつけていく。感受性が豊かでも「表現力」が豊かとは限らないですよね。子どもたちにはいつも「見ようとしない者には何も見えないんだぞ！」と脅しをかけるんです。「いいか！目を開けているからと言って見えるんじゃないぞ！」と。そうするといつのまにか自分から見るようになりますね。子どもの時の感性を退化させないで、までいに（＝大事に、丁寧に）磨いていかないと腐っていくんです。いいですか、腐っているんですよ私たちは！（笑）子どもたちがバカな大人に囲まれていると、日本の将来が大変なんです（笑）。

関口怜子（せきぐち・れいこ）
長年にわたり、子どもとまちをテーマにワークショップを展開。「ビーアイ (Be I)」とは、子どもたちが見る、聞く、話す、描く、調理するなど、自分自身で体験し、学んでいくことを通して「自分である・自分として喜びを感じる」ためのスペース。

2011.5.18

あるくとサロン③　千葉信 _ せんだい演劇工房 10-BOX box-1

―被災状況はいかがでしたか？

千葉　うちは２箇所施設があり、赤井地区の施設にはあと５センチぐらいで水が床上に来るところでした。大曲地区の方は約１メートル冠水しまして、１か月事業を止めて、今は再開しています。この周辺は亡くなった方もいて、今、瓦礫の撤去をしていますからこれから遺体が何人出てくるか、という状況です。

―花いちもんめは地域でいち早く再開したそうですね。

千葉　停電した１週間だけ休んで、電気が通じた時点ですぐ再開しました。介護事業者は、海が見えるところ、環境が良いところに施設を建てますので、野蒜から女川にかけて事業者はことごとく被災し、全く機能しなくなりました。うちは被災が少なく、なんとか稼働できる状態ではあったので「まずやれるところをやろう」という発想に立ちました。まず何が足りないかと思い、避難している方々が家の後片付けをするのに高齢者がいたのでは大変だろうと思って「どうぞ施設をつかってください」とお声がけをしました。今でも石巻・矢本管内で正常に動いているのはうちぐらいです。まだ清潔を保つこと、後片付けのために高齢者を一時的に預かること、そういう仕組みがまったく機能していない。この状況はこれからも続くと思います。

―利用者さんの変化は何かありますか。

千葉　自分のことよりも家族のことを心配していますね。私が管轄している大曲の浜は被害が大きく、助かった高齢者が一様に言うのは「こんな年寄りより若者を助けてほしかった」「なんで若者が死んで自分が残るんだ」と。スタッフも相当被災しています。職員もひとり亡くなりました。家族を失った職員が３人、家を流されたのが４人、浸水したのも 10 人くらいいます。そういう事情にありながら一所懸命に仕事していますが、やはり家族を失った人はかろうじて立っていると言うか、ちょっと押すと倒れそうな状況です。利用者もそうですが、職員のメンタルケアも大変で、津波という言葉を出すと耳をふさぐ職員がいまだにいます。さきほどのダンスで絶叫するシーンがありましたが、私は津波で流された人のことを思い出してつらかったです。私は実際見たわけではなく、人から聞いた話ですが、車ごと浮き上がってその中から「助けて」と絶叫する声が聞こえるのに対して何もできなかった。流された人もそうですが、それを見てきた人も大変なんです。あの声はそれを思い起こさせましたね。

西海石　作品は昨年の夏にホンジュラスで創ったので、この状況はまったく考えないで創りました。何と叫んでいるのかと聞かれれば「数字の５です」と答えますが、意味を求めてつくったものではない。影響を考えなかったわけではないのですが、そこに宛てて創ったわけでもない。抽象的なつくりになっているので、そういうところはお客さまそれぞれの経験とか想像力を使って完成してくれるのではないか、と思ってやらせていただきました。

千葉　私はコンテンポラリーダンスを観るのは初めてで、どう意味づけしたらいいのか、と（笑）。でも、無理に意味づけをしなくてもいいだろうし、素直な気持ちで見れば自ずと自分にとってそれが何なのか、感銘を受けるもの、そうでないものが出てくるだろうと思い、途中からはわからないなりにも「ああ私はこうだったなあ」と感じながら観ていました。だから、舞台を観てはいましたが、鏡を見ているような感じでもありました。だから先ほど言った阿鼻叫喚（あびきょうかん）の状況は、私が今そんな状況だからそう捉えたのであって、それを喜びの場面と捉えた方もいるかもしれません。それが芸術なのだろうと思いました。

―あるくとの「出前」を希望した経緯は？

千葉　デイサービスの利用者さんが全く途絶えていましたので、早く元に戻したいというところからつなプロ（＝被災地と NPO をつなぐプロジェクト）にお願いしました。震災のあと忙しい忙しいと過ごしてきて、精神的な安寧（あんねい）がほしい、誰か都合のつく方に入ってもらいたいとお願いしました。

西海石　「何かをしてあげに行っている」ように思われがちですけど、私は、行って「おしえていただく」のがいいと思っていますし、新しい発見がたくさんあって面白いです。

千葉　ボランティアの方の多くは目線が上になってしまうと言うか、「やってあげる」という意識が見えてしまうことがある。高齢者の方もそれはわかっていて「１時間我慢すればいいんでしょ？」と言う。そのことを理解していただきたいと思います。みかささんもおっしゃったように「おしえてください」というスタンスの方が関わりやすいと思います。高齢者の方は一所懸命働いてきて、家を息子さんに譲って第一線を退いているけれども、「自分はこの家を建てた」「子どもたちを育てた」と絶対的な自信を持っているわけです。でも、それを家族に言うと「また自慢話が始まった」と相手にされない。施設で職員がその話を聞くとものすごく生き生きとしてくるんです。それはその人の生い立ちを認めてほしいから言うのであって、その人の存在を認めるというスタンスであれば高齢者の方は喜ぶと思います。人間は誰でもほめてもらって、存在を認めてもらえばうれしいですよね。それが基本です。ですから「おしえてください」「あなたと私は同じだよ」というメッセージがあればいいと私は思います。

―今回のことは、千葉さんにとってどういう体験でしたか。

千葉　まだ整理がつかないし、結論づけることもできてないですね。まあ「何でも来い」と開き直れるようになりました。大陸的と言うか、枝葉末節は気にしないという感覚にはなりました。今まで些細なことで泣いたり恨んだりしていたことが本当にちっぽけだったと気づいたことは良かったかな、と思います。

―「東北」ということを意識させられたように思います。

千葉　テレビのインタヴューで、水汲みに並んでいる人に「たいへんですね」と言ったらある主婦が「私より大変な人たちがいるのだからこのくらいは我慢できます」と答えたんです。「ああ、東北人の気質はそういうものか」と思いました。我が身も大変なのに「あの人は大丈夫だろうか」というのが東北に住んでいる人たちの良い気質なのかなと思いました。優しいとも言えるし、律令国家に押しつけられてきた、虐げられてきた歴史がそう我慢させるのだと言う人もいますが、それはそれとして、共存共栄というためにも、他人を慮（おもんぱか）ることを自然に身につけてきた東北地方の気風はすばらしいです。別にへりくだることもなく威張ることもなく、そういうものとして大切にしていくべきだと私は思いました。

―東北の表現者に期待することは？

千葉　私は郷土史に興味があるので、わらび座の「アテルイ」を見に行こうかと思っていました。アテルイは東北をひとつの国として成り立たせようとした最初の人で律令国家に翻弄されてきた。それを屈辱と感じるべきか歴史の一つの過程と感じるべきかはわからないけれど、効率主義とか自由主義とかそんな価値観にとらわれず、お互いに相手の気持ちを慮りながら慎ましく生きているという姿の方が人間らしいのかなと思います。そういう方々と一緒に共存して、そういう方々が求めるようなメッセージをくださるような、地域密着型の表現があると心強いと思います。

千葉　信（ちば・まこと）
社会福祉法人慶和会老人福祉施設花いちもんめ施設長。宮城県東松島市赤井地区にてケアハウス・デイサービスセンター・ヘルパーステーション・居宅介護支援事業所花いちもんめ、および大曲地区にてデイサービスセンター・ショートステイ・有料老人ホーム大曲花いちもんめを統括。個々の人生を認め尊重することを信条に自ら率先して現場に当たる。レクリエーションの時間に披露する施設長のカラオケは利用者の方々の楽しみの一つとなっている。

2011.5.20 ～

ダンスをたのしもう _ 社会福祉法人しおかぜ福祉会 / 宮城県岩沼市早股

知的障害者支援施設しおかぜ福祉会は、海岸からおよそ 3km のところに位置し、津波による床上浸水で施設が一時使えなくなった。施設利用者が抱える心身のストレスの軽減を図るため、体を動かせるようなプログラムの出前の依頼があった。すんぷちょ代表の西海石みかさと ARC ＞T 事務局のタムラミキが中心となって、ダンスを楽しみながら交流する時間を提供している。

「ダンスを楽しもう」実施概要［2012 年 4 月末現在］
日時：毎月 1~2 回土曜日 10:00 ～ 12:00
参加メンバー：西海石みかさ (すんぷちょ)　伊藤文恵 (空間実験こがねむし)　近藤麻衣子 (日本語教師)　タムラミキ (ARC ＞ T 事務局)　山口小夜子 (看護師)　長保めいみ (シェイクスピア・カンパニー)　渋谷裕子 (ももいろゴリラ)　千田優太 (ももいろゴリラ)　上島奈津子 (俳優)　平山健太 (東北学院大学演劇部)　齋藤裕亮 (何応)　加藤隆 (東北福祉大学)　大庭千鶴 (東北芸術工科大学)　わかやなぎよしみ (俳優)　白鳥英一 (OtoOpresents)
［順不同／ 2012 年度も継続中］

あのときあれから

私は 2011 年 9 月までしおかぜの職員として働いていました。震災で被害を受けたのは施設だけではなく、職員何名かの自宅も浸水、家族に被害を受けた利用者も何名かいました。しおかぜは主に就労支援と自立支援を行っており、中心的な作業は農園での花のプランター作りや野菜作りでした。その他、委託作業として段ボール加工やボール洗浄があったのですが、震災の被害や影響もあり、作業がほとんどできなくなってしまうという事態になりました。震災前とがらりと変わってしまった環境に、利用者も職員もストレスを感じていました。

そんな状況が続いていた中、私が観に行ったすんぷちょの公演で西海石みかささんに声がけしたことがきっかけで、ARC ＞ T の出前が始まりました。出前当初は、すぐに馴染む方と戸惑う方がいましたが、ほぼ 1 年が過ぎた今では定着し、じっくり楽しんでいる様子も見られます。日々接するご家族や職員の影響が一番大きいと思いますが、全体的に落ち着いてきているように見受けられます。一人一人が自分で選択することの自由やそのままでいいと思えること。お互いが気づきあう機会になってきている気がします。

ARC ＞ T 事務局　タムラミキ

2011.5.23 ～

レクリエーションの時間の提供 _ 社会福祉法人慶和会 花いちもんめ / 宮城県東松島市

花いちもんめは、東松島市の沿岸部にある老人福祉施設で、津波で被災した。ARC ＞ T では施設長からの依頼を受け、5 月から月に 1 回のペースで「ほがらかタイム」という高齢者が楽しめるようなプログラムの出前をおこなってきた。

9 月には敬老会に合わせて、12 月にはクリスマスに合わせて「敬老ウィーク」を企画。赤井地区と大曲地区にある 2 つの施設で連日出前を実施した。朗読、歌唱、踊り、映像上映など、さまざまなプログラムが披露された。このころから施設利用者の方々に「ああ、また来たね」と認識されはじめたようである。

花いちもんめ出前 実施概要［2012 年 4 月末現在］
日時：毎月 1~2 回 13:00 ～ 16:00
敬老ウィーク：2011 年 9 月 12 日ー 16 日
クリスマス敬老ウィーク：2011 年 12 月 12 日ー 17 日
参加メンバー：西海石みかさ (すんぷちょ) 長保めいみ（シェイクスピア・カンパニー） サマイ (俳優) 千葉瑠依子 (ダンサー) 澤野正樹（俳優） 橋本沙織 (精神保健福祉士) 近藤麻衣子 (日本語教師) タムラミキ (ARC ＞ T 事務局） 山口小夜子 (看護師) 千田優太 (ももいろゴリラ) 上島奈津子 (俳優) 齋藤裕亮 (何応) 民族歌舞団ほうねん座 野々下孝 (仙台シアターラボ) わかやなぎよしみ (俳優) 伊藤み弥 (ARC ＞ T 事務局) かとれあ (かとれあ project) 大久保雅基 ひのおさむ 田村よう子 郷内宣子 (かとれあ project) 大場勇人 川合かおり 樋渡宏嗣 (SENDAI 座☆プロジェクト） 生田恵（三角フラスコ） 大渕浩 白鳥英一 (OtoOpresents) 渋谷裕子 (ダンサー) 高橋美和 (アンサンブルフェリーチェ) 相澤洋美 (アンサンブルフェリーチェ) 鈴木拓 (ARC ＞ T 事務局) 土屋悠太郎 (タイ舞踊家) 今野智子 (IMS 磯貝メソッド仙台塾) 五十嵐俊江 (IMS 磯貝メソッド仙台塾) 戸内弓子 (IMS 磯貝メソッド仙台塾) 小濱昭博 (三角フラスコ) 小林直美 (フォンジューンインストラクター) 館林敦士 (WILD CAT HOUSE) 川村智美 (ARC ＞ T 事務局) 20 世紀アーカイブ仙台 大沢佐智子 (舞台美術家) 高橋彩 (ARC ＞ T 事務局) 斎木良太 瀬川まーち (俳優) 伊南喜人 永澤真美 (俳優) 安藤友春 大久保裕

envisi 主催追悼集会「南三陸の海に思いを届けよう」Ustream 中継の手伝い（南三陸町ホテル観洋 /2011 年 6 月 11 日撮影）

2011.6.2-6.5

日本演出者協会「フェニックス・プロジェクト」_笹塚ファクトリー / 東京都渋谷区

日本演出者協会は、公演を行えない、日常の仕事を失うなどの過酷な状況下にある被災地の舞台芸術家を支援するため、支援金を呼びかけるとともに、考え合う場をつくることを目的にチャリティーイベントを企画。東京の民間劇場笹塚ファクトリーからの劇場提供を受け、6月から8月にかけて「フェニックス・プロジェクト」を開催した。朗読、ダンス、人形劇、音楽、大道芸などさまざまなジャンルの舞台人有志が大勢集まり、多彩なパフォーマンスが上演された。

この席で岩手、宮城、福島の演劇人が一堂に会し、それぞれの状況を報告し合った。東北と他地域の演劇人が直接顔を合わせて話し合い、考え合えたことは、東北の演劇人にとって大きな勇気となった。また、このときの出会いが、その後「PAW 横浜 2011」「来て、見て、あるくと。」などにつながる新しい交流のきっかけを生むことになる。

このチャリティーイベントの収益金は、ARC ＞ T をはじめとする被災地の舞台芸術家団体に送られた。

あのときあれから

震災後に被災地の協会員と連絡を取り合う中で、〈共に話し合い、考え合う場を創る〉、〈被災地の舞台芸術家の活動を支援する〉この二つを主眼として行動を起こす必要を感じ、4月にフェニックス・プロジェクトを立ち上げました。東京在住の東北出身の舞台人の必死の活動で、ようやく6月に笹塚ファクトリーで最初の開催に辿り着き、マスメディアが伝えない現状を報告して頂き、直接会うことの大切さ嬉しさを全員で共有することができました。今 ARC ＞ T が行われていることは、まさに対話によって次の世界を共に探り、行動を起こすという、現在の日本で最も必要なことだと思います。経済中心で快適さを追い求めてきた社会は、ますます個人中心となり、お互いが敵にしかならないという不安を多くの人が抱いています。大震災からわずか一年で被災地以外の場所では、風化が始まっています。あるくとの会議、活動がテレビで全国に放送されることを心底願っています！

日本演出者協会　理事長　和田喜夫（わだよしお）

6月13日　東京から佐藤道元氏来訪

6月14日　河北新報夕刊「あるくとの報告」開始（〜翌年3月末）
早稲田大学フォーラム「大震災と芸術文化　現場からの証言」に鈴木拓が参加

6月16日　吉野さつき氏ご一行の東松島市視察にあるくと随行
あるくと調査部が気仙沼および南三陸町へニーズ調査

6月17日　東北電力が復旧作業可能地域の停電をすべて復旧
枝光本町商店街アイアンシアターと打ち合わせ
劇団三カ年計画が名足小学校と伊里前小学校にて朗読会

6月20日　東日本大震災復興基本法成立
第11回定例会（仙台市市民活動サポートセンター）

プログラムの一つとしておこなわれた「被災地の舞台芸術家トーク」1と2から、一部を抜粋して掲載する。

和田喜夫（わだよしお）

（演出家、演劇企画集団楽天団代表、日本演出者協会理事長）

ある仮設住宅で、集会所を建てようとしたところ、「50世帯以上でないと集会所は建てられない」という条例があるのでダメだと言われたそうです。この非常時にあって人間が集まってこれから一緒に何かをするためには、まず集会所が必要だと意見がまとまったのに、条例で縛られるというのは本当に愚かなことだと思いました。いまこそ「民間」のネットワークで話し合わなければいけないという気がします。僕は、劇場は集会所だと思ってきましたが、このフェニックス・プロジェクトも或る意味で「集会所」です。いま東北がどんな状況か、東京のマスコミでは充分には紹介されないという偏った現状があります。この機会にネットワークを作る必要があるのではないかと思っています。

今回、阪神淡路大震災を体験した協会員から「風化させないで」との声がありました。「阪神ではまだまだいろんなことが解決されてないし、時間の中で忘れられていくのがとてもつらい、ということを多くの人が思っている」とありました。そして、「再開発の中で貧しい人たちが後回しにされてしまったことに憤りを感じる」という強い文章を頂いて、これは本当に他所事ではないと感じました。

こむろこうじ

（劇作家、演出家、劇団ベッカーズアクト主宰／岩手県久慈市）

岩手では、若者の価値観が180度変わったようです。今までは、東京で一旗あげようとしていたけど、「私は絶対出て行かない」「地域のために頑張る」という中高生がいっぱいいます。震災を契機にして、地域や人と人の関わりをもって生きていることに気づいた若い世代が多くいるのは頼もしいことです。

例えば、岩手の沿岸の被災地にいても、良い作品を創ったら東京で評価してもらえる場があれば、地域に根ざしてもっと一所懸命になれるかもしれない。演出者協会が被災地に滞在して、地元の人たちと一緒に舞台を創り、意志のある若者に演出の技法を伝授して力をつけさせる…そんな支援の形や、新しい文化のスタイルがネットワークによって広がればいいですね。震災復興しながら、今まで埋もれていた文化も立て直すことで、文化をもっと豊かにしていけるのではないかと思います。

千年に一度の災害が起きたわけですが、壊れたのはここ100年で人がつくったものや伸びてきた木などであって、自然は原型を留めたままです。自然を敬う気持ちで一緒につきあっていくことを考えれば、岩手で暮らすことは新しいライフスタイルと言えるかもしれません。

町聡子（まちさとこ）

（演出家、俳優、郡山演劇研究会「ほのお」副代表／福島県郡山市）

震災から一か月が過ぎた時に、「私たちも何か役に立てないか」と避難所のイベントで寸劇を上演しました。みなさんに喜んでいただけたことで、それまで「何もやる気にならない」と不安だけを抱えていた団員が、上演後は「次はこうしたらもっと喜んでもらえるのでは」と積極的な話をするようになりました。避難所の災害FM局から朗読ボランティアの依頼があったりもして、目標や希望を持つと身体が動くし、動くことで次に何をすべきか見えてくるんだなと実感しております。

私は、震災や原発事故のことを作品にして舞台に載せてほしいと素直に思います。被災者の声、被災者の思い、被災地の願いを知ってもらうことはとても大事なことです。もしそれらが各地で上演できたら、小さな声も大きな声になっていくでしょう。

今回、私はとても反省しております。福島県には原発が10基あって首都圏の電気を賄っていること、たいした産業のない市町村では原発によって交付金や雇用など経済的な恩恵を受けていることは知っていても、「やっぱり原発の近くには住みたくないな」という程度でしか考えていなかったからです。結局、私も政府と同じように原発の町を遠くから見ていたんだなと気がついて、ショックでした。

伊藤み弥

（日本演出者協会会員、ARC＞T事務局員）

避難所に出入りしている人から聞いた話では、いま避難所は「慰問疲れ」を起こしています。有名無名含めて、出し物や炊き出しというふうにいっぱい来る。そのお心遣いはとてもありがたい一方で、「また一時間我慢すればいいんでしょ」と言う人もいるという話です。物資も慰問も、本当に必要とされているものが必要としているところに届いているのかは疑問です。被災地にいる実感としては、演目として芝居はまだ早いですね。やっと音楽や詩がしみてきた頃かな、と。

演劇には喪ったものを伝える力があると思います。文字や映像はこれから何年も残るけれど、匂いとか湿度とか感覚、個人の記憶は歴史からこぼれ落ちてしまう。そんなことを演劇はつなぎ留めていってほしいと思います。

鈴木拓

（ARC ＞ T 事務局長）

最初の 1 か月は生きることで精一杯。2 か月めは NPO や自治体の援助や有名人が来て、一瞬のハイテンションの状態があった。3 か月めの今、現地に入っている人たちは非常に危惧しています。避難所では平等でしたが、仮設住宅に入った時点で、自活を強いられ、格差が生まれる。その中でいかにコミュニティーを形成していくのかが問われています。

そして、中高生がかなり置き去りにされています。子どもや高齢者、障害者への支援がまず先だったので、中高生は悲しむ余裕もないまま支援活動の手伝いをしていました。表面上は笑っていても、まだ現実に向き合えていない子がたくさんいます。そのケアがこれからの課題になっていくでしょう。

仙台の復興会議では「経済の復興」がやはりメインの議題で、そこのメンバーには文化人がいませんから、コンクリートの話ばかりしている。そういう中で、地元で表現やっている僕らに何ができるか、外部からの支援をどのようにお願いするか、正直まだよくわからないです。今はいろんな人と会って、話して、思っていることを共有できることが僕のエネルギーになっています。そういう「対話」がいろんなところで起きるといいと思います。

貝山武久（かいやまたけひさ）

（演出家、メープルリーフシアター代表、日本演出者協会理事）

私は仙台の出身です。今回、すぐ下の弟を津波で亡くしました。遺体は何も身に纏っていなくて、遺品として残っていたのは右足に穿いていた靴下だけだったと聞かされた時には、言葉がありませんでした。私は、泣きたいという気持ちよりは、弟が何メートルかの津波を見たときの恐怖の顔が想像されて、それがある瞬間ふと脳裏に浮かんでくる、そんな体験を何度も持ちました。

人間が自然と調和して生きるという事を忘れた時に、思い上がりの心が出てくる。防災の面での不備があったことは確かで、ましてや原発の問題はあきらかに人間が犯した誤り、つまりは人災だと思うんです。今更ながらこんな犠牲を払わなければ感じなかったのかと思うような惨憺たる有様で、これは国として抜本的に見直さなければならない問題だと思います。

それと、先ほどの伊藤さんの、いま避難所の人たちは慰問疲れしているという話、胸にぐさっと来ました。慰問に行こうとする人間にはそれなりの気持ちがあり、それは尊いのだろうけど、それを受ける側の人との間に齟齬（そご）が生じることもあるということですね。その内容、やりかたを含めてね。それはある意味、日本の福祉行政の根本にも通じることで、相手に対する配慮とデリカシーは、お互いなくしてはならないということでしょうね。

菅野直子（かんのなおこ）

（演出家、劇作家、日本演出者協会会員、フェニックス・プロジェクト事務局長）

演劇も人の心を描いていく芸術だと思うので、それぞれのスピードで表現をしていけたらと思いますし、一緒に進んでいけたらいいなと思っています。

坂田裕一（さかたゆういち）

（NPO 法人いわてアートサポートセンター副理事長／岩手県盛岡市）

演劇人の持つコーディネイト力を使えないか、ということで、盛岡在住の演出者協会会員、岩手県の演劇協会、音楽家、美術家などで「いわて文化支援ネットワーク」を作りました。広く文化の視点から支援していこうと「3.11 絵本プロジェクトいわて」「いわてフィルハーモニー」などの形で支援活動をしています。

今私たちが一番考えなければいけないのは、文化が壊れてしまうことへの防波堤を作ることだと思います。

その土地の人が自分たちの文化に誇りを持ってその土地で暮らしていく。文化が地域を救ってきたわけですよね。地域を守っていく、そのためには地域がずっと培ってきた文化を守る。それは劇場というハードを作って守るのではなく、その「気持ち」を守るために何ができるかということをやっていく。僕はそのことが必要だと思っています。と同時に、今、ゼロになったわれわれが何をするかと言えば、復興じゃなくて「新興」、新しく興すということを考えていかなければいけないと僕は思っています。

伊藤み弥

仙台の演劇人たちは混迷を極めていて、とにかく意見がまとまらない。しかしその「居ても立ってもいられない」という思いは一つだし、そこは信じたいということで、ARC ＞T を立ち上げました。劇作家は今はまだ書けないと黙しているし、演劇自体、被災地で必要とされているとは言いがたい状況です。

そんな中で、私たちは基本姿勢として「他者を否定しない、自分を否定しない」という言葉を掲げています。それは、他人のやり方を否定しないこと、そして、周りと比べて何もやってない自分を卑下することは絶対しないでほしい、生き残ってしまった自分を決して否定しないでほしい、という切なる祈りです。

つちはしあつし
土橋淳志

(劇作家、演出家、A 級 MissingLink 主宰、DIVE 理事)

DIVE（ダイブ）大阪現代舞台芸術協会は約 30 の団体や個人が加盟する NPO 法人です。前身は 94 年に発足した「関西演劇人会議」で、扇町ミュージアムスクエア 10 周年記念行事として始まった、関西演劇界の問題点を話し合う集まりです。95 年の阪神淡路大震災のとき、安否確認や情報を集めるセンターが必要だということで、急遽、演劇人会議を「阪神大震災連絡センター」としました。以後、情報集約や意見交換、チャリティー収益金の受け皿として中心的役割を担いましたが、同じ年の 4 月の第 3 回ミーティングを最後に、自然消滅に近い形で活動を終えました。時間の経過と共に関心が薄れたということもありますが、活動停止の一番の理由は、多くの参加者が演劇人会議に、演劇を活用したボランティアのコントロールセンターとしての役割を求めて来てはったんですね。でも、演劇人会議自体は緩やかな集まりであって、そもそもそういう役割を担う組織ではなく、時間やコストの関係で限界があったようです。その反省をもとに「今後そういう非常時に対応可能な組織が必要ではないか」と DIVE が生まれました。ARC ＞ T や演出者協会と連携して何かやっていきたいと思っています。

りゅうざんじしょう
流山児祥

（演出家、俳優、流山児★事務所代表・芸術監督、日本演出者協会副理事長）

震災の日、「お客さん来ないかもね」って劇場で待ってたら 27 人もお客さんが来た。帰宅難民の群れがすごくて家へ帰るのも怖いから、とにかく誰かと集まれる場所がほしかったんでしょうね。僕は、劇場は避難所としてあるべきだと言い続けていて、これが本当になった。だから今、「避難所演劇」「公民館演劇」を提唱したいんですよ。公民館は非常食やガソリンも備蓄している。そこに演劇も備蓄すればいいじゃないかと。それから、お寺や教会だって人が集まる場所、演劇の場所にしたらいい。

本当の意味で人が出会える「場所」を、劇場という建物だと思ったら大間違いであって、「人」なんだということを認識しなきゃいけない。本当にいま「人と人をどうやって繋ぐか」ってことしかないと思うんだよね。物は必ず壊れるんだってことをもうはっきり分かろうよ。

鈴木拓

現地の人間の思考は止まっていないです。「どうも被災地は思考が止まってるようだから、支援側が考えたこれを持って行きます」っていうものが多いんですけど、決して思考は止まっていない。なので、見ていてほしいです。それでも動きたい人は、是非一度現地に来てもらって、僕らと話して、何ができるかということを一緒に考えたいです。

あのときあれから

あれからとこれからを照らす言葉

昨年の夏、個人的な仕事で、被災地の小学校の、学習発表会の作品創りのお手伝いをしました。被災の体験を語りと寸劇で構成した作品でしたが、台本を担当された先生は「こんな辛いことをわざわざ台本に書いていいのか」と最後まで葛藤されていました。

フェニックス・プロジェクトは、日本演出者協会の被災地支援事業として 2011 年の 4 月に立ち上がり、6 月、7 月、8 月と 3 ヶ月連続で「現地の舞台芸術家団体に支援金を送る」、「共に考える」この 2 つを主な目的としたチャリティーイベントを行いました。被災地のアーティストトークには仙台から鈴木拓さん、伊藤み弥さん、なかじょうのぶさん、石川裕人さんにお越し頂き、3 ヶ月の経過をそれぞれの立場からお話頂きました。

6 月のまだ先の見えない不安の中で「他者を否定しない、自分を否定しない、このことを私たちは活動の中で大切にしています。」と発言されたのは伊藤み弥さんでした。演劇を続けていいのか？作品をつくっていいのか？演劇を続けるにはどうしたらいい？連日のように皆さんで話合いを重ね、行動をしてきた仙台の皆さんの中から生まれたその言葉は、「表現の自由」を支える根本的な思想を改めて照らすような言葉でした。

もしも、私が仙台で活動されている皆さんに出会わなければ冒頭に紹介した先生との関わりは少し違ったものになったかもしれません。

フェニックス・プロジェクトでも 70 作品ちかく作品が発表されました。誰もが、この大きな出来事を前に、語ること、語らないこと、両方の選択肢を持っている、いつもそんなことを思いながら、私自身作品創りをし、また創ろうとする人を見守る一年でした。これからもそうだと思っています。

フェニックス・プロジェクト担当
かんのなおこ
菅野直子

2011.6.11-6.26

3 weeks Charity_青年座劇場 / 東京都

4月初めに仙台を訪れて復旧作業に邁進した若手メンバーを中心とする青年座の座員有志が企画し、3週間にわたるチャリティーイベントを開催した。リーディングや音楽演奏、子ども向けなど、さまざまなプログラムがある中、仙台からSENDAI座☆プロジェクトが『明日に向かって歌え!!　アテルイ／キャラバン、再び西へ』を上演。6月11日と12日の3公演で観客233名を動員した。SENDAI座はこの公演の入場料と募金で集まった義援金を宮城県と仙台市を通じて被災地に送った。

青年座は仙台からの一行を歓迎し、舞台設営、食事、宿泊所の提供など、旅公演にかかるすべての面においてサポートした。また、このイベントでの収益金はすべて被災地およびARC＞Tへと贈られた。

青年座「3 weeks Charity」実施概要
実施日：2011年6月11日～6月26日／会場：青年座劇場／内容：SENDAI座☆プロジェクト復興応援チャリティー公演『明日に向かって歌え!! アテルイ／キャラバン、再び西へ』、ステージ『手錠の光』、リーディング『明日―一九四五年八月八日・長崎』『風が吹くとき』、Day for Children、Music Festivalなど

あのときあれから

みんなわりと好き。
家族はもっと好き。
女の子好き。
美味しいご飯も美味しいお酒も好き。
友達も好き。
綺麗なものも好き。
海も好き。
山も好き。
動物も好き。
芝居が好き。
好きなこと沢っ山。

沢山の友達が結婚した。
沢山の友達が子供を、産んだ。

すっごい幸せそう。

これが僕の、311の一年後。

電気と好きなもの天秤にかけたら、好きなものが落ちました。

だから今、ぼくは、はりきって反原発。

劇団青年座　宇宙

6月22日　アーツエイド東北発起人会（せんだいメディアテーク）
東京から西堂行人氏来訪

6月24日　仙台文学館が再開
東日本大震災復興基本法公布・施行
津波対策の推進に関する法律制定

6月25日　第12回東日本大震災復興構想会議
「復興への提言」提出

6月26日　兵庫県立ピッコロシアターから田窪哲旨氏来訪

6月27日　第12回定例会（仙台市市民活動サポートセンター）

6月28日　水産庁が水産復興マスタープラン策定・公表
文化庁「震災復興のための芸術家派遣事業」準備委員会（10-BOX）

6月29日　文化庁「震災復興のための芸術家派遣事業」実行委員会（仙台市文化振興課）
アーツ千代田3331から取材（塩竈・ビルドフルーガス）

7月1日　仙台サンプラザ、七ヶ浜国際村が全施設貸し出し再開

7月4日　アーツエイド東北ミーティング（東北文化学園大学志賀野研究室）

2011.6.16〜
NPO法人20世紀アーカイブ仙台との協働

古い映像を見ながら会話して高齢者の脳の活性化を図る「回想法」を実施していたNPO法人20世紀アーカイブ仙台と出会い、6月16日に花いちもんめに打ち合わせに一緒に行った。回想法とは懐かしい写真や映像などを使って脳を活性化させる認知症予防法。実際にNPO法人20世紀アーカイブ仙台が所有する戦後の写真やフィルム、動画、昔の農具、歌などを持っていった、花いちもんめのほか、名取市の仮設住宅で回想法を多夢多夢舎で無料映画上映会を実施し、ARC＞Tも協力した。

あのときあれから

震災から1年以上が経過し、仙台の街中では震災前の状況となにも変わらないような時間が過ぎています。しかし、沿岸部へ目を向けると、町は無くなったままであり、復興まではまだまだ時間が必要な光景です。

私共20世紀アーカイブ仙台があるくとの皆様と御一緒させていただいた初めての協働イベントは、東松島の赤井地区「花いちもんめ」にて8ミリフィルム映像による『昔を語る会』でした。進行役の我々2人以外にあるくとから、7名もの傾聴役スタッフが参加し、お年寄りの人たちの間に入っては、思い出話に耳を傾けひたすら聞き役に徹していただき、お年寄り達は非常に満足気でした。普段2人で進行を行うと、30名くらいの参加者の場合、どうしても前の方のお話ししか聞けなくなってしまい、後ろの方で思い出したことを話そうとしている方がいてもなかなか拾ってあげることができません。ですので、今回は傾聴役の大切さを身に染みて感じたイベントとなりました。

その後、花いちもんめは、赤井と大曲合わせて4回程あるくとさんと昔を語る会を実施しました。移動の車中も楽しく過ごさせていただきました。ありがとうございます。また一緒にやりましょう。

NPO法人20世紀アーカイブ仙台 理事長　坂本英紀

7月19日　出前部自主研修（演劇）
7月17日　仮設住宅での落語公演に協力　気仙沼・内松川地区
FIFA女子ワールドカップで日本代表が初優勝
7月16日　仙台市戦災復興記念館が全施設貸し出し再開
JR仙石線・矢本〜石巻間運転再開。全線開通の目処立たず
東北六魂祭（〜17日）
7月15日　東京から黒澤世莉氏、Nextご一行ほか来訪
7月14日　横浜からSTスポット横浜の田中真実氏来訪
7月11日　岩沼市民会館中央公民館、気仙沼民会館が全施設貸し出し再開
envsi.主催追悼集会「南三陸の海に思いを届けよう」（南三陸町）
第13回定例会（10-BOX box-4）
7月10日　好きだった景色を忘れないための写真展（仙台市・ギャラリースワロウ）
7月8日　日本演出者協会「フェニックス・プロジェクト」vol.2になかじょうのぶが参加（東京・〜10日）
7月7日　出前部が出前メニューづくりの会をはじめる
公益財団法人神戸文化支援基金「志縁パーティー」
7月6日　劇団青年座の宇宙氏、尾身美詞氏ほか来訪
文化庁文化部の鈴木仁也氏10-BOX来訪

1　BalletCompany~demain~ 公演『ココロをこめて〜まちが、人が笑顔になりますように〜』(元鍛冶丁公園／仙台市青葉区国分町)。野外でのチャリティ公演。(2011 年 6 月 18 日 -19 日)

2　仙台市泉中央の商業施設 SELVA で子ども向けのイベントへ出前。俳優の館林敦士、高橋康太らがジャグリングや紙芝居を披露した。(こどもとあゆむネットワークと協働・2011 年 6 月 5 日)

3　東松島合同保育所へ CAL「東北キッズソリダリティプロジェクト」から寄贈されたタオルケット 50 枚とおもちゃを ARC ＞ T が届けた。(2011 年 6 月 23 日)

4　ＮＨＫ仙台第一放送「やるっちゃ！宮城」で半田深雪（左から 2 番目）が出演。宮崎駿『風の谷のナウシカ』を朗読。(2011 年 6 月 12 日)

5　AVN311 の吉野さつき氏とダンサーの早川朋子氏 (東京)、山田珠実氏 (京都) が東松島市矢本子育て支援センターほっとふるを視察。ARC ＞ T も同行。(2011 年 6 月 16 日)

6　早稲田大学フォーラム「大震災と芸術文化　現場からの証言」に鈴木拓が参加。(2011 年 6 月 14 日)

7　ARC ＞ T ではで出前自主研修会や出前部ミーティングを行い、情報の共有や演劇とダンスの特性を活かしたアイディア出しや練習をしていた。

あのときあれから

＜震災後＞の言葉

＜震災＞後、多くの言葉が生まれた。
誰もが言葉に敏感にならざるをえなくなった。
言葉は時に慎み深く、時に内省を伴い、時に暴力となった。
言葉はわたしたちの心を写す。とともに、現実の似姿を映し出す。
忘れてはならないことがある。書き残しておかなくてはならないことがある。
それが記憶と記録だ。表現とはそれが形になったものだ。

わたしたちは改めて、文化や芸術の必要性を痛感する。
一年以上経って、わたしたちは新しい言葉をどれだけ獲得できただろうか。
わたしたちは＜震災＞以前の言葉で、相変わらず思考していないだろうか。
新しい言葉だけがわたしたちの新しい考え方と生き方を指し示してくれる。

演劇評論家・AICT 国際演劇評論家協会日本センター会長
西堂行人（にしどうこうじん）

2011.6.6-12.6
「絆支援員」研修への出前

仙台市は 2011 年 6 月から一般社団法人パーソナルサポートセンターと協働で「安心見守り協働事業」を開始。これは、応急仮設住宅に住む人びとの孤立を防ぎ、就労支援など生活再建のサポートを目的とする事業で、「絆支援員」というスタッフが仮設住宅を一軒一軒訪問し、住民の様子を見守りながら、さまざまな困りごとの相談を受け、それに応じた専門機関などを紹介する。この絆支援員は、被災者から雇用され、およそ 2 週間の研修を受けたのちに二人一組で活動する。

その研修プログラムの一つとして、コミュニケーションに役立つワークショップの依頼が ARC ＞ T メンバーの生田恵 (三角フラスコ代表) に寄せられた。ARC ＞ T からの出前として、6 月の第 1 期研修から 12 月の第 5 期研修にかけて、生田恵と白鳥英一 (OtoOpresents 代表) らによる演劇ワークショップと、土屋悠太郎 (タイ舞踊家) による身体ワークショップが実施された。

からだをほぐすこと、自分と相手の身体に向き合うこと、呼吸を感じること、見つめ合うことのほか、相手の言うことを受容または否定してどんな感じがするかを試す「肯定と否定のダイアログ」、より実践的な「クレームを受ける」「無理難題を言われる」ロールプレイなどをおこなった。メンバーはワークショップのメニューを事前に自分たちで試し、実施後は振り返りをするなど、研修生と現場の状況の変化に合わせて内容を工夫していった。

絆支援員研修ワークショップ実施概要
実施日：2011 年 6 月 6 日、9 日、7 月 25 日、27 日、8 月 29 日、31 日、10 月 6 日、17 日、12 月 5 日、6 日／場所：仙台市青葉区二日町／出前者：生田恵（三角フラスコ）、白鳥英一 (OtoOpresents)、土屋悠太郎 (タイ舞踊家)、長保めいみ (シェイクスピア・カンパニー)、サマイ (俳優)、かとれあ (かとれあ project)、千葉瑠依子 (ダンサー)、矢野文子 (ヤノバレエスタジオ & アーツ主宰)、瀬川まーち (俳優)、上島奈津子 (俳優)、小住典子 (俳優)、タムラミキ (ARC ＞ T 事務局)

2011.8.6-8.7

「祈りの星祭り～Pray for TOHOKU～」_勾当台公園特設ステージ／仙台市青葉区国分町

社団法人日本芸能実演家団体協議会(芸団協)は、芸能を通じて被災者を励ますため「震災復興プロジェクト」を立ち上げた。その一環である「仙台七夕まつりプロジェクト」のメインステージへの出演を依頼されたことを受け、ARC＞Tでは仙台フィルハーモニー管弦楽団との協働で「祈りの星祭り～Pray for TOHOKU～」を企画。

第一夜では、木管五重奏の調べに、俳優たちによる朗読、子どもたちの群読、和太鼓の演奏とダンスが加わり、夏の祭りらしいにぎやかさと華やかさの中にも鎮魂の思いを込めたステージを披露した。第二夜では、フルオーケストラが七夕や故郷にちなんだ親しみやすい曲を演奏。ARC＞Tメンバーの半田深雪(魚類の薔薇主宰)が司会進行を務めた。

8月6日　仙台七夕まつり（～8日）

8月1日　白石市文化体育活動センターが全施設貸し出し再開
第15回定例会（10-BOX　box-3）

7月31日　加美町中新田文化会館が全施設貸し出し再開

7月30日　仙台オペラ協会『鳴砂』新国立劇場地域招聘公演（～31日）

7月29日　仙台市青年文化センターが全施設貸し出し再開
東日本復興対策本部が東日本大震災からの復興の基本方針決定

7月28日　都市のしくみとくらし研究所「city&life」誌から取材

7月25日　平成23年度第二次補正予算成立
第14回定例会（10-BOX　box-4）

7月24日　被災3県を除き、地上デジタルテレビ放送へ全面移行

7月22日　東京から坪池栄子氏、奈良部和美氏ほか来訪

7月21日　京都から岩下徹氏、志賀玲子氏来訪

7月20日　八戸から田中稔氏来訪
出前部自主研修（ダンス）

「祈りの星祭り～ Pray for TOHOKU ～」実施概要
【第一夜】日時：2011 年 8 月 6 日 19:30 ～ 20:30/ 構成・演出：石川裕人 (TheatreGroup“OCT/PASS”)/ 振付：千葉里佳 (BalletCompany~demain~)/ 演奏：仙台フィルハーモニー管弦楽団 (フルート：芦澤暁男、オーボエ：木立至、クラリネット：副島謙二、ファゴット：入交滋、ホルン：須田一之)/ 出演：絵永けい (TheatreGroup“OCT/PASS”)、金野むつ江 (六面座)、丹野久美子 (劇団 IQ.150)、藤原貢 (劇団やんま)、サマイ (俳優)、熊谷由海 (Project T-time)、永澤真美 (仙台シアターラボ)、かとれあ (かとれあ project)、長保めいみ (シェイクスピア・カンパニー)、原西忠佑 (仙台シアターラボ)、白鳥英一 (OtoOpresents)、大渕浩 (俳優)、樋渡宏嗣 (SENDAI 座☆プロジェクト)、劇団まんざら (佐山輝子、松崎ちよ子、土田美代子、黒川春子、伏見郷子、郷内宣子、奥平常利、沼田益偉、八尾坂彰)、BalletCompany~demain~(栗和田朋与、今野愛那、佐藤優彩、寺崎朝香、任鮮雅)、創作和太鼓「鼓逢」(大森由紀子、佐藤久美子、氣田貴志子、佐藤雅、植原江里香)、子どもたち (赤間史佳、大和田奈央、熊本芙久、熊本玲也、昆すず、昆奈緒、齋藤ほのか、齋藤良道、白鳥空太、白鳥小雪、白鳥はな、菅原美月、岑日菜子)/ 映像記録：長屋裕二 (ガオンスタジオ) / 舞台監督および演出部：ARC ＞ T 事務局 / 朗読テキスト：まどみちお『いま！』、長田弘『立ちつくす』、菅原克巳『ブラザー軒』、井上ひさし対談『東北ルネサンス』より、北原白秋『お祭り』、茨木のり子『水の星』、チェーホフ『三人姉妹』より / 演奏曲：ハーライン「星に願いを」、ビゼー「カルメン」より、シュトラウス「美しく青きドナウ」、マスカーニ「カヴァレリア・ルスティカーナ」より、いずみたく「見上げてごらん夜の星を」
【第二夜】日時：2011 年 8 月 7 日 19:00 ～ 20:00/ 司会進行：半田深雪 (魚類の薔薇主宰)/ 演奏：仙台フィルハーモニー管弦楽団 ／映像記録：長屋裕二、ARC ＞ T 事務局 / 演奏曲：モーツァルト「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」、さとう宗幸「青葉城恋歌」、下総皖一「たなばたさま」、岡野貞一「ふるさと」ほか

構成・演出：石川裕人

8月15日　仙台市シルバーセンターが全施設貸し出し再開
だらだらとおはなしする会（定例会番外編）

8月14日　劇団 IQ.150 主催「お盆の会」

8月12日　「東日本大震災により生じた災害廃棄物の処理に関する特別措置法」成立

8月11日　岩手県が第一期東日本大震災津波復興計画 復興基本計画・復興実施
envisi 主催追悼集会「南三陸の海に思いを届けよう」（南三陸町）

8月10日　福島県が福島県復興ビジョン策定
千葉からNPO法人まちアート夢虫が花いちもんめへ出前

8月9日　東京から島次郎氏来訪

8月7日　岩沼市が岩沼市震災復興計画グランドデザイン策定

1·17 神戸から　3·11 東北へ

島田 誠

17年前に直下型地震が近代都市を直撃した阪神・淡路大震災が世界を驚かせましたが、今回の東北大震災では地震と津波によって広域にして甚大な被害を蒙り、その上に福島原子力発電所の事故の影が日本全体を覆っています。被災地は「絆」「がんばれ」の掛け声のうちに表裏、明暗に引き裂かれ、混迷の手探りが続いているように思います。阪神大震災の当事者として、そして今回の伴奏者として、「日本は変わらなければならない」と言われ、『復興』とは、『新生＝新しい地への生まれ変わり』であると分っていても、巨大なシステムはなかなか針路を変更できずに、もどかしさばかりが募ります。

しかし、阪神・淡路大震災を契機にNGO/NPOが確かな役割を担うようになり、その蓄積が「新しい公共」という制度となり私たちのような小さな文化基金が公益財団法人として認定されることを可能にしたのです。東北大震災による多くの犠牲となられた人々を礎にして日本を根底から転換させる契機であったと振り返ることが出来る種を蒔き、育て、緑の大地を蘇らせる。私たちが関わる文化芸術こそが、そうした変革の大きな役割を担っていると思います。その意味において、私たちは傷ついた人々に寄り添い、共に歩み新しい共同体を生む試練を与えられているともいえます。朝日新聞の社説（この原稿を書いている5月5日）に高橋源一郎（作家）が、いまある制度の延長線上でしか語れない政治の貧困を指摘し、「この国で起こったことから、なにも学ばなかったのだろうか」という問いを紹介していますが、17年前の体験からもわずかなことしか学んでいないとも言えます。

私のささやかな試みはすべて「自立した市民が支える社会」への実験装置のようなものです。私たちがお任せにしてきたのは「原子力」だけではないのです。

1995・1・17

震災の8日後に私は当時経営していた書店の営業を再開、被災地の支援活動を始めました。1ヵ月後には神戸の文化は自分たちの手で守るという決意と、芸術家自身も神戸の復興のために力を結集するという願いをこめ「アート・エイド・神戸」実行委員会を立ち上げ5年間、活動しました。

いつの時代そうであったように
悲しみを美しさにかえ
苦しみを美しさにかえ
時に絶望をもまた美しさにかえ
その中に希望の種子を埋め込んでゆく・・・
それが美術という仕事なのだと思っています。

伊津野雄二（彫刻家）

災害は天災だが、人災が被害を拡大させ、そのあとに続く、孤独死、関連死、自殺などは希望を失ったことによります。私たちは寄り添い分かち合わねばなりません。市民から遠いと思われていたアートが市民生活の中に入っていき、選良意識をもっていたアーティストたちが震災を期に、自らの存在基盤を問いなおす機会でした。

私は「神戸文化復興基金」を立ち上げ、被災したアーティストに緊急見舞金を贈り、壁画キャンペーン、3冊の「震災詩集」の刊行し、朗読会や歌曲、合唱曲、演劇、映像へと繋がっていく、あらゆるジャンルの芸術の活動支援を行い、震災から生まれたアートを「Hyogo Art Week」として東京、福岡、釧路などで発表しました。

根源的に社会の在り方、すなわち私たちの生き方を問いなおすという「ユウフォリア（至福感）」は、現実にはやがて挫折、消滅していきましたが、震災の経験はNGO/NPOの活動領域の拡大、市民参加型協働の防災、減災のまちづくりや「新しい公共」という社会的位置づけを生みました。まさにその年に東北大震災が起こったのです。

「アーツエイド東北」設立へ

昨年、「災害対策全書」（兵庫21世紀創造推進機構）に「芸術文化による復興支援策」(*1) を書き、これで震災との関わりは卒業したと思いました。私は研究者ではないので現実に有効であると信じた処方箋を書いたわけですから、行動することは必然でした。

4月5日にギャラリー島田で「東北大震災への文化支援を考える」というアート関係者の集まりをもち、4月17日、夜行バスで仙台に向かい、18日から3日間、宮城県の津波被災地を福島県境の山元町から北へ七ヶ浜までつぶさに見ました。百聞は一見に如かずというとおり。津波でコンクリートの堤防まで破壊され、道路沿いの電柱はなぎ倒されガードレールは吹っ飛んで家に巻きつくように張り付き、工場の鉄骨が飴細工のように曲がっている。その海沿いの道にびくともせずに桜古木が並び満開に咲き誇る。恐ろしいまでの黙示録的風景でした。阪神大震災とは大きく異なる災害で、また風土、文化も異なるので、現場を目撃しなければ、多分、判断を間違ったと思います。そのことを踏まえて、せんだいメディアテークを拠点に多くのアート関係者と話し合いをさせていただき、「東北のことは東北のみなさんの手で」と、自ら文化の力で立ち上がっていく外から見える象徴としての旗を上げてくださいと促しました。私たちは、寄り添い、分かち合う。なにより、ひとりよがりや自己満足を排し、そうした活動を支えるお金の流れをつくり、ニーズに応えていくことを大切にすることを伝えました。旗をあげる、「旗」の語源は旗のもとに人々が集い、歩くことだという。ならば、まず旗をあげて出行する、旗のもとに集まる人々の声を聴く、途上にある者たちに地図を描く（新井敏記「SWITCH」編集長の言葉から）。その旗が掲げられたのです。

6月22日、「アーツエイド東北」の発会式がせんだいメディアテークで開催され、7月7日の七夕の日に神戸で公益財団法人「神戸文化支援基金」設立記念の「志縁パーティー」（北野ガーデン）で行い、「アーツエイド東北」から代表世話人の志賀野桂一さんとARC＞Tの鈴木拓さんをお招きし300万円の志縁金を贈りました。(*2)

8月には一人で塩竈、松島、石巻、気仙沼、大島、仙台とめぐりました。ただ被災された場所を歩き、身を晒していたいと思い、鞄には赤坂憲雄さんの本を数冊しのばせていました。そして神戸の7つの画廊が協力して志縁のためのチャリティー展「Chain of Arts」を開催。（売り上げの全額寄付）竹下景子さんの「詩の朗読とコンサートの夕べ」を川内萩ホールで聴き、翌々日には、「『文化芸術による復興推進コンソーシアム』設立シンポジウム～文化芸術を復興の力に～」（東京国立博物館）で話しました。

「アーツエイド東北」は11月に一般財団法人を果たし、設立にいささか関わったものとして感慨深いものがあります。

「アーツエイド東北」発会式（2011年6月22日／せんだいメディアテーク）

(*1) ギャラリー島田のHP内「公益財団法人「神戸文化支援基金」からダウンロードいただけます。
(*2) 当財団から「アーツエイド東北」への寄付は約700万円、東北プロジェクトへの助成は140万円（8件）になります。

2012年4月末現在

様々な支援や志縁の有り方

私のやろうとしていることと他の支援との違いは

① 国や行政による震災復興基金による助成は長期にわたり制度的なもので人体になぞらえれば「骨格」。

② 企業メセナ協議会ルートによるものは企業からの寄付でプログラム助成で「筋肉」

③ アートNPOリンクによるエイドはアーティストとその活動によるもので「動脈」

④ 私の提唱する「アーツエイド・東北」は緊急・短期のもので、多くの無名の市民や組織化されていないアーティストによる。現地のニーズに合わせてメリハリをつける即断即決型で「毛細血管」に例えることが出来ます。

「行政や市場、あるいは中央といったものにあずけていたものを地域や私たち自身に取り戻す」(「アーツエイド東北」設立趣意書から）という小さな試みを神戸の震災の前から続けてきました。私たちの「実験装置」を流れていく「血液＝お金」は小さなものです。しかし､「志＝縁」がこもっています。この人たちは単なる寄付ではなく、日常的に文化芸術に親しみ、その大切さを知るがゆえに、「おまかせします」ではなく、私たちの財団、「アーツエイド東北」あるいは「ARC＞T」を選び取って志縁をして下さっているのです。

東北の文化に学ぶ

震災を契機として、私は衝撃といってもいいほどの実に多くの学びをさせていただいています。東北については何も知らなかった、その東北を知りはじめて、実は日本という風土についても深くは考えてもいなかったことを知りました。

そして、自分を遡(さかのぼ)れば、東北へと繋がる強い縁があったということ。もちろん、何度も美術を巡る東北への旅はしてきましたし、人間国宝の瞽女(ごぜ)、小林ハルを描き続ける木下晋（鉛筆画）は親しい作家ですし、越後瞽女を描いた斎藤真一展を今年、手がけました。でもいままでの理解は表層に留まっていたころを痛切に思い知ったのです。

私の母もまた東北と深い縁があったことも・・・・。

羽仁もと子の自由学園に学んでいた母は、「女子学院」を卒業した18歳の時、東北大飢饉が起り、自ら志願して秋田県の農村に入ったという。上野駅から東北本線黒沢尻へ、何度も乗り継いで、一昼夜を要する生保内(おほない)という村（現在の仙北市）のセットルメントに昭和10～12年にかけて住み込んだ。ボランティアが「奉仕団」といわれていた時代のことです。生保内のセットルメントでは若い女性の指導者として住み込んで献身的に村のために尽くし、3年間、ほとんど東京に帰ることもなかったという。それまで母は東京生まれだと思い込んでいましたが、今、母の年譜を見ると大正6年、新潟に生まれ5歳の時に東京に出ていることも今回初めて知りました。

「ARC＞T」に期待する

ドンキホーテのように仙台入りした時､鎧も剣も盾もなく、サンチョ・パンサもいないで徒手空拳(としゅくうけん)、パワーポイントも画像もなく、ただ気持ちだけを込めて話しをしたのでした。その夜、4月4日に発足したばかりの「ARC＞T」のミーティングにいきなり誘われてご挨拶させていただきました｡よく、受け入れて下さったものだと改めて思います。

神戸の震災時にはインターネットもメールも携帯電話もなかった。いわばデジタル時代幕開け前夜が「1･17」だったのですね。今は、皆さんの活動を瞬時にＨＰを初めとするネットで知ることが出来ます。そして東北を知り、「ARC＞T」や「アーツエイド東北」の皆さんの活動を知るにつけ、感嘆するばかりです。正直、羨ましい、妬ましいとさえ感じます。

4月に初めて仙台入りし、せんだい演劇工房10-BOXを訪ね、資料を読んで演劇都市であることをはじめて知りましたが、聞きしにまさるとはこのことでした。震災後、いち早く文化復興の組織とネットワークを構築しえたのは、演劇を作り上げていく手法に皆さんが習熟されていることと関係があります。議論を重ね、訓練・稽古を重ね、アンサンブルとして完成させていく、しかも稽古場や劇場や、まとまった資金も必要とする。日常的に地域として支えていく土壌を持っておられたのですね。

恥をかくところでした。その代わりに冷や汗をかいています。神戸は世界にひらかれた創造文化都市であるとのイメージを打ち出し続けてきました。仮に私が、その神戸文化と震災からの文化芸術の復興の実績を語って上から目線で語ったとしたら、とんでもないことでした。私たちこそ皆さんに学ばねばならないのです。

私は神戸の文化芸術に長く関わってきて、神戸が都市としての創造性を失い、すべての点において失速している要因は分っているのですが、今回の皆さんとの出会いで、一層、鮮明に理解することが出来ました。

私は「1.17」以降、復興とは元に戻ることではない、被災地こそ、時代の価値観を転換させる責務があるとして先鋭的、批判的な言辞を繰り返したため、市庁には出入り禁止状態が17年後の今も続いています。それは赤坂憲雄さんの「私自身が異人（ストレンジャー）となり、近代社会の硬直化した日常を活性化させなければならない」という言葉につながっています。今度こそ、私たちの生き方を根底から問い直し、日本の新しい針路を示し、東北から世界へと発信せねばなりません。

私が設計した小さな「装置」が、東北に着床したように、「アーツエイド東北」や「ARC＞T」の優れた「装置」が点在していろんな地域に組み込まれていくことでしょう。推進エンジンとして働き、メンテナンスを怠らねば永続的です。こうした「播かれた種」が育ち、それぞれの大地で根付き、「散水装置」によって緑の大地を蘇らせることを願っています。

公益財団法人「神戸文化支援基金」理事長
アート・エイド・神戸 事務局長
ギャラリー島田 代表
島田 誠

2011.8.19-8.21

兵庫県立ピッコロ劇団との協働 _ 仙台市大野田児童館・せんだい演劇工房 10-BOX

兵庫県立ピッコロ劇団のご一行が来訪した。今回は、みやぎ県子ども・おやこ劇場と協働して大野田児童館でワークショップを実施するとのことで、ARC ＞ T メンバーも見学に訪れた。

「あつまれ！ピッコロひろば」と名付けられたワークショップは、空間を認識するためのゲームから始まり、コミュニケーションあそび、造形あそびなどを行った。開始直後に震度 4 の地震が起き、子供たちは泣き出し、講師陣は動揺した様子だった。その後、講師の方が「揺れを体験して、いま東北にいるんだと実感した」と語った。それを聞いた ARC ＞ T メンバーは、自分たちが余震に慣れてしまっていたことに気がついた。

ワークショップ後は、児童館の職員や子ども・おやこ劇場の方々と一緒に振り返りを行い、意見交換をした。翌日は ARC ＞ T オフィスにて検討座談会「東北の子どもたちのためのワークショップについて～」を開催。録画した様子を見ながら、講師陣と ARC ＞ T メンバーが具体的なワークの内容やワークショップの意義、現場での在り方などについて話し合った。

十分な環境ではなかった状況での実施で、厳しい意見や課題も挙げられた。神戸の震災から学ぶことも多い。しかし、同じには語れないことも多々ある。「今、ここ」で有効な独自プログラムの必要性を感じる機会となった。仙台と兵庫、震災をくぐり抜けた地域同士の継続的な連携がはじまった。

キャッチボール

兵庫県立尼崎青少年創造劇場 ピッコロシアター
劇団部　演劇制作専門員　田窪哲旨（たくぼてつし）

兵庫県の劇場、そして劇団で勤務する者にとって、これまで出張といえば東京がほとんどでした。地方の時代だとかいっても、演劇の中心はやっぱり東京です。

しかし、ここ 2 、 3 年ほど、東京以外の都市への出張が増えました。岐阜県可児市、愛知県豊田市、そして千葉県館山市などなど。いずれも一緒に演劇作品を製作し、ワークショップを実施し、作品を上演した連携先の劇場がある都市でした。また鳥取県や滋賀県では、毎年のようにピッコロ劇団員が滞在して（または通って）、現地の方々と一緒に作品作りをしています。

そして 2011 年からは、宮城県にたびたびお邪魔するようになりました。

きっかけは、もちろん東日本大震災でした。

ピッコロシアター、ピッコロ劇団は兵庫県立の劇場であり、劇団です。兵庫県は、関西広域連合の一員として、東日本大震災の発生にあたって、阪神・淡路大震災の経験と教訓を生かし、いち早く被災された地域、特に宮城県の支援に取り組みました。現地の情報・ニーズを把握しながら、救援物資の提供、避難所運営、健康相談、ボランティア支援、施設の復旧、被災市町の業務支援など、切れ目のない支援を続けてきました。

そんな中で、われわれ劇場には、劇団には、演劇人には、いったい何ができるんだろう。

劇場に来場されたお客様や利用者の方々から義援金を募る、阪神・淡路大震災の際の資料や記録をお届けする、そういったことはすでに行ってはいましたが、正直、何もわからないまま、2011年6月26日、初めてせんだい演劇工房10-BOXにあるARC＞Tのオフィスを訪ねました。

そこには、仙台の、地元のアーティストとして、「今こそ動かなければ」、「何かしなければ」、「何ができるのだろう」、「何かできるのか」…いろんな思いを抱えた、若いアーティストの方々が集まっていました。

アーティストだけではありません。10-BOXの八巻工房長はじめ各地の文化施設スタッフの方々、みやぎ県子ども・おやこ劇場の方々、そのほか皆さんがそれぞれの立場から今何ができるのか、試行錯誤しながらもすでに動いて、または動こうとされていました。

阪神・淡路大震災の時、ピッコロシアターは被災地の劇場であり、誕生したばかりの被災地の公共劇団でした。震災発生の翌月から、避難所52カ所の子どもたちに届けた「ももたろう」や「大きなカブ」などの寸劇、避難所が解消された後の県内12の体育館などで上演した「学校ウサギをつかまえろ」。劇団旗揚げの翌年に経験したこれらの活動は、確実にその後の劇団活動、作品創作の血肉となりました。また、公共劇団として、地域に存在していくひとつの意義を見いだす契機となりました。

ならば、この震災にあたって、関西にいるわれわれが作品や体験事業を直接被災された地域に届けるのではなく、現地に根付いたアーティストがこれから彼らの地域で行っていくそういった活動に寄り添っていく、少しでも力になっていくことはできないのだろうか。

2011年9月からいよいよARC＞Tが中心となって、被災された地域の約90施設にアーティストを派遣し、子どもたちに芸術体験を届ける事業に取り組むという直前の時期、8月にピッコロ劇団は仙台市に伺いました。

みやぎ県子ども・おやこ劇場の方々の協力をいただき、ピッコロ劇団員が太白区大野田児童館で演劇体験ワークショップ「あつまれ！ピッコロひろば」を実施。この内容をもとに、3日間にわたり、ARC＞Tのアーティストの方々と、被災地で行う演劇によるアウトリーチ活動について、それぞれの経験や情報、ノウハウを交換し、学びあうための場「東北の子どもたちのためのワークショップについて考えよう～」をもちました。

また翌9月には、逆に仙台からSENDAI座☆プロジェクトに兵庫へ来ていただき、「十二人の怒れる男」をピッコロシアターで上演していただきました。この時には、大阪の小劇場・ウイングフィールドはじめ、関西の民間、公立の劇場が集まった、「むりやり堺筋線演劇祭」と連携し、新聞等マスコミも巻き込んで、東北発の芝居を皆で見ることで東北の演劇を応援しよう！という気運が盛り上がりました。

SENDAI座☆プロジェクトには、2012年も「ハイライフ」でピッコロシアターへ来ていただくことになっています。(もちろん「十二人～」が上質で感動的な舞台だったから、次もぜひ！となったのです)

そしてもうひとつ、今度は兵庫から役者と演出家が仙台に滞在させていただいて、仙台の俳優と作品を創作することになりました。2012年8月に10-BOXで稽古、9月にピッコロシアターと10-BOXで上演させていただく「扉を開けて、ミスター・グリーン」という二人芝居です。SENDAI座☆プロジェクトのピッコロシアター来演に大いに刺激を受けて、ピッコロ劇団の眞山直則（まやまなおのり）（仙台市出身）が演出、仙台を中心にご活躍の戸石みつるさんと、ピッコロ劇団の吉村祐樹（よしむらゆうき）が出演します。スタッフも、仙台・関西混成でいきます。ARC＞Tさん、10-BOXさん、SENDAI座☆プロジェクトさんの協力を得ながら、関西と仙台でどんな化学反応が起こるのか、とても楽しみで、ワクワクしています。

ともに震災を経験した地域に根付いて活動するアーティストとして、これからも、ARC＞Tさんとこのようなキャッチボールを続けていければと思います。東京という中継点をかまさない、少しばかり距離の開いたキャッチボールですが、お互いこれから肩を鍛えつつ、無理のないペースで、末永いお付き合いをお願いできればと考えています。それぞれの地元で、演劇を続ける意味を考えながら。

どうぞよろしくお願いします。　（2012年4月）

実施概要

「あつまれ！ピッコロひろば」

実施日：2011年8月19日／会場：仙台市大野田児童館軽体育館（仙台市太白区大野田）／内容：小学校1～3年生30名程度を対象としたピッコロ劇団のアウトリーチプログラムの実施と振り返り検討会／講師：亀井妙子、森万紀、山田裕、本田千恵子（以上、兵庫県立ピッコロ劇団）／協働：宮城県子ども・おやこ劇場、せんだい演劇工房10-BOX、ARC＞T

「東北の子どもたちのためのワークショップについて考えよう」

実施日：2011年8月20日、21日／会場：ARC＞Tオープンオフィス／内容：前日のアウトリーチプログラム実施を検証し、地域の子どもたちのために、地域の演劇人たちが、より適したプログラムを継続的に届けていくことを目指した意見交換会

2011.8.24 ～

次代を担う子どもの文化芸術体験事業 - 派遣事業 -〈東日本大震災復興支援対応〉

文化庁から震災対応の事業が始まる。通常は学校が申請し学校にアーティストが派遣される。震災対応版だった本事業は、各地方自治体に実行委員会を置き、官民協働で実施することが求められた。地元のアーティストたちも実行委員会に参画し、事業を実施することになる。ARC>T 事務局は、実行委員会の実務基盤を担当。柔軟で即応性の良いコーディネイト業務を行う。地方のアーティストが単発で教育の現場に入ることは通常難しく、震災前はある一定の専門性を要した。しかし、この事業で地元のアーティストが地元の子どもたちと触れ合う機会が創出された。子どもたちだけでなく、施設の職員のみなさんや、アーティストたち自身が、気づきを得た活動であった。

8月25日　大阪ウイングフィールド「仙台の演劇人を支援する関西公演」の呼びかけに尼崎ピッコロシアターと伊丹アイホールが賛同
10-BOX 別館「能・BOX」開館
長野から青野智子氏来訪

8月24日　白鳥ホールが事実上閉鎖（仙台・春日町）

8月23日　出前部自主研修（ダンス）

8月22日　第16回定例会（以降、会場は 10-BOX box-2）
東京から座・高円寺創造アカデミーご一行ほか来訪

8月21日　「東北の子どもたちのためのワークショップについて考えよう2」（10-BOX）
「10-BOX 夏の学校」開催（～23日）

8月20日　「東北の子どもたちのためのワークショップについて考えよう1」（仙台・大野田児童館）
東京から磯島未来氏来訪

8月19日　日本演出者協会「フェニックス・プロジェクト」vol3　石川裕人が参加（東京・～21日）
ピッコロ劇団「あつまれ！ピッコロひろば」ワークショップ（仙台・大野田児童館）

8月18日　兵庫県立ピッコロ劇団ご一行来訪（～21日）

あのときあれから

文化庁「震災復興のための芸術家派遣事業」で若林児童館に来ていただきました（仙台シアターラボ「ものの気持ちワークショップ」）。子どもたちは大喜びで、先生たちも「子どもたちの新たな一面が見られた」と好評でした。適切なルールと表現の自由を保証してあげるだけで、子どもたちがこんなにも輝きだすことを、正直、私は知りませんでした。職員や子どもの評判から、当日不在だった館長は年末の「来て、見て、あるくと」の体験プログラムを追っかけて行ったようです（笑）。

実施直後には「ぜひ、またすぐにでもやりたい！」と思っていたのですが、そのうちにふと考えてしまいました。子どもたちに対してアーティストが関わるということに何を期待するのでしょうか。少なくとも自分は子どもが将来俳優やダンサーになることが目的ではない。もちろんそういう子がいてもいいですが、それを目指さない子の方が絶対数としては多いでしょう。

私が期待するのは、活き活きとしている大人、熱量のある大人と子どもたちがいっぱい出会ってほしい、ということです。「自分らしく表現すること」を生き方の根幹に選んだ大人と出会うことで、職業の選択の他に「生き方の選択」として「ああいう生き方もあるんだ」「あれもOKね」と感じてほしいと思います。

アーティストと出会ったことは、子どもたちの記憶の表面からは消えてゆくかもしれません。でも、きっと沈殿していって、その子が重ねてきた層の中に必ず残ります。いつか自分を掘っていく作業をしなければいけないときに、「あ、こんなことがあった」「こんな人と会った」と思い出すことがある。もしかすると、それが生きることの支えになるかもしれませんよね。表現をすることで「生きていると楽しいことあるかもなあ」って。

そのような意味から、児童館ごとに担当アーティストがいて、その児童館の芸術監督みたいになると楽しいんじゃないかな、とも思っています。

こりれいず代表　須藤達也（すとうたつや）

9月1日　イズミティ21がホール部分を除いて再開
いわきアリオスが部分再開
英国からジェレミー・ハント氏来訪

8月31日　宮城県南三陸町、東松島市、岩手県内の避難所が閉鎖

8月30日　「平成23年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震に伴う原子力発電所の事故により放出された放射性物質による環境の汚染への対処に関する特別措置法」成立

8月27日　出前部自主研修（演劇）

8月26日　農林水産省が農業・農村の復興マスタープラン策定・公表
宮城県震災復興計画（案）決定
除染に関する緊急実施基本方針決定

1　東松島市立図書館「復興祭り」で子育て支援センターほっとふるからの要望で子ども向けの読み聞かせや手遊びを出前。（2011 年 7 月 23 日）
2　envisi「南三陸の海に思いを届けよう」Ustream 中継の手伝い。（避難先の東鳴子温泉旅館 /2011 年 7 月 11 日）
3　せんだい演劇工房 10-BOX・月と太陽のひろば（box-2）に ARC ＞ T のオープンオフィスをかまえる（2011 年 7 月 13 日）
4　出前部自主研修会（仙台市民活動サポートセンター /2011 年 7 月 19 日）
5　6 月末日で避難所機能を解除した福室市民センターの須藤さんを招きお話しを聞く会（2011 年 7 月 28 日）

「正解はないし、まちがいもないんだよ！」

最初のこの一言に、子どもたちは一瞬で表情がやわらぎ、次々出される“お題”に、迷わず自分の体いっぱい使って表現していました。

仙台シアターラボによる演劇の手法を使った「えんげきであそぼう〜もののきもちワークショップ〜」は、いつも「正解」を求められている子どもたちにとって、自分の思いや考えを自由に表現できる“開放のワークショップ”でした。

日々、頭を悩ませて行事を組んでいる私たち児童館職員が嫉妬するほど、子どもたちは２時間たっぷり動いて、口々に「楽しかった!!」を連発。ファシリテーター野々下孝さんの（実は）とても計算されたプログラムと進行のマジック。さらに俳優である原西忠佑さんと真田嶺さんの絶妙な動きに、子どもたちはもちろん、側で見ていた大人たちもすっかり魅了されました。

八木山児童館は、個人的なご縁もあり、仙台シアターラボをはじめ、タイ舞踊の土屋悠太郎さん、ももいろゴリラの不思議なダンス、長保めいみさんのすてきなお話しの世界、小濱昭博さんたちの「想像力で遊ぶ」とたくさん ARC ＞ T の方々に来ていただき、昨年はとてもぜいたくな楽しい一年でした。

元八木山児童館・現川平マイスクール児童館職員
太宰明子

5　次代を担う子どもの文化芸術体験事業の準備。市内の学校、幼稚園、保育所、児童館など施設へアートプログラムをまとめたパンフレット芸術飛行船を発送（2011 年 8 月 9 日）

6　千葉からＮＰＯ法人まちアート夢虫が来仙。東松島の老人福祉施設花いちもんめへ出前（2011 年 8 月 10 日）

7　次代を担う子どもの文化芸術体験事業・迫町公民会館「渋谷裕子ソロ公演」（2011 年 8 月 31 日）

8　TOHOKU KIDS SOLIDARITY PROJECT との協働で石巻市鹿妻地区の児童館と石巻市中央の児童館へおもちゃを届ける（2011 年 8 月 31 日）

あの震災後、個々人の生活すらも厳しい状況にある中、いち早く活動を開始した ARC ＞ T。10-BOX を拠点として、当事業団とも力を合わせ、常に前向きに、制度上の制約にも粘り強く弾力的に対応し、文化芸術の力を通して幅広く市民の方々の心の復旧にご貢献いただいたことに、心からの敬意と感謝を申し上げます。

震災から一年あまりが過ぎ、仙台市中心部では生活基盤の復旧復興が進みましたが、沿岸地域を中心に、依然としてかつての生活に戻ることのできない方々が、また生活再建がかなっても、あるいは被害そのものは軽度でも、心の傷は未だ多くの人に残されているものと認識しております。

当財団では、今なお困難に直面しておられる方々にどのように寄り添っていけるのか、お役にたてるか、手探りしながら事業を進めているところです。今後も引き続き共に力を合わせ、息の長い活動ができれば幸いです。

公益財団法人仙台市市民文化事業団
理事長　五十嵐悦朗

石巻市南浜町（2011 年 8 月 31 日　撮影・鈴木拓）

劇作家たち「喪失、そして再生」

―震災直後、「もう書けない」と言う方が多かったのですが、当時の気持ちはどのようなものでしたか。

生田　それどころじゃなかったですよね、ほんとに。「芝居したい」なんて口に出しちゃいけないような気がしたし、芝居したいとも思えなかった。ましてやそれを書こうなんてことは思いつきもしなかった、という感じです。外側から「こんな大変なことがあったんだから書け」「東北に劇作家はいないのか」という発言があったと聞いたときには、「ちょっと待ってよ」って思いました。とにかく「書けないんだ」と劇団員に言ったら「書かないでいいよ」って言われました。ちょうどその時「こどもひろば」(*1) の話が来て、迷ってたんですけど、周りの人の話を聞いて、なんかもう「行かなきゃいけない！」と思って、劇団員に言ったら「作家の目ですべてを見て受け入れてこい」と言ってもらいました。書くとか書かないということはその後の話で、「私はこういうことが起きたときに、それとどう向き合うか」ということが最初だったかなと思います。

生田恵（いくた・めぐみ）
三角フラスコ・劇作家・演出

丹野　私もしばらくは作品を書くとかいう発想がどこにもなくて、東京の雑誌の「悲劇喜劇」の原稿を依頼されたんですけど、最初「無理です」とお断りしたんですよ。私自身が津波をかぶったわけでもなかったし、家族も無事だったし、劇団員もどうにかこうにか命は助かっているんですけど、そういうこととは別に、なんだか考えていることが一つもまとまらなくなった。何をしたらいいのかわからなくなって、普通の生活もまともにできなくなったんですね。だから一度お断りしたんだけど、「被災地の方から書いてほしい」って何度もおっしゃっていただいて、締め切りの日にパソコンに向かっても手がふるえてしまうような状態で。出来事を書いただけの原稿になってしまったので「それでもいいでしょうか」って出すしかなかった、という情けない話があって…語れなくなったんですね全然。
ARC＞Tの前身の「舞台人会議」の時、「とにかくみんなに会いに行かなきゃダメだ」って思って、なんとか行ったんですよ。でも話しているうちにどういうわけだか震えてくるし、涙が出てくるし、変に腹が立ったりしてなんだかわけがわかんなくなったので、退散して来たような感じです。あの時点で何をやっていたかと言えば、食料や水を運んだり、炊き出しをやったり、5月に田植えをするための苗の準備をしたり…そういうところからもう一回やり直さないとだめな感じで、そんなことばかりしていた1年ですね。

丹野久美子（たんの・くみこ）
劇団 I.Q150 主宰・劇作家・演出・俳優

(*1) こどもひろば：公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンが各地の避難所に展開する遊びの場。被災した子どもたちが被災後の環境に適応できるよう、また、子どもたちが安心安全を感じられるようにすることを目的とする。2011 年 3 月 16 日、仙台市若林区の小学校にて最初の開設。

震災後、あの光景を目の当たりにして文字通り「言葉をうしなった」人は多い。また、被災者への遠慮から全国各地でイベントが自粛された。事実､仙台の舞台関係者からも「いま芝居をやるなんて不謹慎だ」という声があった。仙台では、劇作家の多くが絶望とともに黙していたが、時を経てそれぞれ創作を再開した。いったんは言葉を喪った彼らが、やがて再び言葉を取り戻すまでについて、劇作家 4 人に話を聞いた。

生田 恵（劇作家、演出家、劇団三角フラスコ代表）
石川裕人（劇作家、演出家、脚本家、ThetreGroup“OCT/PASS”主宰）
白鳥英一（俳優、ナレーター、演出家、OtoOpresents 代表。劇作家名は芦口十三）
丹野久美子（劇作家、演出家、俳優、劇団 IQ.150 主宰）

聞き手　伊藤み弥（ARC ＞ T 事務局）

白鳥　ぼくは「書けない」とは実は思わなかった。翌日から、あった出来事とか感じたことをメモに残し始めていて、そういう意味で書くことはずっとしていたんです。
どうも僕が書くということは自分の心を救うことみたいで、それと、見るもの聞くものがすごい角度や温度や勢いで自分の中にひゅんひゅん入ってくるから、書かずにはいられない。で、いっぱい時間があったんだよね、仕事が飛んじゃって、水汲みに並んだり、食べものを買いに並んだり、とにかく待っている以外何もすることがなかったので、書くということで自分を慰めていたような気がするんです。普段だったら言えないようなことを取りあえず書いておく、紙やパソコンに叫んでおく。あとは「こどもひろば」で東松島に行ったときに子どもたちとしゃべったこととか。それが後々小さな作品やアイディアの基になっている。みなさんが「書けない」と言うので「俺って傷ついてないのかな」とも思ったけど、自分にとって発散をすることが書くということの始まりで、それで自分自身が救われるので、それならそれでしょうがないかな、という感じです。

白鳥英一（しらとり・えいいち）
OtoOpresents 代表・劇作家・演出・俳優・ナレーター

生田　そのメモは最初から「自分がどう思ったか」も書いてあるんですか？

白鳥　台詞になってたりするよ。　（一同：えーっ！）
日常のやりとりがコント的な小さな台詞とか、ひとり台詞とかになっていて、そのまま使えるわけではないけれど、とりあえずそういうメモはいっぱいある。ただ、書いてはいるけど、考えて書いていたのではないから、のちのちその中から「これはだめだ」「これは出せない」ってなったし、逆にだんだん書けなくなっていくんですけど。

―芝居をやるという意味での創作については、やれる気はしてましたか？

白鳥　全然なかった。市内の劇場もダメになってたし、いま芝居をやれる状況ではないと思っていた。でも、芝居やれないと思うと、やりたくなるね逆に。

石川　この１年経つのが速かったと言う人もいるけど、俺の場合はものすごく遅延しているのね。最初はまったく書けそうもないと思ったし、電気が戻ってからはほとんど一日中テレビの前に居て、鬱病のようになってただ見ているだけという状態が続いて、書くとか書かないとかいう状態じゃなかったね。俺は震災前からずっと日記を手書きで書いていて、今日は何があったという出来事をただ記録していた。やっぱり４月下旬までは「あ､この先俺書けなくなるかもしれないな」と思った。丹野さんも言っていたけど､まとまったことを話せない。今から思い返すと、それは「震災前の演劇的な言葉がすべて解体してしまっている」ということなんだね。

石川裕人（いしかわ・ゆうじん）
Theatre Group"OCT/PASS" 主宰・劇作家・演出・シナリオライター

石川　8月頃になってAZ 9 (*2) に書いたのが震災後初めての新作だったんだけど、そのとき「あ、前の俺が書いたのとは肌合いがちがう」ってはっきりわかった。そのとき書くことは本当に手探りで、何か遠いものをなんとか引きずりおろして近づけようとするあがきが見える。だから上手く書けているとは思えない。今書いている作品でも、震災に対する考え方がまた違ってきているし、それは時間が経過しているから当たり前なんだけれども、そこをどうやって接着するかものすごく苦しんでいてさ…なんだろう、全部壊滅してしまったんだね、演劇的なことが。とりあえず今までやってきたことが。すべてが分断されてしまって、そこからまた芝居を始めるということは、何かの決意を持って始めなければだめだなと思っている。

―いわゆる「自粛」の気持ちはありましたか。

丹野　自粛とかは全く考えなかったですね。私自身は芝居が書けないとは思ったけど、早く世の中の人がわっと元気になれるようなこと、まちに元々あるささやかなお祭りとか、お酒飲んだり食べたり語らったりというようなことはまずやらないとだめだと思ってたから。

石川　自粛って東京の方からよく聞こえてきたけどね。仙台とか東北ではなかったんじゃないかな。個人的には、特に東電の原発事故があってからは逆に「自粛なんてするか」と思った。舞台の照明でいっぱい電気使ってやろうと思って（笑）。

丹野　それってかわいいね（笑）

―その後、「書けるかもしれない」「書こう」と思ったきっかけは何ですか。

生田　たまたま震災前から決まっていた予定があって、それが全部うちの単独公演ではなかった。大阪の「インディペンデントシアター」のひとり芝居フェスティバル全国ツアーに地域製作枠で参加するとか。うちだけの公演だったらキャンセルしたと思うんですよ。でも予定があったので、それに合わせて創っていきました。それでも、順序があって…4月初めのARC>T会議の時に澤野くん (*3) から「C.T.T. に出てほしい」(*4) と声を掛けられて、「えっ、いま？！」と思ったんですけど、どうも俳優たちはみんなやりたかったみたいで、劇団のミーティングで話しているうちに「今やりたいって思ってるんだな」とわかって、「じゃあ稽古できるところ探そうか」ってなりました。私は本当に一行も一言も書けなかったので…初めてですね、全くテキストも台本もなしでつくったのは。稽古してる様子を見ていて「これはどう？」「こうしてみて」と提案をしていったものをつなげて構成してC.T.T. で上演しました。それが4月30日と5月1日でした。だから、書いてはいないけど、現場には早いタイミングで復帰しているんです。それが少し自信にはつながったと思います。そのとき他の地域からいらしてた人たちと、普段ならしゃべって交流するのに、全くしゃべれなくて楽屋の隅でじっとしていたり（笑）。相手の作品を観ることができて、うちの作品も見てもらうことができて、そこからですね、一気にわーっと話し出した。それが大きかった。その後、ひとり芝居の公演が夏に決まっていたので、ようやく今度は書き始めるんですけど、「脚本ってどうやって書いていたんだっけ？」って思い出せない（笑）

丹野　それ、よくわかるよ。

生田　稽古場で適当にお題を出して、俳優が動くのを見て、なんとなく言葉がつられてぽろぽろと出てくる。俳優の動きによって台詞を引き出してもらったという感じです。新しい書き方でしたね。台詞というものでもなかったかもしれないし、戯曲というところまでいけてたかもわからない、詩のような感じのものでした。そうしていたら、会話が書きたくなったんですよ、「台詞を書きたい」って思えた。10月の大阪公演を一緒にやることになっていた土橋淳志くん（*5）が4月頃

(*2) AZ9：AZ9(アズナイン) ジュニア・アクターズのこと。仙南地域広域行政事務組合教育委員会の主催事業の一つ。仙南地域2市7町在住の小学4年生から6年生で構成される児童劇団で、93年創立。渡部ギュウや石川裕人が講師を務める。

(*3) 澤野正樹：俳優。仙台シアターラボ所属、短距離男道ミサイル総合演出、若伊達プロジェクト事務局長。仙台の若手俳優の一人。当時、C.T.T.sendai の事務局を担当していた。

(*4) C.T.T.：Contemporary Theater Training「現代演劇の訓練」のため試演と検証をするための会。95年京都で設立、仙台事務局は2010年4月発足。2011年4月30日と5月1日、仙台特別支演会がToru's Factoryにて開催された。伊藤文恵、三角フラスコ、高橋裕子舞踊団、短距離男道ミサイル(以上仙台)、演劇企画くすのき(東京)、ニシムラタツヤ・寂光根隅的父(愛知・岐阜)らが参加。

様子を見に仙台に来てくれて、「やりましょう」って言ってくれていたので、あとはそれだけを頼りに書き始めたという感じです。

石川　うちの劇団では震災後３週間ぐらいに厄払い宴会をやったのね。俺が元気ないんで（笑）で、やっぱり若い劇団員たちは芝居やりたいんだね。俺なんか「そんな場合じゃない、芝居やるよりどっかで泥かきでもしてこい」って思ってたんだけど、そうじゃなくて「芝居やりたい」って言うんだね。「へえ、そうなのか」って思いながらも「でも今年はやれないなあ」って悲観的なムードでいたんだけど、「夢とらっく劇場」（*6）で実際被災地に入っていろんなものを見て、いろんな人と話してきたら、「芝居でやるべきことはある」って思った。そのときも書けるとは思ってなかったけど、「書こう」と思うきっかけにはなったのね。それまで俺は取材なんかしない人で、全く想像だけで書くというやり方だった。でも、今回被災地に行ってみることで自分の目で確かめてきたことは大きいと思っている。そういう意味でも昔の書き方とはちがってきている。現場へ行くことは大事だと認識を改めた。そして、劇団員や仲間がいて良かったなと思った。

丹野　しばらくは炊き出しとかしていて、でも「何かしなきゃ」と思いながら、今までやっていたものの価値も何もわからなくなって、私は好き勝手にそれこそ垂れ流しのように書いていた気がして、もうどうでもよくなっちゃったというか、今までやっていたことすらわかんなくなっちゃった。ぱかーんと崩壊してから動き出したのは、毎年やっている塩竈の市民ミュージカル（*7）の人たちの安否確認でした。津波だと聞いたときに塩竈が全部流されたみたいに勝手に思い込んじゃって腰が抜けたんですけど、とにかく一人一人の安否確認に行ったんです、避難所回ったりして。さいわい亡くなった人はいなくて、でも被害の大きいところもあって。で、ちっちゃい子が言うのよ「先生、もうミュージカルやれないのかな」って。私、ぎょっとしたの。だって家を流された人もいますからね、舞台なんていう空気じゃなかった。でも「そんなことないよ」って言ってしまったの、つい。「また夏になったら行ってもいいの？」って言うから「うん、大丈夫だよ」って言っちゃったのよ根拠もないのに！（一同：笑）で、「子どもとの約束は絶対破れない」と思って悩み始めた。いつもだと最初からばーっと書きなぐるようにいけるんですけど、そのときは一行一句に止まって、また

（*5）土橋淳志：劇作家、演出家、A 級 MissingLink 主宰、大阪現代舞台芸術協会 DIVE 理事。2011 年 4 月 23 日、関西の演劇関係者とともに ARC ＞ T を訪れた。

（*6）夢とらっく劇場：セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン主催企画。4 トントラックの荷台を舞台にして ARC ＞ T メンバーが『セロ弾きのゴーシュ』を上演。2011 年 4 月末から 5 月初めにかけ、岩手・宮城の沿岸被災地 6 箇所を巡回。

（*7）塩竈市民ミュージカル：05 年以来継続する塩竈市の主催事業「塩竈夢ミュージカル」のこと。07 年から丹野久美子が作・演出を担当。2011 年 2 月 12 日–13 日「ゴメンナサイが言える時 2011」公演。8 月 5 日には夢ミュージカル出演者による歌と踊りとお喋りでつづる「夏のコンサート」を開催。

だめで、の繰り返し。どうしようもなくて子どもたちと喋ったことや聞いたことからつくっていきました。だから、その子たちが元気になればいいという願いだけで書きました。話を聞いたらやっぱり大変だったんですよ。それで、震災後、夜眠れないとか怖い夢を見るとか言ってたから、しゃべった方がいいと思ったんですよ。「それなら一緒に歌うたったりしながらお話ししようか」って言ったら、最初は「お話しできるかなあ…」って言ってた子が「もっとしゃべりたい」って言い出したの。「先生に言わなかったこと、もっとあるんだよ」って。舞台のことはさておき、しゃべったほうが眠れるようになるんじゃないかと思ったの。「みんなの前でお話しする方が元気になれそうな気がするから」って 67 歳のいつこちゃんも言うから「それじゃあそうしようね」って感じだった。それを戯曲だとか台本だとか言えるかはわからないけど、そういうふうにして 1 本やりました。それから 1 年、舞台のことは何もしてないですね。

白鳥　ぼくの場合、うちのメンバーとスケジュールが合わないとか、世の中が芝居どころじゃないということもあって、自由にならないから書こうという気持ちに行くんだね。で、むりくりにでも公演をやろうと思って、とにかく書いてしまおうと思ったんです。こどもひろばで行った東松島で会った子どもたちのことを。4 月になって学校が再開するから避難所が解散になって「明日、さよならだから」「え、そうなの？！」っていうことを、ひとり芝居で書いちゃおうと思って。なんでひとり芝居かと言うと、メンバーとスケジュールが合わなかったのでしかたない。だって芝居どころじゃないんだもん、生きていくためには。だからまず、一人芝居書いて、二人芝居書いて、みんなの書いて…と自分の中では明快な流れを持って書いているんです。

―実際にやってみてどうでしたか。

生田　もともと 10 月大阪公演のあと 11 月に仙台でやりたかったんですけど、いろんな都合で延期しました。大阪で実際やってみると 10 月はまだ生々しすぎて、公演をするのにリアルになり過ぎちゃう、その台詞を吐くことも、その感じを感じることも。だから、仙台公演はすこし時間が空いて結果的に良かったと思います。大阪でやってきて、自分たちがやったことを確認できたこと、生々しい状態のものでもとにかく吐き出してきたということ、それを大阪のお客さんに感じてもらえたことは良かったなあと思いました。距離のあるところとは言え、阪神淡路大震災の記憶を蘇らせてしまったみたいで、面識のないお客さんからも「うちは尼崎で大変だったんだよ」って話しかけられたり、今まで何回か大阪行っていて一度も聞いたことなかった阪神淡路の話をいろんな人からしてもらったり、「連帯感」じゃないですけど、妙な空気感が生まれました。「知りたい」「共感したい」と思って見てくれる人たちが居るところでやってきたことで、ものすごく救われた部分があったので、良かったと思いました。
2012 年 5 月に仙台公演をやるんですけど、もっと芝居として昇華したい、実際の出来事に非常に近いことではあるけれど、それをちゃんと芝居の世界として出したい。それをやれることによって自分の演劇がすこし変わってくるんじゃないかなと思っています。具体的にどうとは言えないけど、予感みたいなものとして。

白鳥　ぼくは「ああ公演できた、よかった」と思った。仙台、東京、岡山といくつも再演して確かめながらやっていったんです。東京に行ったときにトークが一つの重要な演目で、「誰が当事者なのか」という話になった。自分は津波の被害はないけれど、でも仕事はなくなって右往左往している。で、被災者に対して何もできない無力感を感じていて、東京の人もそれを感じているだろうと思っていて、東京のテレビクルーが被災地に入ってバッシングされたというネタもあったけど、演目からはずしたりしました。地震とか津波のことをダイレクトにできなくて、「それは皆さんも同じだと思ったからです」と話したら「それが良かったと思います」という意見をもらいました。直接被災してなくても、見えてないところで被災しているということはあるから。東京であの映像を見せられながら何もできないでいるのもけっこうな被災だと思うので、それを煽ることはできないと思いました。岡山の人たちは「うちは大丈夫ですんで」というスタンスで、それは阪神淡路大震災のときの自分がそうだったと思い出したの。想像できるかと言えばやっぱり想像できないんだなあ、と。岡山のトークで「うちは地盤が固いし雨も少ないから首都移転したらいい」って話になったとき、席を立って帰った方がいたんです。その方は石巻から岡山に避難してきた方だったんですよ。傷んでいる友だちや知り合いがいる、亡くなった方がいるっていうことの想像まで到らない、到れないんだと思いましたし、それを責めることではないと思いました。

―これから、みなさんの創作はどうなるでしょう。

生田　震災後のことで震災の影響を受けていないことなんて一つもないと思っているので、それは確実に影響するだろうし、ただ、そこにだって新しい物語は生まれるだろうと思います。今回震災のことを書きましたけど、それは目の前に震災のことしかなかったし、世の中もそうだったし、避けて通ることができなかったから。震災後、何もかも変わりましたけど、でも、人が生活することそのものは変わらないわけで、そこにまた新しい物語があるんだとしたら、それを書くことにはなるだろうと思います。だけど震災とは絶対に無関係ではないし、震災の続きだから…ちょっとなんて言ったらいいのかわからないけれど、そのときどきで書かなければいけないことはあるんじゃないのかな。仙台にいるからなおさら節目節目で向きあわなければならないことが出てくるだろうし。東京とか大阪とか遠くの人が書く震災の話はありました。かなりの人たちが「自分が書いていいのか」と葛藤しながらも書いてるんですね。ですけど、それってやっぱり５年後10年後ってなったときには、遠くの人には難しいことなんじゃないかと思うんですよ。そういうことできるのは地元にいる自分たちなんじゃないかと思うし、そこにはまたその 10 年分の人の生活があるわけで、そういうことも見続けていきたいなと思います。

石川　逆に、阪神淡路大震災のことを17年経って今われわれが書けるわけはないよね。最近思ったのは、やっぱり震災の中核のところで経験している東北の、特に沿岸部の人たちの気持ちと東京圏・関西圏の人とははっきりちがう。たしかに東京も揺れは大きかったし、経験はしている。でも、あの津波の現場や壊滅した風景までは見ていない。われわれは見ている。ここからたった 10 キロしか離れていない海岸沿いの荒涼とした風景をまざまざと見ている。その感覚の落差がかなりあって、このあいだも東京の演出家と話をしているうちに、やっぱり関東圏の表現者と俺らはちがうんだって思った。そして、書き方とか演出とか俳優とか作品とか、全然ちがうものができてくるんだろうと思った。だから、東北の芝居人たちがどうなっていくのか、それを見続けていきたいと思うね。

丹野　ちょうど震災から１年経った今年の３月に、東京の劇団の作品で震災をテーマにした作品に客演したんですが、なぜかはわからないけれど、東京の演出家が考えてくることに拒絶反応が全身に出たんですよ。ただ、私は役者として出演することになっていたから、最終的には提案はしても、演出家の言うことを「わかりました」とやるのは当然だと思ってましたけど、私は生理的な人間なので（笑）あちこちに支障が出てくる。

それぐらいの「違和感」なんだよね、「あ、ちがうんだ」っていう…演劇なんてそれぞれ全然違う人たちがいて、それが面白いんだとは思うけど、こと震災に関しては、わからないで引き受けちゃいけないなって思ったんですよね。私、友だちが兵庫にいて、阪神淡路の話を聞いたときにピンと来なかったんですよ。で、相手が「東北の人と話すと全然わかってないから電話していてイライラする」って言われたんですよ。「心配してくれてるのはありがたいんだけど、なんか腹が立つ」って言ってたことを今思い出すよね。いろんなひとに「大変だったね」って言われたときもうまく答えられもしないし、あのことをどう言ったらわからない…自分が話そうと思うことが「これはうそじゃないか」「そういうことじゃないんだけどな」とか思ってしまう。土とか植物とか自然のものは信じられるんだけど、それ以外のものが信じられなくなった部分があって、みんな作り物と言うか、価値観も変わったし…

石川　芝居も虚構だから「自分はできない」って思ったの？

丹野　怖いの。本当は台本を書かなきゃいけない状態がずっと続いているんですけど、今まで 30 年間やっていたことが、いったい何なんだろうって疑ってしまう。去年あたりは人と話していても苦手意識が過剰になってしまって、人付き合いがつらくなって「そんな私が演劇なんて書けるのかしら」なんて思うのね。

石川　最初に俺が「壊滅してしまった」というのはまさにそれで、俺も「書けなくなるかもしれない」と思った。今は書いているけど、「こんな嘘ごとを書いていいのか」という感じは今でもある。それをなんとか力技でねじ伏せて書いていると言うか、「こんなことが続くのか」と危機感を持ちながらやっている。

丹野　信じていたもの、信じられるもの、この先信じてゆけそうなものが変わっちゃったんですよ。根元からほっくり返されたというか。昔、うちの劇団員が亡くなったときも同じように動けなくなったけど、そのときは百か日の供養に芝居をやろうって立ち上がれたのに、今回はどうしてできないんだって自分を責めてしまう。自分らのストレスの捌け口みたいに演劇やってるつもりはなかったし、お客さんと出逢うことが楽しくてやってたように思うんだけど、何か書こうとすると「あなたの書きそうなことはくだらないことでしかないんじゃないの？」とか思ってしまって、とたんに、考えがぱらぱらぱらっと崩れていく…ちょっと自虐的になってるんですかね。劇団員が「舞台やりたい」と言ってるから、舞台に立たせてやりたいと思うわけですよ。でも「何も出てこないよ、ごめんね〜」なんて泣いたりして（笑）あれから私の中から何か生まれるのかということに関して言えば、「もうダメかもしれない」とそんなこと思ったりするんです。

白鳥　ぼくは、短い作品ながらも上演してきて、逆に今書けなくなっている。自分の書くことが「これでいいのか」という思いが強くなっちゃって。本質を書きたいと思っているのに、その周辺をただ歩っているだけのような感覚になって、戯れ言を書いている気がしてきた。ハコ書きとかストーリーまでは組めるんだけど、そこからが書けない。今ぼちぼち書き始めているものは「上演できないんじゃないか」と思いながら書いているのね。内容がとてもパーソナルな感じもあるし、他愛なさ過ぎて、世の中に対してあってもなくてもいいんじゃないかと思ってしまう。それでも自分では書く必要があるから書いているんだけど。だから、周辺からちょっと入り込みたくて…美談の中にも欲があるというか、人間には良い面も悪い面もある。その中心に行けなくなって、良い物語とかやさしい台詞しか言えなくなったらいやだなと思う。「人間はすばらしいね」ばっかりじゃいやだな。書きづらいと思うことでも入り込んでいきたいと思ってる。でも、「感情を逆なでするかな」とか「嫌われたくもないしなあ」と思ったりして。そういう意味で上演には到らないのではないかと思っています。

―上演するからにはお客さんへの配慮をする、と。

白鳥　うん。わかってほしいという気持ちもあるし、もちろん傷つけたくないし、良かったと言ってもらえたらそれは嬉しいし。書くとか演（や）るとか、最終的に表に出す段階でとても慎重になっちゃうかな、と思う。今までも考えてたと思うけど、足らなかったなあ。

丹野　自分も観客の立場なら、津波とかの話は見たくないという気持ちは当たり前にあるけど、ただ、少し離れてちがうことを少しずつ考えていきたいという人もいると思うし、ブラックな内容のものをお客さんが選ぶかもしれないですよね。それだって仙台市内の人と沿岸

部の人でもまたちがうと思いますよね。それぞれいていいと思うし、やさしいだけの物語とか良い話だけをやる必要はないと思う。自分が思ったことをやればいい。塩竈での１本をやって子どもたちとの約束を果たしたときに、あの子たちが「明日からちょっと元気になれるよ」って言ったから「ああよかったな」って思って、周りの批評なんて気にならなかった。自分でも「ひとつやれたかな、ありがとう」という感じでした。これからの創作については、石川さんに「業」だと言ってもらったからがんばるとして、一度更地になったから、劇団員とももう一回始めからみたいな感じでつきあって、何かできたらいいなと思いますね。ありがたいよ、待っててくれるんだから。すごいプレッシャーだよね（笑）

石川　俺が今書いているものは、震災で露わになったいろんな問題点―それは人間の本質であったり、東北の今まで置かれてきた歴史的な状況であったり―を「さらす」芝居。だから見たくないと思う人も出てくるようなものだと思う。それをしないと自分が前に進めないということがあるので、白鳥くんはまだ先があるからだけど、俺はもう「別にいいんだ嫌われたって」と思って芝居をやっていこうと（笑）

白鳥　俺、腹のくくり方が甘いなあ（笑）

石川　芝居って、昔からそうだけど、人間のいやなところ、目をつぶっていたいところにつっこんで行かなければいけないというところがある。俺はもう「背景に瓦礫を背負って芝居をやっていくんだ」と思っている。実際の瓦礫がいずれ消えたとしても、心の中にはいまでもあの一年前の瓦礫が残っている、そう思ってやっていく。

丹野　そう、私なんかまだその中に埋まってる気がするもんね。

石川　そういう決意を持って、「東北のために芝居をやっていこう」とこの歳になって初めて思った。前はそんなこと思ったこともなかったけどね。東北のことをテーマにしながらやっていきたい。東北で芝居やってる人たちはたぶんそうなっていくんじゃないかな、と思っています。

丹野　「ただいま執筆中！」って言えれば良かったのにね。10 月に予定が入っている宮城野区文化センター（*8）での公演と塩竈の２月の公演に向けて書かなきゃいけないんだけど、背中に火がついてるのに燃えないで止まってるの。劇団員は優しいんだけど、うちの家族はきびしくて「いつまでそうやって泣いてるんですか」「書く気ないんじゃないの」とまで言われるからね。今に見てろ！なんてね（笑）。

（*8）宮城野区文化センター：仙台市宮城野区の地域交流、文化・情報発信の拠点となる複合施設。2012 年秋開館予定。運営に関して行政と協働する市民による企画委員会が設置されている。

2011.9.12 〜
砂連尾理ワークショップ
宮城県障害者福祉センター・せんだい演劇工房 10-BOX・仙台市福祉プラザ

文化庁次代を担う子どもの文化芸術体験事業 - 派遣事業 - を控え、また、出前活動をおこなうアーティストの研修として、大阪在住のダンサー砂連尾理（じゃれおおさむ）さんの協力を得て、身体や人との関わりについて学び合う場を設けることになった。そのころ世間では、支援する側の人たちが疲弊してきており、支援者そのものへのケアの必要性が叫ばれていた時期でもあった。今回は宮城県障害者福祉センターと ARC＞T との共催でおこなわれ、福祉施設職員やボランティア活動をする人、人と接する仕事に携わる方々への参加を呼びかけた。

およそ 20 名の参加者が温かな雰囲気の中、人とのふれあいや関わりから生まれる動きや、言葉に頼らないコミュニケーションを楽しんだ。これ以降も砂連尾さんはしばしば仙台を訪れ、ワークショップは継続している。そこは、舞台関係者に限らず、障害を持つ人、子ども、高齢者、小さな子を持つ母親など、さまざまな人たちが交わる場となっている。

9月15日　女川町が女川町復興計画策定東京から石橋財団ご一行来訪

9月12日　花いちもんめ敬老ウィーク（東松島市赤井、大曲・〜17日）

勉強会：砂連尾理ワークショップ「ケアする人のケア」（〜13日）

9月10日　定禅寺ストリートジャズフェスティバル（〜11日）
吉野作造記念館トークセッション「私たちの道程〜未来を歩むために I」に石川裕人が参加（宮城・大崎市）

9月5日　枝光本町商店街アイアンシアター「えだみつ演劇フェスティバル2011」制作発表にすんぷちょが参加（北九州）
第17回定例会

9月2日　野田内閣発足

あのときあれから

仙台は私にとって 2003 年以来、ほぼ毎年のように訪れる、とても縁の深い町だ。その町が今回の東日本大震災で大きなダメージを受けた。被害の甚大さが日に日に明らかになるにつれ、関西に住む僕は多くの友人が住む仙台に一刻でも早く駆けつけ、何か手助けしたい、そんな思いに駆り立てられていた。ただその一方で、メディアが作り上げている復興支援の波に乗ることには何だか躊躇してた。そんな時、2003 年当時のワークショップ参加者であり、現在は ＡＲＣ＞Ｔ のメンバーである西海石みかささんと電話で話す機会があり、仙台でワークショップしませんかと声を掛けてもらった。それから今年の 3 月までに 3 回のワークショップを企画してもらい、仙台と関わらせてもらっている。その事がどれだけの支援になっているのかは正直分からない。ただ僕にとって、仙台と関われているという僅かばかりの当事者性の共有が、これからの社会を考えていく上での、大きな原動力となっている。

ダンサー・振付家
砂連尾理（じゃれおおさむ）

砂連尾理ワークショップ実施概要［2012 年 4 月末現在］
#1「ケアする人のケア」
実施日：2011 年 9 月 12 日、13 日
会場：宮城県障害者福祉センター 会議室 (仙台市宮城野区幸町)、
せんだい演劇工房 10–BOX box-1(仙台市若林区卸町)
#2「からだで遊ぶ、こどもと踊る」
実施日：2011 年 12 月 16 日
会場：せんだい演劇工房 10-BOX box-3
#3「からだで聞く、からだで話す。」
実施日：2012 年 3 月 6 日、7 日
会場：仙台市福祉プラザ 9 階 大広間 (仙台市青葉区五橋)、
せんだい演劇工房 10-BOX box-3
［2012 年度も継続中］

9月28日　仙台市民会館が全館再開
9月26日　第18回定例会
9月25日　ウォーキングARC＞T打ち合わせ

9月24日　岡山県天神文化プラザと招聘企画の打ち合わせ
9月23日　東北新幹線が通常ダイヤに戻る
岩下徹ワークショップ（10-BOX・〜24日）
9月21日　エル・パーク仙台が全施設貸し出し再開
9月20日　招聘第一弾・ＰＡＷ横浜2011「東北・復興ｗｅｅｋ」（横浜・相鉄本多劇場・〜25日）

2011.9.20-9.25
PAW'2011 東北・復興 Week_ 相鉄本多劇場 / 神奈川県横浜市

被災三県【岩手県】【宮城県】【福島県】から劇団を招聘し、作品を上演、終演後にはアフタートークを行った。また、シンポジウム「演劇に出来ること」では、進行に西堂行人氏を迎え、アートに関わる多くの人たちはどの様に捉えているのか、演劇に関わる私たちはどの様に捉えるのか、これからの表現を変える何かが見えてくるのか、さまざまな問いを岩手、宮城、福島の現在をふまえて、東北の演劇人と東京・横浜の演劇人がそれぞれの視点から議論する場となった。

PAW'2011 東北・復興 Week 実施概要
主催：横浜ふね劇場をつくる会
　　PAW Yokohama（設立 30 周年記念）
実施日：2011 年 9 月 20 日～ 25 日
会場：相鉄本多劇場 / 神奈川県横浜市
【公演】
［宮城県］Gin's Bar 色彩シリーズ act.3
『BLACK ー家族の肖像ー』
公演日：2011 年 9 月 20 日 -21 日
作：井伏銀太郎 / 演出：西澤由美子、井伏銀太郎 / 出演：西澤由美子、井伏銀太郎 / 舞台監督：武藤修平
［岩手県］架空の劇団 番外公演
『瓦礫と菓子パン～リストランテ震災篇』
公演日：2011 年 9 月 22 日 -23 日
出演：くらもちひろゆき、吉田志津香 他 / 舞台美術：田中雅樹 / 照明：溝江純 / 音響：佐藤浄 / 衣裳：福田紋子 / 小道具：伊藤タエ子制作：高橋宏臣 / 舞台監督：須貝綾子
［福島県］満塁鳥王一座 プロデュース公演 #2
『キル兄ニャとU子さん』
公演日：9 月 24 日 -25 日
作・演出：大信ペリカン / 出演：鳥居裕美 (捨組)、佐藤隆太 (劇団 Be White)、浅野希梨 / 音響：大信ペリカン、小田島達也 / 照明：麿由佳里 / 舞台美術：満塁鳥王一座 / 制作：満塁鳥王一座
【シンポジウム】「演劇に出来ることとは」
開催日：2011 年 9 月 25 日
進行：西堂行人 / ゲスト：大信ペリカン (満塁鳥王一座)、くらもちひろゆき (架空の劇団)、鈴木拓 (ARC＞T 事務局長)、大西一郎 (フェニックス・プロジェクト)、一宮均 (PAW Yokohama 代表)、柾木博行

あのときあれから

ARC＞T さんありがとう。

震災の後自分に何が出来るのかと自問していたとき、ARC＞T のホームページで被災地では公演をする場所もない、県外で公演する機会を創ってくれないかというメッセージを見つけました。その時横浜ではふね劇場を使った演劇フェスティバルを計画して、企画を検討しているときでした。東北の演劇人に 1 週間自由に使ってもらおう、公演が無理なら今の現状を報告する会でも良いじゃないですかと提案したところ、岩手、宮城、福島から 3 団体が横浜に来てくれることになりました。震災から半年という時期でしたが、それぞれが震災を経た思いを演劇という表現に表して頂きました。この様な活動がどれほどお役に立てたのか分かりませんが、この様な機会を創って頂いた事を感謝しています。　今後も ARC ＞ T のような現場の組織と連携しながら、私の出来る範囲で続けていくことが大事なことかなと思っています。2012 年は 7 月 31 日に郡山のあさか開成高校の芝居を横浜に招聘します。高校生のリアルな感性が横浜の高校生と共有できることを願っています。

横浜ふね劇場をつくる会事務局長
PAW Yokohama 代表　一宮　均

あのときあれから

あの日、私達普通に「生きている人達」が一瞬にして「生き残った人達」に変わってしまった。

普通にして来たことを普通に出来るのが本当の復興と信じ、『Verte一秒間に四文字で伝えられない想い』を1か月遅れで上演しました。9月には横浜PAW'2011東北・復興weekに招聘されて、9.11アメリカ同時多発テロ直前のニューヨークを舞台にした「大災害と家族」がテーマの『BLACK―家族の肖像―』を上演しました。そして今、「被災地の想いを演劇で世界へ」を合言葉に、仙台の演劇人有志とWhiteプロジェクトを結成しました。

『White - あの日、白い雪が舞った-』

物語は震災から3年後の春、宮城県の港町の結婚式場親族控室。津波警報放送中に津波に流され、未だ行方不明の娘「雪子」。娘の為に「冥界婚」を山形の若松寺で行った両親が、地元で「想い出話を親しい人たちでする」という本人不在の結婚式を企画する。震災後を生きる人々の姿、愛する人を失った悲しみを乗り越えていく姿を描く。

2012年10月にはタイニィ・アリス主催「アリスフェスティバル2012」、11月は宮城野区文化センターオープニング企画への参加を予定しています。このほかにも上演の機会を求めています。

Gin-s Bar　井伏銀太郎
宮城県仙台市

あのときあれから

現在『震災タクシー』というタイトルの芝居を書いている。これは、あの日、常磐線の原ノ町駅を過ぎたあたりで被災し、それから盛岡に帰ってくるまでの行程をもとにした作品だ。この作品ができると、震災関連ものの作品が2つできたことになる。

善し悪しではないが、当面震災ものと呼ばれる作品以外に書ける気がしない。しかし、その震災ものも、本当に書けるだろうか?という疑念もある。やはりまだ整理がついていないし、フィクションとして消化できる自信がない。それでも、やはり芝居を創っていかなければいけないと思うし、それがわたしたちの役割でもあろう。

『瓦礫と菓子パン～リストランテ震災篇』は、これもひょんな話で、ARC>Tから声がかからなかったら、創ることもなかっただろう。この作品は横浜のみで上演するつもりで、つまり、被災地に近いからわかることを遠くの人に伝えよう、という思いで書いたものだ。それが、震災を伝えるものとして、風化と戦う武器となり、これからもいくつか上演の話が来ている。やはり何かを伝えることがわたしたちの役割なのかなぁとも思う。

架空の劇団　くらもちひろゆき
岩手県盛岡市

あのときあれから

商店は1つしか開いていなかった。7万人以上いた人口が1万人程度までに減少し、現在4万人にまで回復しているという南相馬市の、最も人がいなかった頃の話である。静まり返った様子を示す擬音に「シーン」というものがあるが、日が落ちても家並みに全く明かりが灯らない町の中で、わたしは自己史上最大規模の「シーン」を体験した。悲しかった。

しばらくぶりの自宅であった。妻と子を避難先の福島市に残し、一人で支援物資のパンをかじりながら、ARC>T（当時名前は未定であったが）の第1回ミーティング中継を見た。スマートフォンの小さな画面に映る仙台演劇人の面々は皆、突然の出来事に戸惑い沈んでいたが、それでもなにか一歩を踏み出そうとしていた。震災からわずか20日ほどにしてミーティングが開かれ、歩き出そうとしている仙台演劇人のエネルギーと力強さにわたしは驚かされ、同時にずいぶん励まされた。「シーン」に飲み込まれてはいけないと思った。

満塁鳥王一座　大信ペリカン
主宰　劇作家　演出家
福島県福島市

2011.9.29

文化庁芸術家派遣事業 事前研修 吉野さつきさん _ 仙台市市民活動サポートセンター 研修室３

５月に AVN311 のメンバーとして仙台を訪問したワークショップコーディネイターの吉野さつきさんをお迎えして、文化庁「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」の第２回事前研修会を開催した。今回は、学校など子どもたちのいる現場に出向くための心構えや留意点について学ぶ場となった。

参加者の中には、ARC ＞ T 以前から子どもたちとのワークショップを経験している者も多く、実際の現場で感じた困りごとや疑問などについて具体的に話し合われた。アーティストは先生ではなく子どもと「対等に出会う」こと、先入観にとらわれない「日常に埋もれた宝物を見つけ出す」視点を持つことなど、参加者はこれからのワークショップや出前活動の現場に活かす指針を得た。

あのときあれから

あのころ、揺さぶられた心の中で、いろいろな物事がシャッフルされて、気づくと、自分の中の地図が大きく書き換えられていた。ある町や場所との距離、誰かとの距離、遠かったものが近くなって、近かったものが遠くなった。
あのころ、初めて、あの光景を目にして、ARC＞T のみなさんと会って、ひたすら話を聞いて、何もできない自分をもどかしく思っていた。
あれから、９月に、ARC＞T の研修会に呼んでいただいことを、今でもとても有難く思っている。なぜなら、私が“このこと”に関わり続ける理由を見つけられたから。それが、自分にとって、なにか特別なことではなくて、いままでやってきた仕事の延長線上にあって、自分が生きることとちゃんとつながっていると確認できたから。
私の中の地図は、まだどこか混沌としていて、もどかしさは、今もある。だから、関わり続けたいと思う。この混沌ともどかしさと向き合うことが、私にとって、アートと社会と向き合っていくことのように思うし、なによりそこに、一緒に仕事したいなあと思う人たちがいるから。
これからも、どうぞよろしくお願いします。

アーツ・マネージャー　吉野さつき

10月7日　気仙沼市が気仙沼市震災復興計画策定
「平成23年度第3次補正予算及び復興財源の基本的方針閣議」決定

10月6日　出前部自主研修（演劇）

10月4日　ARC>T PRESENTS 芋煮会 at 10-BOX（10-BOX）

10月3日　仙台市が他地域から避難中の小学生について市内小学校への入学受付を開始

10月1日　仙台市広瀬文化センター、若林区文化センター、やくらい文化センターが全施設貸し出し再開
仙台空港アクセス線が全線再開
ウォーキング ARC>T street 01「長塚圭史と歩くと…」（10-BOX・～3日）

9月29日　ドイツからベアーテ・ヴォンデ氏ほか来訪
文化庁芸術家派遣事業事前研修会：吉野さつき氏ワークショップ

演劇人から演劇人のために

ベルリン森鴎外記念館　ベアーテ・ヴォンデ

ドイツで暮らす大多数の人々と同じく、私たち日本学者らも、地震、津波、放射能汚染の三重苦の災害の映像に大きなショックを受けました。最初の週末はただただ、呆然とＴＶの画面を見凝めるだけで、自分の視覚に入ってくるものを信じることすら出来ませんでした。あの出来事は今でも悪夢のようで、災害で亡くなられた方々や、大切な人を失って、これからも生きていかなければならない方々のことを考えると、いてもたってもいられない気持ちになりました。しかし、そんなときに私の本能のようなものが、自分にこう呼びかけました。「このショックから自分を解放するには、自ら立ち上がって、アクションを起こすしかない」と。

何年も前から演劇祭を開催しているライプツィヒの友人が、災害直後に国際演劇協会の内村賞を受賞しました。これ以上、ＴＶの前でじっとしていられなかった私は、彼の元へと向かいました。国際演劇協会のベルリンの同僚が、私が日本学者で、日本の演劇界に友人が多いことを知ると、東北の演劇人とのコンタクトを取れるよう手伝ってほしいと私に頼みました。彼らは、何とかして被災者に力を貸したい、しかし、一般的な方法によってではなく、自分たちの仲間である、東北の演劇人に援助をしたいと考えていたのです。

ARC＞T の活動の何よりも良かった点のひとつは、迅速にＨＰを立ち上げたことです。それによって私たちは、現地の状況やそこに住んでいる人々、とくに演劇人の近況を知ることができ、幅広いネットワークを通じて、互いに声をかけ合い、本当に困っている人々に手を差し伸べる、活動の様子をドイツ語に訳し、伝えました。ドイツ国際演劇協会は急遽、有志グループを立ち上げ、ARC＞T に関する資料をもとに、募金の呼びかけをするためのスピーチを考えました。このスピーチは、世界演劇の日に、沢山のドイツの劇場にて俳優に読み上げてもらいました。
この募金活動によって集まったお金と、マイヤ・プリセツカヤ基金から寄せられた募金が、少しでも現地の窮状が和らぐことを祈りつつ、ARC ＞ T の友人らに託しました。

またその後、演劇雑誌「テアター・デア・ツァイト（時の演劇）」に数ページに渡る ARC ＞ T についての記事を寄稿し、2011 年 9 月に鈴木さんと、その他の ARC＞T 代表の方々に、仙台でお会いすることができたのは、本当に嬉しいことでした。私はそこで、アクチュアルな問題についての意見を交わし、またトラウマを抱えた子供たちの、演劇活動を通した学校でのワークショップも体験することができました。

募金活動を通して芽生えた東北とドイツの演劇界が、次に目指すべきは芸術的な交流であると考えた私たちは、東北の演劇人をドイツに招待することを企画しました。キールにて開催される一人芝居の演劇祭「モノドラマ・フェスティバル」に出てもらうことが叶えば、日本の東北の演劇界における問題を知ってもらう良い機会になったと思いますが、残念ながら劇団に関する資料が届かず、実現には結びつきませんでした。ARC＞T とドイツが将来、このステップアップを果たせることを、期待を込めて見守りたいと思います。

9 月に仙台を訪ねたとき、私が見た限りでは、災害の爪あとはもう、ほとんど見かけられませんでした。しかし、もっと難しいのは、遠くに住んでいる人たちが、現地の人が抱えているトラウマを理解することだと思います。だからこそ、これからも私たちが様々な方法でお手伝いができるように、ARC＞T のホームページには今後も、アクチュアルな状況と活動を伝えていってもらいたいと願っています。

ARC＞T が、灰の中から甦った不死鳥のように強い力を得て、傷を癒し、苦しみを乗り越え、新しい演劇の形を生み出すことで、多様かつ独創的な東北の文化が育っていくことを願ってやみません。

2011.10.1 〜
舞台芸術専門講座「ウォーキング ARC ＞ T」はじまる
せんだい演劇工房 10-BOX・能 -BOX

ARC＞T が発足して半年が経った。東北の地での舞台芸術の活性化を目指して、福澤諭志（ふくざわさとし）さん（株式会社 STAGE DOCTOR 代表取締役社長）と伊藤達哉（いとうたつや）さん（有限会社ゴーチ・ブラザーズ代表取締役）と ARC＞T の協働による舞台芸術専門講座を開始した。この講座では、「教える／教わる」「東京／地方」という関係ではなく、対話を重視してともに学び、お互いの方法を共有しながらともに歩むスタンスを心がけている。プログラムには実演家向け、テクニカル向け、その両面からなる創作の現場視点のものがあり、毎回多彩なガイドを迎えて継続的に実施している。

あのときあれから

「長塚圭史とあるくと」と題してのんびりとしたWS（ワークショップ）を２度開かせて頂きました。私自身、具体的な作品作りのWS以外の経験は皆無と言っていいほど乏しいのにも関わらず、日々奮闘している皆さんのエネルギーに刺激され、思わず手を挙げたのが始まりでした。

何かを教えるなどというような大それた事は元々考えていませんでした。とにかく「演劇というものは何も無いところから生みだせるものである」という、恐ろしく当たり前のような、しかしなかなかこれでどっしりとした、見えない土台のようなものだけ引っさげて、楽しく演劇で遊ばせてもらいました。枝を手に、これは魔法の杖だと口にすれば忽ち魔法の杖に変化する。この豊かさを共有すること。ここをしっかり共有出来たところで次のことを仕掛けたい、なんていう風にまだまだ皆さんとの歩みを止めるつもりはないのですが、ご迷惑にならない程度に、むくむく行こうと思っております。

長塚圭史（ながつかけいし）

10月31日　第20回定例会（総会・Ustream 中継はしなかった。）（写真左）
10月30日　岩手、宮城、福島がほとんどの避難所を閉鎖（完全閉鎖のめどは立たず）
10月28日　たんぽぽの家「臨床するアート 2011 東京セッション」に鈴木拓が参加（東京・アーツ千代田 3331）
10月19日　いわきアリオスが大ホール、小劇場ほか再開
10月17日　第19回定例会
10月16日　多夢多夢舎ダンス発表（東北福祉大学室内練習場）
10月14日　出前部自主研修（ダンス）
10月12日　石巻河北総合センターが避難所解除し全館再開
10月11日　石巻市の全避難所が閉鎖。以降、待機所として公民館など４カ所を使用
10月8日　仙台ＹＯＳＡＫＯＩまつり（〜９日）

ウォーキング ARC ＞ T 実施概要［2012 年 4 月末現在］

Street01「長塚圭史と歩くと…」
実施日：2011 年 10 月 1 日〜 3 日
会場：せんだい演劇工房 10-BOX box-1、別館 能 -BOX
ガイド：長塚圭史（佐ヶ谷スパイダース）
アシスタント：佐藤みゆき（こゆび侍）
ナビゲーター：原西忠佑

Street02「舞台監督ってなぁに？」
実施日：2011 年 11 月 29 日
会場：せんだい演劇工房 10-BOX box-4
ガイド：福澤諭志（株式会社 STAGE DOCTOR)、
武藤祥平（有限会社舞台監督工房）
ナビゲーター：鈴木拓

Street03「長塚圭史と歩くと…2 歩目」
実施日：2011 年 1 月 18 日〜 1 月 20 日
会場：せんだい演劇工房 10-BOX box-1、box-5
ガイド：長塚圭史（阿佐ヶ谷スパイダース)
アシスタント：江口のりこ、田中哲司
ナビゲーター：原西忠佑

Street04「小道具を見る・知る・遊ぶ」
実施日：2012 年 2 月 18 日〜 19 日
会場：せんだい演劇工房 10-BOX box-7
ガイド：高橋岳蔵（劇団☆新感線)、秦真祐子
ナビゲーター：鈴木拓

Street05「ヘアメイクとの付き合い方」
実施日：2012 年 2 月 25 日〜 26 日
会場：せんだい演劇工房 10-BOX box-6
ガイド：西川直子
アシスタント：佐藤華子
ナビゲーター：鈴木拓

Street06「黒澤世莉と歩くと…」
実施日：2012 年 3 月 23 日〜 25 日
会場：せんだい演劇工房 10-BOX 別館 能 -BOX
ガイド：黒澤世莉 (時間堂)
アシスタント：菅野貴夫 (時間堂)、直江里美 (時間堂)、
ヒザイミズキ (時間堂)
ナビゲーター：原西忠佑

Street07「そもそも " 制作 " って何？」
実施日：2012 年 4 月 17 日〜 18 日
会場：せんだい演劇工房 10-BOX box-6
ガイド：伊藤達哉（ゴーチ・ブラザーズ）
アシスタント：小野塚央（ゴーチ・ブラザーズ）
ナビゲーター：鈴木拓

［2012 年度も継続中］

2011.10.4
ARC＞T PRESENTS 芋煮会 @10-BOX_せんだい演劇工房 10-BOX

これまで全国のたくさんの方々から様々な支援をしていただき、支援を受けるばかりだったARC＞Tはいつか「ありがとう」という言葉を伝えたいと思っていました。各地の演劇人からARC＞Tのメンバーに会ってみたいという声をもらい、顔を合わせて対話をする場を設けることで「ありがとう」の気持ちを伝えられるのではないかと東北らしい宴として「芋煮会」開くことにしました。

東京から、仙台から、俳優陣をはじめ、大学演劇、在仙の劇団、劇場関係者、大道具、照明、舞台監督、制作、映画館支配人、音楽家、ダンサーなどさまざまな分野の人がせんだい演劇工房10-BOXに集い、宮城版芋煮（豚肉で味噌仕立て）と山形版芋煮（牛肉で醤油仕立て）を囲み、和気藹々（わきあいあい）と団欒（だんらん）しました。東京と仙台の演劇人の交流をはかる芋煮会となりました。

11月23日　岡山天神文化プラザ打ち合わせ（岡山・天神市）

11月21日　招聘第二弾・すんぷちょ「えだみつ演劇フェスティバル2011」参加（北九州・枝光本町商店街アイアンシアター・～27日）

11月18日　東日本復興特区法案審議入り

11月15日　福島県南相馬市の仮設住宅入居開始

11月12日　第21回定例会（総会2・Ustream中継はしなかった。）

11月11日　ローズファンドからヒアリング
FMたいはくに鈴木拓が出演

11月9日　女川町が避難所閉鎖

11月6日　日本劇作家協会東北支部「よみがえれ岩手 文化でつなぐ 命と未来」のシンポジウム「震災後の演劇・東北からの発信」に生田恵が参加（盛岡劇場）

11月1日　いわきアリオスが別館音楽小ホールほか再開

あのときあれから

故郷の慣れ親しんだ風景、生まれ育った土地の姿を見て愕然としながらも、物資を届けるだけに過ぎない行為に偽善を感じていた。「他に何か出来ることは無いか？」と葛藤を続ける中、「東北復興に向けての舞台人会議」を拝見し、彼らの熱を帯びた議論に触発され、同じ舞台人として何か出来るかもしれないと連絡を取った。この一年毎月仙台を訪れ ARC＞T を通じ多くの人と出会い、多くの言葉を重ね実感したことは「荒れ果ててしまった（文化＝社会）を耕し、育み、守っていくのはそこに住む人達にしか出来ない」という、当然と言えば当然のことだった。

少しでもその歩みの栄養源になることを願い、ARC＞T と協働で交流会や舞台専門講座を始めた。社会と文化がより密接するその土地で舞台人が日常の営みでもある活動を取り戻すその時に少しでも豊かであってくれることを願って。この一年を決して忘れず、ゆっくりと時間を掛けて共に歩んでいきたい。

株式会社 STAGEDOCTOR
福澤諭志

ARC ＞ T PRESENTS 芋煮会 @10-BOX 実施概要
実施日：2011 年 10 月 4 日
会場：せんだい演劇工房 10-BOX ウッドデッキ 他
主催：ARC ＞ T
協力：ゴーチ・ブラザーズ、STAGE DOCTOR、せんだい演劇工房 10-BOX

つれづれ

2012

劇団三カ年計画主宰　なかじょうのぶ

明日は来る。今日と同じような日が続く。何の疑いもなく思っていた。根拠など考えたこともなかった。

二十代の頃全てを疑っていた。酒さえも信じてはいなかった。笑顔が作れなかった。一瞬を鋭角に生きていた。

いつの間にか飼いならされ侵食されていたんだ。筋肉はそげ中性脂肪だらけだ。チキショー、悔しい。経済に負けてしまったんだ。予算と見積もりの中に生命はなかった。

震災後の五月、何校かの小学校で童話の朗読を行なった。子供達が集まるまでの間、今の状況を先生が説明してくれた。土台と門柱だけとなった街を登下校していること。校庭が使えず身体を動かすことができなく、下校後の遊びも室内になっていることなど。話を聞いている部屋の窓から見えるものは、むき出しの鉄筋と土台、その後ろは巨大な海。

授業を再開している小学校は何処も高台にあった。伺った小学校も高台にあり、海と小学校の間にあるべき街は消えていた。

話を聞く子供達は行儀がよかった。悲しいくらいに大人の好意を受け取っていた。

子供達もあの日を生き抜いてきた。大人達は昨日を取り戻すべく動き始めている。子供達の声は聞こえてこない。大人達は同じ言葉を強弱をつけ何度も、誰彼かまわず話している。子供達の大人を見上げる目は、あの日、僕もいたんだよと言っている。子供達の大声を、叫びを聞きたい。

子供達の背中に寄り添いたい。大人達は大人を忘れてしまっている。無限の物語は利益の前で枯れはてている。チンプな言葉でも、繰り返していけば温かくなることだってある。忘れず、気にかけ、相手の目線で思う。たたずみ、空を見上げ、隣に座る。言葉を紡いでいけば新しい物語が生まれてくる。子供達よ、地団太は大人に負かせ、新しい物語を思い描いてくれ。

栗原市の喫茶店で三月から第四土曜日朗読会を劇団三カ年計画主催で始めた。出前出張朗読会の見本市でもある。内容はコント、童話、短編戯曲等なんでもあり。毎回新作書き下ろし短編戯曲も披露している。

当初の狙いはコントを発表する予定だったが、劇団員の前で披露したところ「何処で笑うの?」、「三人が舞台に立つから後の七人が客席で笑えばよい」とか言われた。コントの文字は封印し新作短編戯曲とした。笑えないコントという新ジャンルを開拓しようと思ったりもしたが、それこそがコントだと気づきやめた。先見の明のある選択だと思っている。

数行前に見本市と書いたが、被災地へのボランティア団体の読み聞かせが余りにも、そのレベルの低さにびっくりしたからである。読む作品さえ選別していない。いつも読んでいる馴染みのものであろう作品を、いつものように読むだけのグループの、なんと多いことか。

学校側も先生方も選べないのだ。申し出があれば無下にも断れず「空いた時間に合わせて来ていただければ」となってしまう。選択肢をこめての見本市である。

県庁所在地以外の地方で、観劇といえば演歌歌謡曲ショーである。文化云々は論じないが、選択肢を一つでも多く持つための定期朗読会である。

岩手宮城内陸地震があり栗駒山は地滑りに見舞われた。東日本大震災で海岸部は壊滅的な打撃を受けた。若者の流出は止まらず少子高齢化。

東北の真ん中あたりの栗原市、名物も名所もこれといってない。生まれたのが栗原市で、今生活もしている。立っている地が栗原市、ただそれだけだが、芝居の新作は　栗原市で発表することを決めた。意味があるわけではない。決意だ。栗原で生きる意地だ。

栗原市の高森原人は捏造だったが、栗原人になる。決めてしまうと、至極もっともなことだと飲み込める。この地の四季を味わい、生まれる表現をこの地に立ち行為する。

都市部と地方と分けがちだが、生活の地で生み出されたものを、その地でご馳走するぐらいの想いだ。永田町の政策との温度差を料理するだけだ。

二ヶ月に一度、南三陸志津川方面に足を向けている。目的もなく海水浴場やキャンプ場があった場所を車で走っている。初めて海水に触れた場所であり、キャンプをした場所である。が、最後に訪れた日時は忘れてしまった。釣りえさを買っていた店は海に面していたような、道路から階段を何段か降り、店に入ったような気がする。

覚えようと意識しなければ、記憶なんてこんなもんである。自分に都合よく、勝者により歴史は作られてきた。その地に立ち見続けることが本当のことを教えてくれる。

根拠のない願望のような明日に、おさらばしよう。

なかじょうのぶ
劇団三カ年計画。2002 年、宮城県芸術選奨受賞。日本劇作家協会会員。日本演出者協会会員。萬開堂書房店主。

2011.10.28

臨床するアート 東京セッション _ エイブルアート・スタジオ / 東京都千代田区

人々が生に向き合う現場でいま何がおき、そこでアートはどのようなものとしてあるのかを考える場として、財団法人たんぽぽの家が連続講座「臨床するアート東京セッション」を主催した。その第2回講座は「東北からはじめる—ARC＞Tという取り組み」と題され、事務局長の鈴木拓が参加した。

ゲスト講師でARC＞Tの活動を報告してきました。会場は東京千代田区の小学校をリノベーションしたアーツ千代田3331。もともとは美術室だったと思われます。聞き手は坂倉杏介さん。事前の打ち合わせで、「どういった流れがいいですか？」と聞かれたので、逆に「なぜ今日ARC＞Tの報告を聞きにこようと思ったのか参加者の皆さんにお聞きしたい」とお願いしました。

冒頭、それまでのARC＞Tの活動をプロジェクションしながらの報告。そのあとはディスカッションのような雰囲気に。参加者が20名くらいだったので、アットホームな雰囲気で対話は進みました。後半は僕の生い立ちの話題になり、ARC＞Tの活動で"個"が見づらくなっていた自分にとっては、嬉しい時間でした。また、社会における制度や仕組みの至らなさを再確認した機会でした。

（ARC＞T事務局長　鈴木拓）

11月24日　10-BOX資料室、制作室が貸し出し再開

11月29日　ウォーキングARC×T street02「舞台監督ってなぁに？」

11月30日　第22回定例会

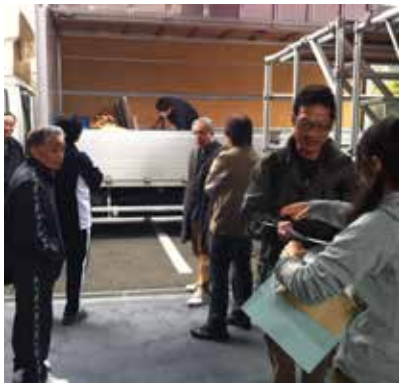
12月1日　10-BOX残る旧棟部分の貸し出し再開
宮城県がみやぎの心のケアセンター開設

12月2日　千葉県市民活動フェスタに鈴木拓が参加

12月9日　第23回定例会

1

2



3

4

1　花いちもんめ敬老ウィーク花いちもんめでは敬老の日前後の 1 週間、敬老会を毎日おこなうことに合わせて、赤井地区と大曲地区にある 2 つの施設で連日出前を実施した。(写真は一部。土屋悠太郎「タイ舞踊」、大久保則子、田村よう子、 長保めいみ「朗読とリラックス」、西海石みかさ、多夢多夢舎「ダンスを楽しもう」) (2011 年 9 月 12 日〜 9 月 17 日)

2　せんだい演劇工房 10-BOX の毎年行っている塩竈市立浦戸第二小学校中学校へのアウトリーチのお手伝い。個人の船で機材を運んだ。(2011 年 10 月 14 日撮影)

3　せんだい演劇工房 10-BOX のアウトリーチ。(2011 年 10 月 14 日)

4　塩竈市浦戸諸島野々島 (2011 年 10 月 14 日撮影)

5　塩竈市立浦戸第二小学校中学校学習発表会 (2011 年 10 月 22 日)

6　舞台芸術専門講座ウォーキング ARC ＞ T street2「舞台監督ってなあに？」(2011 年 11 月 29 日)

5

6

2011.11.22-27
えだみつ演劇フェスティバル2011_枝光本町商店街アイアンシアター／福岡県北九州市

インタビュー：横田泉

仙台からおよそ1400km、福岡県北九州市にある枝光本町商店街アイアンシアターは震災直後から東北の舞台人のことを心配し、ARC ＞ T 設立以前からその様子を Ustream 経由で見守っていた。3 月末には枝光の子どもたちが書いた大きな段ボールの手紙が届けられ、枝光への招聘公演の提案があった。はるか遠い南の地からの熱い励ましに仙台の舞台人は色めき立った。

その年の秋に開催された「えだみつ演劇フェスティバル2011」にはすんぷちょが招聘された。以下は、フェスティバル参加についてのインタビューである。

招聘のきっかけとなったのは、震災直後の 3 月に行われた「東北復興に向けての舞台人会議」。この会議の Ustream 配信を見た、枝光本町商店街アイアンシアターの芸術監督、市原幹也さんは「公演をする場所がない」という仙台の舞台関係者の状況を知り「北九州に来てやりませんか」と声がけ。その後ほどなく ARC ＞ T が発足して、アイアンシアターと ARC ＞ T が協働する形でえだみつ演劇フェスティバルに、東北支援枠を設けることを提案しました。ARC ＞ T 内ではさっそく参加者を募集、選考の結果、すんぷちょがダンス作品『Midorigo』と『Maek』で参加することとなりました。

フェスティバルですんぷちょは、11 月 22 日から 25 日にかけてワークショップを行い、26 日、27 日にはそのワークショップ参加者と一緒に舞台公演を行うという、参加型の公演を行いました。メンバーはここで、商店街とアイアンシアターとの特殊な関係を感じたといいます。

メンバーがシアターで準備をしていると、こんなことがあったといいます。

「市原さんは毎朝、商店街を散歩しているんですが、戻ってくる時には必ず“お土産”をもらって来るんです。商店街の方が差し入れをしてくれるんですね。それから、シアターで準備をしていると近所の人が『遊びに来たよ』なんて顔を出しに来るんです」（千田優太さん／ダンサー）

そうした様子を見て今までとは違う「劇場」の在り方を感じたといいます。

「自分が知っている劇場は、『遊びに来る場所』ではなかった。でも、ここでは劇場は『そこに行けば誰かと話せる場所』。そういう場所になっていることが、すごいと感じました」（千田優太さん）

さらに、ワークショップの合間にはこんなことがありました。

「小学生が『イッチー（市原さん）いる？』と、学校帰りにシアターに遊びに来るんです。それから『脚本書いたから見て』『やってみせるから、見てて』なんて、演技をしてみせるんです。小学生の子たちは自分たちのことを『アイアンキッズ』って名乗っていて、市原さんも『知らない間に子ども劇団ができてた』と笑っていました」（髙橋亜希さん／照明スタッフ）

シアターはもちろん、演劇そのものに対して、商店街の皆が親近感をもっているのを感じたといいます。この独特な関係の背景には、アイアンシアターができた経緯が関係しているようでした。

アイアンシアターは 2009 年 2 月、地域の活性化のため、北九州市八幡東区の枝光本町商店街にある元銀行の建物を利用して開館しました。よくある地域活性プロジェクトの一環のようですが、少し違っているのは、そこに商店街の人々の強い思いがあったということ。かつて八幡製鉄所があったこの商店街には、栄えていた当時には劇場があったといいます。それが、街の衰退とともに閉館。しかし、「劇場」に強い思い入れがある商店街の人々の手によって、「枝光本町商店街アイアンシアター」として再び開館したのだといいます。こうした人々の思いを証明するように、シアターのオーナーは商店街のタクシー会社「光タクシー」の社長が務めており、運営費は商店街が集めていました。シアターは、地域の確かなニーズと協力によって運営されていました。

すんぷちょ代表で、今回の作品を演出した西海石みかささんは、そうした地域とシアターの関係性を、公演の中でも垣間見たといいます。今回枝光で上演した作品では、ワークショップ参加者である出演者が、観客の耳元で「枝光の好きなところをささやく」いうシーンをつくっていました。すると参加した小学生がこう言ったといいます。

「宮川とアイアンシアター」

「宮川」というのは近所の公園の名前。小学生たちにとって、毎日遊ぶ公園と劇場とが同列の存在だということがよく分かる、印象的な出来事だったと西海石みかささんはいいます。

また枝光の人々は、メンバーにも思わぬ影響も及ぼしました。フェスティバルでのワークショップに、普段は裏方である技術スタッフが自ら参加したのです。当時のことを、照明担当の髙橋さんは次のように振り返ります。

「枝光でワークショップに参加していた方は、ダンスを普段やっていない人たちなので、動きのレパートリーが少ないんです。それが、やっていくうちに引き出しがどんどん増えていって。最初は客席で見ていた小学生もそのうちに参加し始めて、最後には『これやりたい！』って自分から言うようになったんです。そういう様子を見て、私も参加することが楽しくなっていきました」（髙橋さん）

またアイアンシアターでの公演は、照明家としての考え方にも影響を与えたといいます。

えだみつ演劇フェスティバル 2011

今回の公演では、照明をしながら複数の仕事を兼任しなければならなかった髙橋さん。実はそれまで、照明以外の仕事をすることや、ましてワークショップに参加することなど強い抵抗があったといいます。それがこの経験を経て、考え方が変わったそうです。

「実際にやってみて、照明をやりながら他のこともできるんだ、やってもいいんだ、と感じました。考え方の幅が広がって、自由になった感じがしました」（髙橋さん）

また、フェスティバルでは市原さんが「被災地のために何ができるか」を考えてつくったという作品が上演されました。メンバーはこれを見たとき、「市原さんの考えていることがよく分かった」と話します。

作品は「さあ、演劇といっしょに街に出よう！『枝光本町商店街』」という参加型の公演で、俳優と参加者が一緒に商店街を歩くというものでした。様々なお店をのぞきながら歩き、食べ物屋さんに寄ればお店の人から「これ、作ってみる？」と声をかけられて、実際に作ってみることも。それは商店街での生きたやりとりと、作品としてのストーリー性とを両立した、斬新で完成度の高い作品でした。参加したメンバーは次のように話します。

「市原さんが『歩ける範囲での関係性』を大事にしようとしていることが分かりました。その感覚は、震災後まさに自分たちが感じたこと。市原さんは作品を通じて、常日頃からそういうものが大切だというのを見せてくれた」（千田さん）

「市原さんの作品は、自分の住んでいる土地でつながりをつくることが大事なんだ、人と人とをつなげるというのはこういうことなんだ、というのを見せていると感じました」（西海石さん）

そして市原さんの思いを感じ取り、「東北と九州はこんなに離れているのに、同じように感じていることが嬉しかった」と口ぐちに話すメンバー。楽日を迎えると、帰りたくないと思うほどに商店街やそこにいる人々に愛着を感じていたといいます。

千田優太さんは最後に「この経験を仙台に持ち帰って、仙台で何ができるのかを考えなければと思いました」と話していました。

えだみつ演劇フェスティバル 2011 東北支援枠参加概要
期間：2011 年 11 月 22 日～ 27 日
会場：枝光本町商店街アイアンシアター
（福岡県北九州市八幡東区枝光本町）
参加メンバー［順不同］
演出：西海石みかさ／出演：西海石みかさ、渋谷裕子、千田優太、西邑太郎 (東北大学学友会演劇部) ／舞台：鈴木拓／照明：髙橋亜希／音響：本儀拓
［内容］
11 月 22 日～ 25 日
えだラボ「すんぷちょサロン & Maek ワークショップ」
進行：西海石みかさ
11 月 26 日～ 27 日公演
『Midorigo』『Maek』
11 月 26 日
アフタートーク「あるくとサロン “ あるくと七転八倒 ”」
11 月 27 日
えだトーク「東北と九州の人が一緒に 3.11 を考える」

横田　泉（よこた・いずみ）
フリーライター。宮城県出身。高校まで宮城県で過ごし、大学進学とともに上京。編集プロダクションなどを経てフリーに。現在は東京を拠点にスポーツ・エンターテインメント関連の記事を執筆。記事掲載媒体に集英社「MORE」、本の雑誌社「WEB 本の雑誌」、書籍『新体操ボーイズ』などがある。

2011.11.27
えだトーク「東北と九州の人がいっしょに、3.11 を考える」
枝光本町商店街アイアンシアター

終演後のトークセッション「えだトーク『東北と九州の人がいっしょに、3.11 を考える』」から一部を抜粋して掲載する。

パネリスト：西海石みかさ (すんぷちょ代表)
　　鈴木拓 (ARC ＞ T 事務局長)
進行：市原幹也 (枝光本町商店街アイアンシアター芸術監督)

（観客との質疑応答より）

観客 1　これからも枝光と ARC ＞ T と一緒になって活動を続けていって欲しいし、自分たちもこれから少しでも被災者のためにできることを継続していきたいと思いました。

鈴木　いま地方と地方が一緒に考えるということが大事だと僕は思っているので、そう言っていただけると嬉しいです。正直なところ、表現者たちは協調性なんて持てるわけがないと僕は思っていますが、それまで一緒に語ることをしなかった表現者たちが今ARC>Tに集って、一緒に考えて、一緒に出前に行く、みたいな新しいコラボレーションが起こっています。それはとても小さな動きですが、その交流が生み出すものがすごく有意義だと思いますね。

市原　そうですね。震災というものに立ち向かうときに、隣の人とであれ、東北の人であれ同じミッションで手を繋げる。今回改めて僕たちはその大切さに気づくきっかけにもなりましたし、こうやって東北から人が来たり、東北に人が行ったりという流れの中で、新しい東北が生まれてくるんじゃないかなって思いました。

観客 2　今回の震災で、創作や演出について心境の変化や影響はあったのでしょうか？

西海石　そうですね、やっぱりすごく考えました。今日観て頂いた作品は、去年の夏に私がホンジュラスにいたときにつくったものですが、5 月に仙台で『Midorigo』を公演するとき、やっていいのかと葛藤しましたし、強烈すぎるかなとも思いました。叫んでいる場面が津波のときの声に聞こえてしまうと言われて、私もびっくりしました。ただ数字の 5 と言っているだけなんですが、結果、何を表現してしまっているか…舞台はやっぱりお客さんの経験や想像力と一緒になって最終的に完成するものなので、迷うところは正直ありました。でも、津波を思い出すというお声もありつつも、「赤ちゃんが産道を通ってきてぐっと生まれてくる感じ」と言われたりもして、私たちの方が発見をすることもありました。その葛藤も含め、「今これをやってどういう意味があるのか」とすごく考えましたので、テーマについては、ホンジュラスにいたときよりくっきり

したと思います。これからつくるものについては、自分たちがやりたいことをやればいいということじゃなくて、繋がっている人のことを考えて創ることになると思います。

鈴木　すぐに震災のことを題材にして書いた人もいますし、未だに筆をもてない人もいるので、タイミングは人それぞれだとは思いますが、もう避けては通れないですね。それが何年か経てば癒えるのかどうかはわからないですけど。

市原　東京の友人が言うには、いつも乗る電車が節電で車内が暗いまま走ったら外がすごい綺麗だったことに気づいたそうです。日常はこんなに綺麗だったのかと、僕たちは気づいた。それなら、僕たちの作品は知らず知らずのうちに変わっていくのではないか、と思います。

観客３　えだフェス市民サポーターのものです。私自身、日々の仕事に埋没して日々は過ぎていって、東北の復興に向けてできることはあるのではないかとも思いつつ、何をしたらいいのかわからないままずっといます。北九州にいてもできることを、なにか考えるヒントを皆さんからいただけたら、と思います。

西海石　枝光は人と人の繋がりがすごいし、それを劇場が繋いでいるのが素晴らしいと思います。震災後、人の繋がりがほんとに大事だと感じました。「こんにちは」「大丈夫ですか」というささやかなことが自分を支えてくれました。今も「人を孤立させない」というのが私のテーマです。

市原幹也（いちはら・みきや）
演出家、のこされ劇場＝主宰、枝光本町商店商店街アイアンシアター芸術監督。北九州芸術劇場では演出・ワークショップ講師などを歴任。古典から近代までの文芸作品をモチーフにした創作、身体表現や即興性を取り入れ、物語に多重構造を仕掛ける緻密な演出に定評がある。近年、韓国と日本双方での創作を行い、国際的に活動している。

枝光はまさにそれをやっているので、大好きです。自分の地元で人との繋がり、温かい関係をつくっておくことがいちばんだと思います。その関係が、まちをつくるし、まちを守るし、人も守ることになる。だから、「枝光はそういうことをやってますよ」とおしえて頂けたら、私たちも勉強になります。

市原　人が集って、想いが繋がる、その端っこに劇場がある、そういう風景が見たいと思って僕はこの２年がんばってきたので、こういう場を持てたことを嬉しく思います。で、今回の震災で僕たちができることはなんだろうと考えました。そのときに、僕はいま隣にいる人と一緒に作品をつくりたいと思った。僕の一番近い人は近所の人たち、商店街の人たち、それから友達。人間がそうやって繋がったり集まったりすることがもう演劇だとも思っているので、そういうことを発見して届けて行きたい。震災直後、子どもたちが劇場に来たんです。理由を聞いたら「テレビが面白くない」と言う。連日、テレビは生々しい映像を流し続けました。メディアが壊れていると気づいたとき、僕たちは九州にいるけど少なからず被災しているんだと思いました。もろに影響を受けている子どもたちが目の前に現れて、何かを欲している。だから僕は彼らと作品をつくろうと思いました。そして、子どもたちが「東北のみんなに手紙を書く」って言って、段ボールにびっしり手紙を書いた。そこに座っている子が、東北のアーティストに「来てください、一緒に踊りたいです、体動かしたいです」って書いたんです。だから、遠くにいるから何もできないと思わずに、まず自分に近いことを考える、自分たちの日常の中に何が大切なのかもう一回考えようとする。人間の中に何があるのか、と。それは自分を見つめることになるし、他者を見つめることにもなる。僕は舞台芸術を通じてそういうことができたらいいなと思っています。ここに座っているお客さんたちも大事な仲間、手を繋いでいると思います。
最後にお願いですけど、今日みなさんには東北の友達ができたと思います。ぼんやり「東北は大変だなあ」じゃなくて、こういう人たちが大変な思いで東北を支えていたりがんばっていたりしているので、なにかあったら顔を思い出して「どうしてるかな」「元気かな」と想像していただければうれしいです。

鈴木　そう、知っていてほしいです。なにか特別なことをするわけでなくても、見守られていれば、僕らは立ち続けられる気がします。

2011.12.24-12.27

来て、見て、あるくと。〜共に歩いた 288 日、そしてこれから〜

エル・パークスタジオホール／仙台市青葉区

2011 年の締めくくりとして、ARC ＞ T 発足以来この 9 か月の活動を紹介し、世界中から寄せられたさまざまな支援への感謝の意を表するために、メンバー有志が実行委員会を結成して「来て、見て、あるくと。」を企画した。

これまで出前活動で実践してきたプログラムの披露、復興と芸術の関わりについて語り合うトークセッション、震災後に創作または上演された舞台など、子どもから大人まで楽しめる内容を揃え、4 日間にわたって開催された。

あのときあれから

テレビで日々増えていく犠牲者の数をただただ見ることと食料の確保に歩くだけの毎日で無力感だけが大きくなっていく中、仙台の舞台関係者で集まろうという声が上がったことは、私にとってとてもありがたいことだった。バラバラに活動してきたメンバーゆえに思いはそれぞれで、批判の声が上がったり関わりをやめる人もいた。それでも、ずっと仙台で舞台に携わってきて、あれだけの人数の演劇人が集まって思いを語ろうとすることは今まで無かったので、私にとってはとても嬉しいことだった。何かが変わるんじゃないか。ここから何かが始まるんじゃないか。と思いながら、幾度ものミーティングに参加してきた。

そこからじりじりと、でも一年という期間を考えればめまぐるしいスピードで確かに多くが変わった。学校の教育現場や福祉の現場に舞台人や芸術を生業とする人々が立つようになった。多くの市民が訪れた「来て、見て、あるくと。」の開催。今まで触れることのなかった人たちの中に「舞台表現」や「演劇」が静かに浸透し、息づき始めていることを感じる。遠くのどこかにいた「芸術家」が社会との距離をぐっと縮めたように感じる。

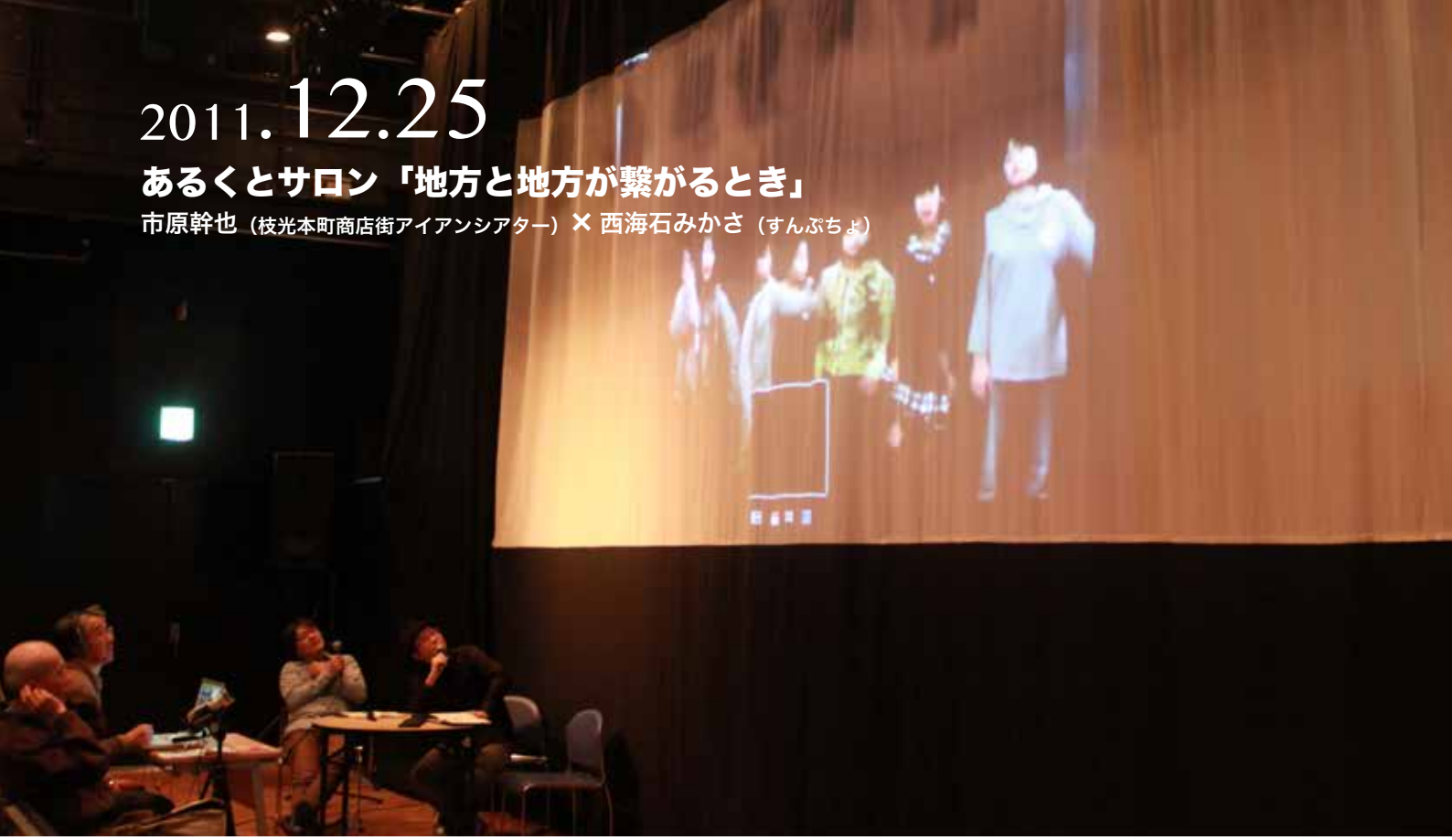
これからも社会と芸術家との間をつなぐ「あるくと」が続いていき、長く人の心を支える活動を続けられるよう、私も関わりを続けていきたい。

TheatreGroup"OCT/PASS"
美峰子（みほこ）

「来て、見て、あるくと。」実施概要
実施日：2011 年 12 月 24 日～ 27 日
会場：エル・パーク仙台スタジオホール
主催：ARC ＞ T ／企画・製作：あるくと年末企画委員会
舞台：今野芳明 (株式会社 FACTORY-K) ／照明：松崎太郎、柴成美／音響：本儀拓 (キ–ウィサウンドワークス)
助成：財団法人仙台市市民文化事業団／後援：仙台市／協力：こどもとあゆむネットワーク、せんだい演劇工房 10-BOX

内容：
【出前プログラム】
『おはようシアター☆おもちゃ箱』
仙台シアターラボ『ものの気持ちワークショップ』
大沢佐智子『トントントントンくぎうち遊び』
【ダンス】
すんぷちょ『Midorigo』
すんぷちょ『Maek(マエク)』
【リーディング】
あるくとメンバー有志『それゆけ安全マン !? ～レントゲン・チェルノブイリ・フクシマ～』
千賀ゆう子『白痴』
『ままのりーでぃんぐ』
郡山演劇研究会「ほのお」『愛しき福島へ～原発から 50 キロのまち～』
シェイクスピア・カンパニー『エッセンシャル・シェイクスピア：レクチャー＆パフォーマンス』
TheatreGroup"OCT/PASS"『人や銀河や修羅や海胆は』
あるくとメンバー有志『赤ずきんちゃんの森の狼たちのクリスマス』
短距離男道ミサイル『クリス☒ミサイル』
Gin's Bar『BLACK- 家族の肖像 -』
【演劇作品上映】
架空の劇団『瓦礫と菓子パン～リストランテ震災篇』
【トークセッション】
あるくとサロン 1「共に歩いた 288 日」
あるくとサロン 2「地方と地方が繋がるとき」
あるくとサロン 3「クリエーションを通して繋がっていく」
あるくとサロン 4「繋がった、その先へ」

12月28日　宮城県が借り上げ仮設住宅新規受付終了
12月26日　宮城県が応急仮設住宅全戸完成
12月24日　年末企画『来て、見て、あるくと。』開催（エル・パーク仙台スタジオホール・～27日）
12月23日　東松島市と岩沼市が「環境未来都市」に指定
12月22日　気仙沼市が一次避難所をすべて解消
12月21日　JR常磐線が福島県原ノ町～相馬間運転再開
12月20日　宮城県内の仮設住宅全戸が完成
12月18日　あるくとオフィス大掃除
第24回定例会
12月16日　「復興庁設置法」公布・施行
勉強会：砂連尾理ワークショップ「からだであそぶ、こどもとおどる」（10-BOX）
12月14日　「東日本大震災復興特別区域法」公布・施行
12月12日　花いちもんめクリスマス敬老ウィーク（～17日）
12月11日　石巻市が待機所閉鎖
東京から石橋財団ご一行来訪
宮城県障害者福祉センター主催「わくわく☆ダンス」開始（講師：西海石みかさ）



2011.12.25

あるくとサロン「地方と地方が繋がるとき」

市原幹也（枝光本町商店街アイアンシアター）✕ **西海石みかさ**（すんぷちょ）

「来て、見て、あるくと。〜共に歩いた 288 日、そしてこれから〜」で行われたトークセッション・あるくとサロンから一部を抜粋して掲載する。

進行：鈴木拓（ARC＞T 事務局長）

市原　北九州市は八幡製鉄所があった町です。いま高齢化が進んでいて、北九州市は 25%、枝光は 35%です。アイアンシアターにはのこされ劇場というレジデントカンパニーがあることが特長です。

鈴木　市原さんは、ARC＞T の前身の「震災復興のための仙台舞台人会議」のときからコンタクトを取ってくれて、3 月下旬には招聘公演のお誘いをしてくださいました。

市原　僕たちは、どれだけ想像しても想像が及ばなくて、情報が来ない中、九州から震災を見つめていました。交通も通信も遮断され、お金集めても届かないと言われて、居ても立ってもいられないという状況でした。僕は、知り合いが仙台にいたので、芝居好きの人はどうしているのだろうと会議中継の映像を見ました。

西海石　あの会議のことはよく憶えています。市原さんからの申し入れを聞いて「枝光に行きたい！」と思った。夏に一度伺ったときは驚きました。商店街から差し入れはあるし、小学生が放課後ランドセル背負ったまま「脚本書いたから見て」って劇場にやってくるし、子供がいつのまにか何か作っている。この関係はすごい。そんな劇場は他にないですよね。

市原　「毎日玄関を開けておく」ということが劇場として重要だと思います。開いているときはいつでも誰でも入ってきていいし、公演していない時間は広場として使っていいんです。それと、レジデントカンパニーが居ることが重要ですね。学校でも塾でも会えない特殊な人間がいる。一緒に遊んで、一緒に面白いこと考えてくれる人がいる。ある日、突然子供たちがやってきて「劇団作ったよ！」って言ったときにはびびりましたね（笑）。

そうやって「みんなに関係ある場所だよ」と伝えてきました。その気になればいくらでも関係できる場所として開いているのがこのシアターの特長で、それをみかささんが感じてくれたようです。すんぷちょは、最後には客席と舞台のボーダーもなくしてしまった。えだフェスでも特殊な作品でした。

西海石　ワークショップしたとき、枝光の良いところをささやくシーンがあって、子どもたちが「宮川公園と、アイアンシアター」って言ったんです。

市原　核心を突いてますね（笑）。彼らのいま生きている場所ですからね。劇場では子供向けのものをやるんじゃなく、子供が見ても面白いものをやろうと思っています。子供にはジャンルは関係ないから。

西海石　本番中に DS 出されたら負け（笑）。

市原　暗転のときには DS 閉じるんですよ、光が漏れるから (笑)。小学生は無料で見られるようにしていて、それはアーティストにも確認します。子供は子供なりに楽しみますが許してください、と。逆に子どもたちには「本番中なぜ大きい声を出してはいけないか」とか観劇教育はしています。あるとき未就学児 OK にしたことがあって、子供が騒いで他のお客さんに迷惑かけちゃったかなと反省してたんですが、あるお母さんがやってきて「御礼が言いたい」と言うんです。「普段ずっと家にいて子育てが大変だけど、今日は久しぶりに舞台を観ることができて、明日からまた頑張ろうと思った」と泣きながらおっしゃる。それを見たときに、僕たちは誰のために演劇をしているのか、どこに届けたいのかということをきちんと考えてやらないといけないと思いました。

鈴木　ところで、アイアンシアターはどういう仕組み、または覚悟で成り立っているんですか？

市原　前提としてお金儲けをしなくていいということがあります。もともと銀行の廃ビルをリノベーションしたので、ゼロから手作りで、町の人が出資者です。自分の楽しみのために、子どもたちのために、未来のためにこの劇場を残したいと思うまちのおっちゃん、つまり中小企業の社長さんたちが出資しています。それと、劇場の出入り口に募金箱があって、ランニングコストはそれでまかなっています。
だから、「この劇場は誰のためのものか？」という問いの答えがそこにある。顔が見えているその人たちを喜ばせるだけです。「この劇場が必要だ」と行動で示している人のためにこの劇場は在る。それが枝光という町の規模とも一致しているんだと思います。

鈴木　仙台の規模だとそのようなことはできないな、と思ってしまったんですが…

市原　アイアンシアターがどうやって成り立っているかというと、隣の人の手を握っているだけですよ。「ここにいていいよ」とお母さんにも、車椅子の人にも、芝居好きの人にも手を握っているだけです。手を握ったら温かいし、握り返されたら嬉しい、という原則です。これが実感として、その人に、劇場に、蓄積される。そのことからしか始まらないと思います。仙台でアイアンシアターみたいなものを作るのにどうしたらいいかと言うと、隣の人の手を強く握るしかないんですよ。その 10 人が面白いって言って集まったら、その手を離さないということです。それは仙台の演劇人にもできます、始めようと言ったら始まります。いまテクノロジーが飽和して自分たちの手で扱いきれなくなっているけど、本来は人間を助けるのがテクノロジーの役割です。その使いようでは手を繋いでいる身近な 10 人と遠くにいる別の 10 人が繋がることができる。とにかく実際に会って話を聞いた、手を繋いだという実感を元に繋がっていくしかないですよ。
さらに言えば、アーティストは人間や時代が繋がっているんだという一つの「層」をダイナミックに可視化するのが仕事だと僕は思います。いま孤独だと言って路頭に迷う観客のひとりに向かってそれを示すことがアーティストの仕事の一つじゃないかと思うんです。実際に手を繋ぐには、手が 2 本しかないから限界がある。でもアーティストの作品からは無数の手を広げられるんです。劇場という場は、そうやって人と人のつながりでうまれる。

鈴木　キーワードとしては、「知っている顔」「目の前にいる人と手をつなぐ」ですね。

西海石　ただ、自分の「目の前の人」というのがご近所の人とは限らないかもしれませんね。仙台でやる場合はちがうコミュニティの作り方があるだろうと思いました。

鈴木　経済原理で動く東京の方法とはちがう、地方同士がその土地でしか成立しない方法を勉強し合うのは有効だと思います。枝光と仙台が繋がったこの先にあるもののイメージはどんなものでしょう。

市原　僕は、仙台は初めてで、知らない町なのだけど、知っている人が住んでいる町だから「当事者意識」がありました。点と点を繋ぐのは、実際に人と会って友だちになるしかないと思います。いまのテクノロジーがあればそれができます。

西海石　枝光の人が Ustream で見守ってくれていることを知っていたから私たちはがんばれたし、ホンジュラスで生まれた作品を枝光でやれました。世界は繋がるんだなあと思いました。

2011.12.26

あるくとサロン「クリエーションを通して繋がっていく」

石川裕人（TheatreGroup"OCT/PASS"）× くらもちひろゆき（架空の劇団）× 千賀ゆう子（千賀ゆう子企画）

写真：矢嶋哲哉（河北新報社生活文化部）

鈴木　震災後、創作に迷いや葛藤はあったか、表現者としてどう考えたか、などをお聞かせください。

石川　直後から１か月は何も手に着かず、何をしたらいいかわからない状態でした。セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンから ARC ＞ T経由で、被災地の子どもたちのために芝居を作る企画の話があり、４人の役者とスタッフ２人、ワゴン車１台で５月の連休に宮城県と岩手県の沿岸被災地６箇所を回りました。(*1) 子どもたちがとても喜んでくれましたが、大人は芝居を楽しむという状況ではなかったようです。その後、自分たちの劇団で７月から内陸部を、10 月からは別の沿岸被災地を回りました。(*2) 今度は大人も観に来て、泣いて喜んでくれる人もいました。それを見たときに「芝居には力がある」と確信しました。これから復興には長い時間がかかると思いますが、私は芝居を通してお客さんとコミュニケーションしながら、東北でしかできない芝居を創って行こうと思っています。

くらもち　盛岡では、３月の公演はほぼ中止か延期になり、４月初旬から復旧してきました。５～６月に上演された新作には、震災の影響が感じられるものがありました。私たちは６月の公演 (*3) を当初の予定どおりにやって、それについて「自粛」とか「心が折れている」とは考えなかったです。５月下旬に ARC ＞T から、横浜から招聘の話があると聞いたときは「考えさせてくれ」と答えました。被災県ではあるが被災者ではないわれわれがよそに芝居を持って行くことをどう考えるべきなのか。結果、「震災直後、現地でどんなものを食べて命をつないだのかを芝居にしよう」と考えました。マスコミでは報じられない現地の事実を伝えに行くことは意味があるのではないか、と。それが大きなモチベーションになりました。しかし、食べものの話とは言え、震災のことなので生々しいところがある。東北ではまだ無理だけど、横浜や東京とか遠いところでならやれるかもしれないと思いました。(*4)

千賀　東京では知り合いの劇団もみんな自粛して、延期か取りやめにしていました。私自身も気持ちがざわめいて、自分に何ができるんだろう、何もできない…自分は芝居しかできないので『白痴』を語ろうと思いました。(*5) ５月から東京、桐生、新潟、神戸、京都を回って仙台にたどり着いた感じです。東京の人たちは、関心はあっても具体的に何かしたかというとよくわからない。時が経つと忘れてしまう人が多いから、今後の問題として考えなくてはならないと私は思います。阪神淡路大震災も忘れられてきて、でもまだ傷跡は残っているのです。私は来年の３月 11 日に石川裕人さんの作品を東京で上演する予定です。(*6)

鈴木　観客の変化は何か感じますか。

石川　震災後は、本当に芝居を見たい人が来るようになったようです。義理じゃなく、本当に見たいものを自分がどう感じるのか。慰められたいとか楽しみたいとかいろいろあるけど、そういう欲求が純化された感じがします。また元に戻るかもしれないけど。

くらもち　盛岡で震災後初めて行われた公演 (*7) に 40 人くらい来たので驚きました。こういう状況でも、あるいはこういう状況だからこそ、人は芝居を見たいのだなあと思いました。自分が見る側に立ったとき、どうしても震災と関連づけてしまう。それは明らかな変化だと思います。

千賀　東京でも同じで、震災のことをオーバーラップさせているお客さんが多いです。東京のお客さんは普段、感想をすぐ言うことはないし、アンケートもあまり書かないんですが、今回は終わってすぐ言いにきましたし、アンケートも多数ありました。私自身は部外者で、直接の被災者でもないのにおこがましいという気持ちが今でもあるんですが、でも自分は公演をやって良かったと思っています。

くらもち　「自分は死んでいても不思議じゃない」と思ったので、「申し訳ない」なんてことは思わず、「拾った命なのだから、やれることはやる」という気持ちです。でも、「被災者ではない自分が横浜でやるのは、おこがましいかなあ」とも思ったんですよね。

石川　わたしはおこがましくないと思っています (笑)。私の家や家族は無事でしたが、同級生や親戚は亡くなっている。こんなにショックだったことはない。これは完全に被災しているんです。だからおこがましくはない。

鈴木　ご自分の創作について変わったこと、あるいは変わらないことはありますか。

石川　明確に変わったことは、震災後、原発のことも含め、東北の抑圧された歴史に立ち向かわなければいけないという気持ちになったことです。復興が遅れていること、原発の立地のこと、国家的な意思が完全に表れていて、戊辰戦争がらみの差別が今でも続いている。今後、私は芝居の中に東北人のアイデンティティーのようなものを必ず入れていくでしょう。宮澤賢治のことがこじつけなくても自分の中に自然にすっと降りてくるのは、そういう血が流れているのかなと思います。

くらもち　僕は、生まれは茨城だけれども、選んで東北に居るので、東北のことを語ってもいいだろうと思います。自分が居るであろう場所、「ここ」を世界の中心にして書くしかないと思います。このことは変わりません。演劇というメディアは、広くはないけれども、深く狭いところに強く訴えかけることが可能だと思うので、僕らが何かできるとすれば「きちんと伝え続けていくこと」だと思います。これまで芝居をつくるときに、自分の外側にある何かを伝えたいと考えたことはなかったのですが、伝えたい気持ちになった。それが震災を受けてのいちばんの変化です。

くらもちひろゆき
劇作家、演出家、俳優、架空の劇団代表。盛岡劇場での企画「もりげき八時の芝居小屋」や市民参加演劇「劇団モリオカ市民」などを支える。新作は渡辺源四郎商店との合同公演『震災タクシー』を予定するほか、劇団モリオカ市民での「震災三部作」を構想中。

千賀ゆう子（せんが・ゆうこ）
女優、演出家、千賀ゆう子企画主宰。言語性と身体性を根源的に問い直す実験的な舞台活動を展開。古典や現代詩の語りや音楽家たちとの即興演劇など多数上演。国内および国外で広く公演やワークショップを行う。仙台とは 20 年来の交流がある。

*1：「夢とらっく劇場〜結〜『セロ弾きのゴーシュ』」作＝宮澤賢治、構成・演出＝石川裕人。2011 年 4 月 29 日〜 5 月 5 日、岩手県釜石市、山田町、陸前高田市、宮城県名取市、東松島市、石巻市を巡回公演。

*2：TheatreGroup"OCT/PASS" 第 33 回公演『人や銀河や修羅や海胆は』作・演出＝石川裕人。2011 年 7 月に大河原市、仙台市、大崎市にて、10 月から 11 月にかけて石巻市、七ヶ浜町、東松島市、山元町、応急仮設住宅団地あすと長町にて、無料 (投げ銭) で公演された。

*3：架空の劇団第 14 回公演『お伽噺 ままごと心中』作＝高橋拓、演出＝くらもちひろゆき、2011 年 6 月 17 日〜 19 日、盛岡劇場タウンホールにて。高校生が心中するという物語。

*4：架空の劇団番外公演『瓦礫と菓子パン〜リストランテ震災篇』構成・演出＝くらもちひろゆき。PAW' 横浜 2011「東北・復興 week」からの招聘を受け、2011 年 9 月 22 日〜 23 日、相鉄本多劇場にて上演。メニューを読む『リストランテ』というレパートリーを、震災後に見聞した実話に基づいてアレンジした作品。2012 年 4 月 25 日〜 27 日、盛岡劇場タウンホールにて再演された。

*5：千賀ゆう子企画公演「S」シリーズ Vol.43「ライブリーディング『白痴』」作家・坂口安吾が昭和 21 年に発表した小説。

*6：千賀ゆう子企画公演「S」シリーズ番外編「『方丈の海』東京先行リーディング」作・演出・脚本＝石川裕人、2012 年 3 月 11 日、東京ストライプハウスギャラリーにて。名取市閖上出身で東京在住の俳優・相澤一成も出演した。

*7：劇団ゼミナールコントライブ『S.O.S~The Sound Of Silence~』2011 年 4 月 8 日〜 10 日、盛岡劇場タウンホールにて。公演初日前夜に大きな余震があり、東北の広い地域で停電し、公演が危ぶまれた。

2011.12.27

あるくとサロン「繋がった、その先へ」

小川智紀（ST スポット横浜）× 鈴木拓（ARC＞T）

小川　ST スポット横浜は劇場を持つ芸術機関で、「アートの持つ力を現代社会に活かす」というミッションを掲げて、劇場の運営と現代演劇やコンテンポラリーダンスをはじめとした事業の企画・運営、芸術普及・教育普及事業を実施しています。87 年に市民ボランティア団体として始まり、2004 年に NPO 法人になりました。アート教育事業部では横浜市と協働する「横浜市芸術文化教育プラットフォーム」事業の事務局を運営しています。横浜には約 500 の学校がありますが、今年度はそのうち 77 校にアートプログラムを届けました。鑑賞型よりは参加体験型を重視しています。その半分は音楽ですね…演劇はもっとがんばれと僕は言いたいですが (笑)。

鈴木　小川さんが演劇に関わったきっかけは何ですか。

小川　演劇が好きで、学生の頃に演劇もやったのですが、全然面白くなくて。当時、僕の大学の講師だった如月小春さんが姫路の児童館で野外創作移動劇をやっていてその現場に入ったことがありました。うまく言えないんですが、それは僕が思う「演劇」だったんです。上手いとか下手とかではなくて、鬼ごっこみたいなものが演劇であり、芸術であり、僕はそんなもののために仕事をしたいと思いました。舞台の中にだけ演劇があるとは全く思わなくて、学校やまちや、行政の中にだって演劇があってもいいんじゃないか、とそんなことを考えているうちにここまで来ていたという感じです。

鈴木　仙台から見ると横浜市は芸術への理解度が高いように見えますが、実際はいかがですか。

小川　仙台市と横浜市の文化振興予算を人口比で較べると、実はそんなに差はないんですね。でも、横浜には文化振興とは別に、行政による「創造都市」の戦略があって、創造都市事業費として流動性の高い予算がついています。その創造の目的は、もちろん観光、人を呼ぶためです。横浜というと赤レンガ倉庫や港のイメージがありますが、横浜市の面積の 5%にしか過ぎない。あとの 95%についてはあまり語られていませんね。

鈴木　横浜ではアートフェスティバルが多いし、古い建物をリノベーションして次々とアートスペースにしていたりもして、それは仙台では考えられないことです。まちとアートを考えるときに、横浜のやり方に見習えるところがあるんじゃないかと思いました。

小川　創造都市戦略の中で、まちをアートで活性化しようとする動きがあります。古い建物をリノベーションして、多少ルーズに使える場所を意識的に創っていこうというのもその一環ですね。例えば、黄金町はその昔、赤線地域だったのですが、いまはアトリエが多くあり、アーティストが集まる地域になりました。行政が強力に支援して、そのネガティヴなイメージをアートで変えていこうとしたものです。行政主導でアートが動いている側面がありますね。それと、95%の地域で活動している地元の劇団には十分な環境ではないかもし

れない。誰に向けての芸術、文化なのかは問われていいと思います。

鈴木　小川さんは震災直後の４月に来仙し、以来、ARC＞Tと中央のつなぎ役と言いますか、多くのアドバイスをいただいてきました。横浜は「中央」と呼ばれることには抵抗があるかもしれないですが…

小川　横浜って中央に見えますか？今回「中央」とは何なのかな、とすごく考えました。震災以降、東北は中央、つまり国ですね、その動きに振り回されてきたところもあったのではないかと思うんです。でも、「東京イコール中央」ではない、もしかすると東京からローカリティを抜くと中央になるんじゃないかという気がします。現地の人の意見を聞けば良いのに、実際はそうはならないという中央の横暴な動きは感じましたので、何とかしたいと思いました。だから僕は「いま中央はこんなふうになっていますよ」と情報提供できたら、と思ってARC＞Tに連絡したんです。

鈴木　その頃、ARC＞Tや東北でのアートによる復興活動はどう見えていましたか。

小川　ARC＞Tのことは「中央」には見えていないでしょう。「東北アーツカウンシルみたいなものがあったら、まとめて支援金を渡してアーティストに分配してもらえるのに…」という声は中央の方からよく聞こえてきましたね。毛細血管のように、アーティストや市民個人に支援金を届けてくれる中間支援組織を探していました。宮城県で最初に名前が挙がったのは10-BOX、えずこホール、メディアテーク、宮城県美術館ぐらい。ただ、いずれも行政組織だから支援金の分配を受け持つことはできないだろうとは思いました。私は偶然３月末の「東北復興に向けての仙台舞台人会議」をUstreamで見て、ここにこういう人たちがいて、具体的にこんなことを求めているんだとわかりました。そして、彼らを取りまとめる人が出て、その人とやりとりすれば効果的な支援ができるかもしれないと思って、ほっとしたことを覚えています。

鈴木　いまのARC＞Tはどう見えていますか。

小川　私からすれば、創造団体ではなく、中間支援の組織であると見ています。中間支援組織は、行政や支援元よりも、より個別のアーティストに近いところにいて、現場の実際の様子をわかりながら、支援元とやりとりできると思います。で、これからはNPOと財団みたいなところが一緒にやれればいいと思っていて、だから10-BOXの中にARC＞Tのオフィスがあるのはいいことだと思うんですよ。市民文化事業団は一次中間支援、ARC＞Tはよりきめ細かい二次中間支援になっていけばいいんじゃないかな。実際の現場の状況を支援元に伝えて、もっと使いやすい仕組みを提案していく。宮城県だけじゃなく、被災３県の情報を集約して行政に働きかけていったら、今ならば制度が変わるんじゃないかと、期待して見ています。

鈴木　ARC＞Tはこれまでにない組織なので、今までの概念にはめようとすると「いずい」（＝しっくりこない）ことがいろいろあります。事業計画を立てて、予算があって、それを間違いなくやることが今までの通常のやり方とすると、ARC＞Tの活動はまったくそのやり方があてはまらない。今後、ARC＞Tをどういう形にしていったらいいでしょうか。

小川　アーティストは「やりたいからやる」べきであって、やりたくないことはやっちゃいけない。それが基本原則だと私は思っています。しかし、実際は既存の制度の中でどう実現していけるかを考えていかなければならないし、行政からのお金を使うと、やりたくないことまでやらないといけないということも起こってくる。仙台だったらどういうやり方があるのかを探ることが必要でしょうね。

鈴木　いまARC>Tは行政から意見を求められることがあります。これは以前とは大きな違いで、仙台では表現者と行政はそういう関係ではありませんでした。今後、例えばARC>Tが行政に提言していくためには、組織としてヴィジョンや強い意志を持たなければいけないでしょうが、緩やかなネットワーク体として成立しているARC＞Tとしては自己矛盾を抱えることになります。それでも、まちの中でのアートの在り方ということを大きな視点で考えるならば、提言していかないと状況は変わらないだろうし、今なら行政が聞く耳を持ってくれている実感があるから、やらなければいけないとも思っています。今のうちに未来のことを考えはじめなければ、と思っています。

小川智紀（おがわ・とものり）
NPO法人STスポット横浜副理事長、同アート教育事業部ディレクター、横浜市芸術文化教育プラットフォーム事務局長ほか、アートと子どもをつなぐ場で活躍。ARC＞T草創期から現在まで、経験に基づいた適切かつ親身な助言を与える。STスポット横浜とARC＞Tの協働事業「高齢者と地元アーティストによる学びあい事業」ではアドバイザーを務める。

1　花いちもんめクリスマス。東松島市赤井地区と大曲地区にある２つの施設で１週間ずつ、連日出前を実施した。（2011 年 12 月 12 日〜 2012 年 9 月 17 日）

2　砂連尾理ワークショップ「からだで遊ぶ、子どもと踊る」（2011 年 12 月 16 日）

3　スタッフクラブ 21 の忘年会に参加。（2011 年 12 月 26 日）

4　宮城県障害者福祉センター主催「わくわくダンス」が始まる。西海石みかさを講師に、障害の有無を越えてダンスを楽しんで　いる（2011 年 12 月 11 日〜）

5　文化庁「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」- 派遣事業 -

6　宮城野児童館 (仙台市宮城野区東宮城野) のクリスマス会。高校生のブラスバンド演奏に照明家の髙橋亜希が照明演出を出前（2011 年 12 月 22 日）

7　花いちもんめでこれまでの振り返り。ST スポット横浜の小川智紀氏、枝光本町商店街アイアンシアターの市原幹也氏も参加した。（2011 年 12 月 28 日）

5

6

7

あのときあれから

「わくわく☆ダンス」にワクワク！

「来てよかった〜」「みんなが笑っているので自分もたくさん笑った」「自由に踊るのは難しいと思ったけど、だんだん踊る楽しさがわかった」「私のダンスを観てくれてありがとう！」「みんな良くできました」

わくわく☆ダンスに参加してくれた方々の声です。ハイタッチあり、セクシーポーズあり、クラッシックバレエあり、ティッシュダンス？あり…。振りを覚えるのではなく、人の数ほど動きは生まれ、星の数ほどダンスがある…そう思う瞬間があった当センターの教室「わくわく☆ダンス」。西海石みかささんと ARC ＞ T の皆さんとの出会いから新しい笑顔がたくさん生まれています。

福祉センターは有り難いことに、いろいろなご縁とつながっています。なかでも「ダンスパラダイス」（ディスコパーティー）を毎年開催しており、曲に合わせて自由に踊る楽しさを一人でも多くの方に届けたいと思っていました。今回、ダンスの原点を見いだせたご縁に感謝しています。そして、人それぞれの個性をどんどん引き出してくれる、いや、自分から出してみたくなる、お話ししたくなる、“ 徹子の部屋 ” ならぬ “ みかさの部屋 ” にドキドキしながら、24 年 5 月から始まる第 2 期の「わくわく☆ダンス」に期待しています。

宮城県障害者福祉センター　佐々木明子

石巻市南浜町（2012 年 1 月 8 日　撮影・川村智美）

REPORT

レポート：横田泉

2011.12.12-2012.5.31
高齢者と地元アーティストの学びあい事業

次代を担う子どもの文化芸術体験事業 - 派遣事業 -〈東日本大震災復興支援対応〉の実施を通じて、アートプログラムの出前を求める声が宮城県内だけでも想像以上にあることがわかった。ARC＞T では、今後、より多くのアーティストが、より多様なプログラムを、より多くの人たちに届けられることが望ましいと考え、新しい出前プログラムの開発と、すでにあるプログラムの向上を目的に「出前プログラム研究会」を発足させた。

まずは高齢者を対象としたプログラムづくりを開始した。これはジャパン・ソサエティ東日本大震災復興基金からの助成を受け、「高齢者と地元アーティストの学びあい事業」の一環としておこなわれることとなり、出前先の花いちもんめ職員との意見交換と振り返りを繰り返しながら展開していった。「高齢者には速すぎる」「複雑すぎる」など、実はそれまでの出前で「言うに言えなかった」という率直な意見をいただき、アーティストは施設側との信頼関係をつくりながら、さらに工夫を重ねた。

なお、この出前プログラム研究会では、2012 年度に子ども向けプログラム、障害者向けプログラムの研究も開始した。

以下は「高齢者と地元アーティストの学びあい事業」についてのレポートである。

「高齢者と地元アーティストの学びあい事業」の始まりとなったのは、東松島市にある老人福祉施設「花いちもんめ」での出前活動でした。

宮城県の沿岸部に位置するこの施設は、２つある施設の一つが津波で建物の１階部分が浸水するなどの被害を受けました。しかし利用者さんからのニーズなどもあり、震災後１週間ほどで被災を免れた施設は再開。その後、施設長である千葉信さんは５月に ARC ＞ T の存在を知り、利用者の方に何か楽しみをと考え、ARC ＞ T にアーティストの派遣を依頼しました。ARC ＞ T から月１回の定期出前を行うこととなりました。

ARC ＞ T が行う出前に対して、もともとは「これをしてほしい、あれをしてほしいという要望は思いつかなかったんです」と話す千葉施設長。ただ、職員も被災しているという状況で、施設の片付けで手一杯になってしまい、利用者の方まで手が回らなかったといいます。そんな中「少しでも利用者の方がにぎやかになるような、気晴らしになることをやってもらいたい」と考えていたといいます。

そうして何度か出前を重ねていくうち、出前に行った ARC ＞ T メンバーは利用者さんの反応が分かれていることに気がつきました。盛り上がっている人とそうでない人がいるのはどうしてなんだろう、と考えるように。そこで、出前のプログラムをより良いものにするために施設側に内容を相談するようになりました。加えてこの活動に対して助成金も受けられることが決定。こうして「出前」から「学びあい事業」へと発展していきました。

学びあい事業の特色は大きく３つあります。施設職員さんとアーティストが相談や意見交換をすること。毎月末に実施の振り返りをする報告会が行われること。さらに高齢者への理解を深めるための勉強会が開かれることです。これらは先に述べたように、派遣されたアーティストが、施設でより良いプログラムを行うために始めたことでした。しかし、それ以外の部分でもアーティストや職員の方に大きな収穫があったといいます。

タイ伝統舞踊家の土屋悠太郎さんは、学びあい事業に参加するアーティストの一人です。土屋さんは事業が始まるにあたって、花いちもんめへ新しいプログラムの提案に行きました。しかし当時のことを「アイディアに対する不安要素や課題をいっぱい出されて、普段通りのショーをした方がいいかもしれない…くらいの感じだったんです (笑)」と振り返ります。そしてその後、試行錯誤が始まったと言います。

「アドバイスをいただいてから、ひとつひとつ、その課題にどう応えたら良いかを考えていきました。しかし、それにすべて合わせてしまうと、今度は自分がやりたいこととかけ離れてしまう。そこで自分が本当に何をやりたいのか、ということを改めて考えて、作品の中に組み込んでいきました。その結果、アドバイスしていただいた効果で利用者の方には喜んでもらえ、自分たちも楽しんで取り組めるプログラムになりました」

打ち合わせでの具体的なアドバイスについて、同じく花いちもんめで活動を行った俳優の上島奈津子（かみじまなつこ）さんは次のように話します。

「以前、利用者さんの世代では『歌声喫茶』が流行ったんじゃないかと考え、当時流行した『上を向いて歩こう』を歌う案が出ました。すると施設の方からは『それはハイカラな東京の歌。こっちの方には農家や漁師の方が多いから、民謡の方が良い』とアドバイスがありました。仙台市内の施設だとまた必要とされるものが違ったりと、場所などによってニーズに違いがあったんです」

施設長の千葉さんは、意見交換を行う効果についてこのように話します。
「今までのボランティアさんの慰問活動だと、どちらかというとこちらが受け身になるものが多く、発表会のようなものを私たちは見るだけでした。それが ARC>T さんの場合だとこちらから要望が言えるので、プログラムの内容を変えていくことができる。私たち職員が、見る側から参加する立場になったんです」

実施の振り返りをする報告会では、アーティストがプログラムの内容や利用者の方々の反応を報告。他のメンバーと情報を共有し、反省点などを次回に反映させるべく、話し合いが行われました。また、勉強会では千葉施設長が高齢者の心理や認知症についての講演を行うなど、アーティストが高齢者に対する理解を深めていきました。

こうした意見交換、実施、振り返りといった作業を繰り返すことで、参加したアーティストはさまざまなことが分かってきたといいます。認知症の方はストーリーを覚えることが難しいため、複雑な劇や朗読は向かないこと。視覚に訴えるものが効果的なので、セットや衣装はしっかり準備した方が良いということ。実施の前に利用者の方と一緒にお昼ごはんを食べるなど人間関係をつくってからのほうが相手に伝わりやすいということなど。

そうした中での大きな発見として「職員が出演すると利用者に喜ばれる」ということがありました。普段接している職員の方や千葉施設長が、面白い衣装を身につけて劇や踊りをする姿を見て、利用者の方はとても盛り上がるそうです。そして、職員がプログラムに参加することは、施設側にとって別の大きな意味があると、千葉施設長は言います。

「新人職員は利用者さんとまだ十分にコミュニケーションがとれていないんです。それが、プログラムの中でありのままの姿を見せることで、利用者さんと職員の仲が一気に深まる。おとなしくてなかなか打ち解けられない職員も、私が率先して参加することで『施設長があそこまでやるなら自分もやるしかない』と思って、やってくれるようになります。また、おとなしい職員は『自分が本当に役に立っているんだろうか』と考えてしまうところがあるんですが、これを経験することで『自分はやれるんだ』という自信がつく。顔つきが全然違ってくるんですよ」
それはまた、千葉施設長の理念を伝える手助けにもなっているそうです。

「私が自分をさらけ出して、みんなの前で笑いをとったりすると、仕事に対する本気の姿勢が伝わるんです。これは言葉で 100 回理念を語るよりも、ずっと効果があります」

プログラムの質の向上のために始まった学びあい事業ですが、現在はこうした職員教育の面でも大きな効果を感じていると言います。
「この事業を通して、人間として成長させてもらっています。一方的な活動ではないので、アーティストと職員相互に予期せぬ効果が得られました。それこそ “ 学びあい ” ですね」（千葉施設長）

事業の名前通りの効果を実感しているようでした。

出前プログラム研究会から生まれたプログラム

タイの民話のハイブリッド紙芝居

「タイ民話のハイブリッド紙芝居」は、タイの民話をベースにした舞踊と演奏、お芝居を一体にしたもので、スクリーンに物語の絵を投影して上演します。この形態は、前々からやってみたいと思っていました。千葉施設長からは「認知症の人には理解できないかもしれない」というご意見を頂きましたが、時間をかけて取り組むからには、本当にやりたいことをやろうと、このプログラムを進めることに決めました。

プログラム作りから上演まで、メインで参加してくださったのは、長保めいみさんと上島奈津子さんです。お二人とも役者の視点と技術を活かし、どうすれば分かりやすく、物語を理解してもらえるのかを考えてくださいました。ARC＞Tのすごいところは、こうした多ジャンルのアーティストと創作活動ができる点にもありますね！

施設の職員さんたちにいただいたアドバイスも、作品を作る上で大変参考になりました。強く印象に残ったのは「高齢者を否定せず、存在感を認める。人を幸せにすることは、自分を幸せにすること」という千葉施設長の言葉です。介護の世界のみならず、表現する上で観客と向き合う意識としても大事なことだと思いました。

本番当日、利用者さんたちはよく笑い、お芝居にも参加してくださり、内心、意外でした。職員さんからは「普段自分から行動しない認知症の方が、楽器を鳴らしていたのでびっくりした」という声を聞くこともできました。タイの文化と芸能に親しむことができ、世界観に入っていきやすいこの作品は、とても気に入っています。今後も機会があれば、喜んで上演していきたいと思います。

タイ舞踊家　土屋悠太郎

歌っておどる花いちもんめ

「歌って踊る花いちもんめ」の企画の発端は音楽に触れるたびに柔らかくあたたかい表情になっていた祖母の姿の記憶からによるものでした。

花いちもんめに伺う度、利用者さん達に声をかけていただいたことが何よりも嬉しく、同時に自分の祖父母の顔が浮かんでいました。生演奏を活かしたこのプログラムでは雰囲気作りのため、場の設置の段階からピアノ演奏を始めました。CDを聴いている時とは違い、目の前で演奏が始まると集中して耳を澄ませているのがわかり、耳馴染みのある曲だと自然に歌を口ずさんだり手を叩いたりと素早い反応がみられました。 また、歌う前に体をほぐすための簡単な体操を生演奏で行い、利用者さんの状態をみてテンポを調整することを心がけました。

普段カラオケを使用している際はあまり歌われない方々も一緒になって歌っている姿があり、「もっと歌いたい！」と声をあげてくださる方もいて、プログラムが終わると笑顔や元気に満ちた様々な表情を見ることができました。

音楽によって記憶の中の自分に触れそれぞれの想いのままみんなと一緒に唄っている姿、素晴らしい歌声を私達は聴かせていただきました。一人一人が持つ記憶と独特な音、歌声に重点を置くことによっていかようにも変化するプログラムであることを教えられました。

場所を選ばず、どこにでも持っていけるこのプログラムを今後も続けていこうと思います。

ダンサー　渋谷裕子

2012

1月11日　年末企画委員会反省会

1月10日　JR東日本が仙台ー石巻を東北線・石巻線経由で結ぶ直通快速列車運行第25回定例会

1月9日　仙台フィル「音楽の力に本拠地を」シンポジウム開催

1月8日　東北劇作家パネルトーク「東日本大震災と演劇の『いま』」になかじょうのぶ、生田恵が参加（福島・いわきアリオス）

1月21日　青森県立美術館復興支援事業「東北からの声 東北の現在」ドラマリーディングに絵永けい、なかじょうのぶが出演。シンポジウムに石川裕人、なかじょうのぶが参加

1月18日　ウォーキングARC×T street03「長塚圭史と歩くと…二歩目」（10-BOX・～20日）

1月16日　第26回定例会

1月13日　出前プログラム研究会（DPK）第1期説明会

結婚披露宴

我々のチームは、拍手や、鏡割り、万歳三唱を使った体操を第一部、結婚披露宴をモチーフにした寸劇をメインの第二部にした参加型プログラムを実施しました。

実施に向けては、メンバーだけでなく施設の職員の方々にも意見を頂きました。我々の「利用者さんに笑ってもらう」という方向性は職員の方との打ち合わせで決まったものです。また､「利用者さんを一人にしない」､「子ども扱いしない」など、プログラム実施時における注意点もそのときに教わりました。

職員の方の魅力はいい演劇人のそれと似て、一緒に打ち合わせや、プログラムを実施することが、話し合い、稽古、本番を行う演劇製作の流れのように感じられ、いつの間にか職員の方も含めて一つのチームになることが出来ました。

仙台という地方都市で演劇を生業としている者として、演劇で地域に貢献することは必須事項でありますが、それと同じくらい、東京などの他地域で製作される演劇とのクオリティーの差を埋めることもまた大きな課題としてあり、時間はいくらあっても足りない状態です。

しかし職員の方や、出前プログラム研究会のメンバーとの出会いにより、我々演劇人も「一人ではないこと」や、「社会人として扱ってもらえる」ことを実感しましたし、演劇人が社会的に自立していけるという希望が持てました。

地域貢献と作品のクオリティーという２つの課題に引き裂かれながらも、多くの方々に助けていただきプログラムを実施していけたらと思います。

演出家・俳優・仙台シアターラボ代表　野々下孝

「高齢者と地元アーティストの学びあい事業」実施概要

［2012 年 4 月現在］

期間：2011 年 12 月 1 日～ 2012 年 5 月 31 日

協働：社会福祉法人慶和会花いちもんめ

　　特定非営利活動法人 ST スポット横浜

助成：ジャパン・ソサエティ東日本大震災復興基金（ローズファンド）

出前プログラム研究会プログラム

『タイ民話のハイブリッド紙芝居』

リーダー：土屋悠太郎

メンバー：上島奈津子、長保めいみ (シェイクスピアカンパニー)

実施日：2012 年 2 月 21 日 (赤井)、3 月 12 日 (大曲)

内容：タイの民話「サルの生きぎも」をもとにした紙芝居に寸劇とタイの伝統芸能を取り混ぜた作品。

『歌って踊る花いちもんめ』

リーダー：渋谷裕子 (ダンサー)

メンバー：相沢洋美 (アンサンブル・フェリーチェ)、上島奈津子、高橋美和 (アンサンブル・フェリーチェ)

実施日：2012 年 2 月 27 日 (赤井)、3 月 22 日 (大曲)

内容：懐かしの歌のピアノ演奏と歌唱、踊りのほか、イントロクイズや軽体操も取り入れた作品。

『結婚披露宴』

リーダー：野々下孝 (仙台シアターラボ)

メンバー：澤野正樹 (仙台シアターラボ)、樋渡宏嗣 (SENDAI 座☆プロジェクト)

実施日：2012 年 3 月 21 日 (赤井)、4 月 12 日 (赤井)

内容：職員が新郎新婦、施設利用者が披露宴出席者の設定で、婚礼の風習を取り入れた作品。

勉強会

「千葉施設長講習会」

実施日：2012 年 2 月 12 日

会場：せんだい演劇工房 10-BOX

内容：高齢者や認知症の実際について話を聞く。

「佐久間新ワークショップ」

実施日：2012 年 4 月 20 日 -21 日

会場：せんだい演劇工房 10-BOX

内容：ジャワ舞踊家の佐久間新氏ｍｃから、高齢者への接し方を学ぶ。

報告会

実施日：第 1 回 2 月 24 日、第 2 回 3 月 30 日、第 3 回 4 月 27 日

アドバイザー：千葉信 (社会福祉法人慶和会花いちもんめ施設長)、小川智紀 (ST スポット横浜)

1月30日　神戸芸術文化会議新年のつどいに鈴木拓が参加（神戸）
　　年末企画委員会第2回反省会
1月27日　せんだいメディアテーク全館再開
1月25日　宮城県「新しい公共の場づくりのためのモデル事業」協議体打ち合わせ（仙台市青年文化センター）
　　第27回定例会
2月3日　国道45号線が全線再開
2月7日　第28回定例会
2月8日　宮城県、岩手県が東日本大震災復興特区第1号認定
　　ドイツからシュトックマン氏来訪
2月9日　DPK第2期説明会
　　TPAMプレイベントVol.4に森忠治が参加（東京・渋谷）
　　ローズファンドから取材
　　DPK最初のプログラム「タイ民話のハイブリッド紙芝居」実施（東松島市赤井・花いちもんめ）
2月10日　世界劇場会議国際フォーラムに鈴木拓が参加（名古屋・～11日）

文部科学省「復興教育支援事業」での取り組み

文部科学省では、被災地の復興とともに、被災地での特色ある教育支援の取り組みや、今後必要となる教育プログラムの作成を支援し、その成果を全国発信することを目的として「復興教育支援事業」を立ち上げた。ARC ＞ T はその事業実施団体の一つとして採択され、仙台市立七北田（ななきた）小学校と塩竈市立浦戸（うらと）小中学校にて、学校における地域学習を深めるために演劇的な手法および表現活動を用いる教育プログラムの作成と支援をおこなった。

七北田小学校では以前から交流のあった渡部ギュウが地域の歴史をもとにした創作劇に取り組み、浦戸中学校では振付家の千葉里佳が自分と他者への気づきを促す身体ワークショップをおこなった。

仙台市立七北田小学校「地域共生科 地域共生学習の支援」
実施概要
実施日：2012 年 1 月 11 日、12 日、16 日、17 日、19 日、
23 日、25 日、26 日、27 日
指導：渡部ギュウ／アシスタント：野々下孝、松崎太郎
舞台：高橋裕介／照明：馬上由紀／音響：佐々木一美
事務局：西海石みかさ、千田優太、鈴木拓
内容：４学年児童と地域サポーターの協働による創作劇『すきだっちゃ、七北田』の創作と発表

仙台市立七北田小学校
「地域共生科 地域共生学習の支援」

台本に頼るのではなく、大きな「構成」だけがあって、その中で子どもたちが自由な発想で、たっぷりとした時間の中で、自分で台詞をつくることをしたかった。台詞をつくるというのは、シュミレーションして関係性をつくることだから、そのひとつひとつの言葉なりアクションなりで関係性を創って、表現まで持っていきたかったんだけど、今年度は圧倒的に時間が足りなかったねえ。そういうところを丁寧にやっていかないとうまくいかない。

でも、コミュニケーションゲームだけやっていると先生方には遊んでいるようにしか見えない。本当はそれだけでも面白いんだけど、もうちょっと整えて、表現のところまでやれればいいんだけどね。1、2 回のワークショップでは「やりにげ」感があるし、やるならアーティスト自身が自分の地域の学校にこつこつ通って説得していくことが必要で、それが子どもたちのためにもなるだろうと思う。

子どもたちには、子ども同士がからだでコンタクト取りながら「ごっこ遊び」という非日常をやることが大切なんだよ。日常の中で、ふと、ごっこ遊びでプレイするということが社会性を身につけさせ、一方で、その遊戯性の中で「これ以上やったら相手が傷つく」とかお互いのいろんなことを学ぶわけでしょう。

学校にアートを持ち込むということは、遊びを持ち込むこと。立派な演劇をやると言うよりは、ゆるやかなゲームから出発して、子どもの自由な発想でやるのがいい。遊べる時間、「遊んでもいいんだよ」という時間を保証してあげる。遊びがある種の勉強でもあるんだよ、ということを伝えたいね。演劇はからださえあれば物がなくてもできるからね、だからいいんだよ。しかし、その「からだ一つでやる」ということの遊戯性、そこをどう理解してもらうかが鍵で、子どもだけに受けてもだめで、先生も保護者も「いいねえ」と思わせるように、理解を取っていかないといけない。

七北田小学校では、その点、子どもも保護者も、地域の歴史を知っているお年寄りの方々も「おもしろいねえ」と理解を示してくれるように学校が仕掛けているんです。「地域をどうやって巻き込みましょうねえ」って、チャレンジしている学校です。

SENDAI 座☆プロジェクト　渡部ギュウ

塩竈市立浦戸中学校
「総合学習の支援（ダンス）」

からだは自分の「持ち道具」です。でも、自分のことはいちばん自分が見えていないので、まず「からだのことを知ろう」ということをやりました。他人のからだに触れて、自分のからだの重さや可動域、動きのつながりかたはどうなっているかなどを体感してもらいました。

重心を他人にゆだねて支え合うワークをやったとき、それをいろいろ試して冒険し始めたグループがありました。私が彼らに本当にやってほしいと思っていたことはそれです。私が投げかけたものをなぞるのではなく、その先に何があるのか、その周りがどうなっているのかということを自分の好奇心でどんどん動き始めてくれること。そのきっかけが見えてよかったと思います。

担当の先生が協力的で助かりました。事前の内容の確認、事後の振り返り、次回の計画など、その都度きちんと話し合ってやっていくことの重要性を感じました。今回はそれができて良かったです。学校側が思っているダンスと私が思っているダンスではかなり隔たりがあり、例えば、コップの水を飲むという日常の動作やしぐさも私はダンスのうちに入ると思うけれど、普通は「振り付け」という概念でとらえている。それだと型にはめ込む、型を教えることだけになってしまう。そうではなく、創造することの楽しさ、考える楽しさを私は伝えたい。日常の中にダンスの要素はいっぱいあるということを生徒が自分で気づいてくれるといいですね。例えば、「掃除」とか、毎回テーマを決めて、動きを取り出し、作品にまとめて、お互いに鑑賞し合い、感想を言い合う、それを繰り返す。

コンテンポラリーダンスの映像を観ていたとき、先生が「ダンスの見方がわからない、どうしても意味を考えてしまう」とおっしゃっていましたが、それは普通のことだし、意味を考えてもいいし、意見がみんなちがっていい。ダンスは答えが一つじゃないから、自分が感じたままに「それでいいんだ」という見方が身につくと、人はもっと生きやすくなるんじゃないのかな、と思っています。

ダンサー・振付家
BalletCompany 〜 demain 〜主宰
千葉里佳

塩竈市立浦戸中学校「総合学習の支援 (ダンス)」
実施日：2012 年 2 月 27 日、29 日
指導：千葉里佳、熊谷盛／アシスタント：原西忠佑
事務局：千田優太、鈴木拓
内容：「自分のからだを知る」、「感度を上げる、チューニングする」
ための身体的ワーク

1　舞台芸術専門講座ウォーキング ARC>T_street03「長塚圭史と歩くと…二歩目」。ガイドは長塚圭史氏 (阿佐ヶ谷スパイダース)、アシスタントは俳優の江口のりこ氏と田中哲司氏。(2012 年 1 月 18-20 日)
2　塩竈市・藤倉保育所にておどるなつこ氏がミニパフォーマンスとタップ体験を出前。(2012 年 1 月 10 日)
3　ドイツからシュトックマン氏来訪。(2012 年 2 月 8 日)
4　世界劇場会議国際フォーラムに鈴木拓が参加。(2012 年 2 月 10 日)
5・6　八木山メイメイ子育て支援センター「小さなおはなしと詩であそぼう」「想像力と遊ぶ」(2012 年 2 月 8 日)
7　人来田マイスクール児童館へ白鳥英一氏「小さな演劇をつくろう」(2012 年 2 月 1 日)
8　舞台芸術専門講座ウォーキング ARC >T street04「小道具を見る・知る・遊ぶ」。ガイドは高橋岳蔵氏 (劇団☆新感線)、アシスタントは秦真祐子氏。(2012 年 2 月 18-19 日)
9　舞台芸術専門講座ウォーキング ARC>T_street05「ヘアメイクとの付き合い方」。ガイドは西川直子氏、アシスタントは佐藤華子氏。(2012 年 2 月 25-26 日)

あのときあれから

震災直後、すべてに追い込まれている状況の中、今現在を生きるのが精いっぱいで、先のことなど考えられずにいた時期、演芸ボランティアの話が来たときは、「少しでも利用者様の安らぎになればいい」、「職員の業務の軽減になれば」と軽い気持ちで承諾しました。

実際、初めて見たときは「なんじゃこりゃ？」「どう盛り上げればいいんだ」と思ったのが正直な気持ちでした。職員が理解できないものを利用者様はもっと理解できないと思い、楽しむ事ができませんでした。終了後の振り返りで、率直な意見を述べていいとのことだったので、「単純明快で、一体になれるもので、職員も巻き込んで盛り上げていきたい」とお話しさせていただきました。

その後、ARC ＞ T さんとさまざまな出し物を行ってきましたが、ようやく一年過ぎ形ができてきたと思っています。

今では、利用者様と ARC ＞ T さんの信頼関係も構築されつつあり、来ることを伝えると「今日は何見しぇんのや」「誰が来んのや」など、期待の声が聞かれるようになりました。また、職員も一緒に盛り上げてくれて、会場を温めています。

デイサービスセンターで働くうえで、自分にはモットーがあります。「利用者様には楽しんで利用していただきたい」ということ、そのためには「自分も楽しんで仕事をしなくてはいけない」と。それをある意味、ARC ＞ T さんと協働することで、はっきりと見える形で実現できたような気がしています。

これからも途切れることなく、ARC ＞ T さんと花いちもんめの関係を続けて行きたいと思っています。

デイサービスセンター
花いちもんめ
内海 徳彦

「ARC ＞ T と私」

『何か、させてもらえるコトはあるのだろうか？』
ずっと悶々としておりました、私。

外は寒くて、室内は温かくて、食べ物も美味くて、インチキな話を交えながら、皆でそれぞれの短剣を作って。良い意味で雑多で。美味く言えないんですけど。何かすごく良い感じだったんですよ、ホント。
後日「サンペルカ (素材) を使ってこんなん出来ましたー」との報告をいただいたりとか。
お話をいただいた時から、「１回こっきりじゃなく２回目は、かぶりモノかな」とか勝手にシリーズ化を考えておりました。

ほんの少しですが仙台のさまざまな現状を、見て、聞いて。言葉にならない自分がいて。バカな頭で考えて。
『何か、一緒にさせてもらえるコトはあるのだろうか？』

たまーにやってくる親戚のおじさんみたいな感じかもしれませんが、温度差もきっとあります、手探りな部分もあります。そんな私ですが、また伺います、インチキな小道具を持って。

劇団★新感線
高橋岳蔵

宮城県仙台市荒浜（2012 年 2 月 19 日　撮影・鈴木拓）

REPORT

レポート：横田泉

多夢多夢舎中山工房×西海石みかさ

「美術のじかん」「ダンスのじかん」

「すべての人にアートを」の理念を掲げる団体すんぷちょ代表の西海石みかささんは、障害児の教育などにも携わった、教諭経験もあるアーティスト。震災以前から、障害者支援施設「特定非営利活動法人多夢多夢舎（たむたむしゃ）中山工房」でダンスワークショップを行い、出前の前身と言える活動をしてきました。西海石さんは震災後、施設が再開されるとすぐにみなさんの様子を見に行きました。職員の方から聞いた利用者の方の様子を次のように振り返っています。

「利用者の方の中には、震災前は明るくて冗談好きだったのに、とてもナイーブになってしまった方や、繊細な方の中には声が出なくなってしまった方もいるとのことでした。また、施設では明るくても、それぞれ食欲がなくなったり眠れなくなったりと、ご家庭で不安定な様子があったようです」

多夢多夢舎の職員の安住鮎美（あずみあゆみ）さんも次のように話します。

「震災後、3月27日から施設をスタートしましたが、雰囲気がいつもと違うのを感じていました。『おはよう』のトーンがいつもと違っていたり、不安そうに『大丈夫だよね？』と何度も確認してきたりということがありました」

そうした様子をみた安住さんは、いま彼らが通常の仕事を行うのは難しいのではないかと判断。そこでまずは仕事ではなく、アートワークショップを行うことにしました。

「まずはそばに人が寄り添っていることが必要だと感じました。それにワークショップで楽しい気持ちになることで、徐々に仕事の方も楽しい気持ちにもっていけるようになるんじゃないかと思いました」（安住さん）

ワークショップの内容は、利用者の方や西海石さん自身がダンスをする気分にはなれそうになかったので、美術を取り入れることに。そしてARC＞Tからもアーティストを募り、4月から出前事業として多夢多夢舎へのワークショップを行うこととなりました。

もともと、普段と違う人が来ると歓迎してくれるという多夢多夢舎の利用者の方々。ARC＞Tのアーティストがワークショップに訪れると非常に喜んでくれたと安住さんはいいます。

また一方で、ワークショップを行ったアーティストも、障害者の方との関わり方についてイメージを変えていったようだと、西海石さんは話します。アーティストたちは当初の「手助けをしなきゃいけない」という考えから「こんなに楽しめることなんだ」「それぞれが個性的でおもしろい表現者なんだ」という印象を抱くようになったといいます。そしてこうした活動を通じ、徐々に落ち着きを取り戻していった利用者の方も多いといいます。

しかし一方で、ワークショップを続けていく上での課題も見えてきたと西海石さんは言います。

「震災後少し落ち着いてきて、アーティストの仕事が再開されるようになると、多夢多夢舎に来られる人が少なくなり、一時は私ひとりという時期が続きました。私が倒れたらこの活動も終わってしまうという不安があります。障害者とのアート活動に興味を持つアーティストや、自らワークショップでのプログラムを考えるアーティストが増えるといいなと思っています」

西海石さんは震災を機に、障害者と社会との関わり、アートとの関わりをあらためて考えるようになったといいます。

「避難所で目の見えない方がトイレに行くのにも苦労されていたり、他の方に迷惑がかかるから、と車の中で過ごす障害者の方を見て、改めて地域社会での障害者の方への理解を深めなければと、強く感じました。そのためにアーティストは何ができるのだろうかと考えています」

現在、多夢多夢舎では放課後活動として、美術とダンスのワークショップをそれぞれ週１回ずつ行っています。

今後の活動については「これからは作品を販売したり、地域の方と一緒にワークショップをするなど、社会や地域とつながるような活動にしていければと思います」と西海石さん。安住さんも「現在はうちの舎員さんだけが対象のワークショップも、彼らが中心になって色んな施設の人と開催できたらいいなと考えています」と展望を同じくしていました。

震災を通じて露わになった「障害者と社会の関わり」という問題。ワークショップは、この問題にアートを通じてアプローチしていくきっかけとなったようです。

2012.3.16-3.19

晴れの国、岡山との交流　— OtoOpresents 招聘公演 —

岡山県天神山文化プラザ / 岡山県岡山市北区天神町

岡山県天神山文化プラザから、東北復興応援企画として東北の劇団を岡山に招きたいという依頼を受け、仙台から OtoOpresents(白鳥英一代表) が参加することになった。この劇場は、岡山県内の若手および実験的な劇団に対して無料でホールを提供する「土曜劇場」という企画を長年に渡って継続し、地域の劇団の創作活動を支援し、演劇文化の振興を図っている。

今回は公演だけでなく市民と交流する機会も欲しいとの希望で、市民参加ワークショップとトークセッションも行われた。ワークショップでは「小さな演劇を作ろう」と題して、参加者が絵本「ブレーメンの音楽隊」と「おおきなかぶ」をもとに、年老いた桃太郎たちが登場する『ブレーメンの音楽隊岡山バージョン』と『カレー寄せ鍋』を創り上げた。トークセッションでは、ARC ＞ T の活動報告と震災に対して舞台芸術は何ができるかについて話し合われた。公演では 4 つの短篇オムニバスのうち市民参加型の作品が 2 つあり、岡山弁と仙台弁にダンスと音楽も入りまじり、にぎやかな上演となった。

当時、岡山県には宮城県からおよそ 400 名の方々が避難し生活しているとのことだった。終演後、石巻出身の方に「来てくれてありがとう」との言葉をいただいた。

岡山県天神山文化プラザ東北復興応援企画実施概要

実施日：2012 年 3 月 16 日～ 18 日

会場：岡山県天神山文化プラザホール

ワークショップ「小さな演劇をつくろう」／講師：白鳥英一

公演『結～他愛ない話のオムニバス～』(「沼イルカ～月明かりに照らされて～」「笑うべ」「お宅のカブオさんに折り入ってご相談がございまして…」「さいごのじゅぎょう」) ／作：芦口十三／演出：芦口十三、へも／出演：白鳥英一、笙司みつえ、瀬川まーち、原西忠佑、岡山市民有志

トークセッション／登壇者：呉英長 (岡山演劇ネットワーク)、大塲真護 (岡山県天神山文化プラザホール企画委員)、白鳥英一 (OtoOpresents 主宰)、鈴木拓 (ARC ＞ T 事務局長)

2月10日　岩手、宮城、福島で3復興局と6支所が始動

2月13日　全国舞台照明技術者会議に髙橋亜希が参加（仙台・～14日）
文化芸術による復興推進コンソーシアム意見交換会に鈴木拓が参加（東京）

2月14日　広島から木谷幸江氏来訪

2月15日　ユース座談会1
DPK第3期説明会

2月16日　岩沼市が移転促進地区方針発表
仙台のボランティアインフォ来訪

2月17日　第29回定例会

2月18日　勉強会：花いちもんめ千葉施設長講習会
ウォーキングARC＞T street04「小道具を知る・見る・遊ぶ」（10-BOX・～19日）
TPAMシンポジウムに西海石みかさが参加（横浜創造都市センター）

2月20日　東京から黒澤世莉氏来訪

2月21日　ユース座談会2
DPK最初のプログラム「タイ民話のハイブリッド紙芝居」実施（花いちもんめ赤井）

あのときあれから

おそらく、このようなことがなければ、遠い東北の方たちの演劇を岡山で観ることもなく、何かをいっしょに考えることもなかっただろう、と思うのです。

アートによる「表現活動」は、その人がこの先、自分の足でどこへ向かって歩いていくのか、それを決めたり、決められなかったりする時に、寄り添っていられるものなのだろう、と思います。こういう当たり前のことが、被災者の方だけではなく、あらゆる人の人生にとって、ヒントとなる瞬間を含んでいるということ。そこにすべてがあるわけじゃないけれど、ARC ＞ T の活動によって、そんな瞬間に出会えた方は、多くいらっしゃるのだろうと思います。

一年が過ぎ、いつの日か「復興」のためのアートではなく、ただただ、純粋にそのものだけを心から楽しみ、浸れる時間がくることを願っています。もしかすると、そこからまた、新たな一歩を踏み出せるのではないかと、そんな気がしています。

岡山県天神山文化プラザ
ホール主任　菅田真理子（すがたまりこ）

3月11日　各地で追悼会・慰霊祭開催
気象庁がこれまでの余震7247回、うち震度4以上232回と発表
アーツエイド東北「竹下景子　詩の朗読と音楽の夕べ」（仙台・東北大学　川内萩ホール）

3月10日　リーディング&トーク「3.11から一年 あの時、あれから、演劇人は」に森忠治が参加（北九州芸術劇場）

3月9日　DPK第3期説明会

3月8日　杜の都の演劇祭2011開催（〜31日）

3月7日　東京から大堀久美子氏来訪取材

3月6日　みやぎNPO夢ファンド相談会（せんだいみやぎNPOセンター）
砂連尾理WS「からだで聞く、からだで話す。」（仙台市福祉プラザ）

3月5日　第30回定例会

2月27日　文科省「復興教育」［ダンス］実施（浦戸中学校）

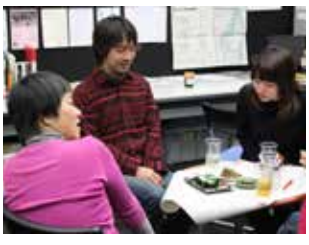
2月25日　ウォーキングARC>T street05「ヘアメイクとの付き合い方」（〜26日）

2月24日　第1回学びあい事業報告会

2月22日　シンポジウムし対話その1開催

2012.3.28-3.29
こどもがつくるまち「Piccoli せんだい〜 miyagino 〜」前日祭
せんだい演劇工房 10-BOX

3月31日、ピコせんサポーター主催イベント「こどもがつくるまち Piccoli せんだい〜 Miyagino 〜」というイベントが開催された。これはドイツで20年の歴史を持つ「ミニ・ミュンヘン」にならった企画で、子どもたちが子どものための仮想の町をつくり、そこで働き、暮らし、働いて得た独自通貨で買い物をするなど、遊びながら社会の仕組みやコミュニケーションを学ぶ場である。ARC>T ではピコせんサポーター事務局と協働し、事前の企画運営の核となる「こども会議」の段階から参画して子どもたちをサポートし、本祭の会場設営では舞台人ならではの腕をふるった。また、本祭に先立つ前日祭として演劇鑑賞会の機会をいただき、おとな向けのリーディングや子ども向けの参加型プログラムを上演した。



3月14日　文化庁芸術家派遣事業総振り返り
3月15日　OtoO presents 岡山県天神山文化プラザ招聘公演（〜18日）
3月16日　宮城県議会が復興元年予算可決
3月17日　JR八戸線が全線再開
　　JR仙石線が陸前小野〜矢本再開
　　JR石巻線が石巻〜渡波再開
　　みやぎ生協こ〜ぷほっとわ〜く基金贈呈式
3月19日　仙台臨海鉄道が仙台港〜仙台埠頭輸送再開
3月21日　「新しい公共の場づくりのためのモデル事業」第一回円卓会議（10-BOX）
3月22日　シンポジウムし対話その2
3月23日　復興庁が復興特区創設　石巻市、塩竈市など認定
　　ウォーキング ARC>T street06「黒澤世莉と歩くと…」（10-BOX・〜25日）

あのときあれから

「こどもがつくるまち Piccoli せんだい」のスタート…子ども委員体験会が 2011 年 3 月末だったので、震災のために中止なりました。会員達の生活も変わり、大人の会議の集まりが悪くなり、しばらく活動が中止に…。一から企画を立て直し、8 月にやっと第 1 回子ども会議が開けました。

そんな中、絵本仕分けボランティアに参加の折りに、10-BOX 工房長のご紹介で ARC＞T を知りました。心の復興のための活動に共感するものがあり、七夕まつりの時に子役を探されていたので、何人か子どもに声をかけて、参加しました。素敵な音楽をバックに、プロの演劇人と共演できたのは、子ども達にとって良い経験になったと思います。

その後、「こどもがつくるまち」の街体験では、ARC＞T からのご紹介で、映画館の映写室を見学させて頂いたり、児童館ではタイ舞踊を観せていただきました。そして、本番の街づくり（会場設営）のお手伝いをして頂けることになり、電信柱や雲などが街に現れて、子どもも大人も大喜び、大成功で終わりました。また、前日祭での上演依頼も快く引き受けていただきました。

一人ではできないことでも、困難なことがあっても、諦めずにやり続けることで、振り向くと沢山の方達に助けられて、夢が実現して行く！と実感した 1 年でした。人と人の出会い、絆に感謝し、これからも「夢は叶う」ということを子ども達に伝えて行きたいと思います。

ピコせんサポーター　齋藤まゆみ

こどもがつくるまち「Piccoli せんだい」～ miyagino ～
前日祭 実施概要

日時：2012 年 3 月 28 日 19:00 ～ 20:00
会場：せんだい演劇工房 10-BOX box-1」
リーディングシアター『星の王子さま』／作：サン＝テグジュペリ／構成・演出：伊藤み弥／音楽：小関佳宏／出演：原西忠佑 (朗読)、小関佳宏 (ギター)

日時：2012 年 3 月 29 日 10:00 ～ 12:00
会場：せんだい演劇工房 10-BOX box-1
『おはようシアター』／作・演出：おはようシアター／出演：川熊美貴、西海石みかさ、伊藤文恵、まめ、土屋悠太郎
『タイ民話のハイブリッド紙芝居』／出演：土屋悠太郎、長保めいみ、上島奈津子

3月24日　北四番丁大衡線全線開通（仙台）

3月26日　宮城県災害対策本部を廃止（本部発表：死者1万149人、行方不明者1634人。住宅全壊8万4749棟、半壊14万7165棟）

3月27日　宮城・岩手でM6・4最大震度5弱の地震

3月30日　第2回学び合い事業報告会

3月31日　東北地方高速道路無料化終了（福島原発避難者、災害派遣等従事車両を除く）

4月1日　多賀城文化センターが再開

4月4日　あるくと発足から1年
第32回定例会（決算・事業報告）

4月7日　「あるくと100人会議」開催（せんだいメディアテーク）

兵庫県立ピッコロ劇団から眞山直則氏、田窪哲旨氏来訪

日本再興東北フォーラム開催（東北大学・～31日）

あるくとオフィス大掃除
第31回定例会

1

2

3

4

5

6

7

1　砂連尾理ワークショップ「からだで聞く、からだで話す。」（2012 年 3 月 6-7 日）
2　塩竈市・清水沢保育所へおはようシアター「おはようシアター☆おもちゃ箱」の出前。（2012 年 3 月 15 日）
3　ARC ＞ T 定例会
4　仙台市・青山保育所へ長保めいみの「からくり紙芝居＆リズム・歌遊び」を出前。（2012 年 3 月 14 日）
5　仙台市・老人福祉施設かむりの里へ渋谷裕子の「歌って踊るかむりの里」を出前。（2012 年 3 月 18 日）
6　仙台市・福室市民センターへコンサートの照明家・髙橋亜希による照明演出の出前。（2012 年 3 月 11 日）
7　仙台市震災復興のための芸術家派遣事業総振り返り。すべてのプログラムの実施について検証した。（2012 年 3 月 14 日）
8　「新しい公共の場づくりのためのモデル事業」第一回円卓会議
9　舞台芸術専門講座ウォーキング ARC ＞ T street06「黒澤世莉と歩くと ･･･」ガイドは黒澤世莉氏 (時間堂／東京)、アシスタントは劇団員の菅野貴夫氏、直江里美氏、ヒザイミズキ氏。（2012 年 3 月 23 日 -25 日）

8

9

ARC＞Tという現象とオルタナティブとしての劇場へ

坂口 大洋
仙台高等専門学校建築デザイン学科准教授

1. さまざまな境界線

先日被災地のある集落の復興に関する意見交換会に参加した。浸水地域の集団移転に伴い現地再建を目指す団体が今後の展開を考えるという趣旨で、壇上には建築学、都市計画学、社会学などの専門家が登壇していた。他地域と同様に合意形成の難しさ、支援の不確定さなど様々な課題が指摘されるとともに、法的、経済的に現実的な選択肢を模索、合意メッセージを強く示し行政と徹底的に議論すべきと専門家の立場は様々だった。

議論が続く中で、ある社会学の専門家が示した意見が非常に興味深かった。

将来像が不透明な中で、災害に対するリスクを認識しながら住むという人に対して、行政はそこまで制限できないのではないかという自己責任論を展開したのだが、社会学者はそれに対して被災地の集落は震災前からリスクを取って居住していたと行政の姿勢そのものを疑問視したのである。過疎化の集落は震災前から既に自立的な機能が危機的な状況に陥っていた。にも拘(かかわ)らず行政は、何ら有効な対応を行ってこなかった。これは明らかにリスクを引き受けて住み続けてきたことに他ならないという主旨だった。

居住に関わる集団移転と文化の場の創出とは、一般的な市民の目線からすると大きな違いがあるかもしれない。だが地方の舞台芸術の場を追っかけてきた筆者からは、同様の構図に映る。そもそも行政はこれまで文化の場に将来像を示したことがあったのだろうか。そして殆どの場合それらを実現するリスクに対しては、当事者の手で引き取られていたのではないだろうか。

折しも、この原稿を作成する過程で「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」が国会に起案された。また、様々な報道にあるように大阪では文化行政の在り方が大きく揺れている。見えない行く末の中で舞台芸術を取り巻く環境を作り出す新たな実践の積み重ねが、今求められている。

2. ARC ＞ T はネットワークか？

ARC＞T の活動は、ネットワークだと言われる。だがそれだけでは、ARC＞T という現象、そしてその可能性の本当のところは良くわからない。メンバーの多くは、震災前から仙台を中心に積極的に舞台芸術に関わってきた面々であり、個人あるいは団体の人脈によって公演や様々な活動が行われていた。

もちろん、震災後多くの出会いがあり、新たな人、場所、コミュニティと関係を持ち活動の幅が広がったことも事実である。言うは易し行うは難しで、見聞きする限りでも一つ一つのトピックスや活動の成果はそれぞれ賞賛すべきものである。

だが、これからの長期的な復興における街と文化の関わりを考えるときに、ARC＞T の活動を単なるネットワーク型の面白い動きということと語ってはいけない気がしている。

そしてそこに一つの日本の公共ホールを取り巻く共通の課題とその課題を解くための二つのヒントがあるとみている。

3. 強靭な現場と脆弱な将来

まず課題だ。

今回の震災により、多くの公共ホールに被害が発生した。被害の影響は大きく宮城県においても、2012 年 6 月に改修工事を経て東京エレクトローンホール宮城（旧宮城県民会館）はようやく再開したが、まだ県内でも 4 施設（*1）は目処が立っていない。

ここまでの復旧の過程を詳細にみると、初期の避難対応、避難所の運営、改修内容、国による予算申請の査定方法など多くの課題が散見されるが、津波の浸水を受けた施設と大きな人的被害が発生した首都圏の施設を除けば、建築的な被害の改修は概ね順調に進み、再開にこぎつけたと言ってよい。

他方、その陰には語り尽くせないほどの現場のスタッフの適切な判断や踏ん張りにより、個別の課題が解決されてきたのも紛れもない事実である。

この「個別の課題を現場が乗り越えていく」という状況は、単なる優秀なスタッフの存在だけではなく、公共ホールの歴史的な整備の過程と深い関係がそのような背景をつくりだしている。そしてまさにこの点が、今考えるべき将来に向けた重要な課題を指示しているように思われる。

（*1）石巻文化センター、石巻市民会館、角田市市民センター、東松島市コミュニティーセンターの 4 館が 2012 年 4 月時点で閉館中。

4. 1980年代からのハコモノがつくりだした本当の課題とは

少し詳しくその構造を見てみよう。

1980年代以降公共ホールの整備において、それまでの貸館主体の機能から、創造型の機能への転換が目指された。特にその時期に整備が進展した地域の大半が地方都市であったことから、地域との関係を踏まえた創造機能のあり方が検討され、様々な試みが展開した。背景には、当時の第二国立劇場の計画進展に関係して、建築を中心とする多くの劇場関係者に創造的な環境の整備が不可欠であるとする認識があったことが大きい。

また、それまでの医療、福祉、教育分野以外に行政が新たに手掛けた分野として「文化」があり、それを「地方」で考えた場合に、「創造」は重要なキーワードであった。

建築的には80年代から90年代にかけて実現した公共ホールは、舞台周辺の側舞台が広くなり、搬入口が使いやすくなり、リハーサル室や楽屋などが充実するなどの設備面も含めて、いわゆるバックヤードの質を高めるということにつながった。

これ自体は、それまでの舞台と客席だけが劇場であった状況から、上演機能は飛躍的に高まり、作品が創れる環境に何歩か近づいた非常に意義のある仕事ではあった。

だが、それらの舞台芸術を創造するという点では筋の通った施設整備そのものが、過度に誇張されまた報道された側面もあり、結果的にハコモノ批判としての社会の俎上(そじょう)に上がり、公共ホールを取り巻く社会的な環境は複雑なものとなる。

ここ数年、そして震災を経験した現時点において将来像を考えるために、改めて80年代後半からの施設整備（今でもハコモノ批判と言われているが。）が何をもたらしたかを捉えなおす必要性を感じている。

例えば、80年代後半からの施設整備に関して、ニーズと乖離した施設整備、バブル景気等を背景とした文化芸術に対する過剰投資、ふるさと創生事業（*2）などに代表される目的意識の低い補助金、それらに関係する様々なステークホルダーの思慮のなさと批判されていることがある。それらは大なり小なりあたっている。建築サイドの片隅に身を置く者として、それらの指摘を真摯に受け止めるとともに諸先輩たちの活動や業績を一歩引いて捉える必要性を十分に認識している。

だが改めて述べるが、いま必要なことはハコモノ批判に対する対応策を考えることではなく、公共ホールを取り巻く様々な課題に対する解決のプロセスを再構築すべきなのである。

少し丁寧に述べると、短期的な問題には舞台芸術の現場は、的確に解決され機能している。「現場知」というものがあるとすれば、舞台芸術の現場は極めて具体的に知が獲得され、共有されている。そしてその最たる例の一つが、今回の震災直後からの公共ホールにおける避難所の運営や復旧プロセスではなかったと思う。

要するに、個々に問題は発見され解決されていくのだが、「そこに存在する課題自体を発見するための機能」と「それらを全体で共有するシステム」が欠如しているのである。先述の80年代後半からの公共ホールにおける創造型への移行を目指した中ではこれらの要素は必要とされず、かつある意味様々な成功体験が積み重ねられたことで、このように考える機会を失ってきたともいえる。

5. 戦い方を変えてみよう。

もちろん、90年代以降もいろいろなテーマが設定された。人材育成、アウトリーチ、創造支援、市民参画運営、創造都市など多くの人が知るところであろう。また、地域創造や芸団協などは施設の活用やアーティストの支援づくりの基盤をつくり、毎年2月に名古屋で開かれる世界劇場会議などの共有するためのカンファレンスも、90年代以降の試みとして始まった。そして個々の場ではそれぞれ課題が吐露(とろ)され、一旦は議論が共有されてきた部分もあるだろう。

だが、それらをどのように目指してきたかといえば、やはりそれぞれの状況に面した人々が個別解を積み重ね、時には参照され、賞賛されてきたが、全体の課題を共有するシステムを創り出そうとする動きはなかった。多くの場合様々な与条件が最初に与えられて問題設定が始まるという構図があるからである。

少し長々と書いたが、要するに、行政が如何に無能か、観客がだめだとか、アーティストが自己中心的だとか、学者が机上の論理しか言わないとか、施設が使いにくいとか、それはそれぞれ問題ではあるけれど、舞台芸術の場を良くするための本質的な課題ではないということである。なぜなら、筆者が劇場の勉強を始めた90年代前半から現在を振り返るだけでも、様々な局面で相当良くなっていると思うからである。けれどもいまだに多くの人が課題であると感じるとすれば、その構図の外側に問題があるのではないか。そして戦い方を変える必要があるのではないだろうか。

そして、そういう局面がより求められる地域が、いわゆる地方都市であり、今回の震災後の在り方は、外側の問題を考える重要な契機である。

それらをつなぎ合わせると、ARC ＞ T が行っている活動は、非常に興味深い。

(*2) ふるさと創生事業：正式名称は「自ら考え自ら行う地域づくり事業」。1988年～1989年実施。当時の竹下登首相が発案し、各市区町村に対して使途を問わず地域振興に使える資金1億円を交付した政策。

6. 勝手な「自分たちごと」からの出発

では ARC ＞ T の活動から見えてくる可能性とは何か。

「勝手にはじめた」ということである。自発的といえば、少し印象が良いかもしれないが、メンバーの話を見聞きする限りにおいては、震災直後、情報が錯綜している中でとりあえず何ができるかという模索から始まっており、具体的な戦略があったわけではない。恐らくそれほど明確な何かということもなかっただろう。「相手」のない中での活動は「勝手にはじめた」という言葉の方が適切に思う。

まさにどう扱ってよいかわからない場面が日々出現し、それらを解くためにこれまでとは異なる関係をつくり問題を越えていく。そして、活動自体が積み重ねられることで結果として様々な意味を帯びていく。もちろんそれは周囲との関係に置いて生まれるのであるが、その関係が発生するプロセスの一つ一つに別の社会的な意味（例えば避難所での支援活動）が付与されている。

全体として広がりのある関係性とゆるやかなネットワークにより経験が蓄積される。そして、継続して行われるコアメンバーの会議でもう少し言語化され、明文化され再びそれぞれの現場で身体化されていく。また、そのプロセス自体がウェブ上や事務局長の鈴木らが様々な場で語ることにより、好意的な誤解も含めて社会的な意味を帯びていく。

冒頭の被災地の集団移転では旧知の大学に所属する研究者が、支援に関わっているのだが、緊迫した局面も多く一つ一つの言葉や振る舞いが非常に慎重となる。その態度は必然ではあるのだが、結果的に伝えるべきメッセージが曖昧になる。そして残るか、移転するかは、最終的に居住者自身の判断であるということもあり、様々な支援や専門的な関わりも、どこか「他人ごと」という空気の中で議論が積み重ねられている。

ARC ＞ T の活動には、あまりそれが感じられないのも良い。実際存在するであろう内部の様々な難しさも、それらが一見すると外に伝わらない雰囲気がまだ残っている。そしてその根底にあるのが、いわゆる勝手にはじめる「自分たちごと」ということ意識が支えている気がしている。

7.「つくれない世代」のアドヴァンテージ

もう一つの ARC ＞ T の活動から読み取れる可能性。

それは世代だ。

ARC ＞ T は、大体 40 歳以下が主要メンバーとなっており、いわゆる今の舞台芸術環境をつくる側として経験してこなかった世代である。

先述した 1980 年代後半から地方都市における公共ホールは大きく変わった。ARC ＞ T のメンバーの多くはこの後から、公共ホールの現場に関わってきた人たちである。仙台だと、せんだい演劇工房 10-BOX が開館した 2002 年以降に活動を始めた人もいる。建築サイドの言葉でいえば、「つくる時代」から「つかう時代」へのシフトチェンジの時期と重なる。

2012 年 2 月名古屋で開かれた世界劇場会議。今回のテーマは「公共劇場とは何か」であった。震災と劇場法（仮称）を見据えた中で、公共の在り方、施設の在り方、評価の在り方、震災に直面した文化といった側面から、公共劇場とは何かを議論する場でもあった。

建築評論家五十嵐太郎、仙南芸術文化センター（えずこホール）所長の水戸雅彦、ARC ＞ T 事務局長鈴木拓をパネリストに迎え、筆者が進行を担当した「劇場文化の見えない被災」という分科会で、ARC ＞ T のプレゼンテーションと、震災後の場について議論がなされた。分科会では、震災後の一つ一つの積み重ねを読み解きながら、震災を経て様々な局面が変わりうることを確認した。

また会議全体としては 10 年以上のこのような議論を踏まえて、劇場の役割がある種のソーシャルインクルージョン（社会包摂）機関として、地域の中に存在すべきであるとする一つの方向性が提示されたように理解している。

そのような共通理解に対して、違いも垣間見えた。

それは現状認識と課題に対する解決の在り方を議論する過程で、その新しいあり方を実現するプロセス、まだこれまでの既存の劇場のシステムに対して改善させようとする世代と、今地域の中に存在する劇場文化の資源を前提としてその外側にある部分に着目する世代との違いが浮き彫りになったように思う。

誤解を恐れずに言えば、新国立劇場、世田谷パブリックシアターなど新たな劇場（60 年代の小劇場運動も含む）をつくることで問題を解決してきた世代（インサイダー）と、そうではない世代との違いではないか。そして特に震災に直面した ARC ＞ T のメンバーたちの世代（アウトサイダー）は、それとは全く異なった問題解決の方法を迫られ、動いた世代と言える。なお且つ、ARC ＞ T は地方をフィールドとするアウトサイダーという、より周縁から状況を語れる、そしてつくりだせる可能性を持っている。

日本の劇場が 1980 年代後半から 1990 年代後半までに急激に建設されたことが、その前と後、そしてその渦中にいたか、いなかったかの違いが、その意識や問題解決の振る舞いの仕方が大きく異なること感じた。

8. 自立的に課題を発掘するシステムと地域と舞台芸術の新たな回路

先に課題の発掘とそれらを共有するシステムが重要であると述べたが、それらは新たな人材を育てる場でもある。自ら反省も含めて、劇場関係者の多くは特に 10 年、行政における文化行政経費の削減などを理由にその問題の発掘そのものを怠ってきた。

確かに将来的には、少子高齢化、縮退状況の中で舞台芸術環境そのものを再構築するための課題は多いが、それを理由に、本来の舞台芸術の場が成立し、持続するために本質的なことを問わずになおざりにしてきたのは事実である。

ARC ＞ T の活動の中身に関しては、他の多くの方々に様々な形で賞賛されていると思うので、ここではそのことに触れないが、勝手にはじめたアウトサイダーの世代という二つの要素に、今のところだが非常に可能性を感じている。
重要なのはやはりこれからだ。

2012 年 4 月に行われた「あるくと 100 人会議」。最後に、せんだいメディアテーク企画・活動支援室室長の甲斐賢治さんが指摘された、「制度をつくる」ということと「制度をほぐす」という視点。これに向けては様々な活動を記録し、集積させていくこと。そしてそれらが、外部に開かれた回路を持っていること。だがそれだけでは、制度を獲得することにはなかなか結び付かない。このようなネットワークが公共のインフラとして機能する。制度化にはそのような理由と設計が必要である。

繰り返しになるが、ARC ＞ T の活動の特色は、場を前提にしないというところにある。

これまで日本では、舞台芸術に限らず場を介して様々な公共サービスを行ってきた。医療、教育、文化はそれぞれ、病院、学校、劇場、美術館と施設がサービスを提供する仕組みであった。逆に言えばそれら以外のサービスを提供する仕組みが存在していない。

だが震災では、その仕組みが全く通用しなかった。そこで生まれた ARC ＞ T の活動にはその可能性がある。なぜなら、日本はこれから過疎化し、ごく近い将来（いや現在すでに）立ち行かなくなる公共ホールが急速に増えてくる。そしてそこでは、場を介しない舞台芸術の関係を成立させる仕組みが求められる。そして、この東北ではそのようなフィールドが相当数ありうるのだ。

そして、そのような地域や状況にこそ ARC ＞ T の仕組みがフィットするはずである。

もう一つは、地域と専門家をつなぐ回路としての役割である。公共ホールを閉館すると、単に利用できる施設が無くなるということだけではなく、そこの地域が専門家と関わる契機を失うということである。そうやってこれから増えていく、喪失した地域に、専門家との新たな回路を一つずつ構築していく。そのノウハウを ARC ＞ T ではつくれる可能性がある。更にそれは、札幌や福岡や広島など新たな舞台芸術の場の試みが生まれつつある地域も加えて様々な地域間のネットワークをつくれる可能性だってある。

ひょっとするとこれらは、劇場を前提としている劇場法（仮称）を越えていくオルタナティブな劇場にもなりえる。

9．新たな関係をデザインする劇場にむけて

冒頭の集団移転の会議はいろいろな怒号が飛び交いながらも、行政への提案がまとめられつつあった。どのように進めても合意形成には無理が出てくる。それは誰の主張にもそれなりに「理」と「利」があるからだ。そしてそれは当然ぶつかる。そのぶつかりによって生まれるきしみや狭間を埋めてほぐす文化の場が求められている。

ARC ＞ T の活動は場を前提としないのだが、実際の活動は極めて場そのものを作り上げていくプロセスに他ならない。その「現場知」はこのような局面に必要不可欠な回路でもある。

ARC ＞ T はある意味、場の原点に回帰しながらも、活動をゆるやかに広げていく。地域に新しい文化の家をつくるみたいなものでもある。だってそもそも明治期に公共施設がつくられる以前、江戸の頃は、町医者も寺子屋もすべて町屋であった。町屋そのものが施設の出発点と考える見方もある。

でも、がちがちの新しい鉄筋コンクリートの家ではない。古民家の改修かもしれないし、テントかもしれないし、キャンピングカーかもしれないし、何かそのような新しい文化モバイルみたいなものかもしれない。

そこには ARC ＞ T は十分にいける。そしてそれは 20 年後も軽やかに存在し、しなやかに続いていることに期待している。

劇場とは常々「人が集まる場のデザイン」であると私は思っているが、その意味で新しい関係をデザインする劇場を、ARC ＞ T はつくりつつあるのかもしれない。

坂口大洋（さかぐち・たいよう）
1970 年生まれ。仙台高等専門学校建築デザイン学科准教授。建築計画・地域計画・文化経済。せんだい演劇工房 10-BOX や東北大学川内萩ホールなどのプロジェクトに参画。著書『劇場空間への誘い』他。震災後は、公文協などと協力し公共ホールの被害調査、改修支援などに奔走。浸水した雄勝法印神楽仮設舞台の再建（Art Support Tohoku-Tokyo プロジェクト）福島第一原発事故の影響を受けた福島県川俣町の集落支援などに関わる。

2012.4.7

「あるくと100人会議 ーまちの再生、アートの再生ー」

せんだいメディアテーク 1F オープンスクエア / 仙台市青葉区春日町

ARC＞T が発足して 1 年が経過した。この 1 年の歩みを振り返り、これから地域で芸術文化やアーティストが担うべき役割や在りかたを思い、地域に文化芸術はどのように寄与できるのかを広く市民と一緒に考える場として「あるくと 100 人会議」を開催した。

第 1 部「ARC＞T の報告 －この一年歩いて出会った全ての人と－」では、この 1 年で関わったさまざまな方々を迎えて、これまでの活動を概観した。第 2 部「まちの再生、アートの再生」では、劇場研究および都市デザインに詳しい坂口大洋氏を招き、仙台や東北の文化および施設のいまについて共有した。第 3 部「明日を生きるために ―10、20、100 年後の仙台―」では、夢や理想を含め、文化やまちのこれからについて、ざっくばらんに語りあった。

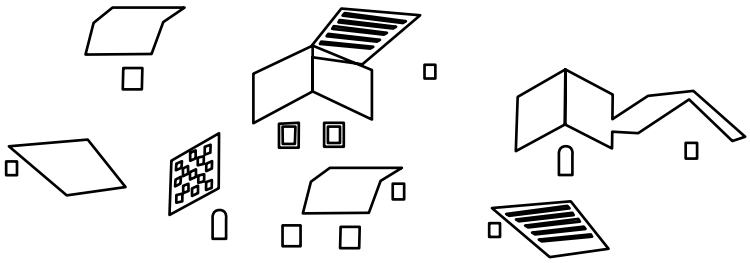
7 時間にわたる会議には、のべ 180 名を超える参加者があった。発言の中からいくつかを抜粋して掲載する。

ARC＞T さんではダンスと美術のじかんというのをやっていまして、共にみんなが踊ったり、絵を描いたり。とってもみんな楽しんでいます。本当に ARC＞T さんには助かっています。みんなも生き生きしてきたので、これからもずっと続いていったらいいな、と思います。

それまでは僕の中で勝手に、障害のある方は「いろんなことができない人」という認識があったんですけど、「ちょっとそれが苦手な人」という考え方にパチンと切り替わりました。

毎回、試行錯誤でしたが、ダンサー、役者、脚本家という、枠を超えたメンバーで舞台を作るイメージで「場をつくる」ということをやっていたような気がします。

最初から新聞やテレビで報道されていることと現地の方が話すことが微妙にちがっているような気がしていて、実際どんなことが起きているのかは、テレビからはなかなか通じてこないんですね。だから人間は直接会うべきだということを本当に感じました。



ARC ＞ T の 1 年間の活動は多岐に渡っていて、よく「何をやっている集団かよくわからない」と言われます。しかし、「ニーズに応える」ということに徹底した結果であり、それぞれのプロジェクトをみれば、アーティストが社会の中で有機的に寄与できるそれぞれの事例だったのではないか、と思っています。

最初は「支援」とか言うのが僕自身なんだかおこがましくて、なかなかできなくて…「じゃあとりあえず飲もう」と言いました。

震災直後、他県のナンバーのパトカーや消防車や救急車がどんどん入ってきた。これまで平常時において行政の壁を乗り越えるのが難しいと思っていたのに、この災害が起こったことによって一瞬でそれが現実のものになっていた。それを見たときに、さて自分はどうするか、と考えました。行政の壁を乗り越えることは通常だと非常に難しいことですが、ある行政区内だけで文化行政をやるというせまい意識では面白いことは何もできない。

自分がこの先やっていかなければいけないことが僕の中で非常に明確になりました。芝居をやり続けることが自分の存在意義であるし、世の中に必要だからこそ芝居はあるはず。表現者である以上は、歩みを止めてはいけないんだということがはっきりしました。

大きく考えれば、演劇というものは行動で、劇場とは心の問題を考える場所だと言えるかもしれません。震災後、自粛した人も敢行した人もそれぞれ多くの人が「今まで自分は誰を対象に表現を考えていたのか」ということを改めて考えたんだと思います。僕も含め。

震災後 1 か月劇場に行けなくなりました。携帯の電源を完全に切って、情報から隔離された時間を過ごすことが怖かった。自分の意識から離れて作品世界に入り込むなんてことは怖くてできなかったんです。そういう時に必要なのは、自分を取り戻す時間、自分の意識が自分に寄り添って自分に在るという時間、そういう感覚だったような気がします。

出前を継続することで、中身が良くなるのと同時に人間関係もできてくる。すると「あなたが来ただけでうれしいよ」という状況が生まれる。時間をかけて、自分の一所懸命さや人間性を伝えること、それが芸能の本質というか、いちばんの効果なのかな、と思っています。

東松島のわれわれからすれば、仙台は「被災地」ではないんですよ、感覚的には。真っ暗な闇の中、三陸道を走ってきて仙台の町が見えたとき、コンビニに電気が点いていて「あ、ここは別世界だな」と思いました。

被災地で被災者同士が慰め合っても全然励ましにはならないんですよ。被災地でないところから誰かが来ることによって、「あ、繋がってるんだな」「われわれのことを思ってくれてるんだ」という思いがあればこそ、頑張れる気持ちになれる。

2011 年 4 月の二兎社公演のアンケートで、「久しぶりにおしゃれをして出かけることができました」「お風呂に入っておいてよかった」という感想を見た時、舞台の役割や劇場に行くことの意味を気づかされました。本来なら非日常空間であった劇場が、日常の場面の一つになっているんだと感じました。

元に戻れないという話がありましたが、僕は逆に、このまま何事もなかったかのように戻っていくんじゃないかなと思います。公共ホールも「元どおり運営再開できてよかったね」っていうふうに。「元に戻さない何か」を意識的にやっていかないといけないんじゃないかと考えさせられました。

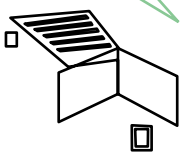
昔に戻れないというのは、いつを指しての「昔」なのか。何を指して昔に戻れないと言っているのか。そこを聞きたい。

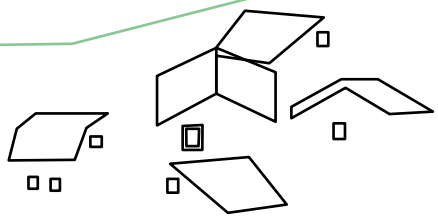
ARC ＞ T の活動をどうやって積み上げていくのか、積み重ねていって、これまでとは違う枠組みやノウハウをどう展開していけるのかと考えたときに、どこかで思い切ったジャンプが必要なのではないかと思います。それはおそらく、今の ARC ＞ T のメンバーだけでは難しいんじゃないかと若干心配しています。

公共ホールあるいは公共施設は「誰のために何をするか」というミッションをはっきり持って、それをちゃんと表明すること。それを市民が応援するかどうかが評価だと思います。公平、公共、平等をやればやるほど、すべてダメになっていきます。それをやっていくと、実は、公共性というものは失われていくんです。

働かないとダメなのかということはずーっと考えています。働かなかったら、どんなに幸せだろうか。日銭稼ぎの中で、自分の体を切り売りして、部品にして、それをお金に換えているってことはいっぱいあるわけですよね。もしかしたら、劇場のシステムというのも分業化が極限まで来ていたのかもしれないです。

人は、何かにコミュニケーションをしたいと思っています。コミュニケーションにおいて、創造力が引き出されると、いきいきします。それを誰かに、また認めてもらうと、本当に喜びを感じます。このサイクルはとても大切です。どんなに小さな子どもからお年寄りまでです。行政がアートへお金を使っていくのはそのためでしょう。すべての人間の幸福にとって、アートは有効なツールだと思っています。





被災地のすごく傷ついた風景を見ながら、自分のいるところが被災地ではない、という引け目を感じていた。
実際は、自分の家のガスも電気も止まって、仕事もなくなってしまったのに、それでもなんとなく引け目を感じていた。

人間の感情が自然に赴いていくところに正しいことがあるんじゃないか、それが生きる姿ではないか、と思います。ただ、それが仲間の喜びであり、それに関わる人たちの喜びでないと意味をなさない。健康な限りは、そういう形で世の中に貢献できたら、それ以上の幸せはないです。

劇場っていう言葉があの「建物」のことを指していると考えると、あまりかわらないような気がしている。その中で起きていることや起こしたいこと、その中で起きる重要なことに目を向けてやれたらいい。

小学校で働いていますけど、子どもたちの精神状態が、震災と関係なく、危機的な状態にあるな、というのが教師の間でも言われていますし、わたしも感じています。

質問なんですけど、ARC＞Tは「東北」というものをどう見ているか、ということを聞きたい。

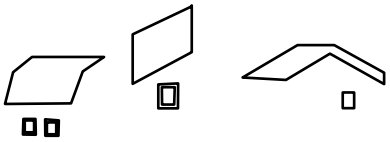
「もとに戻れない」という言葉にこだわっても無意味だと思います。戻れないのは当たり前で、時計は元に戻らない。それよりも、震災以前にあった朦朧としている課題が、震災によってちょっとクリアになった。

あのときあれから

POST3.11. 希望の話。

それは大変な厄災だったし、街にも人の心にも傷跡は至る所に残ってはいるけれど、希望の話をしようと思う。世界中からの温かい支援。人々の胸を熱くした感動のエピソードの数々。たくさんの人たちが、そんな話を聴きながら世界は捨てたもんじゃないと思い、幸福とは、自分のしたことが誰かを幸福にすることで自分もまた幸福になるのだと気づいたんだと思う。神戸の震災復興に参加したボランティアの多くがその後もさまざまな社会活動を続けている。今回の震災でもそんな人たちが増えている。一方、バブル崩壊後の世界しか知らない20代の若者たちの4人に1人が定職を持たないワーキングプア。しかしその20代の約7割が現在の生活に満足しているという。彼らが欲しているのはお金や物ではなく人との繋がりなのだそうだ。そんな若者たちと震災で価値観を揺さぶられたたくさんの人たちがイメージを重ねれば世界は変わっていくのだと思う。競争社会から共生社会へ。「チャンスというものは多くの場合、つらい経験に姿を変えてやってくる。だからほとんどの人はそれと気づかない」今が、そのときなのだと思う

仙南芸術文化センター（えずこホール）
水戸雅彦



あのときあれから

2011年4月18日に初めてARC＞T会議へ参加してから「あるくと100人会議」までの1年間。数えてみたら25回仙台に出向いていました。びっくり。2003年に仕事で1度訪仙してはいたものの、それ以外、何の縁もゆかりもない土地だったので、当初は「行って現地の人に相手にしてもらえるのか」との不安と緊張と少しばかりの期待でいっぱいだったことを思い出します。舞台美術の仕事に関わり始めてから20年という節目に経験した未曾有の大震災。いろんな事が整理つかないまま、今も自分の中でぐるぐる旋回しています。「舞台美術家という仕事のこと」「仕事に生かされてきた自分のこと」「被災地のこと」「被災された方々のこと」「自分の日常」「人が生きるってこと」「パフォーミングアーツという表現のこと」そして1年前に沸々とわいた「ARC>Tに集った皆さんと同じ歩みの中で何か自分にできることがあれば一緒に動いていきたい」との思い。この衝動も変わらずの今です。

舞台美術家　大沢佐智子

アートはマイノリティに向かう本能があると思うんです。「救う」と言うよりは「寄り添う」かもしれないけど、そっちに向かおうとする本質的な作用があると思う。

われわれは権力や政治力はない。が、告発することはできると思う。演劇っていうものは、学者や政治家でなくても、自分の思った段階のレベルの問題を社会に向けて告発するということができるジャンルなんですよ。知るために、知らなさ過ぎるから、その殻を破るために、リアルに知ることの表現というものが演劇にはできると思っています。

人とアーティストが出会う場、ハブになる場が増えているといいと思います。それが劇場でも、公共ホールでもいいと思うし、近所の市民センターでも居酒屋でもいい。そういうインフラ整備をこれからの 20 年でやっていけたらいいなと思います。
その方法はまだわからないですが。

劇を野外でやることは、ひとつの文化なわけだし、それもずっと昔から脈々と引き継がれてきていることで、それがなくなったら「劇都仙台」にも大きなマイナスだと公園課の人と話をしました。担当者はお金がもったいないので屋外でやるのだろうと思っていた。そうじゃなくて、演劇の中ではひとつの重要な文化だという話をして、理解してもらって、公園を使えることになったという経緯です。

僕も「劇場はいらない」みたいな発言をしてますけど、決してそうではなく、あの時は必須ではなかったという意味です。やっぱり劇場は、とても大事な場所です。だって、作品を見やすくするために、長い時間をかけて世界中の人が考えた結果でしょ？それが否定されるわけがない。であれば、器と、中に入っている精神が、完全にずれちゃっているっていうことだと思うんだよね。

うちの母に、「何がほしい？」って聞いたら「老人が買い物して疲れちゃった時に、ちょっと座る場所がほしい」って。本塩釜駅の隣にあったカフェが憩いの場所だったのに、津波で流されちゃってなくなっちゃった。そういう劇場があったらいいんじゃないかな、ってすごく思います。公共ホールがそうなったらいいなとも思うけど、公共ホールじゃないかもしれないですよね。

震災があって初めて「この地域に自分が生きているんだ」ということを自覚しました。いま流通が発達していて、何も考えずに生かされることができちゃう時代です。流通を促すこと、お金やモノを動かすことが第一になっている。そんな中で難しいけど、人と自分が暮らすこの地域で生きていくってことを大切にしていくことが、ステキな社会をつくっていくんじゃないかなと思います。

まちとアートが出会うときっていうのは自分自身がそのまちを好きにならなきゃダメだな、ってすごくいつも思っています。自分で歩く事はすごく大事だと思います。あとは、人と出会うこと、根源的な話ができる、っていうこと、作品だけじゃなくて、広く話せる人と出会うことっていうのはすごく大事。

何かやりたいなら、とにかく自分でやんなきゃだめだよ。何かやりたいと中途半端にしか思ってないから、行政うんぬんっていう話になるんで、本気で表現しないと俺は生きてられないと思ったら、行政のことを待ってられないからね。待ってたら、津波で死んじゃうよ。

大人は子どもに気を遣わないで本気で見せていくってことをすればいいと俺は思います。だから、児童用とか、なんとか用とかって分ける必要はないんだよね。生きている連中と接しているだけだから。

津波で日常が一瞬のうちに全部さらわれちゃって、その光景を体感した人たちが、それでも自分たちがやってきた表現を選び取って生きていこうという「覚悟」を、私はこの仙台に感じ取って、そこに惹きつけられています。

制度は獲得していかないと得られない。作品の中だけでナイーヴに語っていてもダメで、僕らはたぶんそれほどに素朴な民としてこれまで過ごしてしまったようです。自分たちの在りようをどう社会化していって、存在感を知らしめていくか。

美術館や劇場という制度が洗練されて、そこにお客さんが嵌まっていく。洗練された振る舞いを要求されていて、そのルールから自分をはずすのは怖い。その固まってきている部分をほぐす必要がある。

この 100 人会議の場自体が「劇場」なんだと思います。みんなで話して、それぞれが発言する時にステージに立つ。自由に入ってきて、出て行ける。その意味で「ここも劇場だったんだな」って思いました。

「あるくと 100 人会議」開催概要

日時：2012 年 4 月 7 日　13:00 ～ 20:30

場所：せんだいメディアテーク 1F オープンスクエア
（仙台市青葉区春日町）

共催：アートリバイバルコネクション東北、せんだいメディアテーク

内容：

第一部「ARC ＞ T の報告 ーこの一年歩いて出会った全ての人とー」
進行：鈴木拓／コメント：協働したみなさん

第二部「まちの再生、アートの再生」
進行：坂口大洋（仙台高等専門学校建築デザイン学科准教授）、
鈴木拓、伊藤み弥

第三部「明日を生きるために -10、20、100 年後の仙台 -」
進行：伊藤み弥、原西忠佑、千田優太

スタッフ

全体進行：高橋彩／舞台：大沢佐智子、横山真、平山健太、斎藤裕亮、齋藤まゆみ、西海石みかさ／音響：藤田翔／照明：渡部千賀子、神崎祐輝、荒野紘也、髙橋亜希／映像：川村智美／ Ustream 中継：長屋裕二／記録写真：越後谷出／受付：熊谷由海、わかやなぎよしみ、上島奈津子／文字起こし：長保めいみ、わかやなぎよしみ

参加団体：特定非営利活動法人多夢多夢舎中山工房、社会福祉法人慶和会花いちもんめ、NPO 法人 20 世紀アーカイブ仙台、日本演出者協会、（株）STAGE DOCTOR、宮城県障害者福祉センター、Piccoli せんだい ~Miyagino~、特定非営利活動法人 ST スポット横浜、有限会社 Next、仙台市八木山児童館、仙南芸術文化センターえずこホール、せんだい演劇工房 10-BOX、仙台市文化振興課　ほか（順不同）

参加者数：第一部 72 名、第二部 52 名、第三部 64 名（合計 188 名）

Ustream アーカイヴ

第 1 部
http://www.ustream.tv/recorded/21650285

第 2 部
http://www.ustream.tv/recorded/21652786

第 3 部
http://www.ustream.tv/recorded/21654401

※ Ustream の 2016 年 1 月サービス中止に伴い、現在は視聴できません。

議事録

http://arct.jp/100meeting_report

仙台の物語

小川 智紀（ST スポット横浜）

かなしさ、うれしさ、たのしさ、せつなさ。そんな単純な言葉で何かを言い当てられたら、どんなに楽なことだろう。なかなか伝わらないし、届かない。人びとが暮らしていくなかで、にわかに説明しきれない感情や考えをひとまとめにしたもの――それは「作品」と呼ばれることも多い――は、まちがって理解されたり、何度も解釈され直されながら相手に渡っていく。

作品はいつも、見えない何かを明らかにしている。地図の海岸線のヘリに塗られた赤と黄色の縁取りよりも曖昧で、数百年刻みで区切られた棒グラフの先にある予測可能な未来より不明瞭なもの。だけど確かにここにあるもの、あり得るもの。とりわけ言葉、動き、音や光や温度、匂いなど、表現の束である舞台芸術の作品空間が、まちの片すみにある何かを可視化・顕在化させるための装置であるのだとしたら、それ自体が強い公共性を帯びているといってもいいはずだ。

■手をあげる、あつまる、長い会議、合意形成、中間支援

作品の作り手は、たがいに影響を与えあいながらもそれぞれ別個である。個別性に目を凝らすことが、想像の営みを尊重することにもなるから、当然のことなのだろう。逆の言い方をすれば、芸術分野の人びとは、その関係者の少なさも相まって、共通の利害に対して組織的に動くことがたいへん苦手である。これは全国どの地域でも同じであるようにみえる。

その一方で、やはり束として状況をみたいという意思が働くことがある。首都圏で過ごしていた私にとって、あの 3 月は強烈だった。支援物資を抱えて、いち早く現場に飛び込み活動をはじめたアーティストもいた。個別の支援活動の意義は十分に分かる。その上で、もっとも効率的・効果的に活動を支えるための構造をつくるためには、どのように動いたらいいのか。背後からは、混乱のただ中にある東京側――固有名詞を含まない「中央」という言葉の方が適切だろうか――のさまざまな意向も漏れ伝わってきていた。私の手帖を見返すと、これが 3 月 20 日のことである。

現地の状況が分からず「中央」の予測に沿って動くのが、本当にいいことなのか。悩み切った私の元に届いたのが「東北復興に向けての舞台人会議 (仮)」開催の知らせだった。

映像配信サイトを通じて公開された仙台からの貴重な発信内容は、その晩のうちに文化庁長官の元へ、非公式に伝えられたという。

3 月 29 日に初めて開かれたこの会議は以来、ARC ＞ T 定例ミーティングとして、1 年間で 30 回を超える開催回数を数える。この会議の中で、東北のアート、仙台の舞台芸術、卸町の今後をめぐる議論が震災後一カ月経たないうちから、継続的に話し合われたことは、何十年経っても永久に記憶にとどめられていい。

各回の議論は、活動報告から、無駄話を挟みながらも、今後の方針についてまで。長い長い会議だ。いずれの議論も錯綜し混乱する。同じ芸術分野の活動とはいえ、バックボーンの違う者たちの会話は言葉の定義から揉める。そもそも私たちは何を代表し、何を目標にしているのかという自問自答が繰り返される。しかし、そこは舞台人たちのことだけあって、巧みなファシリテーションによって可能な限り多数決が避けられ、ゆるやかな合意づくりが毎回真剣に試されている。

ARC ＞ T のように、個別性を守るためのシステム作りを行う団体は「中間支援組織」と呼ばれる。一般的にこれらの組織の立ち上がりは、資金面の制約と関係者の多様性から、情報提供機能で抜きんでた活動として見えてくる。その後は、資源や技術の仲介、人材育成、マネジメント能力の向上支援へと活動の幅を拡げていく、というのが教科書的な理解だ。今後は、中間支援性の高さをどのように測り、集中的な支援に繋げていくべきなのか。行政の外郭組織のみが担う場合が多かったこの領域のあり方について、ARC ＞ T の内外で議論を積み上げていくことが必要だろう。作品づくりの過程とまったく同じであるはずだ。

■場、場所、そこに胚胎するもの、ヤギについて

ARC ＞ T が投げかけた問いの一つに「場」と「場所」をめぐる問題があったと思う。ここでいう「場所」とは、具体的な所在地で示される。宮城県仙台市若林区卸町二丁目 12-9 といえば、せんだい演劇工房 10-BOX の所在地である。「場」はもう少し概念的だ。そこに集まる人びとの合意形成に着目した「空間」のとらえ方であると思う。一般にも「場が凍りつく」というような使い方をされる。舞台人が大好きな「関係性」という言葉もこの問題系に含まれ、ワークショップや作品創作における稽古などのときに使われることが多い。

小川智紀（おがわ・とものり）
NPO 法人 ST スポット横浜副理事長、同アート教育事業部ディレクター、横浜市芸術文化教育プラットフォーム事務局長ほか、アートと子どもをつなぐ場で活躍。ARC ＞ T 草創期から現在まで、経験に基づいた適切かつ親身な助言を与える。ST スポット横浜と ARC ＞ T の協働事業「高齢者と地元アーティストによる学びあい事業」ではアドバイザーを務める。

ARC ＞ T の活動はその立ち上がりにおいて、創作、出前、調査、招聘、仕事の 5 部門に分かれて動き出した。その際、活動に関わったアーティストたちに求められたのは、おのおのの現場で「場」を作り出すことであったことが当事者たちによって語られている。もちろん多くの文化施設が被害を受けて復旧までに時間を要したので、緊急避難的に劇場外の場を求めた、という側面もあっただろう。しかし何より、アーティストたちはそこで「場」の重要性を実感したことは、これまでの ARC ＞ T の活動報告が雄弁に示している。

それでは「場」をつくることができれば、「場所」としての劇場は不要なのだろうか。そもそも ARC ＞ T の活動を静かに胚胎していたともいえる 10-BOX という場所は、どのような場所なのだろうか。金沢市民芸術村を参考にしたともいわれる、アーティストサイドに立った自由な利用形態を持つ全国有数の稽古場兼劇場であり、卸町再開発を視野に入れ、2002 年に卸町勤労青少年ホーム跡に建設された施設、というだけでは足りないだろう。

もう少し具体的に示そう。私がある日 10-BOX をうろうろしていると、工房長である八巻寿文さんに呼ばれた。行ってみるとヤギがいる。みんなが撫でている。「あのね、ぼくはヤギがいる劇場がいいと思うんだよね」と彼はいう。ヤギは子どもになつく。年寄りはヤギがいた頃の昔話を語りだす。飢えてどうしようもなくなったら、ありがたく食用にすることもできる、と笑った。つまり、これが「場所」の核心なのではないか。

芸術に対する高い専門性という機能だけに焦点を合わせ、それを集めることによってのみ成立している施設を、劇場と呼んでいいのだろうか、という根本的な疑問。機能分化した高度に専門的な施設を一辺倒に追いかけるのではなく、社会との連続性や全体性の中において場所を考えたい、というのが彼の意識にはあるのではないだろうか。

ヤギを所有する施設としての「もの」性ではなく、ヤギがいる「こと」を大切にしているという明確な姿勢がそこにある。ハードウェアとソフトウェアをきれいに切り離して整理し、その幸福な連関を模索するというのが劇場運営手法の最近のメインストリームであり、中央の法的な整備もその方向で進むようだ。その一方で、場所の中に場を見つけ、場のある場所を考えることが、これまでの多くの議論から置き去りにされてきたのではないだろうか。

■こころのケア、対象化・外部化、サバルタン

ARC ＞ T の活動の中でも特筆に値するのは、出前部の活動である。当初は避難所、のちに学校、幼稚園、児童館、知的障害者や高齢者の施設に芸術家が出かけていき、多くの芸術活動を展開している。全国的に見ても希有（けう）な活動の拡がりである。そこでは芸術文化という錦の御旗を振りかざすのではなく、教育や福祉分野で働く人びととの協働が模索されており、継続的なプログラム開発の努力が続けられている。

あの 3 月の直後、私の仲間うちで議論になった言葉がある。中央の持つ語彙の中でもっともナイーブな言葉でもある「こころのケア」という単語だ。いまでも芸術による支援活動の一部はこの文脈に沿って説明されることがある。しかし、こころはケアできるのだろうか。ケアされる者・ケアする者を分けるとはどういうことか。

そこにあるのは、人を対象化・外部化して捉えるという考え方である。御しやすいサイズにして相手を見る。そこでは自分の内部に対して、致命的な危機をもたらすような状況はあらかじめ排除され、安全が担保される。でもそんなの無理だ。これだけ多くの人が傷ついている中で、これっぽっちの安全なんて。

ARC ＞ T の出前部は、芸術文化や福祉、教育といったカテゴリーを超えて、それぞれの現場にいる一人ひとりに向き合おうとしているのがひしひしと分かる。最終的には、障害者施設に通い、自分を正確に語る言葉を持たないかもしれない、むき出しの固有名詞であるだけのひとりの人間にまで。いまの社会で支配的なマーケティングの言葉でたどり着かない、語れない、至らない、サバルタンと呼ばれる人たちの方へ。

直接的には、相手のこころを、私の中で内面化していくのはとてもむずかしい。しかし、舞台芸術という視点から相手と向き合ったら、いったいそこに何が生まれるだろうか。彼のいたみとひかりは、どのような変化を見せるのだろう。そして、私は。

もっとも短い物語は、土地の名前だ。仙台という地名には、ARC ＞ T メンバーの足跡が刻まれ続けている。いま同じ時間を伴走して私は見ている。あるいは、私もその物語の登場人物なのかもしれない。

※157ページからお読みください。

河北新報夕刊連載　「あるくとの報告」　2011年6月14日～2012年3月27日　毎週火曜日

ントマイムなどで想像力を働かせたりするプログラムを届けに行ってきました。全く方向性の違う2作品が、発想の塊である子供の目にどう映り、どういったことを思ってもらえるのか、楽しみにして行きました。

僕は想像力チームで参加していたのですが、稽古の中で「ない物が、どうすれば子供たちに見えるだろうか」を、問題にしていました。うまく伝わるかどうか、大人よりも想像力がつたないのではないかと心配していました。しかし、子供たちの想像力は思っていた以上に豊かで、感覚の鋭さに驚かされてしまいました。

こちらが子供扱いをしたり、緊張したりしていると、それが全て伝わってしまっていることが、子供たちの反応からダイレクトに感じられました。あまり子供を相手にすることがなかったので、新しい発見がたくさんあり、自分と違う年代、環境・境遇の方々と出会えた経験はとても貴重でした。また、出会いに行きたいと思っています。

（東北学院大学・齋藤裕亮）

あるくとの報告38

2月25、26日の2日間にわたって仙台市若林区のせんだい演劇工房10-BOXで行われた「ウォーキングARC√T　street05 ヘアメイク編」。東京の舞台で活躍しているヘアメイクさん、西川直子さんの知識と技に触れるべく受講しました。

1日目はヘアメイク。そして2日目はメイク。両日共に東京と仙台のヘアメイク事情の情報交換と、丁寧なレクチャーをいただきながら実技を行いました。逆毛を立てたり、舞台用化粧品を使ってメイクしたり、真剣に鏡に向かって格闘していくうちに小さな「できた！」が感動に変わりました。

私は若作りメイクも体験。見ていた受講生から「大学生でも通用するんじゃない？」との声も。実年齢より20歳近くも若作りできたその技術に大感動でした。

日常生活でも、髪形や化粧をちょっと変えるだけで印象がガラリと変わるのと同じく、メイクは舞台上でも、役のキャラクターや設定を雄弁に語ってくれます。

仙台では公演のたびに出演者同士で試行錯誤することが多いのが現状です。そんな中、今回の企画はプロの生の技術に触れ、表現の幅を広げる貴重な機会となりました。

（熊谷由海＝Project T-time）

あるくとの報告39

1年前、夕刊1面の「100万人の輪」の仲間入りをした2日後、「3・11」が発生しました。現在は売り上げなどに縛られずに社会貢献的な活動ができるよう、会社勤めを辞め、フリーランスの映像技術者として映像編集などで生計を立てつつ、あるくとの活動の動画配信をしています。

昨年3月29日、あるくとの前身「東北復興に向けての舞台人会議」は、参加者の震災当時の状況と現状をリアルな声で動画配信し、録画試聴も含め、延べ1000人以上の方に見ていただきました。

あるくと発足直後の4月11日の会議は、リアルタイムでの試聴は約100人でしたが、あるくとを強く応援したい人々であったと思います。

現在の視聴者数は多くはありませんが、ミーティングを動画配信サイト「ユーストリーム」で中継することは、多くの人々に支えられて活動するあるくとの透明性を保つためにも必要だと思います。

しかし2時間近くの会議を見続ける事も大変です。あるくとの活動に興味のある方は、リアルなつながりや情報交換ができるミーティングにご参加ください。

（映像音声編集技術・長屋裕二）

あるくとの報告40

あるくとが歩みを始めてから1年がたとうとしている。1年前の僕らは無力感でいっぱいだった。あのような状況下で表現者たちにできることが分からなかったからだ。

そのような中でも〝ニーズに応える〟ことに徹底し、活動してきたあるくとは、アートが持つ再生の力を再認識することになったと思う。

そして2年目を迎えるに当たり、当初のイメージをはるかに超えて〝歩く〟というよりは〝駆けて〟きた僕らは、新たな気づきを求められている。

それは、人々の生活の中にあるアートとは？ということ。あの非日常の中でもアートが決して無用ではなかったことへの答えを、復興が始まったばかりのこの土地で考え続けていかなくてはならないだろう。

あるくとという活動は、日常の中にあるアートの大切さを、市民もアーティストも知るキッカケになったのかもしれない。震災により顕在化されたさまざまな諸問題と向き合っていく時、僕らアーティストが担える役目をこれからもみんなで考え、行動していくことで〝まちづくり〟に寄与していけたらと思う。

（あるくと事務局・鈴木拓）

あのときあれから

あるくとの会議に、初めて参加させていただいたのは、結成前夜の昨年3月末でした。その時は、非常時とはいえ、普段ばらばらに動いている演劇関係者がまとまれるのか、半信半疑でした。

この1年、あるくとは多彩な活動を行い、いい意味で予想を裏切ってくれました。昨年6月から40回にわたり、夕刊に連載していただいた「あるくとの報告」の文章からも、復興にかける皆さんの熱意を強く感じました。

あらためて「報告」を読み返すと、七夕での仙台フィルとの共演、昨年末の「来て、見て、あるくと。」など、ずっと皆さんが動き続けた様子が分かります。仙台の舞台関係者が頑張っていると、読者にも広く伝わったのではないでしょうか。

被災地からは徐々にがれきがなくなり、目に見える復興支援の要請は少なくなりました。そして、目に見えない心の復興支援が本格化するのは、これからでしょう。今後もあるくとの活躍に期待しています。

河北新報社生活文化部・矢嶋哲也

共有する場に感じられました。皆さん楽しんで参加されていたようです。

「ああしなければ」「こうしなければ」。制約の多い日常を離れ、私自身もとても心が軽くなりました。全ての人に必要なものが、ここにはあるのかもしれません。

（俳優・上島奈津子）

あるくとの報告32

あるくと出前部は、東松島市の老人福祉施設「ケアハウス花いちもんめ」さんへ、演目の出前を行っています。入居者の方や来所されている方々に、アーティストの演目を見ていただくものです。

この活動の演目をブラッシュアップしよう、という動きが出ています。今年に入り、出前部以外のあるくとメンバーからも参加者を募り、出前プログラム研究会が結成されました。

昨年実施した演目に関して、花いちもんめ施設長の千葉信さんから、高齢者向けの演目に必要なのは「身体を動かす」「歌う」「見学する・聞く」―と、ご意見をいただきました。この要素を二つか三つ満たすと、ニーズにあった演目になるとのことでした。

このアドバイスを基に、研究会に参加したメンバーが立案、実施、施設での打ち合わせ、練り直し、再度実施、を繰り返し、高齢者向けプログラムを作成していきます。一人でも多くの方に、笑顔になっていただきたい。出前プログラム研究会のスタートです。

（俳優・わかやなぎよしみ＝OtoO Presents）

あるくとの報告33

18、19日、仙台市若林区のせんだい演劇工房10-BOXにて「ウォーキングアルクト street03 長塚圭史と歩くと…2歩目」と題し、昨年10月の1回目に引き続き、阿佐ケ谷スパイダースの長塚圭史さんをガイドに迎え、俳優向けワークショップを開きました。

参加者は仙台の俳優、ダンサーのほか、タイ舞踊家や米国からの大学生（しかも演劇未経験者！）など、多様なフィールドで活躍する人たちが集いました。

内容は「イスとられないゲーム」「名前おに」などのゲームやお芝居作りとさまざま。正解や成果を求めるのではなく、目の前の相手と思いを交わし、向き合うことに重点が置かれました。

一番感銘を受けたプログラムは、即興で短いお芝居を創作し、登場人物をリレーしていくものです。ほかのペアがつくった場や関係性を観察し引き継ぐ、そして自分と共演者との間でつくった新たな関係を次につなげていく。

その場その時に生まれた関係を紡いでいくのに大事なのは、相手をよく見ること、そして自分もよく見ること。自分と相手の間にこそ演劇がある、とあらためて気づかされた3日間でした。

（俳優・原西忠佑）

あるくとの報告34

ジャパン・ソサエティ東日本大震災復興基金の助成を受けて「高齢者と地元アーティストの学び合い事業」がスタートしました。

1月31日、その事業の中で、ダンサーの渋谷裕子さんが立案したプログラム「歌って踊る花いちもんめ」の第1回の稽古に参加してきました。「花いちもんめ」は東松島市にある老人福祉施設です。

プログラムをただ「見せる」というよりは、その場で生まれるコミュニケーションを大事にしたい、と言う渋谷さん。その言葉をもとに、演奏した曲に関する利用者の思い出を聞くコーナーや、曲に合わせて隣の人に触れる動きを取り入れてみては、といったさまざまなアイデアが生まれました。用意する曲も、昭和20～40年代のものや、季節感のあるものを中心に選んでいきました。

誰に見せるものなのか、どう感じてほしいのかを工夫して考える力は、震災対応や福祉の垣根を越えて、アーティストが本来持っていた力なのだということを強く感じた稽古となりました。本事業は、今年の5月末まで続きます。

（あるくと事務局・高橋彩）

あるくとの報告35

1月21日、私の母校である東北芸工大と山形大が提携して運行しているボランティアバス「スマイルエンジン山形」に参加した。毎週土曜日、学生、教職員、一般の方を乗せて牡鹿半島で活動している。

今回の活動場所は、重機が入りづらい段々畑のような形をした集落。居住区に認定されなかった土地は今後、納屋等を建てて活用される。

そこで、人の手で片付けの仕上げを行った。土に混じったガラス片や瓦屋根のかけら、木片などを拾い、片付けを依頼した人のニーズに合わせ、丁寧に作業を進めた。

作業終了後には必ず、振り返りとディスカッションがある。経験と情報の共有、そして未来を考え話し合う。

そこには学校や会社などある一つの枠にとらわれない人同士のコミュニケーションの場があり、とても有機的な人のつなぎが見えた。

失われた日常をこれからどのように見詰めて、どう見直していくか、物質的な作業と同時に思考の構築をしていく作業を学んだ。

（あるくと事務局・川村智美）

あるくとの報告36

10、11日に名古屋市で開催された、世界劇場会議国際フォーラム2012に講師として参加してきました。

この会議は全国各地の舞台芸術創造や劇場運営に関心のある人々のネットワークを構築し、劇場にまつわるムーブメントを取り上げて交流する場として、1993年に始まりました。今年のテーマは「日本に公共劇場はあるか？」。私は「『劇場文化』の見えない被災と復興のプロセス」というセッションで宮城県の芸術文化被害についてお話しました。

本来劇場は、人々の生活・日常の中で芸術体験を通して集い語り合う場です。しかし日本では、公共施設としての劇場は、概念通りの機能を担っていません。文化機関である以上、設備・機構だけでなく、文化的な機能を包摂していることが必要なのです。

なぜ日本では概念が一般的に浸透していないのか？　この論点を行政、劇場運営、技術者、利用者の多様な視点で議論しました。

復興のプロセスの中で、あるくとが担ってきた活動は、劇場が本来持つべき機能にも寄与できるかもしれないと感じています。

（あるくと事務局・鈴木拓）

あるくとの報告37

8日にあるくと出前部の依頼で、仙台市太白区の八木山児童館へ、紙芝居を楽しんだり、パ

今回、アイアンシアターに向かったのは「即興パフォーマンス集団すんぷちょ」。22日から25日まで、現地の人々と共にワークショップを行い、作品を作った。そして、その作品とすんぷちょの作品を26、27日に上演した。こんなにも参加者の皆さん、街の人々、劇場の方々と一つになれた時間は今まで経験したことがない。そのくらい熱く、濃い1週間であった。

「本当に人と人とのつながり、双方性がある作品」「すんぷちょさんが帰っても枝光の町をもりあげていこうと思っております。石巻の友達にもこの元気が伝わったらいいなと思いました」(アンケートより)

演劇の住む街づくりに取り組むアイアンシアター。その思いは、街の人を通して東北まで届いてきた。

(ダンサー・千田優太)

あるくとの報告27

東京の舞台監督の方が来るという。今まで役者と事務方面(制作)のスタッフワークばかりだった私には、ワクワクするお話がうかがえる予感がありました。

そんな思いで、先月29日に仙台市若林区のせんだい演劇工房10-BOXで開かれた「ウォーキングARCVT」の「舞台監督ってなぁに?」へ参加しました。東京からSTAGE DOCTORの福澤諭志さん、仙台から「舞台監督工房」の武藤祥平さんがガイドとして参加し、ナビゲーターはあるくと事務局の鈴木拓さんでした。

本講座のタイトルでもある「舞台監督」の定義自体が定まっていない、という点からスタート。多岐にわたる実務の内容を、福澤さんの手掛けた演目の舞台図や上演時の映像、リポートを交えながら紹介し、あっという間に3時間半の講義が終了しました。

「できるだけ早い段階で、演出家のやりたいことをつかまえる。技術や知識は、それを導き出すためのもの」。今回、一番印象に残った言葉です。舞台に関わる人全般に言えることですが、あらためて心に刻みました。

(俳優・わかやなぎよしみ)

あるくとの報告28

メンバー有志が集まって結成した「あるくと年末企画委員会」は、24〜27日に仙台市青葉区のエル・パーク仙台で開く年末企画「来て、見て、あるくと。」の準備を進めています。これまでご支援いただいた皆さんに活動を報告し、より多くの方にあるくとを知っていただくのが目的です。

会議で何度も話し合い、子どもから大人まで楽しんでいただけるように心掛けました。上演作品の一部とワークショップは親子で参加でき、仙台の作品だけでなく福島、岩手両県の劇団にも声を掛けて、被災地の劇団がどのような経緯をたどってきたのかを作品を鑑賞しながら知ることができます。

チラシのデザインも、子どもから大人まで手に取りたくなるようにし、街中を歩きながらカフェや保育園、児童館などに配りました。年末企画らしく、クリスマスにちなんだ会場の装飾も現在作成中です。

「来て、見て、あるくと。」をたくさんの方に楽しんでいただき、東北の舞台芸術の「いま」を知っていただく機会になれば、と思います。

(俳優、企画製作・澤野正樹=仙台シアターラボ)

あるくとの報告29

13日と15日、東松島市の老人福祉施設「花いちもんめ」への出前。クリスマスウイーク。ウクレレを弾き、歌う。

前回「津軽海峡冬景色」を歌いだしたら皆も自然と口ずさみ、うれしくなった。そうなると張り切るもので、曲を増やしてうかがった。

「リクエストあれば」と聞いたら、最後にやるはずの曲で「もう一度歌いますからね」って念を押して皆で歌ったり…。リクエストをくれたおばあちゃんが、気に入ったのか「♪上を向〜いて」って、ずっと歌ってた。

簡単な雑学披露と冗談まじりのトーク。「この曲は、何年のレコード大賞でした」「小林亜星さん作曲で〜す」

そして「秋桜(コスモス)」を、「家では『薄紅の〝くもの巣〟が〜』って歌ってるんですよ」と紹介すると、普段ほとんど笑わないというおばあちゃんが笑ったのだ。慌てて職員がカメラを取りに行ったけどすぐ元の顔に。「ああ、残念」って…。

毎回汗かきながら「こうなら伝わるかな」「これならどう?」と試行錯誤している。皆さんに育てられているようだ。また行きます。

(劇作家、演出家、俳優・白鳥英一=OtoO Presents)

あるくとの報告30

昨年末、仙台市青葉区のエル・パーク仙台で行った「〜共に歩いた288日、そしてこれから〜来て、見て、あるくと。」では、会期中の4日間を通して「あるくとサロン」というトークプログラムを行いました。

岩手、東京、横浜、北九州からゲストを迎え、震災直後の被災地で文化の担った役割やクリエーションの現場、地方における劇場の在り方などについて対話できました。

「関係しようと思ったら、いつでも関係できる場所づくりをしている」(北九州市枝光本町アイアンシアター・市原幹也芸術監督)、「被災地で何を思っているか、メディアが報じない事実を作品に取り入れ、伝えにいく気持ちでいる」(盛岡市の架空の劇団・くらもちひろゆき代表)。と、それぞれの立場で話を伺うことができました。

これまで、あるくとは日常的なところからアートを求められ、ニーズに応えてきました。アーティストがどこまでまちづくりに寄与できるか。めまぐるしく過ぎ去った10カ月、新たな年を迎えて、多種多様なアーティストが一緒に考えながら歩みます。

(あるくと事務局・川村智美)

あるくとの報告31

仙台市宮城野区の宮城県障害者福祉センターで8日に行われた「わくわくダンス」のお手伝いに行って来ました。あるくとのダンサー西海石みかささんの講座。障害のある方だけでなく、付き添いの方やヘルパーさん、私たちあるくとメンバーも一緒に参加しています。

この日印象に残ったのは「自己紹介ダンス」でした。ぐるりと円になり、一人一人自己紹介の後に自分の名前と自分をイメージしたポーズを取ります。それをみんなでまねするのです。おのおのの違ったかたちがそこにはありました。

ダンス講座というと決められた振りをお稽古するイメージがあるかもしれませんが、ここでやられていることは違います。誰かに強制されることなく思いのままに体を動かしてみる楽しみ、それを見る楽しみ。人それぞれの面白さを

あるくとの報告21

人は、日々誰かに何かを伝えようと試行錯誤し、何かを共有しながら生きている。私たちは、不器用で、口下手で、どちらかというと一人で何もかもを抱えがちな東北人だ。

心に受けた傷は目には見えない。でもここで、言葉にならない感情を一度、吐き出してみると良いのではないか。抱えきれないものは、皆で分けあえばよい。心の在り方は体に表れる。そこから生まれるダンスがきっと、ある。

来年2月、そんな試みを初めて仙台で開催する。先日、この企画への出演希望者を対象に、仙台市若林区のせんだい演劇工房 10-BOX で説明会が行われた。

「出演者を集めることが、一番大変だろう」と考えていたが、なんと10～70代までの幅広い年齢層が20人も集まった。東北人は熱い。

「誰もが楽しめること」を基本にしたダンスは、コミュニティーダンスと呼ばれる。ダンス経験とか年齢とか何者であるとか関係なく。日常から表現は生まれ、やがて、人がアートになっていく。ここから、多くの出会いへと広がっていくことに期待したい。

（ダンサー、振付家・千葉里佳）

あるくとの報告22

舞台表現を志す人と共に学んで歩む「舞台芸術専門講座 ウォーキング ARC→T」を始めました。舞台芸術の第一線で活躍している方と、地元の表現者との対話でつくっていく講座です。第1回は10月1～3日、仙台市若林区のせんだい演劇工房 10-BOX で、ガイドに阿佐ケ谷スパイダースの長塚圭史さんを迎えて行いました。

テーマは「記憶の再生」。真剣に遊びましょうとの言葉に誘われて参加しました。ほかの参加者は役者、ダンサー、演出家など異なった場で活動している方々。ガイドも参加者も対等な立場で、「真剣に遊んだ」3日間でした。

個人的な出会いや夢の記憶が共有され、最終的に全員の物語として空間に立ち上がる。円座になり、誰かが立ち上がると物語が始まる。立ち上がるまでのとても刺激的でわくわくする一瞬。全員が演じ手であり、観客でもあることの一体感。

何より否定しない空間を保ち続けたことが、モチベーションや自信を高めることにつながっていった気がします。これからも舞台芸術の活性化を目指して続けていきたいと思います。

（あるくと事務局・タムラミキ）

あるくとの報告23

3・11の大地震の後、劇団員全員で「無料公演をやろう」と決め、7月から「人や銀河や修羅や海胆（うに）は」という宮沢賢治の作品群をモチーフとした舞台で宮城県内ツアーを行ってきた。装置は椅子が10脚のみ。音楽は生演奏で照明は使わない、野外を中心としたツアーだ。

7月には内陸部5カ所、10月に石巻、東松島市と七ケ浜、山元町の沿岸部4カ所を回り、千人以上の動員があった。石巻では津波の被災地である門脇地区と海を見下ろす日和山公園での公演し、出演者全員の合掌から始まった。

どの場所でもたくさんの笑顔に出会うことができ、ラストシーンでは心の深淵をのぞくような静まりかえる瞬間があった。終演後には、津波の体験を聞かせてくれたり、「来てくれてありがとう」などと温かい言葉をかけていただいたりした。

「祈りと鎮魂の舞台」として始めたツアーだったが、普段は行かない地域に出掛け、喜んでもらえたことは大きな収穫だったと思う。これからもお付き合いを続け、いい舞台をお見せすることができればと思っている。

（俳優・美峰子＝TheatreGroup"OCT/PASS"）

あるくとの報告24

私は「かとれあプロジェクト」と、平均年齢66歳の劇団「シニア劇団まんざら」に参加しています。7月には、東松島市の老人福祉施設で行っているあるくとの出前活動に参加。10月には仙台市で、震災復興を願って上演した、かとれあプロジェクトの演劇公演「楽屋」に出演しました。

まんざらも11月4～6日、仙台市青葉区の市民活動サポートセンターで第2回公演「結婚披露宴」を行いました。のりのよいお客さまに支えられ、爆笑のうちに公演を終えることができました。震災後、5月に初めて集まり、共に芝居をつくってきた皆さんの苦労に、感謝の気持ちでいっぱいです。

21人の大所帯ということもあり、稽古中は一本の脚本ができそうなほどドラマチックでした。おのおのが吉凶、病気やけがなどをクリアし、全員そろって舞台を終えられたことが何よりです。

この貴重な体験の成果を、何らかの形で被災地の皆さまにお届けできないかと思案している団員もいます。これからも積極的に活動を続けていきたいと思います。

（郷内宣子＝シニア劇団まんざら／かとれあプロジェクト）

あるくとの報告25

去る11月13日、多賀城市ＰＴＡ連合会祭りに出演させていただきました。「とり戻そう子供達の元気と笑顔を」という呼びかけで、地域のボランティアの方々が会場を明るく盛り上げていました。

私は会場のステージでタイ舞踊を舞いました。震災で傷ついた東北の大地、人々の心や暮らしが1日も早く復興できるよう、祈りを込めました。

踊りの後は、タイの楽器を会場の子どもたちと一緒に奏でました。集まってくださったみなさんの記憶に残るような時間を贈りたいという思いで、この日のショーを務めました。

東日本大震災で多くの命が失われ、ライフラインが止まった時、私の職業の出る幕はなく、しばらくは災害ボランティアをしていました。「表現や芸能で復興に貢献できる時が来たら、全力を尽くしたい」。そう願っていた私にとって、このイベントで踊らせていただけることはとても嬉しい出来事でした。

きっと今、これからが文化の力が発揮される時だと思います。誰かの心に喜びの種が届いていたら心からの喜びです。

（タイ舞踊家、フォンジューン体操トレーナー・土屋悠太郎）

あるくとの報告26

11月20日22時、レンタカーに5人が乗り込み仙台を出発した。目的地は北九州・枝光である。震災直後にARC→Tが動きだした時、真っ先に「来てください」と声をかけてくれたのが、枝光本町商店街アイアンシアターだ。東北の舞台人にどれだけ励みになったことか。ついにその時が来たのだ。

震災後の学童保育は統廃合され、プレハブや学校の空き教室で行われているそうで、子どもたちはまだ落ち着かない環境の中で過ごしています。これからの未来をつくっていく子どもたちのために、日常の遊び場から手助けをしていきたいと思います。

（あるくと事務局・川村智美）

あるくとの報告16

12日、仙台市宮城野区の宮城県障害者福祉センターで行われた、あるくとなど主催のダンスワークショップに参加しました。講師は大阪在住のダンサー砂連尾理（じゃれお・おさむ）さん。「ケアする人へのケア」がテーマでした。

震災から半年が過ぎて、被災者のケアをする人たちも疲れているのでは、と考えての企画です。参加者は約20人でした。

まず、誰にでもできて、でもいつもとは少し違う柔軟体操や、体の動かし方を学びました。日常生活で使っているのとは別の感覚を刺激されます。例えば、筋肉は伸ばそうと頑張ると逆にこわばってしまい、「力を抜くこと」が大事だと気付かされました。

体を使ったコミュニケーションも体験しました。言葉によるコミュニケーションとは質感が違い、より心がこもっているように感じました。現代人の言葉にはどこか心が足りない気がします。体から発せられる言葉こそが重要だ、とあらためて思いました。

体をほぐせば心もほぐれます。終了後、晴れやかな気分になっていました。あるくとの出前活動を通じて、この気持ちを多くの人にお届けできたらいいなと思います。

（俳優・荒野紘也＝TheatreGroup"OCT/PASS"）

あるくとの報告17

9月12日から17日まで、東松島市の老人福祉施設花いちもんめで、敬老の日にちなんだ「敬老ウィーク」というイベントが行われました。あるくともこの企画に参加。朗読や音楽演奏、タイ舞踊や紙芝居などさまざまな演目を披露しました。

私は、俳優の白鳥英一さんの朗読「夢十夜」のお手伝いをしてきました。朗読だけでなく白鳥さんの軽妙なおしゃべりとウクレレ演奏などもあり、利用者の方々に楽しんでいただけたようです。

利用者さんに朗読参加してもらうコーナーも大いに盛り上がりました。終了後、せりふを言ってくださった方にお話を伺うと、ご自宅では声を発する機会が少ないとのこと。「こんなふうに声を出したりしゃべったりできるのはうれしい」と笑顔で話してくれました。

この施設には5月の下旬から毎月継続的に訪問していて、何度かお顔を拝見する利用者さんも増えてきました。地元にいる私たちだからこそ継続的な活動が可能なのです。

小さな喜びをこれからもお届けできるよう、寄り添いながら、この出前活動に参加していきたいと思っています。

（俳優・上島奈津子）

あるくとの報告18

9月末、仙台市太白区の八木山児童館で「ものの気持ちワークショップ」を開催しました。「仙台市震災復興のための芸術家派遣事業」の一環です。心身の発散を目的とした内容で、テレビやリモコン、ソファなど、家のリビングにあるモノになって、その気持ちを想像してみるというものでした。

参加者は、八木山小の1年生がほとんど。始まる前に、「決まった答えはない」「自分と他人をバカにしない」という簡単なルールを説明しました。答えを導きだしたり、決められた筋道をたどったりするのではなく、「やりとりの中にある大切なものを感じる」のが狙いだからです。

子どもたちは家具や家電を、体いっぱい使って豊かに表現していました。多様な発想とそれに伴う反応、発見もさまざま。職員さんから「子どもたちが今まで見たこともない表情をしていました」との感想をいただきました。

この派遣事業は年度末まで継続されます。芸術の楽しさ、楽しみ方を子どもたちに伝えていくこと、それがあるくとの使命と心得て励んでいきたいと思います。

（俳優・原西忠佑）

あるくとの報告19

これまで支援をいただいた皆さんへ「ありがとう」という気持ちを込めて、また東京と東北の演劇人の交流を深める懸け橋になれればという願いを込めて、仙台市若林区のせんだい演劇工房10-BOXウッドデッキで4日、「芋煮会」を開催しました。前日から野菜の仕込みをし、当日は朝の9時からウッドデッキを養生して、舞台の小屋入りのようでした。

東京にはないこの催し。総勢90人に参加していただき、宮城のみそ味、山形のしょうゆ味を一緒に作りました。大学の演劇部の学生の皆さんが東京の演劇人を囲む会になったり、若手俳優同士で会話が弾んだりと、鍋を囲んで自然に対話が始まり、アットホームで気兼ねない場になりました。

会場は10-BOXの「0」の部分に当たります。「0」はこれから生み出すための場所です。東京と仙台が一堂に集まり、対話して、これから何かを「始めよう」、そんなきっかけになったと思います。ご参加いただいた皆さま、ありがとうございました。また仙台に遊びにきてほしいです。

（あるくと事務局・川村智美）

あるくとの報告20

仙台市宮城野区岩切の保育園で7日、「おはようシアター」がありました。「おはようシアター」は、姫やカエルのおじいさんやタイ人に扮（ふん）したアーティストによるおはよう体操、姫の手遊び、マジック、タイ舞踊、演劇「大きな種」などが織り交ぜられたプログラムです。

舞台美術も手作りで持ち込み、普段とは違う空間をつくり上げます。最初は泣いていた赤ちゃんもオープニングソングでピタリと泣きやみ、子どもたちはアーティストと一緒にダンスをしたり、体操をしたり、歌ったりと、とても盛り上がった45分でした。

「仙台市震災復興のための芸術家派遣事業」では、ダンサーや演劇人などさまざまなアーティストが参加し、普段は見られないようなキャスティングでプログラムをお届けしています。震災をきっかけにつながった絆が、子どもたちに笑顔を届けているのを見ると、私も笑みがこぼれずにはいられません。

アートを通して、心を癒やす時間、また明日への活力がわく体験の機会を提供していきます。

（あるくと事務局・高橋彩）

木管五重奏の調べに導かれ、「ことば」が会場に流れる。今を生きるものたちの大切さ、無限の真ん中に立ちつくす勇気、投影される家族の絆、そして地球存在の奇跡に払うべき敬意。名曲の旋律と相まって、胸の隅々まで響き渡る。

私が朗読したのは、井上ひさしと赤坂憲雄の対談「東北ルネサンス」の一節。「町を思い国を思うのなら、自分でも動かなくてはなりません」との訴えに心が動く。北原白秋「お祭り」の群読では、子どもからお年寄りまで45人が、あふれる喜びと思いを爆発させた。

朗読と音楽に耳を傾けながら、震災復興を足掛かりに、日本、そして世界が人に優しい世の中へ、新たに歩み始めてほしい。そう願う七夕の夜だった。

（俳優・藤原貢）

あるくとの報告11

震災後、私の所属する劇団の活動は事実上休止となりました。そんな折、仙台のアーティストが「あるくと」というネットワークを作る話を聞き、こういうときだからこそ横のつながりが大切と思い、参加しました。

会議や被災者への出前活動、イベントなど、さまざまな活動と新しい出会いの中で見えてきたのは、大災害時に二義的と思われがちな芸術活動も、アーティストやそのスタッフには、それが生業であるという事実。そしてアーティストが抱える「表現」への純粋な渇望と、秘めた力の大きさ。あるくとによって、ばらばらに点在した力が出合い、融合して、何かが生まれる希望でした。

人は、どんなにつらく深刻な状況にあっても、ちょっとしたことに思わず笑います。実はそれこそがどん底から抜け出す救いの鍵です。その笑顔を生みだすことが、芸術文化の根っこ。

私たちは、あるくとの活動を通じ、周りのみんなから、そして自分たちからも笑顔があふれることを願っています。あるくとが、復興する東北の希望となりますように。

（シェイクスピア・カンパニー・長保めいみ）

あるくとの報告12

私は映像編集の仕事の傍ら、音楽や演劇のライブを、インターネットに動画配信しています。3月27日に俳優の渡部ギュウ氏から「会議の様子を海外からも見られるようにネット配信してほしい」とメールをもらいました。それがきっかけで、最初の会議から現在まで、あるくとのすべての会議をネットで中継しています。

撮影をしながら、第三者的な視点で会議に参加して見えたのは、多くの演劇人が熱い思いを抱き、表現の場を求めていることでした。そして、経験豊かな演劇人たちがあるくとを支えてくれ、若手があるくとの役割に強く期待していることでした。

ただ、ボランティアベースでは、あるくとの活動は長く続けられないという心配もあります。企業協賛など運営資金が集まれば、より多くの人にアートを届けられるようになるのに、と思います。

会議をネットに発信することで、地元アーティストと国内外の人々が新たに出会うお手伝いができ、私自身もさまざまな人と知り合えました。これからも積極的な動画配信を続けていこうと思います。

（映像音声 編集技術・長屋裕二）

あるくとの報告13

8月19日、兵庫県立尼崎青少年創造劇場ピッコロシアターの方々が仙台にやって来て、仙台市太白区の大野田児童館にて子どもたちに演劇ワークショップを行いました。遊びを通して空間認識の力や造形能力を育てる内容でした。

あるくとのメンバーは宮城県子ども・おやこ劇場の方々と一緒にそのワークショップを見学し、これからの協働活動のための話し合いを3日間にわたって行いました。「いかにアーティストが地域に貢献することができるか、共に学び、刺激し合いながら、息の長い支援と連携を継続していければと考えています」とピッコロシアター。

あるくとも同じように、一度でさよならではない継続性のある活動を目指しています。今回のワークショップで学んだことを生かし、地元のアーティストの手で子どもたちに表現の豊かさや自由さを伝える活動を、もっと盛り上げていきたいと思いました。「また遊びに来てね」と笑顔で話す子どもたちに、少しでも寄り添えるように。

地元密着と継続性を大事にしながら、これからも共に歩くと心に決めて。

（あるくと事務局・千田優太）

あるくとの報告14

記憶は日々薄れ、自己防御の色を濃くし再生される。子供たちは土台だらけの道を渡り、右へ曲がり通学していく。

東京の友人が「石巻へボランティアに行ってきた」とのことで、仙台で会った。東京の地下鉄も地下街も薄ボンヤリしていると言う。大人たちはもどかしさと後ろめたさを引きずりながら歩いているように見える。それは66年前の夏の光景に通じる気がする。

私は南三陸町や石巻市の小学校などで、子供たちのために読み聞かせをおこなっている。その経験から思うことは、人にはまず想像力が働き、そうして気力が立ち上がっていくのだということ。

想像の基盤は「過去」ではないかと思う。大人には過去がある。子供にはちっちゃい昔しかない。だから、その子供たちには夢を与えるしかない。子供の口から夢を物語る言葉がでてくるまで、子供のそばに座り、同じ目の高さで、子供の目に映るモノを、一緒に大人たちは語り続けなければいけない。大人たちはあと10年は疲れちゃいけないんだ。66年前の夏、汗だらけの大人たちの背中があったように。

（劇作家、演出家、俳優・なかじょうのぶ）

あるくとの報告15

この震災で、子どもたちの集まる場所、本、学童用品、おもちゃ、遊具などがなくなりました。あるくとは、米国サンディエゴの支援団体「クリエイティブ・アクション・リンクス」と協働し、米国の子どもたちが書いてくれた手紙や遊び道具などの支援物資を被災地の子どもたちへ届ける支援活動「東北キッズソリダリティープロジェクト」を、行っています。

8月30日、石巻地区児童クラブと石巻鹿妻地区児童クラブにおもちゃを届けてきました。石巻は内陸と沿岸で状況が全く違います。鹿妻は津波の被害が大きかった所で、まだ家のがれきが残ったままの場所もありました。夏休みが終わって学校が始まったところで、プールの授業ではしゃぐ声を聞いたり、清掃の時間に掃除をする子どもたちの様子を見たりすることができました。

あるくとの報告5

5月下旬、出前部が向かったのは東松島市にある老人福祉施設「花いちもんめ」。震災時には津波も来たそうですが、施設は早くに再開し、利用者の皆さんが温かく迎えてくださいました。

まず幾つかのグループに分かれ、手足を使った運動や簡単なマッサージを行いました。運動は、じゃんけんなどを応用したゲーム感覚でできるもので、手足を動かすと同時に声も出していきました。一緒に体を動かすと自然と気持ちもほぐれ、終わる頃にはみんな笑顔になり、冗談もあちこちで飛び交いました。

「また行きたいね」とメンバーと話していたら、7月初めに再び出前に伺うことができました。

この時は、NPO法人20世紀アーカイブ仙台の協力を得て、昭和の懐かしい映像を見ました。人生の大先輩である利用者の皆さんが、当時どのような生活をしていたのかを私たちメンバーに教えていただき、この日も大いに盛り上がりました。

次はどんなことをしようか、今から楽しみです。これからもほっこりした楽しい時間を届けに行きたいと思っています。

（俳優・サマイ）

あるくとの報告6

「いつもココロに太陽を、いつもカバンに手ぬぐいを」。元気玉ぷろじぇくと「ゆ」制作チームの合言葉です。

温泉&銭湯をこよなく愛する「風呂部」の二人で発足したのが、元気玉ぷろじぇくとです。なので公演タイトルが「ゆ」。震災直後に営業再開してくださったたくさんの銭湯に感謝の気持ちを込めて。お風呂に入る気持ち良さや解放感、脱衣所での緩い交流の居心地よさ。そんな場が欲しくて、5月初め、街中のとあるカフェで興行しました。

4月のあるくと設立前から「考える前に動いてしまえ！」とアーティストに呼び掛けて、ダンス、朗読、お華、タイ舞踊、マイクパフォーマンス、カリンバ演奏など、これまで出合う機会のなかった思いがけない縁がつながりました。公演は「あるくと協力公演」の第1号になりました。

まだ落ち着かない日々の中だったにもかかわらず、立ち見になるほどたくさんのお客さまにご来場いただき、思い思いにのんびりしていただくことができました。

（劇作家、演出家・半田深雪＝魚類の薔薇）

あるくとの報告7

私は東京から「あるくと」に参加しています。3月末、偶然「東北復興に向けての仙台舞台人会議」（あるくとの前身）をインターネットで見始めたのがきっかけです。

震災当日、東京も大きく揺れました。都内のスタジオにいた私は帰宅できず、その後の計画停電情報にも右往左往。津波被害と福島原発ニュースの衝撃的な映像に「私、何かできるのか…」とぼうぜんとしました。

そんなさなか、インターネットでの会議視聴。「ここに生きて、この地で自らの表現を」。強い意志を持って生きる、あるくとメンバーの方々に出会い、引かれ、突き動かされました。

現在は、あるくと出前部の活動で、仙台市青葉区の知的障害者授産施設、多夢多夢舎中山工房での「美術のじかん」に、月1回参加しています。利用者の方々に絵を描いてもらうなどして、美術に親しんでもらう時間です。何の先入観もなく、あるものをありのまま感じ、表現する多夢多夢舎の芸術家たちに、毎回新鮮な驚きを感じます。

魅力的な人たちとの出会い。生涯の宝物になりそうです。

（舞台美術家・大沢佐智子）

あるくとの報告8

震災後、すぐ公演は無理だと思いました。その3週間前に公演した塩釜の居酒屋も津波で店を閉めました。

最初の頃のことは、あまり覚えていませんが、ラジオからのアナウンサーの声を聞き、計り知れないことが起きたと分かりました。まず演出術のぶ厚い本を読み、劇の短いアイデアを書き留めました。

その後、東松島や石巻で子どものためのボランティア活動に従事。あるくとの活動では、岩手や宮城の沿岸部を巡演する「夢とらっく劇場」や絆支援員とのワークショップに参加しました。また、東松島の老人福祉施設でご高齢の方々と交流し、市民センター祭りで朗読劇を上演し、今後、仙台七夕での朗読、仮設住宅で劇をという話もあります。

今、仙台だけでなく他地域も回る演劇の稽古の真っ最中です。合間を縫い、自分のチームのための台本執筆と準備を進めています。あの日、あれから感じたことを舞台にあげようと思っています。

（劇作家、演出家、俳優・白鳥英一＝OtoO Presens）

あるくとの報告9

震災後間もない3月末、私はあるくとの会議をインターネットで見ました。

すぐ活動できる状況ではありませんでしたが、「好きな演劇で復興のために役立つこと、表現できることがあるなら参加したい」と決めていました。今は、自分なりに関われる範囲で、あるくと出前部の活動をしています。

6月には、仮設住宅入居者を支援する仙台市の「安心見守り協働事業」の絆支援員向け研修として、演劇とダンスのワークショップを依頼されました。出前部ではまず、自主研修会で互いのアイデアを試し、プログラムを作成。これがアーティスト同士の情報共有と交流の場にもなりました。

実際の研修では、参加者から「いつもとは違う視点が見つかった」「リフレッシュできた」などの声が上がり、それが私たちにも響いてきました。自分自身への問い掛けにもなったのです。

このワークショップが、絆支援員と仮設住宅入居者とのコミュニケーションのお役に立てば、と思います。

（俳優・かと　れあ）

あるくとの報告10

昨年、私は古希を迎えた。自分でも不思議なのだが、先行きの短い身でありながら今まで以上に人類の未来が気になる。そんな時、東日本大震災で「普通の暮らし」を奪われ、右往左往しているうちに七夕が到来した。

人混みの苦手な私だが、6日、仙台市青葉区の勾当台公園市民広場での七夕ステージに立つことになった。あるくとの朗読と仙台フィルの演奏との共演である。

河北新報夕刊連載「あるくとの報告」

2011.6.14 ～ 2012.3.27　この記事は、河北新報に連載された「あるくとの報告」をまとめたものです。

あるくとの報告1

「アートリバイバルコネクション東北」（通称あるくと）は、地元で活動する表現者のネットワークです。東日本大震災の後、仙台市などを拠点にする俳優や劇作家、ダンサー、音響・照明・舞台美術などのスタッフ、映像関係などさまざまな分野のメンバーが、まちや人々が元気になるためにお役に立てれば、との思いで、活動を始めました。

具体的には、避難所で文化活動が必要とされているかを調査し、必要とされていれば出前します。宮城県内の避難所や被災した老人福祉施設でダンサーがストレッチやマッサージを紹介したり、子ども向けのイベントで役者が紙芝居や絵本の読み聞かせを披露したりしました。

事務局では地元で創作活動をする人たちの情報をウェブサイトで発信し、劇場が閉鎖されて仕事を失った舞台スタッフや公演の機会を失った劇団への支援を呼び掛けています。まだまだ舞台を楽しむ状況ではないかもしれませんが、いつか必要とされる日のために地道に歩みたいと思います。アートは生きる力になる、と信じて。

（あるくと事務局・伊藤み弥）

あるくとの報告2

火曜日夜7時。避難所になっている福室市民センター（仙台市宮城野区）の和室で、避難している人向けの「気持ちよく眠るためのからだほぐし」を行っています。

あるくとメンバーには照明にこだわる舞台関係者が多く、やわらかい光の電球をかもいに取り付けて準備します。

4回目になる7日のからだほぐしは、呼吸がテーマでした。息と一緒に自分の中の悪いものを全部吐き出し、きれいな空気を吸うという内容。参加者は、自分の呼吸に全神経を集中させました。

初めは「よく寝られない」「夜中に起きてしまう」などの声が聞かれました。顔なじみになると場もなごやかになり、1時間のプログラム中で笑うことがいっぱいです。

大人がゆったりとした時間を味わえるよう、子どもたちは別室で積み木や絵本で遊びます。「船に動物たちが乗ってるんだよ」「空を飛ぶよ」。すてきな舞台になりそうな想像力を示してくれます。

「また来週ね」と別れたけれど、その間に避難所を出られた方も。喜ばしいことはちょっと寂しい。「最後のお一人を見送るまで続けようね」と言っています。

（あるくと出前部・西海石みかさ）

あるくとの報告3

私は山形県・東北芸術工科大の復興プロジェクト「福興会議」に、フォトエッセー担当として関わっています。その縁から、同大の東北復興支援機構が取り組むプロジェクト「荒井良二とふらっぐしっぷ」に、「あるくと」として参加することになりました。

絵本作家の荒井良二さんが、被災した塩釜、石巻、多賀城、仙台の街を訪れ、人々と対話し、一緒に絵を描いていくワークショップツアーです。絵を被災地のメッセージを配した旗に仕立て、商店街や仮設住宅などに設置していきます。

18日、塩釜市のギャラリービルド・フルーガスを皮切りにスタート。参加したみなさんと共に記憶に記憶を重ねていくように絵の具を出し、描きました。

「旗と風を出合わせよう。旗と風が出合ったら上を向くかもしれない。」と荒井さん。この応援の旗ツアーは9月19日、仙台市のせんだい演劇工房10-BOXゴールです。さまざまな思いの旗が風に乗り、未来へ届くことを願っています。

（あるくと事務局・川村智美）

あるくとの報告4

ゴールデンウイークに、岩手県と宮城県の被災地6カ所で公演した「夢とらっく劇場」に参加しました。舞台は4トントラックの荷台の上です。宮沢賢治原作の「セロ弾きのゴーシュ」を上演しました。どの会場でもたくさんの子どもたちが集まってくれました。

お芝居の後は、俳優やスタッフが色鉛筆などをプレゼントします。上演したばかりの私たちが、子どもたちに直接語りかけて手を振り、握手をすると、本当にうれしそうに笑い、恥ずかしそうに手を振り返してくれます。劇を楽しんだ時間だけでなく、俳優たちと交流する瞬間も、子どもたちにとって特別な経験になるように思いました。

震災直後は、生命の維持や生活の立て直しが急務で「今は表現の時期ではない」と災害ボランティア活動に専念していましたが、「夢とらっく」に参加して、表現に携わる者ならではの貢献ができると実感しました。

私たちも被災者なので心と体のバランスに気をつけながら、これからも表現の目的や対象を大事に考えて活動していきたいと思います。

（タイ舞踊家・土屋悠太郎）

平成 23 年度 次代を担う子どもの文化芸術体験事業 - 派遣事業 -〈東日本大震災復興支援対応〉

仙台市域

日付	実施会場「プログラム名」参加人数
2011/08/24	むくどり夢の家 「小さな演劇をつくろう」 参加人数 30 名
2011/09/28	仙台市八木山児童館 「ものの気持ちワークショップ」 参加人数 20 名
2011/10/07	ちゃいるどらんど岩切駅前保育園 「おはようシアター」 参加人数 54 名
2011/10/11	若林区文化センター 「くず〜〜い屑屋でござい」 参加人数 300 名
2011/10/12	仙台市黒松児童館 「朗読のワーク」 参加人数 50 名
2011/10/15	社会福祉法人仙台市肢体不自由児者父母の会仙台自立の家 「タイ伝統芸能ショー」 参加人数 40 名
2011/10/15	仙台市子育てふれあいプラザのびすく泉中央 「スローモーションワークショップ」 参加人数 35 名
2011/10/18	善き牧者会さゆり保育園 「タイ伝統芸能体験 (フォンジューン舞踊)」 参加人数 30 名
2011/10/18	仙台市立吉成小学校 「からだとことばで遊ぶコミュニケーションゲーム」 参加人数 63 名
2011/10/19	仙台市立高森東小学校 「体が踊るからダ !」 参加人数 52 名
2011/10/21	学校法人旗立学園やまびこ幼稚園 「童謡唱歌と詩や童話の朗読」 参加人数 85 名
2011/10/22	仙台市木町通児童館 「WCP 〜アートで笑顔になろう〜 Water Color Painter」 参加人数 100 名
2011/10/24	むくどり夢の家 「小さな演劇をつくろう」 参加人数 30 名
2011/10/24	むくどり夢の家 「タイ伝統芸能体験 (フォンジューン舞踊)」 参加人数 30 名
2011/10/24	仙台市榴ヶ岡児童館 「ことばにならないこのきもち」 参加人数 20 名
2011/10/25	乳銀杏保育園 「人形劇『おまえうまそうだな・ねずみのすもう』」 参加人数 150 名
2011/10/25	仙台市根岸保育所 「和太鼓、踊り、うた 芸能体験ワークショップ日本の芸能を楽しもう」 参加人数 56 名
2011/10/26	柳生もりの子保育園 「人形劇『おまえうまそうだな・ねずみのすもう』」 参加人数 120 名
2011/10/27	若林区文化センター 「人形劇『おまえうまそうだな・ねずみのすもう』」 参加人数 150 名
2011/11/04	学校法人やわらぎ学園六郷幼稚園 「おはようシアター」 参加人数 100 名
2011/11/05	宮城野小学校宮城野児童館 「タイ伝統芸能ショー」 参加人数 30 名
2011/11/05	特定非営利活動法人 多夢多夢舎中山工房 「おもしろ空間工作『とびだす音楽。とびだす言葉。』」 参加人数 30 名
2011/11/07	仙台市八幡児童館 「小さな演劇をつくろう」 参加人数 40 名
2011/11/07	仙台市国見保育所 「絵本体験ワークショップ」 参加人数 20 名
2011/11/10	学校法人仙台こひつじ学園向山幼稚園 「『おこんじょうるり』朗読劇」 参加人数 164 名
2011/11/10	仙台市立七郷小学校 「誰でもダンス」 参加人数 20 名
2011/11/11	仙台市東仙台保育所 「おはようシアター」 参加人数 65 名
2011/11/14	仙台市七北田児童センター 「体や心のセルフケア講座」 参加人数 35 名
2011/11/14	こりれいず 「ものの気持ちワークショップ」 参加人数 20 名
2011/11/15	仙台市立八木山南小学校 「誰でもダンス」 参加人数 56 名
2011/11/15	そらのこ保育園 「絵本体験ワークショップ」 参加人数 30 名
2011/11/18	志波幼稚園 「おはようシアター」 参加人数 80 名
2011/11/18	仙台市立北中山小学校 「絵本体験ワークショップ」 参加人数 61 名
2011/11/19	特定非営利活動法人 多夢多夢舎中山工房 「おもしろ空間工作『とびだす音楽。とびだす言葉。』」 参加人数 30 名
2011/11/26	仙台市鹿野児童館 「トコトコフォトストーリー」 参加人数 20 名
2011/11/29	仙台市立七郷小学校 「誰でもダンス」 参加人数 20 名
2011/11/30	仙台市立作並小学校 「賢治さんと遊ぼう」 参加人数 39 名
2011/12/02	せんだい保育室こどもの家エミール 「おはようシアター」 参加人数 30 名
2011/12/03	仙台市新田児童館 「やってみよう ! 親子で即興劇」 参加人数 15 名
2011/12/03	特定非営利活動法人 多夢多夢舎中山工房 「おもしろ空間工作『とびだす音楽。とびだす言葉。』」 参加人数 30 名
2011/12/05	仙台市太白保育所 「和太鼓、踊り、うた 芸能体験ワークショップ 日本の芸能を楽しもう」 参加人数 38 名
2011/12/08	せんだい若者サポートステーション 「体ほぐし〜筋力 UP まで痛くない誰でもできるストレッチ体操」 参加人数 10 名
2011/12/08	仙台市立八木山南小学校 「誰でもダンス」 参加人数 56 名
2011/12/09	仙台市高砂保育所 「おはようシアター」 参加人数 30 名
2011/12/10	仙台市八木山児童館 「タイ伝統芸能ショー」 参加人数 20 名
2011/12/13	仙台市立八木山南小学校 「誰でもダンス」 参加人数 56 名
2011/12/17	仙台市柳生児童館 「フォンジューン体操」 参加人数 30 名
2011/12/19	仙台市折立児童館 「みんなで楽しむレクリエーション」 参加人数 30 名
2011/12/20	仙台市将監保育所 「絵本体験ワークショップ」 参加人数 80 名
2011/12/20	仙台市立七郷小学校 「誰でもダンス」参加人数 20 名
2011/12/22	仙台市将監児童館 「Maek(マエク)」参加人数 20 名
2011/12/22	仙台市八乙女保育所 「タイ伝統芸能ショー」参加人数 95 名

日付	実施会場「プログラム名」参加人数
2012/01/05	特定非営利活動法人アフタースクールぱるけ 「誰でもダンス」 参加人数 35 名
2012/01/09	仙台市将監児童館 「Maek(マエク)」 参加人数 20 名
2012/01/10	仙台市福室児童館「和太鼓、踊り、うた 芸能体験ワークショップ日本の芸能を楽しもう」 参加人数 70 名
2012/01/12	太白区文化センター「ましゅ &kei」 参加人数 :100 名
2012/01/13	仙台市立東仙台小学校 「ももゴリのダンス作品の作り方〜〜入門編〜〜」 参加人数 66 名
2012/01/13	仙台袋原あおぞら保育園 「宝物を探せ !」 参加人数 30 名
2012/01/17	青葉保育園 「まつりのひびき」 参加人数 140 名
2012/01/19	仙台市立大野田小学校 「コミュニケーション」 参加人数 60 名
2012/01/20	仙台市立大野田小学校 「コミュニケーション」 参加人数 60 名
2012/01/20	新田すいせん保育所 「おはようシアター」 参加人数 110 名
2012/01/26	せんだい若者サポートステーション 「 体ほぐし〜筋力 UP まで痛くない誰でもできるストレッチ体操」 参加人数 10 名
2012/01/27	仙台市立向陽台小学校 「360°」 参加人数 480 名
2012/01/28	仙台市中田児童館 「声の調べと楽器の調べ」 参加人数 40 名
2012/01/28	仙台市福室市民センター 「ジェミニと楽しいまんが教室★」 参加人数 35 名
2012/01/31	仙台市立秋保小学校 「童話や伝統の朗読 今は昔の福袋」 参加人数 55 名
2012/02/03	仙台市幸町児童館 「おはようシアター」 参加人数 20 名
2012/02/03	仙台市立広瀬小学校 「自分の可能性をひろげようダンス !」 参加人数 137 名
2012/02/04	仙台市松陵児童センター「フォンジューン体操」 参加人数 30 名
2012/02/08	学校法人六郷学園ドリーム幼稚園 「親子で楽しく体を動かしてみよう」 参加人数 20 名
2012/02/09	仙台市立四郎丸小学校 「絵葉書イラスト体験会」 参加人数 72 名
2012/02/10	仙台市鶴ヶ谷児童館 「おはようシアター」 参加人数 20 名
2012/02/15	寺岡すいせん保育所「和太鼓、踊り、うた 芸能体験ワークショップ日本の芸能を楽しもう」 参加人数 60 名
2012/02/16	新田東すいせん保育所 「まつりのひびき」 参加人数 70 名
2012/02/17	仙台市荒巻保育所 「おはようシアター」 参加人数 90 名
2012/02/21	学校法人三島学園ますみ保育園 「はじめてのおしばい『おばけリンゴ』ほんとうの『げんこつやまのたぬきさん』」 参加人数 68 名
2012/02/22	仙台市八乙女児童館 「はじめてのおしばい『おばけリンゴ』ほんとうの『げんこつやまのたぬきさん』」 参加人数 60 名
2012/02/22	仙台市支倉保育所 「はじめてのおしばい『おばけリンゴ』ほんとうの『げんこつやまのたぬきさん』」 参加人数 80 名
2012/02/23	仙台市寺岡児童センター 「はじめてのおしばい『おばけリンゴ』ほんとうの『げんこつやまのたぬきさん』」 参加人数 60 名
2012/02/23	仙台市岩切保育所 「はじめてのおしばい『おばけリンゴ』ほんとうの『げんこつやまのたぬきさん』」 参加人数 57 名
2012/02/23	せんだい若者サポートステーション 「体ほぐし〜筋力 UP まで痛くない誰でもできるストレッチ体操」 参加人数 10 名
2012/02/24	大野田すぎのこ保育園 「おはようシアター」 参加人数 80 名
2012/02/25	ぷりえ〜る保育園 「おはようシアター」 参加人数 30 名
2012/02/25	仙台市市名坂児童館 「声優体験ワークショップ」 参加人数 20 名

宮城県域

日付	実施会場「プログラム名」参加人数
2011/08/30	迫町公民会館 渋谷裕子ソロ公演 参加人数 30 名
2011/10/16	名取市愛島東部住宅自治会 「仙台すずめ踊りをやってみよう」 参加人数 20 名
2011/12/01	石巻かもめ学園「WCP 〜アートで笑顔になろう〜 Water Color Painter」 参加人数 20 名

実施会場数 (計):79 箇所／実施回数 (計):88 回

実働芸術家数 (のべ):398 名 (主指導者 :100 名・補助者 :298 名)

2011 年 4 月 6 日〜 2012 年 3 月 31 日までの出前活動一覧

2011 年

4 月 6 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　半田深雪　土屋悠太郎

4 月 12 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　伊藤文恵　土屋悠太郎

4 月 15 日　志津川小学校（南三陸町）　絵本のお届け
鈴木拓　加瀬貴広　宇宙　※こどもとあゆむネットワークとの協働

4 月 15 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ　千葉瑠依子　半田深雪

4 月 17 日　東松島市図書館（東松島市）絵本のお届け
八巻寿文　館林敦士　小川猫雀　美峰子　片倉久美子　土屋悠太郎　寺田美夏　黒田浩　今野舞亜　庄司智仁　※こどもとあゆむネットワークとの協働

4 月 19 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　半田深雪　土屋悠太郎　伊藤文恵

4 月 22 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ　千葉瑠依子　半田深雪

4 月 26 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　半田深雪　土屋悠太郎

4 月 29 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）　アートデイ
西海石みかさ　半田深雪　美峰子

4 月 29 日　釜石市民体育館 (岩手県釜石市)
夢とらっく劇場「セロ弾きのゴーシュ」
石川裕人　白鳥英一　寺田美夏　真田翻　土屋悠太郎　X 梨ライヒ　鈴木ひろし　外崎伸（以下実施メンバー同）※セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン主催

4 月 30 日　山田南小学校（岩手県山田町）
夢とらっく劇場「セロ弾きのゴーシュ」
※セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン主催

5 月 1 日　サンビレッジ高田（岩手県陸前高田市）
夢とらっく劇場「セロ弾きのゴーシュ」
※セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン主催

5 月 3 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）　アートデイ
千葉瑠依子　西海石みかさ　半田深雪　土屋悠太郎　伊藤文恵

5 月 3 日　ファミリーマート植松一丁目店（名取市）
夢とらっく劇場「セロ弾きのゴーシュ」
※セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン主催

5 月 3 日　せんだいメディアテーク（仙台市）
歩き出すために「宮澤賢治の詩を読む」
半田深雪　かとれあ　髙橋菜穂子　長保めいみ　美峰子　館林敦士　戸石みつる　樋渡宏嗣　渡部ギュウ

5 月 4 日　広瀬川宮沢緑地公園（仙台市）「広瀬川で遊ぼう」
小畑次郎　橋浦あやの　山中冴晶　山中景晶　小野寺竜一　西海石みかさ　伊藤み弥　鈴木拓　※広瀬川市民会議主催

5 月 4 日　ロックタウン矢本（東松島市）
夢とらっく劇場「セロ弾きのゴーシュ」
※セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン主催

5 月 5 日　広瀬川宮沢緑地公園（仙台市）「広瀬川で遊ぼう」
小畑次郎　橋浦あやの　山中冴晶　山中景晶　小野寺竜一　西海石みかさ　伊藤み弥　川村智美　※広瀬川市民会議主催

5 月 5 日　大街道小学校（石巻市）
夢とらっく劇場「セロ弾きのゴーシュ」
※セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン主催

5 月 5 日　東松島市図書館（東松島市）「子どもの広場」
高橋康太　館林敦士　樋渡宏嗣　樋渡美穂　鈴木拓

5 月 6 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ

5 月 10 日　福室市民センター（仙台市）「気持ちよく眠るためのからだほぐし」
千葉瑠依子　かとれあ　生田恵　橋本沙織　西海石みかさ　大久保遊　里見まり子

5 月 11 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　大沢佐智子　橋本沙織

5 月 11 日　石巻市立湊小学校（石巻市）震災復興支援無料上映会
原西忠佑　※山形県映画センターへ協力

5 月 13 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
千葉瑠依子　西海石みかさ　橋本沙織

5 月 20 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
千葉瑠依子　西海石みかさ　橋本沙織　近藤麻衣子

5 月 21 日　しおかぜ福祉会（岩沼市）「ダンスを楽しもう」
西海石みかさ　伊藤文恵　近藤麻衣子

5 月 23 日　花いちもんめ（東松島市赤井）「ほがらかタイム」
西海石みかさ　長保めいみ　サマイ　千葉瑠依子　上島奈津子　澤野正樹　橋本沙織　近藤麻衣子

5 月 24 日　福室市民センター（仙台市）「気持ちよく眠るためのからだほぐし」
サマイ　千葉瑠依子　生田恵　長保めいみ　橋本沙織　近藤麻衣子　西海石みかさ

5 月 25 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　土屋悠太郎　生田恵

5 月 31 日　福室市民センター（仙台市）「気持ちよく眠るためのからだほぐし」
長保めいみ　サマイ　生田恵　千葉瑠依子　西海石みかさ　伊藤み弥

6 月 1 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　長保めいみ　飯田智穂　猪戸美香

6 月 3 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
千葉瑠依子　西海石みかさ　橋本沙織　佐藤紘

6 月 5 日　泉セルバ（仙台市）「あるくとひろば」
館林敦士　高橋康太　佐々木一美　小野円　伊藤友明　川村智美　※こどもとあゆむネットワークとの協働

6 月 7 日　福室市民センター（仙台市）「気持ちよく眠るためのからだほぐし」
生田恵　長保めいみ　橋本沙織　西海石みかさ

6 月 8 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　飯田智穂

6 月 10 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ　橋本沙織

6 月 11 日　しおかぜ福祉会（岩沼市）「ダンスを楽しもう」
西海石みかさ　タムラミキ

6 月 11 日　ホテル観洋ほか（南三陸町ほか）
南三陸町追悼会「南三陸の海へ思いを届けよう」
長屋裕二　鈴木拓　※ envisi への協力

6 月 14 日　福室市民センター（仙台市）「気持ちよく眠るためのからだほぐし」
長保めいみ　サマイ　片倉久美子　西海石みかさ

6 月 15 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ

6 月 17 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ　山口小夜子

6 月 21 日　福室市民センター（仙台市）「気持ちよく眠るためのからだほぐし」
西海石みかさ　長保めいみ　サマイ　かとれあ　山口小夜子

6 月 22 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　猪戸美香　飯田智穂　山口小夜子

6 月 23 日　東松島合同保育所（東松島市）寝具などお届け
原西忠佑　鈴木拓　※ CAL との協働

6 月 24 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ　千葉里佳　山口小夜子

6 月 25 日　しおかぜ福祉会（岩沼市）「ダンスを楽しもう」
西海石みかさ　山口小夜子　タムラミキ

6 月 28 日　福室市民センター（仙台市）「気持ちよく眠るためのからだほぐし」
西海石みかさ　サマイ　山口小夜子　小住典子

6 月 29 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　大沢佐智子　猪戸美香　飯田智穂　山口小夜子

7 月 1 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ

7 月 5 日　花いちもんめ（東松島市赤井）「クラシカルセンダイ」
西海石みかさ　伊藤みや　郷内宣子　サマイ　白鳥英一　大場勇人　川合かおり　樋渡宏嗣　※ 20 世紀アーカイブ仙台との協働

7 月 5 日　福室市民センター（仙台市）「気持ちよく眠るためのからだほぐし」
まとめの会
生田恵　小住典子　サマイ　猪戸美香　長保めいみ　西海石みかさ

7 月 6 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　猪戸美香　飯田智穂

7 月 8 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ　長保めいみ　居舘倫絵

7 月 9 日　しおかぜ福祉会（岩沼市）「ダンスを楽しもう」
西海石みかさ　川熊美貴　タムラミキ

7 月 11 日　ホテル観洋ほか（南三陸町ほか）
南三陸町追悼会「南三陸の海へ思いを届けよう」
長屋裕二　※ envisi への協力

7 月 14 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　飯田智穂

7 月 15 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ　羽太結子　川口聡　青木佳文　郡山幹生　藤原顕　砂川史織　落合由人　黒澤世莉

7 月 20 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　猪戸美香　飯田智穂

7 月 22 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ

7 月 23 日　子育て支援センターほっとふる（東松島市）「学ぶ・遊ぶ・復興夏祭り」
川熊美貴　菅朗　川村智美

7 月 23 日　しおかぜ福祉会（岩沼市）「ダンスを楽しもう」
西海石みかさ　タムラミキ

7 月 25 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「映画無料上映会」
西海石みかさ　高橋史生　※ 20 世紀アーカイヴ仙台のお手伝い

7 月 25 日　パーソナルサポートセンター（仙台市）「絆支援員ワークショップ」
土屋悠太郎　生田恵　長保めいみ

7 月 27 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　大沢佐智子　猪戸美香　飯田智穂

7月29日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ
8月3日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　猪戸美香　飯田智穂
8月5日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ
8月6日　仙台七夕まつり（仙台市）
「祈りの星祭り〜 Pray for TOHOKU」第一夜
石川裕人　絵永けい　今野むつ江　丹野久美子　藤原貢　かとれあ　熊谷由海　サマイ　永澤真美　長保めいみ　大渕浩　白鳥英一　原西忠佑　樋渡宏嗣　千葉里佳　BalletCompany 〜 demain 〜　劇団まんざら　創作和太鼓鼓逢　子ども有志　仙台フィルハーモニー管弦楽団
8月7日　仙台七夕まつり（仙台市）
「祈りの星祭り〜 Pray for TOHOKU」第二夜
半田深雪　仙台フィルハーモニー管弦楽団
8月8日　大曲花いちもんめ（東松島市大曲）「映像とお話の会」
生田恵上島奈津子　長保めいみ　西海石みかさ　樋渡宏嗣　大渕浩
※ 20 世紀アーカイブ仙台との協働
8月10日　大曲花いちもんめ（東松島市大曲）
まち・アート夢虫　西海石みかさ
8月10日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
猪戸美香　飯田智穂
8月11日　ホテル観洋ほか（南三陸町ほか）
南三陸町追悼会「南三陸の海へ思いを届けよう」
長屋裕二　※ envisi への協力
8月17日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　飯田智穂　猪戸美香
8月19日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ
8月21日　高森東小学校（仙台市）PTA 向けダンスワークショップ
渋谷裕子
8月24日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　飯田智穂　猪戸美香
8月26日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ
8月27日　しおかぜ福祉会（岩沼市）「ダンスを楽しもう」
西海石みかさ　長保めいみ　タムラミキ
8月29日　パーソナルサポートセンター（仙台市）「絆支援員ワークショップ」
土屋悠太郎
8月31日　パーソナルサポートセンター（仙台市）「絆支援員ワークショップ」
白鳥英一
8月31日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
飯田智穂　大沢佐智子
9月1日　鹿妻地区児童クラブ（石巻市）おもちゃのお届け
川村智美　鈴木拓　高橋亜希　※ CAL との協働
9月2日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ
9月7日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
飯田智穂 猪戸美香 西海石みかさ
9月8日　高森東小学校（仙台市）PTA 向けダンスワークショップ
渋谷裕子　西海石みかさ　千田優太
9月9日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ　高橋彩
9月10日　しおかぜ福祉会（岩沼市）「タイの踊りと演奏」
土屋悠太郎　大沢佐智子　西海石みかさ　タムラミキ
9月12日　花いちもんめ（東松島市赤井）敬老ウィーク
「タイ舞踊」
土屋悠太郎　西海石みかさ
9月12日　大曲花いちもんめ（東松島市大曲）敬老ウィーク
「童謡唱歌と詩の朗読」
長保めいみ　高橋美和　相澤洋美　千田優太
9月13日　花いちもんめ（東松島市赤井）敬老ウィーク
「夢十五夜〜こんな夢を見た」
白鳥英一　上島奈津子　瀬川まーち　西海石みかさ
9月13日　大曲花いちもんめ（東松島市大曲）敬老ウィーク
「回想法レクリエーション」
20 世紀アーカイブ仙台　高橋彩
9月14日　大曲花いちもんめ（東松島市大曲）敬老ウィーク
「タイ舞踊」
土屋悠太郎　高橋彩
9月15日　花いちもんめ（東松島市赤井）敬老ウィーク
「回想法レクリエーション」
20 世紀アーカイブ仙台　鈴木拓
9月15日　大曲花いちもんめ（東松島市大曲）敬老ウィーク
「夢十五夜〜こんな夢を見た」
白鳥英一　千田優太
9月16日　花いちもんめ（東松島市赤井）敬老ウィーク
長保めいみ　高橋美和　相澤洋美　高橋彩
9月16日　大曲花いちもんめ（東松島市大曲）敬老ウィーク
「ダンスを楽しもう」
西海石みかさ　多夢多夢舎有志
9月17日　花いちもんめ（東松島市赤井）敬老ウィーク
「紙芝居や朗読・手遊び」
かとれあ　大久保雅基　ひのおさむ　田村よう子　鈴木拓
9月17日　大曲花いちもんめ（東松島市大曲）敬老ウィーク
「民俗芸能」
民族歌舞団ほうねん座　西海石みかさ
9月28日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
飯田智穂　猪戸美香　タムラミキ
9月30日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ　タムラミキ
10月5日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
飯田智恵　猪戸美香　西海石みかさ
10月7日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ　上島奈津子
10月12日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
飯田智穂　猪戸美香　西海石みかさ　高橋彩
10月13日　福室市民センター（仙台市）KAREI カレッジ
長保めいみ
10月14日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ　高橋彩
10月14日　浦戸第二小学校（塩竈市）文化祭への協力
川村智美　佐々木一美　へも　鈴木拓　原西忠佑　※ 10-BOX への協力
10月16日　パーソナルサポートセンター（仙台市）「絆支援員ワークショップ」
生田恵　白鳥英一
10月17日　パーソナルサポートセンター（仙台市）「絆支援員ワークショップ」
土屋悠太郎　小住典子
10月19日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
飯田智穂　西海石みかさ
10月21日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ　上島奈津子　大沢佐智子　白鳥英一　高橋彩
10月22日　浦戸第二小学校（塩竈市）文化祭への協力
鈴木拓　館林敦士　佐々木一美　丹野久美子　江目ひとみ　※ 10-BOX への協力
10月22日　宮城野児童館（仙台市）照明演出の出前
高橋亜希　鈴木拓
10月24日　箱塚桜仮設住宅（名取市）「回想法レクリエーション」
20 世紀アーカイブ仙台　長保めいみ　西海石みかさ
10月26日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
飯田智穂　猪戸美香　西海石みかさ　高橋彩
10月28日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ
10月29日　しおかぜ福祉会（岩沼市）「ダンスを楽しもう」
西海石みかさ　タムラミキ
10月30日　大曲花いちもんめ（東松島市大曲）「タオル人形でミニシアター」
田村よう子　タムラミキ　上島奈津子
10月31日　花いちもんめ（東松島市赤井）「日本のおどりを踊りましょう」
西海石みかさ　長保めいみ　大沢佐智子
11月2日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ　タムラミキ
11月4日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　まめ　飯田智穂
11月8日　箱塚桜仮設住宅（名取市）「回想法レクリエーション」
20 世紀アーカイブ仙台　生田恵　上島奈津子　土橋淳志
11月9日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ　タムラミキ
11月11日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　まめ　タムラミキ
11月12日　しおかぜ福祉会（岩沼市）「ダンスを楽しもう」
渋谷裕子　千田優太　タムラミキ
11月16日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ
11月18日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　飯田智穂
11月19日　しおかぜ福祉会（岩沼市）「ダンスを楽しもう」
タムラミキ
11月22日　大曲花いちもんめ（東松島市大曲）「しおり創作と宮城の民話」
田村よう子　タムラミキ　上島奈津子
11月25日　花いちもんめ（東松島市赤井）「お話しと演奏と芝居」
長保めいみ　白鳥英一　上島奈津子　わかやなぎよしみ　タムラミキ
11月30日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
高橋彩　タムラミキ
12月2日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　まめ
12月3日　シャロームの会（仙台市）オリーブサロン「タイ舞踊」
土屋悠太郎　川村智美

2011 年 4 月 6 日〜 2012 年 3 月 31 日までの出前活動一覧

12 月 3 日　宮城県障害者福祉センター(白石市)「ダンスパラダイス 2011inしろいし」
西海石みかさ
12 月 5 日　パーソナルサポートセンター（仙台市）「絆支援員ワークショップ」
土屋悠太郎　タムラミキ
12 月 6 日　パーソナルサポートセンター（仙台市）「絆支援員ワークショップ」
生田恵　白鳥英一
12 月 7 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
高橋彩　タムラミキ
12 月 9 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
土屋悠太郎　高橋彩
12 月 11 日 宮城県障害者福祉センター（仙台市）「わくわく☆ダンス」
西海石みかさ　川村智美
12 月 12 日 花いちもんめ（東松島市赤井）クリスマス敬老ウィーク
「みんなで踊ろう椅子ダンスと 360°」
渋谷裕子　千田優太　西海石みかさ
12 月 12 日 大曲花いちもんめ（東松島市大曲）クリスマス敬老ウィーク
「けんじのせかい」
長保めいみ　斎木良太　タムラミキ
12 月 13 日 花いちもんめ（東松島市赤井）クリスマス敬老ウィーク
「回想法レクリエーション」
20 世紀アーカイブ仙台　澤野正樹
12 月 13 日 大曲花いちもんめ（東松島市大曲）クリスマス敬老ウィーク
「ウクレレ演奏と朗読」
白鳥英一　高橋彩
12 月 14 日 多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ
12 月 14 日 花いちもんめ（東松島市赤井）クリスマス敬老ウィーク
「朗読と手遊び歌」
タムラミキ　小濱昭博
12 月 14 日 大曲花いちもんめ（東松島市大曲）クリスマス敬老ウィーク
「民話と手遊び」
田村よう子　わかやなぎよしみ　高橋彩
12 月 15 日 花いちもんめ（東松島市赤井）クリスマス敬老ウィーク
「名台詞と演奏」
白鳥英一　わかやなぎよしみ　タムラミキ
12 月 15 日 大曲花いちもんめ（東松島市大曲）クリスマス敬老ウィーク
「日本のおどりを踊りましょう」
西海石みかさ　斎木良太　小濱昭博
12 月 16 日 多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　まめ　大沢佐智子
12 月 16 日 花いちもんめ（東松島市赤井）クリスマス敬老ウィーク
「フォンジューン体操を楽しもう」
土屋悠太郎　小林直美　館林敦士　川村智美
12 月 16 日 大曲花いちもんめ（東松島市大曲）クリスマス敬老ウィーク
「津軽三味線演奏と唄」
伊南喜人　斎木良太　タムラミキ
12 月 17 日 花いちもんめ（東松島市赤井）クリスマス敬老ウィーク
「IMS 磯貝メソッド仙台塾」
今野智子　五十嵐俊江　戸内弓子　西海石みかさ
12 月 17 日 大曲花いちもんめ（東松島市大曲）クリスマス敬老ウィーク
「おこんじょうるり」
かとれあ　長保めいみ　永澤真美　安藤友春　大久保裕　タムラミキ
12 月 21 日 多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ　高橋彩
12 月 22 日 宮城野児童館（仙台市）クリスマスコンサート照明演出
髙橋亜希　鈴木拓

2012 年

1 月 6 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
高橋彩　タムラミキ
1 月 8 日　宮城県障害者福祉センター（仙台市）「わくわく☆ダンス」
西海石みかさ　わかやなぎよしみ　上島奈津子　川村智美
1 月 10 日 藤倉保育所（塩竈市）「ミニパフォーマンスとタップ体験」
おどるなつこ　小濱昭博　高橋彩
1 月 11 日 多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ　高橋彩
1 月 13 日 多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　まめ　高橋彩
1 月 18 日 多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ
1 月 20 日 多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　まめ　足羽アリス貴和子
1 月 22 日 宮城県障害者福祉センター（仙台市）「わくわく☆ダンス」
西海石みかさ　わかやなぎよしみ　齋藤裕亮　川村智美　高橋彩
1 月 25 日多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
まめ　高橋彩　タムラミキ
1 月 27 日 多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
大沢佐智子 高橋彩 タムラミキ
1 月 28 日 しおかぜ福祉会（岩沼市）「ももゴリのダンスを楽しもう」
渋谷裕子　千田優太　上島奈津子　高橋彩　タムラミキ
2 月 1 日　人来田マイスクール児童館（仙台市）「小さな演劇をつくろう」
白鳥英一　上島奈津子　瀬川まーち　千田優太　タムラミキ
2 月 8 日　八木山子育て支援クラブメイメイ（仙台市）
「創造力で遊ぶ」＆「小さなおはなしと詩を楽しもう」
小濱昭博　長保めいみ　斎木良太　齋藤裕亮　千田優太　高橋彩
2 月 8 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
高橋彩　タムラミキ
2 月 10 日 多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　まめ
2 月 12 日 宮城県障害者福祉センター（仙台市）「わくわく☆ダンス」
西海石みかさ　齋藤裕亮　平山健太　上島奈津子　川村智美　高橋彩
2 月 15 日 多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
高橋彩
2 月 17 日 多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　大沢佐智子　高橋彩
2 月 18 日 しおかぜ福祉会（岩沼市）「ダンスを楽しもう」
タムラミキ　上島奈津子　平山健太
2 月 21 日 花いちもんめ（東松島市赤井）※高齢者と地元アーティストの学びあい事業
DPK「タイ民話のハイブリット紙芝居」
土屋悠太郎　上島奈津子　長保めいみ　渋谷裕子　タムラミキ　西海石みかさ　鈴木拓
2 月 22 日 多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ　高橋彩　高橋亜希
2 月 24 日 多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　まめ　飯田智穂　高橋彩
2 月 25 日 しおかぜ福祉会（岩沼市）「ダンスを楽しもう」
齋藤裕亮　平山健太　加藤隆　大庭千鶴　タムラミキ
2 月 27 日 花いちもんめ（東松島市赤井）※高齢者と地元アーティストの学びあい事業
DPK「歌って踊る花いちもんめ」
渋谷裕子　上島奈津子　高橋美和　相澤洋美　タムラミキ　西海石みかさ　川村智美
2 月 29 日 多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ　タムラミキ
3 月 2 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　飯田智穂　タムラミキ
3 月 7 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ　高橋彩
3 月 9 日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
まめ　飯田智穂　タムラミキ
3 月 11 日 福室市民センター（仙台市）「春色コンサート」照明出前
高橋亜希
3 月 12 日 大曲花いちもんめ(東松島市大曲)※高齢者と地元アーティストの学びあい事業
DPK「タイ民話のハイブリット紙芝居」
土屋悠太郎　上島奈津子　長保めいみ　澤野正樹　タムラミキ
3 月 14 日 青山保育所　仙台市「からくり紙芝居＆リズム・歌遊び」
長保めいみ　齋藤裕亮　高橋彩　斎木良太　千田優太
3 月 14 日 多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ　タムラミキ
3 月 15 日 清水沢保育所（塩竈市）「おはようシアター」
川熊美貴　菅朗　土屋悠太郎　伊藤文恵　まめ　西海石みかさ　上島奈津子　千田優
太3 月 17 日 しおかぜ福祉会（岩沼市）「ダンスを楽しもう」
西海石みかさ　齋藤裕亮
3 月 18 日 宮城県障害者福祉センター（仙台市）「わくわく☆ダンス」
西海石みかさ　上島奈津子　わかやなぎよしみ　齋藤裕亮　矢野文子　タムラミキ
3 月 19 日 かむりの里　仙台市※高齢者と地元アーティストの学びあい事業
DPK「歌って踊るかむりの里」
渋谷裕子　西海石みかさ　上島奈津子　高橋美和　相沢洋美　わかやなぎよしみ
タムラミキ
3 月 21 日 多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ　高橋彩
3 月 21 日 花いちもんめ（東松島市赤井）※高齢者と地元アーティストの学びあい事業
DPK「結婚披露宴」
野々下孝　樋渡宏嗣　澤野正樹　わかやなぎよしみ　タムラミキ
3 月 22 日 花いちもんめ（東松島市赤井）「民俗芸能」
民族歌舞団ほうねん座　西海石みかさ
3 月 22 日 大曲花いちもんめ(東松島市大曲)※高齢者と地元アーティストの学びあい事業
DPK「歌って踊る花いちもんめ」
渋谷裕子　上島奈津子　高橋美和　相沢洋美　タムラミキ
3 月 23 日 多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　飯田智穂
3 月 28 日 多夢多夢舎中山工房（仙台市）「ダンスのじかん」
西海石みかさ　わかやなぎよしみ　橋本沙織　高橋彩
3 月 28 日 piccoli せんだい〜 miyagino 〜「こどもがつくるまち」（仙台市）
高橋亜希　鈴木拓　佐々木一美　荒野紘也　※ピコせんサポーター主催
3 月 28 日 piccoli せんだい〜 miyagino 〜「こどもがつくるまち」（仙台市）
前日祭「星の王子さま」

前日祭「おはようシアター」
川熊美貴　西海石みかさ　伊藤文恵　土屋悠太郎　髙橋彩
前日祭「タイ民話のハイブリット紙芝居」
土屋悠太郎　上島奈津子　長保めいみ　荒野紘也　川村智美　※ピコせんサポーター主催

3月30日　多夢多夢舎中山工房（仙台市）「美術のじかん」
西海石みかさ　高橋彩

3月31日　しおかぜ福祉会（岩沼市）「ダンスを楽しもう」
西海石みかさ　齋藤裕亮　わかやなぎよしみ　タムラミキ

3月31日　piccoli せんだい〜 miyagino 〜「こどもがつくるまち」（仙台市）
佐々木一美　荒野紘也　鈴木拓　高橋亜希　原西忠佑　川村智美　※ピコせんサポーター主催

ARC＞T メンバーの声

落描き、工作、縫物、編物、料理、木登り、畑山遊び、秘密基地作りなどなど。小さい頃、こんな遊びが大好きでした。何かが形よくできあがる訳ではなかったのですが、そんなことどうでもよかったな。

ARC>T の活動（多夢多夢舎『美術のじかん』、文化庁派遣事業、『来て、見て、あるくと。』）に参加した昨年を振り返り、「もしかしたら自身の原体験が誰かと一緒のちょっと楽しいアートな時間に繋がるのかも？」なんて空想しています。

大沢佐智子（舞台美術家）

沢山の繋がりができて、沢山話をすることができました。今までの二十年間で一番多くの人に出会った一年間、僕の小さな歩み足は大きな一歩に変わり、漠然と悩み続けていた日常は大きく変わりました。子供も大人も高齢者もアイデンティティを持つ沢山の人々も、大いに遊んだらいい。だって悲しいもの、だって楽しいもの、だって嫌だもの、だって好きだもの。そんなことを学んだ気でいます。そう、あるくと、から。

齋藤裕亮（何応）

震災後。表現活動を通して、復興に関われるのが、アルクトの活動に思われました。もっと早く進められるといいなあと毎回思う定例会議。だが、道の見えない雪の中をあるいて、後から道筋が出来ているのがアルクト活動だとも思えていました。活動を等して知り合い触発される表現者たちとの交流や創作活動。いつの間にか一年が過ぎたのですね。生活の身近にアートかあれば、心も癒され、豊かになっていくと思います。まだまだ震災後の爪痕が残っている今、私たちは表現活動を続けていかなければならないと思います。

かと れあ　(俳優・かと れあ project)

ARC>T への直接参加は発足から約１年後と遅めではありますが、第１回から会議は見続けており１年越しの想いが実った心地です。ARC>T のような緩やかなネットワーク体こそ、もしかしたら日本の演劇界には必要な存在であったのかもしれず、それが他のどこよりも先んじて仙台で生まれた事にこの街の可能性を感じます。震災がきっかけで生まれたとはいえ、然るべき土壌がなければ決して生まれる事などなかった訳ですから。

横山 真（演劇家）

震災後、どうして良いか分からなくなり、光りを見出そうと、会議に出席した。懐かしい顔を見ると落ち着いた。４月１日依頼を受け、お笑い慰問を行った。皆が塞ぎこんでいる。ある方から、何やっても笑う余裕が無いよと言われた。どうしよう･･･。ふと宮城弁が出た、すると空気が一つになり、笑いも。光りをそして勇気もくれた。その後、本を届ける活動や SENDAI 座の演劇にも参加、趣味のガチャガチャ慰問もした。色々と学ばせて頂きました。

ワッキー貝山 (ローカルタレント）

僕は子供達のためのアーティスト集団「おはようシアター」で活動してます。八百人以上の子供たちとの出会いが僕に幸せな魔法をかけてくれました。しかし言葉にできないものを抱えた子供達がたくさんいることも知りました。僕が辛くても足を伸ばせば世界はもっと寂しいことも。だからこそ僕はお客様を幸せにする魔法をかけ続けます。

akiLa（東北大学学友会演劇部）

2011 年 3 月 11 日～ 2012 年 3 月 31 日までの間に宮城県内で行われた主な舞台公演一覧公演初日｜主催｜作品｜（会場）｜入場料｜［出演団体地域］

2011 年

3 月 11 日
宮城大学演劇集団 arco iris 2011 年度卒業公演『すばあく☆』(仙台市／クォータースタジオ）400 円［仙台］ ※初回公演後に地震発生。残り 3 公演を中止
4 月 5 日
SCS ミュージカル研究所『ミュージカルのおくりもの』（南三陸町／歌津中学校体育館）無料［仙台］
4 月 12 日
えずこホール／二兎社『シングルマザーズ』(柴田郡大河原町／えずこホール大ホール）無料［東京］
4 月 30 日
C.T.T.sendai 特別支演会（仙台市／ Toru's Factory 高橋裕子モダンバレエ研究所）950 円［仙台］
5 月 3 日
ココロノキンセンアワー実行委員会／東日本大震災こころの復興祈念企画ココロノキンセンアワー第 1 話『オペラと歌曲の世界』『星たちのメロディ 2011 shiogama』(塩竈市／遊ホール）無料［宮城］
5 月 6 日
SCS ミュージカル研究所 県立利府支援学校芸術鑑賞会『がんばれ、げんちゃん！』(宮城県立利府支援学校体育館) 無料［仙台］
5 月 8 日
元気玉！ぷろじぇくと『ゆ』(仙台市／ SENDAI KOFFEE CO.）500 円［仙台］
※収益金は日本赤十字ほかへ寄付。
5 月 16 日
すんぷちょ『Midorigo』(仙台市／せんだい演劇工房 10-BOX box-1）1,000 円［仙台］ ※震災の影響で会場変更。
5 月 21 日
ココロノキンセンアワー実行委員会／東日本大震災こころの復興祈念企画ココロノキンセンアワー第 2 話『オペラとファンタジー絵画の競演』(塩竈市／遊ホール）無料［宮城］
5 月 20 日
日生劇場 人形劇『小さな山神スズナ姫』（亘理郡亘理町／中央児童センター）無料［東京］
5 月 21 日
日生劇場 人形劇『小さな山神スズナ姫』（石巻市・湊小学校）無料［東京］
5 月 22 日
日生劇場 人形劇『小さな山神スズナ姫』（牡鹿郡女川町／女川第一小学校）無料［東京］
5 月 23 日
東北大学学友会演劇部 新入生歓迎公演『人斬り以蔵』（仙台市／東北大学片平キャンパス内第 6 ホール）600 円［仙台］
5 月 28 日
流山児★事務所 レパートリーシアター 2011『夢謡話浮世根問』（仙台市／せんだい演劇工房 10-BOX box-1）一般 3,000 円ほか［東京］ ※震災による白鳥ホール閉鎖に伴い、会場変更。収益金は ARC ＞ T へ寄付。
6 月 2 日
㈱ニュース・プロモーション／ WAHAHA 本舗 2011 年全体公演『ワハハの力』(仙台市・電力ホール） S 席 7,800 円ほか［東京］
6 月 4 日
SENDAI 座☆プロジェクト復興支援公演『明日に向かって歌え !! アテルイ・キャラバン 再び西へ』(仙台市／白鳥ホール）一般 3,000 円ほか［仙台］ ※収益金は仙台市へ寄付。
6 月 5 日
ココロノキンセンアワー実行委員会／東日本大震災こころの復興祈念企画ココロノキンセンアワー第 3 話『日本の民俗芸能と寄席文字の世界』(塩竈市／遊ホール）無料［宮城］
6 月 8 日
仙台演劇鑑賞会／劇団 NLT『オスカー』（仙台市民会館小ホール）会員制［東京］
※イズミティ 21 および市民会館大ホール使用不可により会場変更
6 月 11 日
野外ダンス実行委員会オープン・エア・ダンス・コレクション vol.2（仙台市／定禅寺通りグリーンベルト）無料［仙台］
6 月 18 日
ココロノキンセンアワー実行委員会／東日本大震災こころの復興祈念企画ココロノキンセンアワー第 4 話『みんなの学芸会』(塩竈市／遊ホール）無料［宮城］
6 月 18 日
BalletCompany ～ demain ～チャリティ公演『ココロをこめて～まちが、人が笑顔になりますように～』（仙台市・元鍛治丁公園）無料［仙台］ ※第 5 回公演『一時的行方不明』を中止。募金の収益を ARC ＞ T へ寄付。
6 月 18 日
Gin's Bar10 周年記念公演 色彩シリーズ Act.10『Verte 一秒間に四文字で伝えられない想い』（仙台市／クォータースタジオ）一般 2,000 円ほか［仙台］
6 月 26 日
ココロノキンセンアワー実行委員会／東日本大震災こころの復興祈念企画ココロノキンセンアワー第 5 話『塩竈夢ミュージカル 歌謡ショー』(塩竈市／遊ホール）無料［宮城］
6 月 26 日
佐取純子、武田こうじ創作舞踊「青葉と天使」（仙台市／河北新報社ホール）無料・申込み制［仙台］
7 月 2 日
コンポンテラリーアート部／飯田茂実 +e-dance 仙台『シャマン術コト始め』『春風のなか、ちいさな街』(仙台市・せんだい演劇工房 10-BOX box-1）2,000 円［仙台］
7 月 8 日
劇団どくんご公演 第 25 番『A Vital Sign ただちに犬』(仙台市／錦町公園）一般 2,500 円ほか［鹿児島］
7 月 9 日
仙台シアターラボ『腐敗』(仙台市／せんだい演劇工房 10-BOX box-1）一般 2,800 円ほか［仙台］ ※当初『崩壊』という題名だったが震災の影響を鑑み、変更。募金の収益を ARC>T へ寄付。
7 月 9 日
TheatreGroup"OCT/PASS" Play KENJI # 6 東日本大震災魂鎮め公演『人や銀河や修羅や海胆は』(柴田郡大河原町／えずこホール平土間ホール）無料（投げ銭制）［仙台］
7 月 15 日
仙台市東警察署／高砂もりあげ隊による振り込め詐欺啓発寸劇（仙台市／岡田西町公園仮設住宅集会所）無料［仙台］
7 月 16 日
えずこホール芸術のまち創造実行委員会／結成 30 周年スペシャル鼓童ワン・アース・ツアー (柴田郡大河原町／えずこホール大ホール）4,000 円［新潟］
7 月 16 日
TheatreGroup"OCT/PASS" Play KENJI # 6 東日本大震災魂鎮め公演『人や銀河や修羅や海胆は』(仙台市／錦町公園） 無料（投げ銭制）［仙台］
7 月 23 日
円ぷらん ～紫陽花とステンドグラスと夏の星空～宮沢賢治の世界『かしわばやしの青い夕方』(仙台市／慈雲山資福禅寺本堂）一般 2,300 円ほか［仙台］
7 月 23 日
TheatreGroup"OCT/PASS" Play KENJI # 6 東日本大震災魂鎮め公演『人や銀河や修羅や海胆は』（仙台市／龍澤寺）無料（投げ銭制）［仙台］
7 月 23 日
SCS ミュージカル研究所／ SCS キッズクラス発表会『ばる～ん ～ふしぎな風船とゆかいな仲間たちの冒険～』（仙台市／電力ホール）一般 1,500 円ほか［仙台］
7 月 23 日
SCS ミュージカル研究所公演『仄仄& DanceDaisuki 2011 夏』(仙台市／電力ホール）2,500 円［仙台］
7 月 24 日
TheatreGroup"OCT/PASS" Play KENJI # 6 東日本大震災魂鎮め公演『人や銀河や修羅や海胆は』(仙台市／ほうねん座民族芸能センター) 無料（投げ銭制）［仙台］
7 月 30 日
TheatreGroup"OCT/PASS" Play KENJI # 6 東日本大震災魂鎮め公演『人や銀河や修羅や海胆は』（大崎市／荒雄公園）無料（投げ銭制）［仙台］
7 月 31 日
IMS 磯貝メソッド仙台塾 2010 年度発表公演『お待たせしました！声の広場』（仙台市／せんだい演劇工房 10-BOX box-1）500 円＋投げ銭募金［仙台］
※ 3 月開催予定が延期。
7 月 30 日
いしのまき市民劇団夢まき座旗揚げ公演『さるとびエッちゃん』『はだかの王様』(石巻市／秋田屋）無料［宮城］
8 月 7 日
ココロノキンセンアワー実行委員会／東日本大震災こころの復興祈念企画ココロノキンセンアワー第 6 話利府町民劇団ありのみ公演『天までとどけ - 利府太鼓とともに -』（塩竈市／遊ホール）無料［宮城］
8 月 7 日
劇団四季『ユタと不思議な仲間たち』東北特別招待公演（石巻市／河北中学校）小中学生と保護者を無料招待［東京］
8 月 9 日
おむらいすファクトリー／たまごファーム & om-stage エンターテイメントショー vol.V『ワンダーランド～不思議の国へでかけよう！～』（仙台市／電力ホール）1,500 円［仙台］
8 月 10 日
劇団四季『ユタと不思議な仲間たち』東北特別招待公演（南三陸町／歌津中学校）小中学生を無料招待［東京］
8 月 12 日
劇団四季『ユタと不思議な仲間たち』東北特別招待公演（気仙沼市／条南中学校）小中学生を無料招待［東京］

8 月 13 日
「雅楽の夕に、」実行委員会『雅楽の夕に、』（仙台市･大崎八幡宮境内）無料［仙台］
8 月 13 日
JIPAS 大日座『星空のコンチェルティーノ〜お琴〜』（仙台市・電力ホール）一般 3,500 円ほか［仙台・東京］
8 月 15 日
エステー㈱ TOURS ミュージカル『赤毛のアン』（仙台市／電力ホール）名取市周辺の被災者を無料招待［東京］
8 月 16 日
劇団四季『ユタと不思議な仲間たち』東北特別招待公演（多賀城市･多賀城中学校）小中学生と家族を無料招待［東京］
8 月 17 日
TBC 事業部 LIVE POTSUNEN 2011『THE SPOT』（仙台市青年文化センターシアターホール）6,000 円［東京］
8 月 16 日
仙台演劇鑑賞会／劇団文化座『てけれっつのぱ』（仙台市／電力ホール・仙台市民会館小ホール）会員制［東京］ ※イズミティ 21 および市民会館大ホール使用不可により会場変更
8 月 18 日
劇団四季『ユタと不思議な仲間たち』東北特別招待公演（仙台市／中野栄小学校）市内の小学生を無料招待［東京］
8 月 19 日
in → dependent theatre 最強の一人芝居フェスティバル『INDEPENDENT:2nd Season Selection JAPAN TOUR in 仙台』（仙台市市民活動サポートセンター市民活動シアター）一般 2,500 円ほか ※三角フラスコが参加
8 月 20 日
劇団航海記第 5 回公演『夏空の光』（仙台市／せんだい演劇工房 10-BOX box-1）一般 1,200 円ほか［仙台］
8 月 24 日
劇団四季『ユタと不思議な仲間たち』東北特別招待公演（名取市／増田小学校）市内 6 年生を無料招待［東京］
8 月 26 日
（公財）仙台市市民文化事業団／こまつ座第 94 回公演『父と暮らせば』（仙台市／電力ホール）一般 3,000 円［東京］
8 月 27 日
えずこホール芸術のまち創造実行委員会／えずこシアター第 14 回公演『ちょこっと Chocotto』（柴田郡大河原町／えずこホール平土間ホール）一般 1,000 円ほか［宮城］
8 月 28 日
劇団ファットブルーム朗読劇『しあわせの王子』（仙台市／宮城県障害者福祉センター）無料［仙台］
9 月 1 日
SENDAI 座☆プロジェクト『十二人の怒れる男』（仙台市／藤崎一番町館 4 階特設ホール）一般 4,000 円ほか［仙台］
9 月 3 日
詩のボクシング気仙沼大会実行委員会／詩のボクシング気仙沼大会（気仙沼市／面瀬中学校ホール）無料［宮城］
9 月 5 日
劇団四季こころの劇場『ユタと不思議な仲間たち』（仙台市／宮城学院女子大学講堂）無料［東京］ ※イズミティ 21 使用不可により会場変更
9 月 8 日
㈱ノースロードミュージック〜あおば寄席その 27 〜柳家小三治独演会（仙台市／電力ホール）4,000 円［東京］
9 月 10 日
登米祝祭劇場子どもミュージカル「ドリーム☆キッズ」結成 10 周年記念ミュージカル公演『星に願いを〜森の中のメルヘン〜』（登米市／登米祝祭劇場）大人 1,000 円ほか［宮城］
9 月 17 日
満塁鳥王一座プロデュース公演 #2『キル兄にゃとU子さん』（仙台市市民活動サポートセンター市民活動シアター）一般 2,000 円ほか［福島］
9 月 18 日
フェリシモ／フェリシモプレゼンツ『こどもスマイルミュージカル〜明けない夜はないから〜』in 名取（名取市／下増田小学校）無料［宮城］ ※名取市の子どもたちが出演
9 月 23 日
登米市／登米薪能 (登米市／伝統芸能伝承館森舞台）A 席 2,500 円ほか［宮城］
9 月 23 日
東北大学学友会演劇部 2011 年 9 月公演『すべての風景の中にあなたがいます』（仙台市／東北大学片平キャンパス内第 6 ホール）400 円［仙台］
9 月 25 日
シューツ＆ルーツ／岩下徹ソロダンス公演『放下 24』（仙台市／せんだい演劇工房 10-BOX）無料［京都］
9 月 26 日
なかじょうのぶ芝居塾 改め 劇団三カ年計画仕切り直しの旗揚げ公演『見上げれば故郷は見えたか』（栗原市／一迫ふれあいホール）1,500 円［宮城］※ 3 月 11 日は旗揚げ公演の仕込み中だった。
9 月 26 日
TBC 事業部／松竹『喜劇まつり』（仙台市／電力ホール）SS 席 7,500 円ほか［大阪］
9 月 27 日
日本の詩歌の会／日本歌曲と朗読の夕べ『ふるさとに想ふ』（仙台市戦災復興記念館記念ホール）2,000 円［仙台］
9 月 29 日
仙台演劇鑑賞会／加藤健一事務所『詩人の恋』（仙台市民会館小ホール･電力ホール）会員制［東京］ ※イズミティ 21 及び市民会館大ホール使用不可により会場変更
9 月 30 日
TBC 事業部／人形浄瑠璃文楽『双蝶々曲輪日記』『新版歌祭文』『団子売』『摂州合邦辻』(仙台市／電力ホール）4,000 円［大阪］
9 月 30 日
渋谷裕子ソロダンス公演『むふっ』(仙台市／錦町公園）1,500 円［仙台］※震災による白鳥ホール閉鎖に伴い、会場変更
10 月 3 日
仙台喜章会第 2 回『能への誘い 触れて観る能』（仙台市青年文化センターシアターホール）3,500 円ほか［仙台］
10 月 7 日
宮城県高等学校演劇協議会／宮城県高校演劇コンクール 2011 仙台若林太白地区大会（仙台市／若林文化センター）［宮城］
10 月 8 日
TheatreGroup“OCT/PASS”Play KENJI#6 第 II 期沿岸部出前ツアー『人や銀河や修羅や海胆は』（石巻市／日和山公園内広場）無料（投げ銭制）［仙台］
10 月 8 日
かと れあ project 演劇公演『楽屋〜流れ去るものはやがてなつかしき〜』(仙台市太白区文化センター地下展示ホール） 一般 700 円、小中学生 300 円［宮城］
10 月 8 日
宮城県高等学校演劇協議会／宮城県高校演劇コンクール 2011 仙台青葉地区大会（仙台市／広瀬文化センター）［宮城］
10 月 8 日
宮城県高等学校演劇協議会／宮城県高校演劇コンクール 2011 南部地区大会（柴田郡大河原町／えずこホール大ホール）［宮城］
10 月 8 日
宮城県高等学校演劇協議会／宮城県高校演劇コンクール 2011 北部地区大会（栗原市／若柳町総合文化センター）［宮城］
10 月 8 日
宮城県高等学校演劇協議会／宮城県高校演劇コンクール 2011 東部大会（石巻市／遊学館かなんホール）［宮城］
10 月 9 日
演劇企画 maru 第 1 回公演『多重人格／メガネーズ／傘』（仙台市／クォータースタジオ）無料
10 月 9 日
SCS ミュージカル研究所古川教室第 21 回公演『Queen - 圧倒的女子力 -』（大崎市／三本木保健福祉センターふれあいホール）1,000 円［宮城］
10 月 10 日
SENDAI 座☆プロジェクト『十二人の怒れる男』本吉町公演（気仙沼市／本吉町公民館視聴覚室）無料［仙台］
10 月 12 日
㈱キョードー東北／『立川談春独演会』（仙台市／電力ホール）2,800 円［東京］
10 月 15 日
TheatreGroup“OCT/PASS”Play KENJI#6 第 II 期沿岸部出前ツアー『人や銀河や修羅や海胆は』(宮城郡七ヶ浜町／七ヶ浜国際村野外劇場アンフィシアター）無料(投げ銭制）［仙台］
10 月 15 日
宮城県高等学校演劇協議会／宮城県高校演劇コンクール 2011 仙台泉宮城野地区大会（仙台市／広瀬文化センター）［宮城］
10 月 15 日
東北学院大学演劇部学祭公演『またあした』（仙台市／東北学院大学土樋キャンパス 90 周年記念館 4 階第一防音室）無料［仙台］
10 月 22 日
TheatreGroup“OCT/PASS”Play KENJI#6 第 II 期沿岸部出前ツアー『人や銀河や修羅や海胆は』（東松島市図書館）無料（投げ銭制）［仙台］
10 月 22 日
仙台市歴史民俗資料館／れきみん秋祭り 2011（仙台市／榴岡公園）無料［宮城］
10 月 22 日
アクターズ仙台／ Autumn Performance2011 色彩シリーズ Act.6『SURF GREEN - ハネムーン in ハワイ』（仙台市／クォータースタジオ）一般 2,000 円ほか［仙台］

10 月 25 日
仙台放送／石井光三オフィスプロデュース『オーデュボンの祈り』(仙台市･電力ホール）5,500 円［東京］
10 月 26 日
劇団黒テント第 72 回公演『窓ぎわのセロ弾きのゴーシュ』（仙台市／エル・パーク仙台 スタジオホール）一般 2,500 円、ほか［東京］
10 月 27 日
仙台放送／オフ・ブロードウェイミュージカル『I LOVE YOU, YOU'RE PERFECT, NOW CHANGE』（仙台市／電力ホール）6,500 円［東京］
10 月 28 日
エイチエムピー･シアターカンパニー『Das Letzte Feuer 最後の炎』仙台公演（仙台市／エル・パーク仙台スタジオホール）一般 2,500 円ほか［大阪、仙台ほか］
10 月 29 日
TheatreGroup"OCT/PASS"Play KENJI#6 第Ⅱ期沿岸部出前ツアー『人や銀河や修羅や海胆は』（山元町／中央公民館大ホール）無料（投げ銭制）［仙台］
10 月 30 日
河南桃生商工／第 13 回股旅演芸東北大会（石巻市／桃生総合センター）大人 1,000 円、中学生以下無料［宮城］
11 月 1 日
SCS ミュージカル研究所 鶴谷特別支援学校芸術鑑賞会『がんばれ、げんちゃん！ Vol.3』（仙台市福祉プラザふれあいホール）関係者［仙台］
11 月 4 日
東北大学学友会演劇部 2011 年度学祭公演『ペンギンの架け橋』（仙台市／東北大学川内北キャンパス C 棟 C303 教室） 無料［仙台］
11 月 4 日
仙台市／シニア劇団まんざら第 2 回公演『結婚披露宴』（仙台市市民活動サポートセンター市民活動シアター）無料［仙台］
11 月 5 日
七ヶ宿中学校総合演劇『未来予想図 - 結ばれていく「絆」物語』(刈田郡／七ヶ宿町活性化センター）無料［宮城］
11 月 6 日
おのずがだ劇団 MOO 第 10 回記念公演『乳の流れる川』(気仙沼市／はまなすホール）無料［宮城］ ※主役の劇団員を津波で亡くしたが、新団員を募集して再開。
11 月 6 日
みやぎ GH 劇団『よねさんと伴に 2011』（仙台市・勾当台公園）無料［宮城］
※県内のグループホーム職員による認知症啓発演劇
11 月 9 日
㈱ G･I･P ／ TEAM NACS 15th project『5D-FIVE DIMENSIONS-』大泉洋ワンマンショー（仙台市／電力ホール）5,500 円［札幌］
11 月 9 日
三角フラスコプロデュース土橋淳志 (A 級 MissingLink)『裏山の犬にでも喰われろ！』ドラマリーディング（仙台市／エル･パーク仙台スタジオホール）一般 1,500 円、U -25 割 1,000 円［仙台、大阪］
11 月 10 日
仏壇の仙和震災復興支援特別企画『林家たい平独演会』（仙台市／電力ホール）招待券［東京］
11 月 11 日
「チャリティー朗読会」有志の会／東日本大震災チャリティー朗読会『文学で歩く〜岩手・宮城・福島』（仙台市／伊）1,500 円［仙台］
11 月 12 日
宮城県高等学校演劇協議会／宮城県高校演劇コンクール 2011 宮城県大会（柴田郡大河原町／えずこホール大ホール）［宮城］
11 月 12 日
利府町民劇団ありのみ第 15 回記念公演『天までとどけ - 利府太鼓とともに』（宮城郡／利府町公民館）500 円［宮城］※震災で 8 か月延期
11 月 16 日
仙台放送／シーエイティープロデュース『女の人さし指』（仙台市／電力ホール）6,800 円［東京］
11 月 19 日
Gin's Bar 色彩シリーズ Act.3『BLACK - 家族の肖像 -』(仙台市／クォータースタジオ）一般 2,000 円、学生 1,000 円［仙台］
11 月 19 日
七ヶ浜国際村パフォーマンスカンパニーミュージカルグループ NaNa5931 公演＆パーカッションアンサンブルグループ Groove7 公演『ゴーヘ Go Ahead』(宮城郡七ヶ浜町／七ヶ浜国際村ホール）一般 500 円［宮城］
11 月 20 日
えずこ芸術のまち創造実行委員会／公共ホール現代ダンス活性化支援事業『Co. 山田うんダンス公演』(柴田郡大河原町／えずこホール平土間ホール）一般 2,000 円、学生 500 円［東京］
11 月 24 日
劇団ミラ・ビバ !! 秋保温泉ミュージカル『温泉鬼・磊の復讐』（仙台市／秋保温泉岩沼屋）無料［仙台］ ※秋保あがらいんフェスティバル !! の一環
11 月 24 日
仙台放送／北九州芸術劇場 Produce『江戸の青空弐』(仙台市／電力ホール）6,000 円［北九州ほか］
11 月 26 日
TheatreGroup"OCT/PASS"Play KENJI#6 第Ⅱ期沿岸部出前ツアー『人や銀河や修羅や海胆は』（仙台市／あすと長町仮設住宅集会所）無料（投げ銭制）［仙台］
11 月 26 日
青森中央高校演劇部『もしイタ〜もし高校野球の女子マネージャーが青森の『イタコ』を呼んだら』（気仙沼市／面瀬中学校ホール）無料［青森］
11 月 26 日
新制作座『泥かぶら』（仙台市／七郷中学校）［東京］ ※被災者 600 人招待
11 月 26 日
ミヤギテレビ／ザ・ニュースペーパー IN 仙台（仙台市／電力ホール）4,500 円［東京］
11 月 29 日
仙台放送／ LIVE MAX『THE WINDS OF GOD』(仙台市／電力ホール）5,500 円［東京］
12 月 1 日
仙台放送／が〜まるちょば『サイレントコメディー JAPAN TOUR 2011』（仙台市／電力ホール）4,500 円［東京］
12 月 2 日
仙台演劇鑑賞会／劇団 1980『落語芝居』（仙台市民会館大ホール）会員制［東京］
12 月 3 日
白 A『I-VISION』（仙台市／ Rensa）3,500 円［仙台］
12 月 3 日
スパイシー劇団ピンクマヨネーズ最終公演『あにまるくらぶ』（仙台市／せんだい演劇工房 10-BOX box-1）1,500 円［仙台］
12 月 4 日
大郷町民劇団おおさと夢劇団『川柳裁判官』（黒川郡／大郷町文化会館） 無料［宮城］ ※脚本・演出は女川第四小学校の三品隆校長による。
12 月 10 日
アクターズ仙台自主企画公演『君に捧げる首飾り演劇と詩の融合』(仙台市／クォータースタジオ）一般 1,000 円ほか ［仙台］
12 月 10 日
東北大学学友会演劇部卒業公演『見よ、飛行機の高く飛べるを』（仙台市／東北大学片平キャンパス内第 6 ホール）500 円［仙台］
12 月 11 日
仙台シアターラボ『トライアル 2011』（仙台市／せんだい演劇工房 10-BOX box-1）800 円［仙台］
12 月 11 日
レジェンド・オブ・企画復興支援プロジェクト Vol.1- 宮城編 -『ゴジラ』（東松島高等学校体育館）無料（カンパ制）［京都］
12 月 11 日
O to O presents『結〜他愛ない話のオムニバス〜』プレビュー公演 1（仙台市／せんだい演劇工房 10-BOX box-3 ）1,000 円［仙台］
12 月 17 日
えずこシアターキャラバン演劇公演『エナジー』（柴田郡柴田町／船迫公民館）無料［宮城］
12 月 17 日
アクターズ仙台自主企画『トマトにこだわる。―詩とダンスによるパフォーマンス』（仙台市／クォータースタジオ）無料［仙台］
12 月 17 日
C.T.T.sendai 試演会 vol.1（仙台市／能 -BOX）950 円［仙台］
12 月 17 日
宮城教育大学演劇部第 17 回本公演 #45『恋愛戯曲』（仙台市／宮城教育大学講堂）450 円［仙台］
12 月 23 日
東北放送／ 10 万人が大笑い！桂文珍 47 都道府県全国独演会ツアー VOL.3『にっぽん！ハハハ !!』（仙台市／電力ホール）4,000 円［大阪］
12 月 23 日
ココロノキンセンアワー演劇部第 2 回公演『ロミオとフリージアのある食卓』（仙台市／エル・パーク仙台ギャラリーホール）一般 2,000 円ほか［宮城］
12 月 24 日
SCS オリジナルミュージカル クリスマスって大変！シリーズ第 17 弾『♪ぽぽぽぽ〜ん ぶんぶん』（仙台市福祉プラザふれあいホール）2,000 円 ［仙台］
12 月 24 日
ARC ＞ T『来て、見て、あるくと。〜共に歩いた 288 日、そしてこれから〜』（仙台市／エル・パーク仙台スタジオホール）無料［仙台ほか］

2012 年

1 月 14 日
平間翠香『源氏物語 - いけ花と朗読で綴る源氏の世界』（仙台市／能 -BOX）3,500 円ほか［仙台］

1 月 15 日
加美町やくらい文化センター／加美町住民ミュージカル『やくらいさんさん』（加美郡加美町／やくらい文化センター）一般 1,000 円ほか ［宮城］
1 月 17 日
東北学院大学演劇部卒業公演『星の忍者』(仙台市・東北学院大学泉キャンパスコミュニティーセンター）無料［仙台］
1 月 21 日
仙台演劇ネットワーク一人芝居ワークショップ発表会（仙台市／クォータースタジオ）1,000 円［仙台］
1 月 25 日
O to O presents『結〜他愛ない話のオムニバス〜』プレビュー公演 2（仙台市／クォータースタジオ）1,000 円［仙台］
1 月 27 日
劇団てんとう虫第 9 回公演『Another 〜もう一つの Faith 〜』（仙台市／エル・パーク仙台スタジオホール）一般 2,000 円ほか［仙台］
1 月 27 日
TheatreGroup“OCT/PASS” 若手制作部若手有志公演『熱海殺人事件』（仙台市／Studio+1）500 円［仙台］
1 月 28 日
㈱ニュース・プロモーション／ WAHAHA 本舗 PRESENTS『梅ちゃんイズム＆ 3 ガガイズム〜不細工な北風と間抜けな太陽〜』（仙台市／エル・パーク仙台ギャラリーホール）4,000 円［東京］
1 月 28 日
仙台オペラ協会第 36 回公演『愛の妙薬』(仙台市青年文化センターシアターホール) S 席 7,000 円ほか［仙台］
1 月 30 日
劇団無国籍第 16 回公演『ゴトウカナエの失踪』脚本リーディング（仙台市／甘味処彦いち）甘味代 500 円［仙台］
2 月 1 日
TBC 事業部／小林賢太郎演劇作品『うるう』(仙台市青年文化センターシアターホール）6,000 円［東京］
2 月 1 日
仙台放送／パルコ・プロデュース公演『90 ミニッツ』（仙台市／電力ホール）7,000 円［東京］
2 月 2
仙台演劇鑑賞会／グループる・ぱる『八百屋のお告げ』（仙台市民会館大ホール）会員制［東京］
2 月 4 日
ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク『踊りに行くぜ !! Ⅱ Vol.2』仙台公演（仙台市／せんだいメディアテーク 1F オープンスクエア）一般 2,500 円ほか［東京ほか］
2 月 4 日
劇団ヤミ鍋第 5 回公演『恋はぐだぐだ』(仙台市／クォータースタジオ)500 円[宮城]
2 月 10 日
仙台放送／『週末よしもと爆笑ライブ 2012』in 仙台〜僕たち一 “ 笑 ” 懸命、笑わせます。〜（仙台市／電力ホール）3,900 円［大阪］
2 月 11 日
仙南地域広域行政事務組合ほか／ AZ9 ジュニア・アクターズ第 19 回公演『フレンズ』（柴田郡大河原町／えずこホール大ホール）一般 1,000 円ほか［宮城］
2 月 17 日
劇団麦第 97 回公演『蝿取り紙〜山田家の 5 人兄妹〜』（仙台市・エルパーク仙台スタジオホール）一般 2,000 円ほか［仙台］
2 月 18 日
塩竈市遊ホール協会／塩竈夢ミュージカル『風のあしあと - 月夜の七曲坂 第二夜 -』（塩竈市／遊ホール）一般 1,000 円ほか［宮城］
2 月 18 日
O to O presents 白鳥英一ひとり芝居 4『さいごのじゅぎょう』（仙台市／クォータースタジオ）一般 1,500 円ほか［仙台］
2 月 21 日
仙台放送／小松政夫 VS コロッケシリーズ第三弾『爆笑昭和のヒーローズ ! 』（仙台市／電力ホール）6,800 円）［東京］
2 月 21 日
えずこホール『6 週間のダンスレッスン』(柴田郡大河原町／えずこホール大ホール）一般 3,000 円ほか［東京］
2 月 24 日
東北大学学友会演劇部 2012 年 2 月公演『窒息』（仙台市／東北大学片平キャンパス内第 6 ホール）400 円［仙台］
2 月 25 日
朗読座／あしなが育英会東北応援公演『さがりばな』（名取市／愛島東部団地仮設住宅集会所）無料［東京］
2 月 25 日
宮城学院女子大学演劇部 2011 年度本公演『月参り』（仙台市／せんだい演劇工房 10-BOX box-1）無料［仙台］
2 月 25 日
三月革命実行委員会ミュージカル舞台『三月革命〜どうして彼女は被災地にもどったのか？〜』（仙台市／エル・パーク仙台スタジオホール） 2,000 円［宮城］
3 月 2 日
若伊達プロジェクトプロデュース公演 act.1.5『桃の花を飾る』（仙台市／せんだい演劇工房 10-BOX box-1）1,500 円 ［仙台］
3 月 6 日
能のある、空間／東日本大震災追悼『能のある、空間』特別公演 御燈能 楊貴妃〜幻想的な明かりで観る〜（仙台市／能 -BOX）2,500 円［仙台］
3 月 8 日
（公財）仙台市市民文化事業団／杜の都の演劇祭 2011 オリジナルプログラム A『皆々さまへ』（仙台市／ ZOKU 和ど菜）3,000 円［仙台］
3 月 9 日
東北大学学友会演劇部 2012 年 3 月公演『CHILDREN』(仙台市／東北大学片平キャンパス内第 6 ホール）400 円［仙台］
3 月 10 日
河北新報社／復興元年『未来への手紙』（仙台市／東北大学萩ホール）申込み制［東京ほか］
3 月 10 日
（公財）仙台市市民文化事業団／杜の都の演劇祭 2011 オリジナルプログラム B『春は馬車に乗って』(仙台市／みやぎ純米酒倶楽部さなぶり）2,500 円［仙台］
3 月 11 日
竹下景子 “ 詩の朗読と音楽の夕べ ”3.11 震災メモリアル・復興支援コンサート（仙台市／東北大学萩ホール）3,000 円［東京ほか］
3 月 16 日
（公財）せんだい男女共同参画財団『みちのく民謡まんだら 2012』（仙台市／エル・パーク仙台スタジオホール）一般 2,500 円ほか［仙台］
3 月 16 日
演劇集団 WHATCOLOR 東日本大震災復興支援公演『新・七夕伝説 煌星★天女』(仙台市／せんだい演劇工房 10-BOXbox-1）無料［東京］
3 月 17 日
仙 台 TAP WORKS 事 務 局 ／ Tap dance Art project TAP the FUTURE in SENDAI　第 5 期末公演『My Rhythm』(仙台市青年文化センターシアターホール）一般 2,000 円ほか［仙台］
3 月 17 日
名取こどもミュージカル実行委員会『together 〜おもちゃの町のものがたり〜』(名取文化会館大ホール）大人 1,500 円ほか［宮城］※名取、仙台、岩沼の小中学生 126 名が出演
3 月 17 日
利府町民劇団ありのみ『もしイタ〜もし高校野球の女子マネージャーが青森の『イタコ』を呼んだら』（宮城郡利府町公民館）500 円［宮城］
3 月 17 日
White プロジェクト第一弾『White - あの日、白い雪が舞った -』（仙台市・クォータースタジオ）2,500 円［仙台］
3 月 17 日
劇団ミラ・ビバ !! 短編公演『あんビバれんす !!』（仙台市／能 -BOX)800 円［仙台］
3 月 18 日
大和町文化振興協会劇団わらび座『アテルイ北の耀星』（大和町／まほろばホール）一般 S 席 3,000 円ほか［秋田］ ※ 2011 年春予定の公演が延期
3 月 20 日
（公財）仙台市市民文化事業団／杜の都の演劇祭 2011 オリジナルプログラム C『銀河鉄道の夜』（仙台市／伊勢屋クリスロード店）昼 2,500　円ほか［仙台］
3 月 22 日
（公財）仙台市市民文化事業団／杜の都の演劇祭 2011 オリジナルプログラム D『薬指の標本』（仙台市／和食波奈仙台店）3,800 円［仙台］
3 月 24 日
宮城教育大学演劇部 2011 年度卒業公演『表に出ろいっ ! 』（仙台市／クォータースタジオ）400 円［仙台］
3 月 24 日
DULL-COLORED POP#11『くろねこちゃんとベージュねこちゃん』（仙台市／せんだい演劇工房 10-BOX box-4）一般 2,500 円ほか［東京］
3 月 25 日
IMS 磯貝メソッド仙台塾『声の広場 2011』（仙台市／せんだい演劇工房 10-BOXbox-1）500 円［仙台］
3 月 29 日
他力舎プロデュース 2012『寿歌Ⅱ〜星はなんでも知っている〜』（仙台市／エル・パーク仙台スタジオホール）一般 2,500 円ほか［仙台］※ 2011 年 5 月公演予定が延期された
3 月 31 日
第一三共・劇団四季／家族のきずなシアター『ユタと不思議な仲間たち』（仙台市／宮城学院女子大学講堂）被災者を無料招待［東京］

ARC＞T が参加したシンポジウム

［2011 年 3 月～ 2012 年 4 月 7 日］

2011 年
6 月 4 日
日本演出家協会「フェニックス・プロジェクト」
（～ 5 日・東京／笹塚ファクトリー）
6 月 14 日
フォーラム「大震災と芸術文化　現場からの証言」
(東京／早稲田大学小野記念講堂）
7 月 8 日
日本演出家協会「フェニックス・プロジェクト」
（～ 10 日・東京／笹塚ファクトリー）
9 月 25 日
PAW'2011 東北・復興 week シンポジウム
「演劇に出来ることとは」
（横浜／相鉄本多劇場）
10 月 28 日
臨床するアート 2011［東京セッション］
(東京／アーツ千代田 3331 エイブルアート・スタジオ）
11 月 27 日
えだみつ演劇フェスティバル 2011 えだトーク
「東北と九州の人がいっしょに、3.11 を考える」
（北九州／枝光本町商店街アイアンシアター）
12 月 2 日
東葛地域・市民活動フェスタ「つなごう市民活動フォーラム」
（船橋／みやもと三百人劇場）

2012 年
2 月 10 日
世界劇場会議国際フォーラム
（～ 11 日・愛知芸術文化センター）
2 月 18 日
TPAM in Yokohama 2012 ラウンドテーブル
「東日本から約 1 年、これからも必要とされるアートのちから
～いわき・アリオス、仙台・ARC ＞ T の活動から～」
（横浜／ヨコハマ創造都市センター）
3 月 18 日 (日)
天プラ・ホールセレクション東北復興応援企画
『東北の演劇を観て、参加して、応援しよう！！』
トークセッション
（岡山県天神山文化プラザ）

ご支援をいただいた方々

［2011 年 3 月～ 2012 年 4 月 7 日］

［団体］
NPO まちあーと夢虫 / 仙台演劇ネットワーク / 大阪ウイングフィールド / 元気玉プロジェクト『ゆ』募金箱 / 流山児事務所 (公演売上寄付) / SENDAI 座☆プロジェクト「アテルイ」東京公演募金箱 / ITI ドイツ / フェニックスプロジェクト / シーラカンスプロデュース / 青年座 3weeksproject / 仙台シアターラボ募金箱 /『かしわばやしの青い夕方』募金箱 / ITI フランス / IMS 磯貝メソッド仙台塾 / Gin's BAR / 日本演出者協会 / かと れあプロジェクト / 劇団シンジンルイ / 株式会社劇団ひまわり / 演劇ダンソウ / 千賀ゆう子企画 / 演劇集団円 /TheatreGroup"OCT/PASS" / 株式会社 STAGE DOCTOR / 有限会社ゴーチ・ブラザーズ / スタッフクラブ 21 / ライティングデザイナーズオブジャパン / C I 部 / PAW'2011 募金箱 / BalletCompany ～ demain ～ / バレエアンドダンス（千葉里佳）/ ドイツ国際マヤ・プリセツカヤ ロディオン・シチェドリン基金 / カプセル / ドイツ国立民族学博物館「日本へ架ける橋」/ 突き抜け隊 / 北九州お手軽劇場アイアンシアター運営実行委員会

［個人］
テラダ ミカ / 大久保裕 / 岡田由美 / 河上牧子 / 伊藤淑子 / 林美佐 / 斉藤登史子 / イシハラ キヨシ / カサイ トモノリ / 渡部ギュウ / 高橋菜穂子 / 三浦麻子 / 西海石みかさ / 清水貴博 / テラオカトウコ / オオエ ヨシキ / コニシ タカコ / クスノキナオキ / 広瀬川イベント参加者 / ヨシモト ユミコ / コガ ヤヨイ / タカハシ ナオト / 長屋裕二 / ストウ タツヤ / ストウアサコ / Angelika　Hagedorn / 佐藤厚子 / 片岡勝 / ナンザン / ナカモトシュンスケ / 篠本賢一

委託事業

文化庁 次代を担う子どもの文化芸術体験事業
- 派遣事業 -〈東日本大震災復興支援対応〉
文部科学省「復興教育支援事業」
宮城県新しい公共の場づくりのためのモデル事業「アーティストと子どもたちでつくる創造的アートプロジェクト」

助成

財団法人石橋財団 / 神戸芸術文化会議 / ジャパンソサエティ東日本大震災復興基金 / 子どもサポート基金 / 国際マヤ・プリセツカヤ ロディオン・シチェドリン基金 / みやぎ生協こ～ぷほっとわ～く基金 / 地域活動ボランティア活動支援事業 / 公益財団法人倶進会 / みやぎ夢ファンド / 公益財団法人仙台市市民文化事業団

ARC>T ネットワーク参加者一覧　※ (所属) および [分野]

※ 2012 年 4 月の解散時の登録者（登録順）

□個人
樋渡宏嗣 (SENDAI 座☆プロジェクト)[俳優]
渡部ギュウ (SENDAI 座☆プロジェクト)[俳優 / 演出]
戸石みつる [俳優 / 音楽]
鈴木拓 (杜の都の演劇祭プロジェクト)[制作]
伊藤み弥 [演出]
熊谷由海 (Project T-time)[俳優]
原西忠佑 [俳優]
館林敦士 (WILD CAT HOUSE)[俳優 / 発声指導]
川村智美 [映像 / グラフィックデザイン]
生田恵 (三角フラスコ)[劇作 / 演出]
野々下孝 (仙台シアターラボ)[俳優]
永澤真美 [俳優]
島田愛美 (office-1uno-)[俳優]
土屋悠太郎 (タイの芸能を楽しむ会)[舞踊 / 体操]
上島奈津子 (Shang yu)[俳優]
美峰子 (TheatreGroup"OCT/PASS")[俳優]
文月奈緒子 [劇作]
千葉瑠依子 [ダンス]
半田深雪 (魚類の薔薇)[演出 / 俳優]
西塔亜利夫 (劇 DAM 垂涎)[俳優]
蓮沼美紀 (Shang yu)[俳優 / 演出]
斎藤大典 (劇団無国籍)[俳優]
真田嗣 (仙台シアターラボ)[俳優]
かと れあ (かと れあ project)[俳優]
安藤敏彦 (Lada Trosso)[劇作 / 演出]
高橋亜希［照明スタッフ］
伊藤文恵 (空間実験こがねむし)[ダンス]
白鳥英一 (OtoOpresents)[俳優 / 演出 / 劇作]
絵永けい (TheatreGroup"OCT/PASS")[俳優]
西海石みかさ (すんぷちょ)[ダンス / 体操 / 美術]
手代木正太郎 (微塵流)[劇作 / 演出 / 美術]
片倉久美子 (TheatreGroup"OCT/PASS")[俳優]
なかじょうのぶ (劇団三カ年計画)[劇作 / 俳優 / 演出]
手代木花野 (CI 部)[ダンス]
長保めいみ (シェイクスピア・カンパニー)[俳優 / 制作]
海田水美 (TheatreGroup"OCT/PASS")[俳優]
長屋裕二 (ガオンスタジオ)[音声映像編集]
剛蔵 (Gin's Bar)[俳優]
森忠治 (トライポッド)[制作 / 製作]
河村邦画 (TheatreGroup"OCT/PASS")[俳優]
ワッキー貝山 [司会 / お笑い]
千田優太 (つなぐ実行委員会)[アート / ダンス / 料理]
加藤豊子 (みやぎ県子ども・おやこ劇場)[代表理事]
上村俊幸 (特定非営利活動法人 多夢多夢舎中山工房)[障碍者支援]
高橋菜穂子 [俳優 / 演出]
大沢佐智子 [舞台美術家]
サマイ [俳優]
χ梨ライヒ (TheaterGroup"OCT/PASS")[俳優]
荒野紘也 (TheaterGroup"OCT/PASS")[俳優]
橋本沙織 [精神保健福祉士]
渋谷裕子 [ダンス]
北野央 (hokusui)[建築計画]
小住典子 [俳優]
小野円 (円ぷらん)
タムラミキ [俳優]
後藤史織 [俳優]
CHii(アトリエ・ジェミニ)[イラスト]
猪戸美香 (アトリエ・ジェミニ)[フリーイラストレーター]
定行俊彰 (NPO 法人みやぎダンス)[理事長]
川熊美貴 (空間実験こがねむし)[俳優 / 演出]
山口小夜子 [看護師]
千葉里佳 (BalletCompany~demain~)[ダンス]
いがり大志 (ambitious music)[音楽]
遠藤瑞知 (桜井薬局セントラルホール)[映画館支配人 / 広報]
金野むつ江 (六面座)[俳優 / 演出]
宍戸香那恵 (ユニークポイント)[俳優]
藤原貢 (劇団やんま)[俳優]
矢野文子 (ヤノバレエスタジオ & アーツ)[ダンス]
羽太結子 [ダンサー]
大渕浩 [俳優]
菅朗 [俳優]
千田祥子 [ピアニスト]
高橋彩 (東北大学学友会演劇部)[演出]
伊藤広重 [俳優]
岩坂瑞木 [ウェブデザイナー]
瀬川まーち [俳優]
千葉宏美
本田椋 (東北大学学友会演劇部)[俳優]
阿部翔太郎 (東北大学学友会演劇部)[俳優]
鎌田勝男 (タイの芸能を楽しむ会)[インストラクター]
朝理恵 (空間実験こがねむし)[俳優]
小林直美 (タイの芸能を楽しむ会)[インストラクター]
亀山武史 (東北学院大学演劇部)[俳優]
大久保雅基 [音楽]
高橋幸介 (尚絅学院大学 演劇サークル 尚劇団)[ダンス / 俳優]
千葉めぐみ (pointo)[制作]
伊藤拓 [俳優]
小濱昭博 (三角フラスコ)[俳優]
佐川誠 (劇団ミラ・ビバ！！)[俳優]
山口由美 (綻び処)[朗読]
梅津隆雄 [美術]
澤野正樹 (仙台シアターラボ)[俳優・企画制作]
まめ [児童館職員]
斎木良太
生駒恵子 (SPIC ／せんだい舞台芸術復興支援センター)[制作]
黒田美雪 (芝居一座風)[俳優]
わかやなぎよしみ [俳優]
齋藤裕亮
伊藤照手 (東北大学学友会演劇部)[ダンサー / 俳優 / 情宣美術]
足羽アリス貴和子 (オバリン大学)
平山健太 (東北学院大学演劇部)[俳優]
大庭千鶴
加藤隆 (東北福祉大学)
齋藤まゆみ (ピコせんサポーター)
八嶋稚英子 (跳んだそら豆)[ダンサー]
横山真 [演劇家]
佐藤怜 [現代美術家]
佐藤孝俊 (株式会社エイエイピー)
金子愛美 [スクールソーシャルワーカー]
神崎祐輝 [照明]
中村大地 (東北大学学友会演劇部)[音響]
朽木雄介 (東北大学学友会演劇部)
佐々木キミテル [俳優]

□サポートメンバー
笠井友仁 (エイチエムピー・シアターカンパニー)[演出]
古賀弥生 (アートサポートふくおか)
垣内友香里 (Benny Moss)
久保澄恵
佐藤文子
岩下徹 (シューツ＆ルーツ / 山海塾)[舞踏]
相澤一成 (アクトレインクラブ)[俳優]
菅田真理子 (岡山県天神山文化プラザ)
田房加代 (ピッコロシアター)
宝栄美希 (CI 部)[舞踏]
伊藤夏子 (おどるなつこ)[ダンス]
柳原美香 [ダンス / 製作]
小野寺誠 (メディア・オブ・サーガ)[プロデューサー]
藤井友美 (子りすの会)[ダンサー]
石上純子 (The City University of New York)

□集団
TheatreGroup"OCT/PASS"[演劇]
IMS 磯貝メソッド仙台塾 [発声指導]
JIPAS 大日座 [演劇]
SCS ミュージカル研究所 [演劇]
演劇集団ナトリウムサナトリウム [演劇]
SENDAI 座☆プロジェクト [演劇]
劇団ヤミ鍋 [演劇]
民族歌舞団ほうねん座 [舞踊]
Gin's Bar[演劇]
他力舎 [演劇 / 街頭紙芝居]
シェイクスピア・カンパニー [演劇]
三角フラスコ [演劇]
C.T.T.sendai 事務局 [演劇]
劇団ミラ・ビバ !![演劇]
杜の都の演劇祭プロジェクト [演劇]
要プロデュース 劇団仙台 [演劇]
Shang yu[演劇]
仙台シアターラボ [演劇]
すんぷちょ [ダンス]
宮城大学 演劇集団 arco iris[演劇]
Factory-k(株)[美術]
ソラソバティ [演劇]
かと れあ project[演劇]
劇団 七色日和 [演劇]
劇団 I.Q150[演劇]
空間実験こがねむし [演劇]
和風レトロ [演劇]
アンサンブルフェリーチェ [音楽]
彩創屋 [照明]
CI 部 [ダンス]

ARC＞T 平成 23 年度決算

科目		決算額
【収入の部】		
事業収入	ワークショップ事業	¥219,500
	出前事業	¥83,500
	交流会	¥285,600
	招聘	¥784,068
助成金収入		¥4,100,000
事業受託金収入		¥8,714,239
支援金収入		¥8,043,802
雑収入		¥181,000
収入の部計		¥22,411,709
【支出の部】		
事業費	アーティスト謝金	¥3,021,200
¥14,301,395	コーディネーター料	¥5,546,400
	雑給	¥25,000
	技術料	¥370,000
	業務委託費	¥287,080
	諸謝金	¥140,000
	レンタル料	¥10,500
	会議費	¥96,796
	会場費	¥440,800
	稽古場補償費	¥105,000
	消耗品費	¥119,752
	物品購入費	¥350,706
	旅費交通費	¥1,527,870
	燃料費	¥20,160
	通信費	¥76,289
	印刷費	¥392,408
	広告宣伝費	¥163,000
	付帯設備利用料	¥102,450
	保険料	¥35,880
	製作費	¥1,321,637
	雑費	¥148,467
管理費	事務局手当	¥4,059,035
¥6,866,469	空調利用料	¥300
	施設利用料	¥177,400
	付帯設備利用料	¥3,650
	事務所維持費	¥390,194
	通信費	¥472,712
	交通費	¥6,320
	出張費	¥594,323
	燃料費	¥59,588
	駐車場代	¥3,400
	消耗品費	¥409,811
	物品購入費	¥176,502
	教材費	¥71,380
	受講料	¥2,000
	印刷費	¥436,800
	雑費	¥0
	手数料	¥3,054
支出の部計		¥21,167,864
収支総額		¥1,243,845
【その他資金収入の部】		
	受取利息	¥129
その他資金収入計		¥129
【その他資金支出の部】		
	所得税(源泉徴収分)	¥1,153,876
	法人税	¥72,000
その他資金支出計		¥1,225,876
当期収支差額		¥18,098
次期繰り越し収支差額		**¥18,098**

Art Revival Connection TOHOKU

「東日本大震災を機に失われた文化・芸術に関するひと・まち・場の再生と、東北復興に向けた諸活動にアートを通じて寄与するため、また、それに必要なネットワークづくりを推進する」ために宮城の舞台表現者たちが中心になって立ち上げた復興支援団体。
活動期間 2011 年 4 月 4 日〜 2013 年 4 月 4 日

僕は ARC>T の活動を通して、多くの被災者に出会った。多くの芸術家に出会った。そして両者の出会いの場に数多く立ち会うことができた。芸術を体験することができた。なにができるかわからない、でもなにかしたい。舞台芸術の力で。そんな思いで集まった我々の活動を継続し行えたのも、支え見守ってくださった日本各地、世界各国の皆さまのおかげです。本当にありがとうございます。皆さまのお心を、芸術を通し被災地そして被災者の皆さまに届けてきました。

2012 年 10 月某日、震災後初めて荒浜で海をみた。感情が渦巻き、その渦の中に引きずり込まれて、濁流にもみくちゃにされて、どこか遠く暗いところへ連れて行かれてしまうような、そんな気になった。なんだかもの凄く怖い。
子どもの頃よく連れて行ってもらった海。大きくなってからもことあるごとに訪れた海。プレートが歪んで弾けたという理屈はわかる。でもやっぱりあの時のあの姿は嘘なんじゃないかと思えるくらい静かな海。想像し得なかったことが起きたのだとつくづく思う。
元々泳ぎが下手なせいもあり海は得意ではなかった。テトラポットにびっしりひっついた海藻が怖くてしょうがなかった。それでも海を恋しく思う。
僕は命までは奪われなかった。でも確実にいくつかのものを失い、傷ついた。

濁流に飲み込まれまいと、僕は必死に演劇にしがみついていた。
僕は芸術家ではない。演劇をする人だ。約 2 年の活動を通して、芸術というものがなんなのか、なんのためにあるのか、なんの役に立つのか、少しずつわかり始めた気がする。そういう意味では、僕も芸術の恩恵を受けた被災者の一人だ。
僕は演劇しかしていなかった。これは自分のための復興で、そうする他なかった。決して誰かのためではない。そのことに、少なからず罪悪感を感じている。ま、僕のしょうもない懺悔はさておき。これからも僕は僕に出来る事をやる。どこかで誰かと幸せの形が重なるといいなと思う。

一日も早い震災復興を、東北の地で、芸術が発展し、根付き、溢れることを願って。

Art Revival Connection TOHOKU 2012 年度代表　原西忠佑
2013 年 1 月 8 日執筆

この記録は、私たちが歩いてきた軌跡である。

このプロジェクトを立ち上げた際、「意図を持った編集は極力行わず、事実のみを記録していこう」と話したのを覚えている。発刊までにこれほどの時間を要したのも、この“事実に基づいた内容”に拘ったためである。

震災を体感したアーティスト達の感情や感覚、息づかいや手触り、意識や思考をなるべく誠実に残そうと思った。それは震災直後私たちが感じたあの、何とも言えない生々しくザラザラした空気感に、どれだけ寄りそえるか？という問いかけでもあった。

記録が歴史になっていくように、私たちの感覚は記憶としてこれからも語られていくのだろう。東北で起きたこの“事実”に私たちは一生向き合って生きていかなくてはならない。それはアートに携わる者にとっては、試され続ける事だ。

幸いにも同志がココロを寄せ合って歩んだこの活動は、世界中の愛ある支援と、同じまちに住む人々に支えられ、大きな活動となった。大きくなることで見えづらくなってしまう小さな意志もあるが、個人的にはある一定の役目を果たせた気分でいる。

一年が過ぎ、思惑が目に見えづらくなっていても、アートが持つ力を信じる強い気持ちを持ち続けられるか？活動の中で起きた“気づき”を、次の一歩にどう伝えていくか？長い道のりの中で自問自答は続くだろう。

どうかこの記録が、薄れていく震災への意識を呼び起こす一端になりますように。そして、今後また日本の何処かでこのような惨劇が起きた際、心の記録として、道標の一つとなりますように。みなさんと一緒に次の一歩が踏み出せますように。

Art Revival Connection TOHOKU 事務局長　鈴木拓
2013 年 1 月 9 日執筆

ARCT

Art Revival Connection TOHOKU の活動を起点に立ち上げた文化芸術振興団体。震災からの復興を進める活動や対話の中で感じた、人々の表現力、想像力、再生力を信じ、日常的な営みの中でアートが多様な価値を創造し、個人の生きる力と心の豊かさを得ることができる存在であるとの認識のもと、それらを繋ぐ担い手として設立。
2013 年 7 月 7 日設立。

東日本大震災が起こり、生まれたアートリバイバルコネクション東北（ARC>T）。今、我々舞台芸術関係者ができることは何かを考え、行動してきました。1 日 1 日が常に大きく変わり続けていく環境の中で、今まで経験していないことも多く手探りでおこなってきて、その延長に今の ARCT があります。「あのとき、あの場所で何が起こり、誰と出会ったのか」それらを少しでも後世に残すためにこの本を作ることになりました。こういった記録物を作るということも慣れない中で、日常にある舞台関係の仕事や ARCT の活動をしながらの作業だったので、予想以上に多くの時間が流れてしまいました。ここまでくるために尽力していただいた「あるくと本」プロジェクトチームを始め、原稿執筆をこころよく承諾していただいた方々、この記録に残すことができた活動に尽力いただいたメンバー、そして活動をしていくために多大なるご協力をいただいた皆さまに心より感謝の気持ちを申し上げます。

この文章を書いている 2015 年 10 月現在、復興支援住宅が完成し始め、仮設住宅に暮らす方々もまた新たな居住地に移動が始まりだしています。沿岸部では、土を盛って日に日に風景が変わり続け、高い防潮堤がその姿を見せ始めた場所もあります。まだまだ復興の途上であるということを現地に行くと実感はしますが、内陸や東北から遠いところでは、すでに遠い過去のできごとのような感覚の人も少なくありません。福島にいたっては、まだまだ先の見えない生活が続いています。あらためて被災された方々が安心できる生活に、心のよりどころである故郷に少しでも早く戻れることを願いつつ、震災によって亡くなられた方々のご冥福をお祈りいたします。

また必ずどこかで起こるであろう大災害のときに、少しでもこの経験による記録が役に立つことを願っております。

2015 年度 ARCT 代表　千田優太
2015 年 10 月 29 日執筆

2011 年に東日本大震災が起き、アートリバイバルコネクション東北 (ARC>T) が生まれました。東日本大震災のリアクションから生まれた ARC>T の活動の中で、アーティスト同士が手を携え、社会とアーティストが繋がり、様々なアクションが生まれ、現在も ARCT として活動を続けています。1 人 1 人の震災が違うように、震災へのリアクションも異なります。しかし多くのコミュニティと同じように、違いを認めながら手を携えて進むことを、我々も意識してきました。

また東北に生きる我々がリアクションする 2011 年以前から、1995 年の阪神・淡路大震災のような過去の災害への先人達によるリアクションがあり、2016 年に起きた熊本地震以降も、リアクションは続き、多くの手が未来に向かって携わり続けることでしょう。過去の災害の記録を知る程に、今を生きる我々に多くの手が、過去からも未来からも携えられていると実感します。

ギリシャ悲劇やシェイクスピアの存在は、文化・芸術が 1000 年後に伝える力を持っていることを証明してくれます。そして私自身、その力はいつか、どこかで、未来の誰かに伝わるものに違いないと感じています。パフォーミングアーツは、様々な価値観を持つ人々が、チームとしての協調と調和を支えとして、無限の可能性の中から共有された想いをすくい取って一つの作品を創り、広く開かれた不特定多数の第三者へ届けようとすることです。過去の災害に応答する人々にとって、被災記録を後世に伝える仕組みづくりや、未来の災害への備えも作品創りであり、その作品を未来の誰かへ届けようとしているのだと思います。

異なる性質を尊重して受容することで、新たな価値を創造する可能性を高め、予想できない未来の変化に対応していくこと。ARCT は、多くの過去に想いを馳せながら、綿々と続くこの繋がりが普遍的なものになるよう活動を続け、少しずつ未来に向かって進みたいと思います。震災以降に受けた、具体的な支援のみならず、多くの方々が繋がってくださった時間の最先端に ARCT は位置します。様々な形で関わり、手を携えていただいた全ての方々に感謝を申しあげます。

2016 年度 ARCT 代表　野々下孝
2017 年 1 月 14 日執筆

本書は Art Revival Connection TOHOKU 活動期間（2011 年 3 月～ 2013 年 3 月）に編集作業が進められ、その後 ARCT 内で立ち上がった「アーカイブプロジェクトチーム」により、発行作業が行われました。発行までに多くの時間が流れていますが、震災活動の記録としてなるべく当時のままの原稿を掲載しています。

※本文の内容および人物の所属等は 2012 年 4 月の時点のものです。

※各ページの実施概要にある参加メンバーには、当時 ARC>T に所属していない方も記載されています。

劇作家・演出家の石川裕人氏（TheatreGroup“OCT/PASS”）は 2012 年 10 月 11 日に療養の甲斐なく急逝なさいました。
仙台の演劇史に大きな足跡を遺した石川さんの偉業を偲び、ここに謹んで哀悼の意を表します。

本書を出版するにあたり、ご協力いただきましたすべての方々に心から感謝を申し上げます。

Art Revival Connection TOHOKU Report_01
アートリバイバルコネクション東北活動報告 2011.3–2012.4

2017 年 3 月 1 日初版発行

企　　画　ARCT アーカイブプロジェクトチーム ARC>T 本編集部
編　　集　伊藤み弥　鈴木拓　大沢佐智子
レイアウト　川村智美
協　　力　横田泉
発　　行　ARCT（あるくと）
〒 984-0015
宮城県仙台市若林区卸町 2-12-9
せんだい演劇工房 10-BOX 内
Tel：070-4116-6174
E-mail：info@arct.jp
http://arct.jp

助　　成　公益財団法人 石橋財団 ISHIBASHI FOUNDATION

※本書は販売本ではありませんが、印刷代と郵送費として 2,500 円のご寄付で、1 冊献本しております。

本書の内容を無断で転記、転載、複製することを禁じます。
Copyright © 2017 by ARCT All Rights Reserved.